
暴力熱血女と貧弱毒舌男（春）

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴力熱血女と貧弱毒舌男（春）

【Nコード】

N2535J

【作者名】

桜

【あらすじ】

暴力的で、熱血漢溢れる少女とやる気なし配慮無し貧弱で毒舌な少年の二人の物語は『冬』から『春』へ！
学年も上がり、新たなキャラクターやいつものキャラクター達とやっぱりグダグダで前よりかはちょっと多めに真面目なハートフルコメディ！
前回よりもラブとか戦闘とか色々多め（のつもり）です。

どうぞ馬鹿馬鹿しい不器用な物語の続編をご鑑賞ください。

再びという名のプロローグ

寒い日々が過ぎ、代わりに暖かい日差しが差し掛かるようになった。

学校への行き道には桜が咲き始め、美しいピンクを見せ付けていた。

僕は、3年生になった。

道行く桜を見ていたら、少し前の僕の不幸な不幸な大冒険が嘘の様だ。

空に舞う桜の花びらを見て僕は目を細める。

花びらは、ひらりひらりと、僕の前を柔らかに落ちて行った。

アア。心が安らぐこの気持ちはきつと嘘じゃない筈。

どうか今年は、馬鹿共がよりつきませんよーに……。

心の中だけで慎ましくパンパンと手を合わせる。

僕にしては珍しく神頼みと来た物だ。

フフ……こんな僕も、桜の美しさに当てられたのかもしれないね……。

何てキザな事を思いつつ学校への道を歩く。

心の何処かで僕ってカッコいいんじゃない？ とかちょっと思ってる節があるのは秘密だ。

僕以外にもチラホラと同じ方向に向かい歩く少年少女が目映る。彼らも僕と同じ学校の生徒なのだろう。

今日は始業式。

新しい3年生としての日々。

受験や就職で忙しいかもしれないけど、僕の良心的な考えに、桜の神様（いるかしらんが）は優しく笑ってくれている筈だ。

そうさ、忙しいんだから、今年は勘弁してよ。

いやマジで。

僕が心の中で拙劣に祈りを込めていると、後ろから期待を裏切る声が聞こえた。

「そこ！ そこだいてー！ー！」

叫び声は後ろから。

しかもとても聞き覚えの在る声だ。

振り向く時間も与えられず、僕は背中への衝撃と共に宙に浮いた。空中で2回転3回転と周った。

結構浮いたのか、地面を見渡す事が出来る。

口をあぐりと開けて僕を見上げている人物達と、またか……と、さも人事の様に見える人物達と居る。

前者は今年入ってきた1年生だろう。 可愛いそうに、君達が今

から行く学校に青春なんていう甘い物は無いよ。

寧ろ激辛。

後者は前に一年生。もしくは二年生のどちらかだろう。

変人ばかりのこの学校では人が飛ぶのなんて日常茶飯事ですからね、解ります。

最後に僕の目に移ったのは、僕を撥ねたと思われる人物。

あっちゃー、と頭を抱えているサイドテールの少女が居た。

何だその態度は、人撥ね^はというソレかこの腐れ暴力女ア！

車よりも早く走れる足を持つ非現実的な彼女なら僕を撥ねたのも頷ける。

……残念な事に彼女は僕の知り合いだ。

そして僕を常に不幸の世界へ連れていく人間の一人。

猫の様な大きな目と、首から提げている赤いロザリオが特徴的だ。

彼女の次に、再び美しい桜が目に入った。

桜の神様が僕に向けて笑いかけている気がした。

温かい慈愛に満ちた目。

とかでは無く、ざまア（笑）と言った具合のバカにした笑みが見えた気がした。

きつと再び始まる不幸への道しるべを垣間見たショックで幻覚でも見たのだろう。

神様、僕が嫌いか。

再びという名のプロローグ（後書き）

皆さまお久しぶりでございます。

そしてあけましておめでとうございます。

新年を迎えたと同時に再び始めたいと思います。

続編です。

前回の作品を読まなくても解るように書いて行けたらと思ったのですが、前作を読んでからの方が解り易いかもしれないので、時間が
ある時にでもお読みください。

前の様な更新速度が出来るか解りませんが。

どうぞ『暴力熱血女と貧弱毒舌男』を宜しくお願い致します。

人物紹介（前書き）

この小説は、基本的に一人称で進みます。

主人公以外に、他のキャラクターの視点に切り替わる事も良くございます。

それをご了承の上に読んで頂くと嬉しく思います。

なお、前作を知らない方にも解り易いように思い書いた物で、人物紹介を読み飛ばしても物語の内容にさして影響はございません。

※前作でメインだったキャラクター達のみの紹介なので新に登場する人物は紹介しておりません。

人物紹介

貧弱毒舌男。

名前…へーじ

学年…高校3年

一人称…僕

※人物紹介

本編の主人公、根暗で卑屈。毒舌とタイトルに有るが、実際、心の中でボロクソ言うだけで地味に臆病な所もある主人公とは思えない様な主人公。

周りの人間が変人ばかりで常に不幸の対象になっている。溜息は日課。自分はマトモと思っているが、テンションの上下や状況により周りが見えなくなる。

突っ込み役に抜擢されている様に見えるが本人にそのつもりは無い。常に変人達への対処方法に頭を悩ませている。就職している姉を持つ。

『善人』では無い。だが『悪人』でも無い。

《前回のあらすじ》

あさくら
朝倉 へいじ
坪侍

父と母は子供の頃に既に亡くしている。

過去の経歴から朝倉の名前を嫌い、苗字で呼ばれるのを嫌う。

あまり体は強くないが、すざまじい姉がいることで地味に精神面は強い。

頭は良い方。

前回では病院に行く途中に縁と出会い、正義を語る縁にイラ立ちを覚えつつ、無意識に惹かれる自分が居た。
一緒に居る時間が増えるにつれ縁といえることが心地よいと感じてきているのに気づいていなかった。
過去に正義を恨んでいたヘーじは、縁の何処までも一直線な世界に引き込まれてゆき、少しずつ変わって行っていた。

暴力熱血女。

名前…穴見縁あなみ ゆかり

学年…高校2年

一人称…アタシ

※人物紹介

本編のもう一人の主人公orヒロイン（一応）。タイトル通り熱血的で、自分の信じる『正義』を貫こうとしている最強の女子高生。学校では長い髪の毛はサイドテールにしている。

鈍感で、あまり異性に感心が無いような行動をするが、直球で言われると弱い。

女性とは思えない怪力と異常な運動神経を持つ。

バカな兄貴が居る。そして仲が悪い。

『善人』というより『正義の味方』を目指している。突っ走りすぎて空回りすることも。

前回ではある事をきっかけに自分とは正反対なヘーじに興味を持ち行動を共にする事になる。

最終に正義の信念を曲げ、全てに絶望している所をヘーじに助けられる。

今回からは首から提げた赤いロザリオが特徴的。

最近ある人物に想いを寄せている。それに自身が気づいているかは不明。

暴力熱血女の兄にして、ヘーじの親友（自称）

名前…穴見 早句間あなみ さくま

学年…高校3年

一人称…俺

※人物紹介

驚異的な馬鹿。

縁の兄だが縁とは仲が悪い。

ヘーじの事をこよなく愛する男、偶に行き過ぎる事も……。

性格が悪いわけでは無いが、良く言えば純粹、悪く言えば天然。

大きなガタイから決して弱いわけでは無いが比較的縁にはボロボロにされる。

時々マトモな事を言うがその真意は不明。

体は丈夫だが心はガラス、【キモイ】はタブー用語。

女性との関係は全く聞かない。

性悪で（人の）秘密好きないつもニコニコしてる女の子。

名前…立花 水歩たちばな みなほ

学年…高校3年

一人称；…私

※人物紹介

新聞部に所属している女の子。

そのせいか様々な人の秘密や情報を手にしている。

それをネタに脅迫するのは最早彼女の特技。

そんな少女だがヘーじに思いを寄せている。

大好きな暴力女に遠慮して中々強気に出れないという所も在る。

一応副ヒロイン（予定）

ヘーじの不幸や何かしらの事件に大概は水歩が必ず関わっている。

彼女はそれで幸せな様だ。

この小説内で唯一マトモな可憐な少女

名前…立花^{たちばな}志保^{しほ}

学年…高校2年

一人称…私

※人物紹介

水歩の妹にして、超マトモな子。非常無情で変人揃いなメンツの中で頑張っている可愛い女の子。ある意味ヘーじの唯一の癒し。水歩の妹とは思えない程優しい女の子。縁の親友で水歩の妹。ヘーじ達の三角関係を1番身近で知ってるいる少女。めんどくさい関係に頭を悩ませている。

前回の事からある人物が少し気になる様子。

●駄目教師

ヘーじ達が通う学校の教師。
いつもめんどくさそうにしている駄目駄目な教師。
復職を持っている。※公務員は復職を持ってはいけません。

●ヘーじの姉

ヘーじの精神力が強いのはこの人のせい。
色々と不明な人、
駄目教師と付き合っている（らしい）

●隣のおばちゃん

ヘーじの家の隣に住んでる気の良いオバチャン。

●学校の方々。

何故か変人が色々と集っている学校。
暖かい目で見守っている側と無駄に騒いでいる側の両極端な皆さん。
平和なようです。

●八木

前作では銀行強盗として登場。
今作で出るかは不明。
現在は刑務所内にいる。

人物紹介（後書き）

次から話しは進んで行きます。
どうぞ宜しくお願い致します。

その1. 春一番の、女の子には、ご用心

僕は、僕を撥ねた少女を訝しそうに見つめる。

頭の上にある大きなタンコブは何があったのか解り易く示しているだろう。

「ボケーっ」と突っ立ってるからよーへーじ」

何をシレっとしてんだ！

「車より早く走れる奴をどうやって避けるか！？」

僕の迅速な突っ込みに少女はめんどくさそうに「アーアーごめんなさーい」と悪びれる気は無い様子。

僕はクセになりつつある今日一回目のため息を零した。

彼女の事を簡単に説明しておこう。

穴見 あなみ ゆかり 縁

こんなふてぶてしい態度を取っているが僕の後輩だ。

人間離れた運動神経を持ち、僕が知る限りでプラスチックで出来たエアガンを握りつぶしたりスイカを粉碎させたりと情人離れした腕力も持っている、言うなれば超！ 危険人物だ。

そんな縁は正義の味方に憧れた熱血バカでもある。

前回の事を説明するのはぶっちゃけ長くなる (めんどくさい) ので省かせて頂く。

話を戻そう。

「何でそんな急いでんの」

呆れつつ一応聞いてみる。

僕の言葉に縁は困ったように片眉を挙げて見せる。

「あー……んと」

結構ハキハキとしている縁なのだが、何か歯切れが悪い。
学校の時間にはまだ時間が在るし……どうしたんだ？

縁は妙にキョロキョロとしている。

「ま、また後で！」

そういつて慌てた様子を見せた後、再びありえない速度で先に行
ってしまった。

……？ なんだったんだ？

走り去っていく縁の後姿を見つめた。

以前の制服が長袖だった分、半袖で大分肌の露出が多くなってい
る。

もうそんな季節かー、と適当な考えが浮かぶ。

……………。

……うん、まあ、悪くは、無い

「腕とかさく短くなったスカートの足とかついつい見ちゃうよねー」

「まーねー……」

ん？

横からの突然の声に無意識に答えてしまっていた。

ツバ！ と慌ててその場から飛び退いた。

僕の直ぐ横に視線を向けると、ショートの短い女性が笑いかけていた。

初めて見た人ならば、最初の印象は綺麗な少女だと思うだろう。

……しかし！

僕はこの人物を知っている。

「アッハッハ！ ヘーじもやっぱそういうの気になるんだ？ 身の・キ・ケ・ン！ 感じちゃうな〜？」

そう言いつつスカートの端を掴むと、業と見えるか見えないかのギリギリまで託し上げる。

ショートの少女は悪戯っぽく笑いながら僕に向けてウィンクをしてみせた。

そう、こういう女で在る。

僕を常に不幸の道へ引きづり込む人間二人目だ。

名前は立花たちばな 水歩みなほというのだが、皆からは大概別の名前で呼ばれている。

僕は過去にミホと呼んでは言われてからミホと呼んでいる。

ミホはどこから仕入れてくるのか、色々な情報を持ち、部活は新聞部に情熱を燃やしている。

彼女の知らない事は無いので正直、縁よりもある意味怖い人間だ。

そして毎度僕を弄ぼうとする性悪女。

これは素なので仕方が無いかもしれないけども……女の子がそういう事するなよ。

イヤでも視線はそっちに行ってしまうのは仕方が無い。
だって男の子ですから！

だが、コヤツのそういう策略に何度も騙されてまるか！！

業と興味の無い素振りを見せる。

一々反応すると余計にバカにされるのが毎度のオチだ。
そう何度も同じ手は食わんよ！

「安心してよ、間違えてもミホは襲わないからさ」

そう嫌味を吐き捨て、ミホの方を見ないようにしつつ、サッサと
歩き出す。

……またあっちを見たら、今度はどんな誘惑が来るか解んないし。

しかし、ミホの生足をモロに見てしまったのは事実……。

春……うん、良い季節だ。

なんて鼻血を出しそうになりつつニヤケながらそう思った。

自分で思うのもアレだがニヤけている僕は多分中々にどうして気
持ち悪いだろう。

先程に春の風物詩で在る桜にボロクソ言った手前だが、過去の事
は忘れよう。

……春、良いじゃない。

新しい僕のストーリーが始まる、と言っても続きなのだが。

また僕の物語に少し付き合って貰う事になるけど、そこはドウゾ、
宜しく。

その2. 春の文字通り青春に燃える姉を私は遠くから見守るつもり

温かい日がやって来た、長い冬休みも終わり、私の姉はというと久しぶりにヘーじに会える！

と、息巻いてショートのを揺らしながらサッサと先に行ってしまった。

私、立花^{たちばな} 志保^{しほ}は姉の事が心配で少し速足で学校の通学路を歩いていた。

姉の初恋を応援したいのは山々だが、姉は妙にそういう所に疎い所が在る。

……私も人の事は言えないけど。

姉は様々な事を知っているのに、自分の恋愛事になると疎いらしい。

そう思うと可愛らしいけど、さて、大丈夫かな？

桜道を歩いていると、何故か道のと真ん中で両手両膝を付いている人物が見えた。

目を凝らすと、それが姉である事が解り、私は一瞬固まった。

……だ、大丈夫そうでは無さそうだった。

姉の顔に暗い影がズーンと掛かっている。

どうやら失敗したらしい。

呆れつつ姉の前まで来ると、ある事に気づいた。

何も考えず四つんばいになっているのか、下着がモロ見えなのだ。慌てて下着を隠す様に私は立ちほだかる。

「お、おねーちゃん！ パンツ見えてるよ！」

道端で四つんばいになって居るわけで、堂々と下着が見えているのだ……。

すると姉は隠す事をする所か、弱弱しい声を上げる。

「いいのよ志保……どうせ私の下着なんて見ても誰も襲わないから……」

「は、はぁ！？ お、襲うう！？」

容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群の姉が一体どうしたのだろう。姉がおかしくなる時は大概へーじさん絡みだ。

何処までも報われない姉に、つい呆れてしまう。

「ううー……へーじの馬鹿ア！ 私が何言われても傷つかないわけ無いじゃないイー！」

半べそを掻いている姉を立ち上がらせながらふと思う。

恋はここまで人を変にするのだろうか。

どちらにしても、弱みを見せない筈の姉がここまで変わったのはへーじさんのおかげなのだろう。

縁には悪いけど……姉の恋が実る事を祈った。

その2. 春の文字通り青春に燃える姉を私は遠くから見守るつもり（後書き）

メチャ短いですゴメンナサイ！

ここは短くても入れたかったので勘弁して頂きたいです（泣
続編も始まりしよっぱなからの視点切り替えですが大丈夫でしょー
か？

ついてこれるかが心配です。

前回での視点切り替えの解りにくさを改善しているつもりですがそこは生温かな目でお送りください。
前作を友人に見てもらった時の一言。

私「どう？ どう!？」

友人「……お前の小説なんか汚い」

私「あれ!？」Σ（@@;）

確かに主人公がゲロまみれになったりする小説は珍しいかもしれない。。

そら汚いわw

その3. 春一番のキモさです　そして久しぶりにピンチです　助けて下さい

久々の学校、学校に入ってすぐクラス代えの掲示がされていた。
そういえば3年になってクラスも変わったんだっけ。

新たな一年生や二年生や三年生がひしめき合い、自分が一年間お世話になるであろう教室を探していた。

ザワザワと騒がしい中、一際目立つ一人の声が聞こえた。

……そして教室を見つける前に、一年間お世話になりたくない人物を先に見つけてしまった。

「どうかヘーじと同じクラスになりますように……どうかヘーじと同じクラスになりますように……どうかヘーじと同じクラスになりますように……」

その人物は掲示の前で両手を擦り合わせ、なにやら必死な表情をしていた。

手には数珠を握られ擦りあわされる度にジャラジャラと五月蠅い。

巨体の男は目を思いっきり閉じて祈る様に呟いていた。

まわりの人間の痛い人を見るような視線にも気づいていない様だ。

……ていうか、見なかったことにしたら駄目だろうか。

この人物、見覚えがあり過ぎて色々な面でヤダ……。

「ハアアアアア……ハア！！」

何だ、君は悪霊でも払うつもりなのか、そして気持ち悪い。

カツ！ と見開かれた目が掲示を食い入る様に見た後。

「つしゃああああああああああああああああ！！！！」
と、歓声を挙げる大男。

つまりは。

……こいつとまた一緒かい。

この男、通称サク。

本名は穴見^{あなみ} 早句間^{さくま}

名前から解ると思うけど、緑の兄に当たる人物だ。

緑と同じくらい……いや、それ以上の馬鹿だ。そしてアホだ。

もう最初の時点でわかんと思うけど、僕は異常にこの馬鹿に懐か
れている。

もんの凄い笑顔が僕の方を向いた。

っげ、見つかった。

「お！ お！ へえ〜じい〜！！」

僕目掛けて飛んで来る二つの太い腕をサッ！ と慌てて避ける。

いきなり抱きついて来るな気持ち悪い！

「朝から暑苦しい！！ ウザイ！！ 鬱陶しい！！！！」

僕の吐き捨てる暴言にもめげずにサクは顔を輝かせている。

「今回も俺たち同じクラスだぜ！ やったな！」

「自分の嬉しさを押し付けるな！ 寧ろ僕は悲しいわ！」
引っ付こうとして来るサクに出来るだけ離れて対応。

「何だよ、このツ・ン・デ・レ♪」

「気持ち悪っ！！」

反射的に出した言葉に、サクの暑苦しい動きがビタツと止まった。
……っは！ 言ってしまった！！

と、僕は後悔する。 何だかんだでサクと二年一緒に居る僕はサクの事を良く知っているつもりだ。

そしてこの男に悪口を言い続けているのだが、一つだけ言っただけではない言葉があるのだ。

この男、サクは大概の悪口に対しては耐性が在るが、『気持ち悪い』の一言にのみメンドクサイ存在へと変わる。

「気持ち悪い……？ 俺が、気持ちわる、い？」

笑顔は消え去りみるみるうちに暗い影が覆っていく。

「だあああー！ 気持ち悪くないから！ ゴメン！！ 僕が悪かったって！！」

「……いいんだ、どうせ俺は気持ち悪い存在なんだ、フフ……俺は世界のゴミ……寧ろウンコ……ウンコはトイレに流されろって事です……フフ……ウンコのクセに出しゃばってすみませんでした……」

め、めんどくさい……。
つまりはこういう事だ。

「悪かったって……」

「あ、自分ウンコなんで、人間様がウンコに何か話しかけちゃ駄目
つすよ、ホント、ウンコって汚いですから」

ウンコでもゴミでもどっちでもいいから廊下で自虐モードに入る
な……。

周りの人たちに見られて凄く恥ずかしい、っというか下級生の目
が先輩を見る目じゃないんですけド。

その時だった。

「……邪魔なんだけど」

ほら見ろボケ、馬鹿サク。

可愛そうな下級生が怯えてるじゃない……

か？

……あれ？

下級生に目をやると、怯えているという様子とは違った。
そこに美青年が居た。

切れ長の鋭い瞳が印象的な男性だ。

何よりも気になったのが長い俸？ を持っていた事だ。
白い布に覆われているそれは、妙に目に付くものだった。

なんだあれ？

僕の疑問は、すぐに解る事になる。

「だから邪魔なんですけど」

いつまでもどこかない上級生に痺れを切らしたのか多少イライラした様子だ。

「うるせー！ ウンコに話しかけんじゃねーよー！ ウンコつけるぞコラァ！！」

……………。

うわぁ…………。

僕は知りません、赤の他人です。

こんな変人と知り合いだと思われたら終わりだわ…………。

さっさとこの場から去ろうとした時。

「…………退かないなら」

何やらドスの利いた声が聞こえた。

そちらに視線を向けた瞬間、僕はぎょつとした。

下級生の男は白い布を巻いた棒から、布を剥ぎ取っていた。

…………は？

そこにあったのは。

日本刀。

え？ 銃刀法違反？

………は！？

黒い鞘を抜き取ると、ギラ付いた刃が見えた。
その光を放つそれは、模造刀もぞうとうとは思えない。

マジもんの本物だ。

それを男は、サクの頭上にて、躊躇いもなく振り下ろす！

今もぶつくさと自虐を言っているサクは気づいていない。

う、嘘だろ！？

ダァン！

大きな音と共に日本刀は床に切れ目を入れていた。

ぎり、ぎり！ 間に合った……。

僕がサクの服を引っ張ったのだ。

サクが先程まで居た所には、床の破片が飛び散っている。

マジかよ……

僕が引っ張らなければ、サクの頭は刀で真っ二つだった。

……本気で振り下ろしやがった！

「っち……何すんだよ……」

舌打ちと共に不満そうな声を漏らす刀を持つ下級生。

「お前……本気で……」

躊躇い無く刀を振り下ろすこの男に寒気が走った。

「……そいつが邪魔だったんだよ、アンタも邪魔するなら容赦しねーぞコラア」

美青年は切っ先を僕に向ける。

……………。

あっはー☆

結局今年も変なのと関わるのねー☆

……ちっきしょー！。

その3. 春一番のキモさです そして久しぶりにピンチです 助けて下さい (後

溜めてる分がある間は毎日更新を目指します！

……新キャラ登場です！

やっぱり変人です！

その4. 避ける事に定評があります。 察して下さい…… 後ウシコがウザい

廊下内で刀を振り回す常識外れの少年。

それを必死に避けつつサクをひきづりながら逃げる僕。

見える！ 見えるよ！ 僕はいつからニュー○イプになったんだろー！ 凄いよ！ 僕ってばメチャクチャ凄いよ！ 今のこの動きをビデオに収めたいくらいだわ！

馬鹿を引っ張りながら僕は華麗な避けを見せていた。

縁の攻撃を毎日食らっているの、それに比べたらマシな方なのだ。
だ。

所謂重い物を持っていてそれを離すと体が軽くなったような……
そんな感じの比喻で解るだろうか。

本物の刀よりも縁の拳の方が怖いのだから僕がどれだけ苦労しているのか察して欲しい。

不幸中の幸いというか器用貧乏というか、ある意味現在切り刻まれずに済んでいるのは縁のおかげかもしれない……。

何か嬉しくない……。

刀を避けながらちよつと目尻に涙を浮かべてみる。

そして学校の方々は誰も僕達を助けようと動くことはない。

というか遠巻きに見て赤の他人を決め込んでいる。

視線は『頑張れよー』っと言っている温かい視線なのか、『また馬鹿やってる……』という冷たい視線のどちらかだと思う。

好きで馬鹿な事やってるわけじゃないけどな！

つとに……この学校の人間は……！

「……てか」

必死に刀を避けながら叫び声を挙げる。

「自分の足で逃げろよ！！ サクウ！！」

いい加減限界なんだよ！ 思いのほか疲れるんだよ！ 貧弱舐めんな！

「いいんだよ……俺なんて尻から刀ぶっ刺された方がいいんだ……」

ああああ！ めんどつくさい！！

ひきづる方の気持ちにもなれって！

「いい加減、そんなお荷物を持った状態で俺を振り切れるとも思ってたのか？」

少年の言う通り、避けられているのだが逃げきれているわけでは無い……さっきから簡単に追いつかれている。

その自信満々な言い方が鼻にかかるが今はそんな事言ってる場合じゃない。

くそ！ こんなウンコ（サク）置いて行きたいけど、この馬鹿^{サク}は後がうるさいんだよ！！

「おおお！？」

サクの悲鳴の声と共にガクつと体が揺れた。

ひきづっていたサクが突然動かなくなったのだ。

振り向くと、下級生のクセに上級生のサクの胴を思いっきり踏みつけて廊下に縫い付けていた。

やっぱ！ サクが斬られる！ サクが斬られる事に関してはぶっちゃけどーとでもしてくださいって感じだけど白昼堂々グロったらしい物見せられちゃトラウマになるわア！

と、僕の脳内はすざまじい速さで回転した。

が。

少年は、サクに向けていた刀を横に、水平に持ち替えていたのだ。刀の長さは横に振りぬけば、僕に当たる位置。

狙いはサクじゃない……？

僕か！

サクが動けなければ、その馬鹿を持つてる僕も動けない。横から。

刀が、迫る。

「こんなモンかよ？ 『朝倉先輩』！」

「！？」

僕の苗字！？

僕の苗字を知っている人間は限られている。

ある事で僕は名字を隠し、下の名前のみを使っている。

それを入れてきたばかりの一年坊主が知っているわけが無いんだけど……。

コイツ、どこで。

しかし。

考える余裕は残念ながら無いわけで。

迫りくる刀は止まらない。

確実に狙ったのは僕の、首！！

マジかよ、コイツ、本気で『殺す』気だ！！

男の目は、いつかで見た『縁』の目を思い出した。

完全にぶっ殺す気だっ！！！！

僕は瞬時に引っ張っていたサクを放し後ろに飛んだ。

ブォン！ と、目の前で本物の刀が横切って行く。

僕の前髪が何本か宙に飛んで行った。

それほど目の前で掠めて行ったのだ。

寒気が走る。

「ツチ、外したか」

こ、この野郎！！！！

こんなヤバイ野郎と関わってられるか！

僕は即座にサクに背を向けた。

「サク！ 先に逃げさして貰うからな！」

勝手に殺されろボケェ！！

お前の自業自得だからな！！

フハハハハ！ さらばだサク！

猛烈ダッシュを決め込んで逃げようとした最中。

男が刀を振り下ろす。

今回ばかりはマジでヤバイ！

「……ッ！」

僕は恐怖でついつい思いっきり、目を瞑った。

……………。

「……あれ？」

いつまで経っても痛みは襲ってこない。

恐る恐る目を開けると。

目の前に、いつのまにか人が居た。

振り下ろす刀は、その人物に止められていた。

人差し指と中指で挟む様に刀の刃を受け止めている人物が。

僕を守るように目の前に居た。

その人物は、我が高校の守護神。

風紀委員に所属する正義の味方。

首から下げられた赤いロザリオが特徴的な少女。

「ゆ、縁！」

縁は僕の方を横目で確認した後、男を睨みつける。

「アタシの庭で暴れるのも大概にしなさいよ………新生が多少はしやぐのは勝手だけど、アタシの『物』を傷つけるつもりなら容赦しないわよ………」

カ、カッコイイ！ カッコイイけど相変わらず人間離れしてますね縁さん………！！

普通振り下ろされた刀を指だけで挟んで止めるなんて出来ませんよ！

いや助かったけどね！

……というか、物って僕か？ 誰が物だ……でも助けられたので

今は何も言えない……

その4. 避ける事に定評があります。

察して下さい……

後ウシコがウザい

久々に実家に帰った時の話し。

友人A「……なア、俺って可愛いよな」

私「何を深刻な顔してると思ったら……何を言い出すんだ君は」

友人A「ツフ……ちょっと鏡の自分に見惚れてしまっ……さ!」
(髪を掻き上げる)

私「……………お前はインコか」

※インコは鏡で自分が映っていると求愛行動をするんだよ☆トリア
ビアー♪

←

その後口喧嘩

何だかんだで変わらない友人は良い物です。

その5. 無視されるのって辛いよね、解ります。

少年は一步後ろに下がると刀を降ろした。

少年は軽く眉を顰める。

「……フン、あんたが噂の縁先輩か」

「気安く呼ぶんじゃないわよ、殺すわよ」

……わお。

縁さん、いえ、縁様が凄く怒ってらっしゃる。

声はドスが利いていて素敵に無敵。

そんなアナタは恐怖です怖ッ！。

こんな怒っている縁様、いえ縁お嬢様は久しぶりかもしれない。

少年と縁お嬢様がにらみ合っている。

空気が凍っていく気がした。

「……へーじ」

突然名前を呼ばれてドッキンコ。

「な、何！？ 縁お嬢様！？」

「は？ お嬢様？」

あ、心の声が、ミステイク。

「いや、何？ 縁」

「えと……怪我無い？」

何いきなり。

いつも君にやられてる方が相当なダメージなのですが。

「君のいつもの攻撃に比べたら数倍マシだから安心して良いよ」
心配してくれている様なので解り易く自分の安否を教えた。

「……………あっそ！」

あれ！？ 解り易く言ったのに何か怒ってる！？ 何故！？

「サッサとどっか行ってくれるかな！？ 邪魔だからッ！！」

ム、流石にここまで言われる筋合いは無い筈だ。

「解ったよ、サッサと行けばいいんだろ！」

僕も少し強気な言い方で返してしまう。

「……へーじの馬鹿」

こら、聞こえてるぞ暴力女！

相変わらず怒るタイミングが解らん子だな……。

立ち上がり、その場を離れようと背を向けた。

その時。

ブォン！ と風を切る音が聞こえた。

反射的に音の鳴った方向、つまり縁の方に振り向くと、男が縁に
向けて刀を振り下ろしていた。

「ゆか……！！」

縁の名前を叫ぼうとした時、僕の焦りは杞憂に終わったのが直ぐに解る。

縁は体を横にすると、振り下ろされる刀を簡単に避けた。

目の前を本物の刀が通り過ぎて行っているというのに、縁は眉一つ動かさない。

怖くないのか？ あいかわらずとんでもない子だ。

「無視してんじゃねーぞデメエ」

縁が避けなければ刀は頭から斬られていただろう。

その躊躇の無さにゾッとする……。

無視されたのがそんなに気に食わなかったのか、少年はギラついた瞳を

こ、コイツ……さすがの縁もこんなのが相手なのはマズイんじゃない……。

そう思い不安の視線を縁に向けた。

「へーじ呼んだ？ 何？ アタシがやられるとでも思った？」

縁は僕の心配をよそに、自慢げにフン、と鼻を鳴らしていた。

……いやいや空気を読め縁お嬢様。

今ね？ あの男は自分が無視されたのを怒ってらっしゃるんですよ。 解ります？

それをね、またね、無視したら、ほら、ね？

僕の考えも知らずに縁は何やら嬉しそうに、っていうかまだ自慢気にしている。

解ったから前を向け、前を。

ほら見ろ、男の表情が更に怒りで赤くなってんじゃ無いの。

「て、テメェ！ 良い度胸じゃねーか！！」

ほらほら、何かそれらしい怒った感じ出してんじゃん！ 君のせいだよソレ！

「うっさいわよアンタ！！ アタシは今ヘーじと話してんの！！」

駄々をこねた子供の様に、めんどくさそうに縁は少年を睨む。

はーい直球地雷ですねー。

火に油、基火にダイナマイトを投げ込みましたー。

僕は知りませーん。勝手にして下さーい。

「殺すぞクソ女アー！！」

男の顔は、正にクリリンに不意打ちをされたフリーザーといった感じの表現だ。

ん？ 解らない？ じゃあ、のび太に反撃されたジャイアンみたいな感じで在る。

「うっさいわねー……サツサと沈めてあげるからかかってきなさいよ、器物破損、銃刀法違反、校内への私物の持ち込み、それら諸々含めて風紀委員として制裁を加えてあげるわよ！！」

か、かっこいい……縁お嬢様、カッコイイです。女ならつい惚れてしまっただ。

良い感じの決め台詞を決めた後、戦鬪の構えを取った。

素手で構える縁に対し、一年生は刀を水平に構えてギラギラと怒りの視線を光らせている。

周りの空気が固まる。

回りで見守っていた生徒達は野次馬根性そのままに二人を囲んで輪を作る。

僕もその野次馬に混じる形で二人を見守った。

その時。

チャイムが鳴った。

空気の読めない間の抜けた音が全体に広がる。

キンコンカンコンコン、という学校特有の音が緊張感を消し去っていくのが解った。

周りで固唾を呑んで見守っていた生徒達は散り散りに去っていく。見れないと思ったらスグに去っていくこの野次馬精神は何なんだ……。

「……ツチ、興ざめだ」

男はそういうと刀を下げた。

「……風紀委員としてアンタは見捨てて置けないけど、時間が来たのなら仕方無いわね」

そう、時間が来たのだ。

風紀委員として時間は守らなければならない。

風紀を守る為に自分が風紀を乱していれば正にミイラ取りもミイラなわけだ。

そういう所はしっかりしている縁。

男と縁は同時に背中を向け合った。

縁とまた目が合ったが、フン！ という感じでそっぽを向かれてしまった。

まだ怒ってんのか君は……。

ハア、と溜息を付くと下に何かいるのに気づいた。

「……ん？」

足元に……野次馬達に踏まれまくってボロボロのサクが居た。
というか僕も普通に無視してサクを踏んでいた。
そして気づかなかった。

僕も縁の事は言えないかもしれない……。

「へ……へーじ……」

そんな弱り切った声で僕の名前を呼ぶな。
そして半泣きの目で僕を見るな。

取り合えず、サクを無視して新しい教室に向かった。

後ろから悲痛なサクの叫び声が聞こえるが、無視。

サク……反省しろ。

その5. 無視されるのって辛いよね、解ります。(後書き)

実家に帰った日。

良い感じに喉が渴いた時の話し。

冷蔵庫に茶色い液体が入ったものを発見！

私「ウヒョーお茶だー！」「(。Д。)」「あはは♪」

パック毎一気飲み。

私「ブヘアー！？Σ(。Д。——)」↑吐いた。

母「あー！ アンタ何うどん汁^{つゆ}飲んでんのー！ 本当勘弁してよー」

私「こ……こっちが勘弁して欲しいわ……紛らわしいorz」

その6. 少年の名は悠馬（ゆうま）

クラスに入ると、見た事ある顔も、見た事無い顔も僕の方を向く。全員が一瞬黙るもすぐに騒ぎ出す。

「アッハッハー！　へえーじー♪」

……この元気な声は。

ミホがブォンブォン嬉しそうに手を振っていた。君とまた一緒か……。。

「何よー！　私と一緒にじゃ嫌そうねー！」

「嫌『そう』じゃ無くて嫌なんだよ……」

「ム！　何よー！」

可愛らしくミホが頬を膨らませている。

……解った解った。

「私は……すごい嬉しかったんだけどな」

そうミホは小さく零す。

少し悲しそうに、寂しそうに。

まーたか、まーたそうやって罍を仕掛けるのか！

と、思ったが、もし本当にそう言ってくれるのなら嬉しい限りだけど。

この子は何が嘘なのか何が本当なのか解り難い。

「……嘘だよ、知らない奴ばっかより、知ってる奴が居た方が嬉しいね」

そう言って、落ち込む様に下を向いているミホの頭をポンポンと

軽く叩いて見せる。

ミホは目を丸くして僕を訝しそうに見た。

え、そんな目をされるのは予想外だったんだけど……

不審そうにしていた瞳が、今度は優しそうな瞳へ変わった。

「へーじ、本当に……変わったねエ？」

嬉しそうな口ぶりだ。

人に言われなきや解らない事もある。

僕は変わったか。

……いいじゃないか、人間変わってなんぼだろ？

「そんなに変わったかい？」

「変ったねー！ 以前だったら死ぬ腐れ女！ ぐらい言うでしょうにね〜？」

「え、僕ってそこまで酷かったっけ！？」

笑いながら言うミホの言葉に軽くショッキング！

ミホは僕の言葉にアッハッハ！ と豪快に笑う。

「ンまァー、私はどっちのへーじも好きだけどね♪」

「……アァーそう、解った解ったから」

相変わらずのミホの言葉にため息を零す。

この子は変わったんだか変わってないんだか……。

「それよりへーじってば朝っぱらから悠馬君に絡まれるとかどんだけ運悪いの〜？」

そう言ってミホはケラケラと笑う。

「悠馬って……あの銃刀法違反の奴？」

朝に殺されかけた相手の事はさすがに直ぐには忘れないけどさ。結構カッコイイ名前だったのね。

「しない？ 中学の時は結構な悪だったらしいよん？」

そらまー日本刀振り回すんだから相当悪だと見たね。

誰でも解るわいウン。

縁は片っ端から不良を叩き潰している。

確かに有名な不良だとしたら縁の名前はイヤでも耳に入るだろう。悠馬が縁の事を知っていてもおかしくは無いな。

「家がヤクザの家らしいからねー、そりゃ刀も持ち出すよねー！」

「そういう問題！？ っていうか……ヤクザの家の方だったんですか……」

僕は気持ちからして何か暗くなってしまう。

「ツブ！ アツハツハツハツハツハ！ 何でいきなり敬語？ 私
はこれから悠馬君とヘーじがどんな面白い事してくれるか楽しみで
仕方無いよん？」

人の事も気にせず何を爆笑してるんだ君は！

ハアァー、また悠馬って子と会うだろうと思うと頭が痛い。

しっかし……あの子は何で僕の名字を知ってたんだろう？

情報通のミホにそのままの疑問を聞いてみる。

「え？ ヘーじの名字を知ってた？」

ミホも軽く首を傾げて見せる。

情報通のミホがこんな態度を取るのだから、やはり知っている筈が無いよな……。

「……まーへーじは色々と有名だしね、ちょっと調べたら出ない名前でも無いしねー？」

「え、そうなの!？」

僕ってばそんな有名!？」

ミホは何が楽しいのかまたケラケラと笑う。

「アッハッハ! なーに言ってるの! 銀行強盗を一人でやつけたんだからそりゃー有名にもなるってー!」

た……確かに過去にそんな事もあった。

アレは相当運が良かったただけであって決して僕が簡単に敵をなぎ倒したわけではない。

もし同じことが起これば、生きている保証は無いだろう。

例えとして、その銀行強盗の件で僕が有名であったとしても……襲われる理由にはならないと思う。

僕は何処を見るでも無く空中を眺め、そして小さくため息を付く。

不良ならば興味本位でいきなり襲ってきてもおかしくは無いけれど。

あの切れ長の美青年、悠馬ゆうまという少年は、何か違う気がした。

あの瞳に宿る、心からの殺意は、そんな興味本位で向けられるものではないだろう。

彼が、何の目的で僕を狙ったのか、そして何故名字を知っていたか、いつか解る時が来るのかもしれない。

その時は、多分……。

あの少年は、また僕に刀を向けているだろう。

怒りに燃える黒い瞳は、いつかの自分を見ているようにさえ思えた。

「……なんでボーっとしてんの？」

考えごとしてんだよ、ボーっとしてるわけじゃ無いから！

でも口には出さない……。

考え事してる時に突っ込むと折角考えてたことが吹き飛びそうになるからだ。

今はミホは無視だ無視。

「んー……何か恋する乙女みたい」

「っは！？」

ミホの突然の発言に大声で反応してしまった。

そんな僕を見て楽しそうに笑うミホ。

「アッハッハ！ なんちってなんちって〜！」

……この子は、真剣に人が悩んでるって言うのに。

僕はまた大きくため息を零す。

ため息を零せば幸せが逃げていくというけど。

僕は今日一日で何回幸せが逃げているのだろうか……。

その7. 秩序を愛する沢渡（さわたり） 薫（かおる）

朝のホームルームというのは3年生になってもメンドクサイ物で、
とうるか日直に先生がいないってどーゆーわけ……？

壇の上では同級生と思われる暑苦しい男が熱弁を奮っている。

「我々はとうとう3年生へと進級したッ！ もうすぐ高校生としての
我々では無くなってしまおう！ 貴様らはさまざまな道を行
くだろう！ 離れ離れになる前に我々は一日一日を大切に生きなけ
ればならない！！ 墮落するな！ 日々を大切に生きろ！！ 貴様
等は特別な個人であるのだ！！」

うわーオ、ウルサーイ。

何この人？ 同い年と思われたくない、そして同じクラスと思わ
れたくない。

偶然隣の席のミホは何が楽しいのか男の熱弁に耳を傾けている。

僕はそつとミホに耳打ちする。

「ね……何あの暑苦しい人」

「へーじ、クラスになったの初めて？ 彼は『薫君』だよん？ 名
前は聞いた事あるでしょー有名な人だしねー」

む……そういえば聞いた事がある。

さわたりかおる
沢渡薫

彼は、いわゆる男バージョンの縁だ。

正義を愛し、秩序を愛し、悪を許さない。

今年生徒会長に就任した男だ。

正義や秩序に固執する彼は縁以上に、イヤ、『異常』に悪を許さない。

悪即斬。

縁よりもタチが悪いのはコイツは自分が全て正しいと思っている所だ。

そして、自分以外の人間を確実に見下している。

ある意味危ない人間だ。

出来るだけかわりたくない人物の一人なのだが、まさか同じクラスだとは……。

どうも今年は去年以上に変人と関わる事になりそうだ。

「おい！　ヘージクン！　聞いているのかね！？」
うおわ！？　こっち見た！！

「え……何いきなり……」
周りから同情の眼を向けられた気がした。
気のせいでは無いだろう、そして隣で面白い事起こった！　と言わんばかりに目を輝かせている性悪女……ちょ、その目刺すよホント。

「ぼーっとしていたじゃ無いか！　少しは気を引き締めたらどうかね？」

僕の思いも知らずに薫君は何やら怒っている。

「はあ……ゴメンなさい」

「全く！　君は頭は良い様だが他の部分は残念な様だな！」

お……おおう、何いきなり喧嘩越し？

「毎日毎日クズと絡んでいるからそうなるんだっ！！」
ん？ クズ？

あ、あー、サクの事？

サクも嫌われてるなァー。

まあ、案だけ自由にやってりゃそりゃ嫌われるわ。

「これだからクズは嫌なんだ！ クズ同士で固まる！！ 君は多少は勉強ができるんだから少しは友達を選んだらどうかね？ 少なくとも君の頭の良さ「だけ」は僕も買っている！！ あの正義気どりのクズ女は君を買っている様だが、所詮頭の悪い人間の意見だったか……」

薫君の言葉は、僕の耳から脳へ、そしてその言葉の意味を理解した時には十二分に。

僕の心は揺れていた。

……は？

クズって何？ 縁の事？

その時に、僕の平静は消えた。

沸々と浮かぶ苛立ち。

僕は少し前に、彼女の信念を知った。

どんな思いで縁が正義を語っているのか、知らないクセに。何も知らないクセに、知ったような事言ってるじゃねーよ。

自分が全て正しいと決めつけるタイプ。

ムカつくね。

何よりも、人の友達を態々大声で馬鹿にするって何？

……縁がクズならお前は何だ？

「調子乗ってんじゃねーヨ、クソ眼鏡」

僕がぼそと零した言葉は、クラス内を凍らせた。

暫しの沈黙の後、薫君が口を開く。

「へ、へーじクン、何と言ったのか解らなかったのだが……？」

口の端がヒクヒクと動いている、明らかに不愉快そうにずれたメガネを治す仕草を見せる。

うん？ 聞こえなかった？

「調子乗んなつたんだよ、君は頭だけじゃ無く耳もオカシイわけ？ 病院行って来いよ、ついでにその無駄に動く口を縫って貰って来たらどう？ 後勝手に決め付けんな、サクや縁がクズなら君はカスか？ おっとカスに失礼だ、ゴミ虫。その無駄な弁舌は虫共とやってろよ、まア……虫ですら君の話を聞くとは思えないけどね」

そこまで言い切ると僕は口を閉ざす。

フム、久しぶりに毒を吐いた気がする。

「き……貴様アア……」

薫君が壇上から僕を睨みつける。

「なんだよ、人に言うのは慣れてても言われるのは慣れてなかったかい？ ゴミ虫」

薫君は怒りで顔を真赤にさせ、憤怒で震える手で眼鏡のズレを治そうとするも、震える手では上手くは行かない様子だ。

カチャカチャと金属音を鳴らしている。

「どうやら君もクズの一人らしい……君は生徒会のブラックリストの一番上に書いておいてやるよ……誰に舐めた口聞いたか解らせてやる」

「っは、やってみろよ。ついでにその汚いブラックリストに付け加えとけ、口で勝てなかったたので実力行使に出ましたって屈辱的にな」

その7. 秩序を愛する沢渡（さわたり） 薫（かおる）（後書き）

新キャラです。

暫くは新キャラ紹介ばっかになりそうです^^;

その8・新たな変態、有島（ありしま）安須樹（あずき）

ホームルームが終わった。

薫君は僕との言い合いの後、すぐに教室を出て行った。

ムム……ちよつと言い過ぎたかな？

これぐらいで罪悪感が出るくらいなんだから僕も甘くなったものだ。

「よし、ヘーじ言うじえねーかよー」

前の席の奴が僕に振り向いてニツと笑った。

え、誰？

「おま……クラス違うくても2年も学年一緒なんだからせめて顔は覚えろよ」

訝しそうにしている僕を見て、前の席の男は少しショックを受けているらしい。

知らない物は知らないんだけど。

「アッハ！ ソイツは有島安須樹ありしま あずきって言ってねー？ 中身変態の残念君だよー」

ミホが簡単に説明してくれた。

なんか妙に新しい人間が多いな……気のせいだろうか？

新しいクラスになったのだからソレが普通なのかもしれない。

「俺そんな風に言われてんの！？」

アズキは、何やらショックを受けた様子でズーンツと暗い影が掛かっている。

その様子を見て僕は少し安心する。

僕が出会う人間は大概変人なのだが、彼はマトモそうだな。

まあ、男なんて基本中身変態なんだから大丈夫だろう、うん。

「ま、女の子にそこまで言われたら、ドキドキしてくるけどな……
ウヘ」

ちょ……もうちょっと期待させてよ。

アズキの残念な発言に僕は一気に落胆する。

「ね？ 変態でしょ？」

そう言っミホがアズキを指差しながら僕に笑いかける。

……確かに変態だ。しかも自重という大切な物を無くした残念過ぎるタイプの変態だ。

頼むから僕に前言撤回させないでくれ、そして変態である事を誇りそうにしないでくれ……

「変態と言っても社会的にセーフな変態だ！ ノータッチ！ 見るのはタダ！」

「それ以前に人としてアウトだろ……」

僕の呆れた声に沢渡はムツとした目を向ける。

「ウルセー！ 男に罵られても気持ち良くねーんだよ！」

頼むから普通の人を用意してくれ。

話が進まないので勝手に話を元に戻す。

「で、何？ あの暑苦しい会長さんにボロクソ言ったのは失敗だった？ 同じクラスなんだから見た目だけでも仲良くしろって事？」

「いや、アイツ頭スゲー良いから授業免除されてんだよ、殆ど教室にはいねーからソコは安心しろよ」

「フーン、あんだけ言っというて授業には出ないのか」
そこは秩序とか良いのだろうか。

「アッハッハ！　ヘーじだって本当は授業でなくて良いくせにー」
……何故知っている。

「っえゝ！　お前ってそんな頭良いの！？」
アズキが勝手に驚いている。
え、僕そんな馬鹿に見られてたの！？　そっちにビックリだ！

僕はテストは、普段は本気を出さない。
目立ちたくないから、という単純な理由だからだ。

「アッハッハ！　知ってる人は知ってるよん？　ちなみにあの会長さんも多分気づいてるねゝ、自分よりもヘーじの方が頭が良いってね？」

何で知っているのかは知らないけれど。
なるほど、あの会長のイメーヅからして相当の負けず嫌いを見た。
僕の事を毛嫌いしている意味が解ったよ。

「ま、気をつけろよヘーじ、俺は前にアイツと同じクラスだったんだけどよ、嫌いな奴はことごとく学校辞めさせられてたぜ？」
そりゃ怖い。

何をしたのかは知らないが、注意は必要そうだ。
だが、人の友達を馬鹿にするような奴に媚びるつもりは無い。

「まア……向かってくるなら正面から叩くまでだ」

「ふーん、望む所ってトコだねん？」

僕の言葉にアズキとミホはニヤツと笑い合う。

「やるっきゃ手伝うぜ アイツには俺も煮え湯を飲まされてるんな！」

「アツハツハ！ 私も私も！！」

いや、性悪女と変態男は仕方が無いでしょ。

変態と性悪なら、高校に入ってからあの会長さんとは何度か衝突してそうだし……。

ニヤニヤと笑っている二人を見て、僕はある事に気づく。

何か……利用された気がする……。

今、クラスメートと談笑する僕は、まだ究極の不幸が始まるなんて事には気づいていない。

風紀委員の縁。
不良の「悠真^{ゆうま}」

生徒会長「薫君^{かおる}」

そして全く関係の無い一般人の僕。

この新たな物語に、この3人は深く関わっていく事になる。

正義と秩序と暴君の三竦みに。
僕が振り回されていくのだ。

その8. 新たな変態、有島（ありしま）安須樹（あずき）（後書き）

こっからがスタートみたいなモンです W W

まだ新キャラと重要キャラは出ます。

新キャラのアズキは……まアサクと被らない様に頑張りたいです W W

その9・亜里沙（ありさ）

今日は始業式。

学校は午前で終わりだ。

……何か今日一日でえらく変人な方々と沢山知り合いになった気がする。

もう今日はサッサと帰りたいわ。

ほんつとに……。

というわけで。

今日は帰る！

何があっても帰る！　それも猛ダツシュで！　即効だ！

「アッハッハー？　ヘーじー帰んのー？」

気合いを入れている所に性悪女が声を掛けてきやがる。

発端がミホである事は多い！

僕を呼び止める性悪女を無視し。

教室を出た。

「あれー？　ヘーじー？」

っと、不思議そうにするミホの声が聞こえたがそれもスルー。

「よ！　ヘーじー！」

廊下で挨拶をする変態男には笑顔で「近寄るな」、と一蹴。

「お……俺何かしたっけ……」

っと、半ばショックを受けた様子のアズキには少し悪い気がしたが、今はそんな事を言ってられない。

「ヘーじ！　ヘエエジ！」

遠くで僕の名前を叫んでいる大きな体を持つ別の意味の変態を確認。

……まだ僕に気付いていない。

遠回りして帰る為に閤の階段へ向かう。

学校の裏側にある階段。

あまり人に使われない階段だ。

今、僕以外階段を降りる人間はいないわけだ。

人がいないってサイコー！

何て思いながらルンルン気分の僕は、ホップステップジャンプ

♪　みたいな感じで階段から跳んだ。

2，3段上から飛び、見事に着地する。

筈だった。

グキ。

嫌な音がしました。本当にありがとうございました。

僕はその場で痛みに悶えゴロゴロゴロと転がる。

着地に失敗したアァー！。

見事に失敗し、足を挫いていた。

痛い！　死ぬ！　痛い！　もうダメ！

クソが……クソがアァー！

誰にも関わってないのに何で不幸な目に！！　何故！（天然）

涙目になりながらも僕は立ち上がる。

つく、負けるもんか！

三階が僕らの学年だ、二階が二年生、一階が一年生。
今僕が居る所は2階。

取り合えずはトラブル暴力女が来る前に離れないと！
僕は足を庇いながら、慎重に降りる事にした。

色々あったけど何とか下駄箱の所まで来る事が出来た。
つくそ！ 慎重に階段を降り過ぎて結局遅くなってしまった。
学校が終わった瞬間にクラスを出てきたのにこれだ。
既に他の生徒達も普通に帰ろうとしている所だった。

もしかして普通に帰った方が早かった……？
僕は溜息を零す。

マア、変人には合わなかったし、結果オーライってわけだ。

なんか悲しくなってきた……。

うん……いいや。

帰ろう。

自分の下駄箱を開けようとした時、可愛らしい声が聞こえた。

「ねえ」

声の先はスグ横からした。

条件反射で横を向くと、小柄な少女が居た。

サラサラの黒髪を左右で結び可愛らしいツインテールが似合っている。

僕をジッと目を細めて見る少女。

な、何だこの子？

少女は方眉を上げて見せる。

その行動の意図は読めない。

「この子なんて名前じゃ無いですよー 亜里沙ありさって名前ですよ、へーじ先輩♪」

そう言って少女、基、香織という名の少女は僕に笑顔を向ける。

その9・亜里沙（ありさ）（後書き）

ぐわあああ！ 折角毎日更新してたのに、等々更新出来なかったア
ア（TT）

部活の飲み会で遅くなったと言い訳しておきます（汗
現在12時33分……どっちにしても更新が少しズレてしまつてゴ
メンナサイ＞＜

その10. 恐怖の恐怖のダブルパンチ

「あ、ああ、亜里沙ちゃん？　僕に何のよう？」

僕は戸惑いつつも要件を聞こうとした。

ツパと見だが。

とても可愛いらしい少女だ。　下手したら志保ちゃんと良い勝負かもしれない。

……知らない子だ。

この学校内じゃ見た事無いし、まだ幼さの残る表情から一年生と認識。

亜里沙ちゃんは僕の言葉の返答にも応えずニコニコと笑っている。僕はそれをつい訝しく見てしまっていた。

普通の男ならこんな可愛い子に話しかけられれば有頂天になるだろうけど、今の僕にそんな余裕な考えは浮かばない。

何故なら。

この子からも変人の匂いがするからだ！

僕は自分で思った事に、勝手にウンウンと頷く。

今日一日でこんだけ妙な人間に絡まれるんだ、この子も変人だろう！

そんな風に勝手に考えていると、少女は少しムツとした表情を作った。

「えー、変人とか酷く無いですかー？」

何を言う、僕に話しかける時点で変人だ。

そう、僕のような冴えない人間に態々話しかけたいなんて思う人間はそうそういない筈だ。

つまり、この子は変人だ！ 断定！

「ヒッドーイ！」

そう言ってケラケラと少女は笑う。

……………あれ。

……ん？ 待て待て待て待て。

僕は今喋ったか？ ていうか最初の『この子』と言ったのも口には出していない。

き、気のせいだろうか？

「わー直ぐに気づくなんてスッゴイ！」

そう言って微笑む少女。

僕の表情はみるみる強張る。

自分のカンが大当たりでこの子が変人なのは確定だけど。

この子……何モンだ？

もし、そうなのであれば、僕のカンが再び正しければ。

変人は変人でも。

タチが悪すぎる。

「……で、僕になんのよう」

先程までのよそ様用の言い方は止めた。

冷たく突き放した言い方、僕の中でこの少女は『変な子』から『危険な子』へ変わった。

冷静に分析する様に、僕は少女を細く睨む。

僕のそんな様子を見て、何が楽しいのか少女はケラケラと笑っていた。

その可愛らしい笑みが、今度は不気味に思える。

「アリサはーえっとー？」

業と伸ばし様な言い方。

自分の事をアリサと呼ぶ様子は、妙にこの子には合っていた。

まるで僕の反応を見て楽しんでる様に人差し指を自分の唇に当てて考える素振りを見せる。

多分、仕草だけで何にも考えていないのだろう。

「悪いけど、急いでんだけど」

出来るだけ冷たく言った。

そんな僕を見ても少女は不満そうな様子は見せない。

僕は余裕を見せるように。

フフン、と馬鹿にした様に笑ってみせる。

ついでに心の中で毒を吐く。

『サッサと用件言えよ一年のガキ』

亜里沙ちゃんの片眉が再び上がった。

少女の顔から笑みが消えた。

謎の少女は小さな声で、僕に聞こえるか聞こえないかでボソッと零した。

「アリサはガキじゃ無いもん」

……決まりだ。

信じ難い……が。

車よりも速い速度で走れる女の子を知っている僕としては今更信じる信じないも無い。

怪力無双の女の子に何でも知ってる性悪女。

僕の知ってる女の子じゃタチの悪い二人だけど……この子の方が多分タチが悪そうだ。

僕の顔は見る見る強張り、頬が引きつる。

ハ……ハハ……

僕の周りにはこんなのはっかか……。

『サイコメトラ』

その言葉が僕の脳裏に浮かんだ。

少女はニッコリとほほ笑む。

もう心が読めるとかそういうのは良いとして、サッサと用件を言え。

もう帰りたい……ほんと。

「ねー先輩？」

謎のエスパー(?)少女が口を開く。

僕の心境を文字通り読んでくれたのか、多分用件を言ってくれるんだろう。

「なに」

半ば諦めて僕は彼女の言葉に耳を傾ける。

「アリサはー」

業とらしく一回溜めて、亜里沙ちゃんは男が見たらニヤけそうになる程の可愛らしい笑みを、しかし裏が在りそうな悪戯っぽさも含めて、笑顔を僕に向けた。

「へー先輩の事が好きなんですけどー♪」

……ん？

………ん！？

僕の中で、血液や脳や心臓までも一瞬、固まった様な錯覚を覚えた。

「アハハー！ 先輩の心の中グチャグチャー♪」

僕が目まぐるしく回転する心の中を覗いている少女は屈託無く笑っていた。

心の中は忙しいけど、体は完全に石の様に停止状態の僕。

エスパー少女は人目を憚らず、突然僕の首に両手を回す。

少女の綺麗な顔がグッと近くなった。

小さくチロツと舌を出す仕草は僕を挑発している様で、何という

か……エロい。

未だ硬直状態の僕としては動けないわけなのだが……。

エスパー少女は僕の耳元で、秘密話をするように小さな声を零した。

「……でもー、こんな状況でー、アリサじゃ無くて別の女の事考えてるって最低ですよー？」

な、なななななな！？

心の中を読まれるというのは中々厄介なわけで。

僕は、アリサというこの女の子の他に、咄嗟に別の子の事を頭に浮かべていたのだ。

そして。

丁度素晴らしいタイミングで。

脳裏に浮かんだその子が、廊下の奥の奥から。

ツパと見で殺気が見える程のオーラを出しながら、すざまじい目力で僕をメチャクチャ睨んでいた。

僕は自分自身でも顔が真っ青になったのが解ってしまう程に血の気が引いたのを感じた。

その子の隣では。

また別の意味でドス黒いオーラを放ちながら睨んでいるショートカットの別の少女も見えた。

そして。

そんな最悪な二人の少女の後ろで、頭を抱えている志保ちゃんが見えた。

この二人がなんでこんなに怒り狂っているのかは知らないが。そして知りたくもないが。

正に恐怖のダブルパンチに睨まれている僕としては泣きたくもないわけ。

その怒りや殺気をビシバシと僕に向けている事から、当然矛先も僕なわけだ。

泣きたいを通り越して死にたい……。

……志保ちゃん、頭抱えてないで助けて。

僕はこの中で唯一マトモな志保ちゃんに、涙目の視線で必死に助けを求めた。

しかし。

志保ちゃんは僕に同情の視線を向け、フルフルと首を横に振った。

その後、志保ちゃんはソツと目を瞑ると、縦と横に手を動かし小さなジェスチャーを見せる。

その意味合いは。

アーメン。

神様なんて糞食らえだドチキショウ……。

その10. 恐怖の恐怖のダブルパンチ（後書き）

前回、亜里沙の名前が香織になっていた事を深くお詫び致します……
実は亜里沙の最初の名前は香織でした。

しかし、会長さんの名前が薫で、似た名前があると被るなー、と急遽変更した次第です。

全て直したつもりでしたが見落としがあったようでした。

本当に申し訳ありませんでした！

感想で教えてくださった方、ありがとうございますm（ー　ー）m

その11. 惚気にしか聞こえない言葉って……終いには呆れるんですが

「ほんと、ヘーじってば馬鹿だからねーアッハッハ！」

「ですよね〜！」

妙に賑わっている二人の後ろを私は歩いてた。

右側のサイドテールは私の親友の縁。左のショートカットが私の姉の水歩。

縁と帰ろうとした時に、偶然お姉ちゃんと出会い一緒に帰る事になったのは良いけど二人はずっとこんな調子だ。

というか、ヘーじさんの事しか喋ってない……。

二人してヘーじさんの何が悪いだとか、何があったとか、そんなのばっか。

意地っ張りな二人だからこんな会話しか出来ないのと、この二人だからでしか、盛り上がれないのと……。

ヘーじさんの事しか頭に無いのは微笑ましいけど、後ろで話を聞いている私としてはため息しか出無い。

唯一、二人の心境を知っている私は、二人の後ろで再び小さくため息を付く。

ヘーじさんも苦労人だな、何て勝手に考える。

いい加減この二人の会話は唯の惚^{のろけ}気にしか聞こえないのだから。

そんな二人の会話を聞いていた時、廊下の奥で見覚えのある人物を見つけた。

それはちょうど前の二人が喋っている会話の人物。
……あれ。

気のせいかな、なにやら可愛らしい女性に抱きつかれている……
ような……？

私がそれを確認したのと同時に、目の前の二人の女性の会話と、
そして足が止まっていた。

危うくぶつかりそうになるも私も慌てて止まる。

どうしたの？ と、聞く前に、私は現状を理解した。

後ろからだから、二人の表情は見えないけれど……背中からドス
黒いオーラが見える……。

二つのオーラが重なり、とても大きく見える。

わ、わあ……。

へーじさんを再び見ると、こっちに気づいていた。
コチラから見えない二人の表情を見た途端、へーじさんの顔がみ
るみる青くなっていく。

あ、へーじさん涙目になってる……。

悲しみの視線は、二人から今度は私に向けられた。

そんな目で私を見ないでください……。

私にもどうにも出来ません。

この二人を止められる人間はきっと地球上にはいないんです。

私は哀れみの視線を向け、今から起こるであろう惨劇から目を逸らす様にゆっくりと目蓋を閉じた。

そして胸の所で十字を切る。

どうか神様……ヘーじさんに幸福をお与えください。

その11. 惚気にしか聞こえない言葉って……終いには呆れるんですが(後書き

ヤバイ。。。やつばーい！

更新急ぎます！

その12. 身体的ダメージのプロと精神的ダメージのプロ……プラスプラスで

僕が何かを言う前に縁は行動をしていた。

結構離れていた筈の距離は縁の在り得ない瞬発力で短くなっている。

目が……燃えている。

僕に向けられている視線は怖い一言に尽きる。

「うわわわわわわわわ！」

恐怖で声から悲鳴のような良く解らない物まで出る始末だ。

怖すぎて視線を外した。

そこでカオリちゃんがいなくなっているのに気づいた。

僕に抱きついていたカオリちゃんは何時の間にか離れ、安全圏の位置にまで移動していた。

何だその笑顔はエスパー女アア！

まるで解っていたかのような笑顔には殺意を覚える。

ちきし……。

僕の悲痛の思いは途中で途絶える。

それは横から来た飛び蹴りのせいだからだ。

蹴ったのは当然に縁。

見事に僕の横腹を捉え、派手に僕は飛ぶ。

僕は見事にズジャァー！ と廊下を転がった。

あまりにも威力で僕は廊下の上で二度三度見事に跳ねた。

痛い、強烈に痛い！

何やらいつもの攻撃とは全く違う気がする……。

怒りと言うか、なんというか……戸惑った分手加減が出来てないみたい……。

ヤ○チャの様に転がっている僕を見下ろしている縁が居た。

顔が真っ赤だった。

目が右往左往している。

こういう時の縁は、めっちゃくちゃ戸惑っている時だ。

「つここここここ校内の異性交遊は禁止よ！ 禁止！！ そ、それをこんな廊下で白昼堂々と！ し、しかもへへへーじと！ へーじとッ！」

最早何を言っているのか解らない。

つというかいきなりの蹴りで受身も取れずモロに食らってしまった。

痛みで何も喋れない……。

「変態！ セクハラ！ 女の敵！ 馬鹿！ アホ！ へんたい！ ！ 後々…… へ、へんたい！！ へんたいへんたいへんたいへんたい！！」

結局ヘンタイしか言っていないよ君……しかしこのまま誤解されたままでは色々困る。

縁程勘違いしやすく、勘違いをとき難い人物もそうそういないほ

どだ。

僕は痛みに歯を食い縛り、声を押し殺す。

「ま、待って…話を聞いて…」

「うるさいうるさいうるさい！ 死ねバーカ！ アホ！ アホヘー
じー！」

最早聞く耳持たぬとはこの事、僕の必死に搾り出した声は縁の叫び声に消え去った。

そして縁は散々僕にボロクソ言った後、何故か涙目になりながらゼーゼーと荒い呼吸をしていた。

どんだけ興奮してるんだ君は。

そして僕を思いっきり睨みつけた後、縁は僕に背を向けて上履きも変えずに、すざまじい速度で校舎を出て行った。

……ぼ、僕が何をしたアアー！。

僕の悲痛の心の叫びなんて誰にも聞こえるわけは無く……いや一人、楽しそうに笑っているその女には聞こえているのだろう……クソが、クソがー！

痛みと悲しみに僕は倒れたまま涙を流していた。

なんだ、どうしたら良いんだ僕は……本当何で……。

そんな悲しみに暮れている時、

横側からパシャパシャという音が聞こえた。

僕は涙を浮かべながらその音の先に顔を向けた。
予想通り、ミホだった。

カメラのレンズが僕を覗いていた。

距離的にいえば、レンズで自分の顔が見えるくらいの距離で撮っていらっしやる。

ってというか僕ってば涙やら鼻水で顔がぐちゃぐちゃになってたのね。

「……何してんの」

取り敢えず聞いてみる。

「んー？ 明日の記事だけど？」

予想通りの答えと共に、カメラのシャッター音は止まらない。

……再び予想通りだろうけど一応聞いてみる。

「何を書く気だ」

「熱血女と貧弱男、電撃的破局！」

「……うおい！ これ以上事態をややこしくすんな！！」

僕の怒りの声と共に、16連射並に連打されたカメラの手が止まった。

何か黒いオーラらしき物が見えるのは気のせいだろうか……。

カメラで顔が見えないのが余計に怖い。

そのカメラを、ミホは下ろした。

……。

その顔は笑っていなかった。

あ……あのミホの顔が笑っていない……。

いつもニコニコとしている基本笑顔を絶やさない筈のミホが、目を細めて明らかに不機嫌をあらわにしていた。

僕の態度は一変し、恐る恐る……爆弾に触れるような気持ちで丁寧な話しかけてみた。

「あ、あのーミホさん？　僕がそんな節操うの無い人間じゃないって解ってるよね……？　いつも通り……毎度毎度運悪く君らが来て、僕自身にはその気が無いって……解ってるよね！？」

ミホは頭の良い子だ。

だからこそ、こんな状況になっても即座に状況を見抜けて、尚且つ余計にタチを悪くするのだ。

そんな時、やっぱりミホは笑顔を絶やさない。

それは彼女自身が楽しんでいたりする節があったりもするからだ。その笑顔が無いという事は……ミホまでも勘違いしているんだ！　きつとそうだ！　ドン引きが一番凹むのに！

「明日の新聞楽しみにしててよ……」

ドスの利いた声に、縁が僕の腹部に蹴りを入れたのと同じ様に、僕の心に思いつき蹴りを加えた感じで（イメージ）ダメージを与えた。

うあゝあゝあゝあゝ……。

僕は身体的に腹部を痛めつつ、直る様子の無い心の痛みに嘆いていた。

偶然なのだろうが、見事なまでなチームワークでミホと縁は僕の心と身体に大ダメージを与えた。

まさにこの学校きつての最悪コンビならではのダメージ。僕は何やらいつもの何倍もダメージが半端じゃありません。

涙を流しながら僕はこの悲しき現実から離れようと目を瞑った。言うなれば現実逃避、という物である。

ああ……。

冷たい廊下が気持ちいい……。

……もうヤダ（泣）

廊下につっ伏しながら涙をボロボロと流しているヘーじは私と縁ちゃんのダブルパンチでノックアウトした様だ。

取り敢えず床につっ伏しているヘーじの写真をもう2、3枚撮っておく。

私のヘーじベストショットコレクションがまた一つ増えた。

うん、そこは置いといて。

私はすぐ横でニコニコと笑っている少女の方を向いた。
目は自然に、怒りを押し殺し笑顔の形に。

「悪いけど、うちんトコのヘーじ誘惑すんの止めてくんない？」

少女はケラケラと笑い声を上げた。

その笑い声が、酷く馬鹿にしているようで、鼻にかかった。

「ええー？ 私そんなつもりは無いですよー」

高い声に余計にイラ立ちを覚える。

「アッハッハ！ ヘーじ狙うなんて物好きな子だねー？ ま、コワイおねーさんに殺されてもしらないよん？」

顔は無理に笑みを作っている。

だけど、睨みつける目を、笑みへ変える事はできないみたい。

少女はまた笑う。

耳に障る笑い声で。

「そのコワイおねーさんってさっきの人ですかー？」

そんなのいわなくても解るでしょ。

「それとも……こっちのオネーサンの事ですかァー？」

「……！」

その視線は私の方を向いていた。

私が怖いおねーさん？

アッハッハ！ なーに言ってるのこの子ー？

……解ってんじゃない

私は作り笑いを止めた。

腕組みをして少女の方を、目を細めて見つめた。

完全に敵意を込めて。

「どういうつもりなわけ？　ヘーじに態々近付いて……目的は？」

「えー？　目的だなんて……亜里沙は純粋にヘーじさんの事が好きただけだしー」

私の言葉に少女はモジモジと体を揺らしながら言う。

上目遣いで怯えたような態度を見せているが、それが演技である

事はお見通しだ。

「君が一年生の……それも、あの悠馬君と通じる人間だって事は知ってるのよ」

その言葉を出した瞬間に、少女の目の色が変わった。

悠馬君が中学で有名だったのは知ってる。

そして学校に入って直ぐに一年生内でグループを作り始めているのも知っていた。

今日一日の始業式だと言うのに、動きが異常に早い……多分この高校に入る前からグループ作りは始まっていたんだろう。

少し気になって一年生を全体的に調べたことがある。
噂通り、組織化されているのは確かだったようだ。

その一年生内のリーダーと思われる悠馬君が初日でヘーじに近づいた。

その次に悠馬君と繋がりがあられると思われるこの子がヘーじに話しかけてきたのだ。

偶然とは思えない。

この子は……いや一年生を調べていたときに名前も知ったんだ。
この子、という言い方は的確ではないだろう。

早乙女 さおとめ 亜里沙 ありさ

かなりタチの悪い女で男クセも酷いとか。

巧みな仕草や言葉で男をモテ遊び貢がれた品物は数知れず、その

誘惑する上手さは人の心を読む事が出来るのではないか、と思われる程だとか……。

この子の事はあまり的確な情報は無いし、この話しは全て噂でしか無い。

噂話しに尾ひれが付く事なんてよくある事だけど、その中に真実があるのも確かだと思ってる。

……油断するつもりは無い。

「べっつにー？ 亜里沙は本当にへーじさんの事が好きなんですよー？」

頬を膨らませる仕草に無意識にイラっとしてしまう。

何でこんなにムカムカするんだろう。

私の脳裏にはへーじに抱きつく亜里沙ちゃんしか浮かばない。

私だって……縁ちゃんだって自分からそんな事しないのに！

それなのに……そんな突然出てきた子に……！

突然亜里沙ちゃんがクスクスと笑い出す。

「な、何よ」

笑われるような事はしてないんだけど……？

「いえいえー？ オネーサンってば、ホントへーじさんの事好きなんですわー！」

その言葉と共に。

自分の顔が真っ赤になっていくのが解った。

え、え！？ わ、私……なんか変な事言っただけ……？

一言も言っていない。

そんな素振りも見せてない。なんで。何で!?

困惑する私を見て、亜里沙ちゃんはクスクスと楽しそうに笑う。

「オネーサンってばすっごく可愛いーですねー♪ そんな素振りなんて全然見せないのに、心の中じゃへーじさんの事しか考えて無いんですもん」

可愛らしい笑みで亜里沙ちゃんがコロコロと笑う。

私は俯く。

きっと私の顔は真っ赤だと思う。

耳が熱い。

どうしちゃったんだ私……落ち着こうよ……いつもの私だったらこんな笑い飛ばして。

「好きだけど何もいえなくて、ついつい怖いオネーサンに譲ってばっかで、それ見て苦しいのが解ってるのに、それでもそのお節介を止めようとしな……オネーさんって変な人ですねー?」

少女は馬鹿にしたようにケラケラと。

また笑う。

何で……知ってんのよ。

「最初から人に譲るんだったら好きにならなきゃ良いのにーほんっと変なのー!」

馬鹿にしたように笑う。

私の思いも知らないで、何をペラペラと。

いつもなら言い返しているのに、私は俯くしか出来ないでいた。頭には自分を自虐する罵倒が浮かぶ。

さつきからずっとそうなんだ。

ソレをまるで知っているのかのように亜里沙ちゃんは私の頭を見透かす。

私が思っていることだから。
何も言えないんだ。

涙が。

出そうになる。

妹の前で。

へーじの前で。

こんな学校の中で。

今迄仮面を被ってきた私が。

こんな小娘に……！。

その14. 妹の前では、良い姉でいたくて。

私は結構シスコンらしい。

その時。

パン！

と、大きな音が響き渡った。

その破裂したような音に顔を挙げた。

私の目に広がった光景は。

あまりにも予想外の事だった。

志保が、亜里沙ちゃんの頬を叩いたのだ。

すざまじい形相で亜里沙ちゃんを睨み、振り切った手を下ろしていた。

あの優しい志保が、こんなに怒りをあらわにし、そして手を出したのを。

姉であり最も近くに居た私でさえ初めて見た光景だった。

亜里沙ちゃんは叩かれた拍子にソッポを向く形になっていて、表情が見えない。

だけど、頬が赤く染まっているのを見て強く叩いたのが解る。

亜里沙ちゃんがゆっくりと顔の位置を戻す。

「アハハー……い、痛いじゃないですかー……」

亜里沙ちゃんの表情は笑顔であった。

しかし、その目を赤く染め、今にも泣きそうになっていた。

「お姉ちゃんの事何も知らないクセに……」

志保が震えた声を出す。

搾り出すように。

「何も知らないクセに知った風な口聞かないでよ!」

志保の声が廊下内に響き渡る。

既に殆どの人間が帰った廊下は静かで、志保の声が良く聞こえた。

「お姉ちゃんがどんな気持ちで……! どんな気持ちでいつもいるのかも知らないで!」

その言葉は、志保の眼の前に居る、頬を押さえている少女に向けられた言葉。

「お姉ちゃんは……私のお姉ちゃんは……」

そこで志保の言葉は止まった。

肩を震わせながら俯いた。

……この子は、何でこんなに優しいのかな。

私はそっと志保の肩に手を置いた。

「もういいよ、志保……」

私の言葉に志保は、何も言わず顔を挙げた。

私は何も言えないのを見て、彼女が変わりに叫んでくれた。

私の情けない姿を見せて、失望するどころか怒ってくれた。

妹に助けられた何て恥ずかしくて言えない。

ゴメンね、弱い……おねーちゃんだったね。

もう大丈夫。

……多分、きっと。

私は志保を守るように前に出ると、いつものように亜里沙ちゃんに笑顔に向けた。

心の不安が、ヘーじの想いが消えてたわけじゃない。

だけど、妹の前に出るのが私の姉としての務めだと思ったから。

私は優しく後ろに居る志保に言った。

「志保……先に帰ってて」

「で、でも……」

か細い声で志保が反論しようとする。

しかし私は志保が何か言う前に続けて口を開いた。

「アッハッハ！ 私を誰だと思ってるの？ 天下の水歩ちゃんだよん？」

気楽に、いつも自分が言うように。

……いつも通り言えたかは解らないけど。

「……解った」

きっと納得はしていない。

だけど志保は解ってくれた。

志保はそれ以上何も言わず、そして亜里沙ちゃんの方を見ないようにながら自分の下駄箱の方へ向かった。

私の方に何度か視線を向け、何度も振り返りつつ校門の方に消えていった。

私はそれを見届けた後、再び亜里沙ちゃんに向き直った。

「……優しいんですね」

亜里沙ちゃんは悪意無い笑みを私に向ける。

「アハハ……あの子には今みたいなトコとか見せたくないんだ、只それだけ」

志保の前では姉としていた事、かつこ悪い所を見せたくない事、そして何よりも志保の心をこれ以上傷付けたくない事だ。

彼女は誰よりも綺麗な心の持ち主だから、汚れて欲しくないと思うのはシスコンだろうか。

私と亜里沙ちゃんが見つめあう形で沈黙が続いた。

もう睨むような事はしていない、多分、怒れば怒るほど彼女のペースになるのだろう。

冷静だと自負している私の心を揺れ動かしたのだ、中々油断出来ない。

……今度は何を言う気なのか。

亜里沙ちゃんはニコツと可愛らしく笑いかけると私に背を向けた。少し拍子抜けして私は目を丸くする。

「今日はこのくらいにしてあげます。　ヘーじさんとも会えたしー、では、また会いましょうね！」

そう元気一杯に言うのと、亜里沙ちゃんはサッサと歩き出す。

私は一瞬止めようと手を伸ばした。

しかし、止めた所で何も言えないと解ると、直ぐに手を引っ込めた。

私は……こんなにも弱かったか……。

「あ、そうそう」

俯く私にカオリちゃんの声が耳に入る。

その声に私は顔を上げた。

亜里沙ちゃんは振り向いているわけでは無かった。

「その気持ち……はつきりさせといた方が良いんじゃないんですか？」

それだけ言うと、亜里沙ちゃんは再び歩き出した。

両方で揺れるツインテールが風でなびき、後姿でも、ああ、この子は可愛いんだな、なんて勝手に考えてしまっていた。

私は再び俯く。

亜里沙ちゃんの言葉が頭の中で繰り返される。

「はつきりさせといた方がいい、かあ……」

今も眠っているヘーじに視線を落とした。

暫くヘーじの寝顔を見つめた後、亜里沙ちゃんが去った方向に目をやる。

……不思議な子。

あの子はきっと私だけじゃなくて、縁ちゃんの敵でもあると思う。

だけど。

最初は腹が立つただけだったけど。

聞いていた噂程、あの子は害のある子では無いのでは？
と思えた。

あの子はあの子なりの考えがあるのかもしれない。

亜里沙ちゃんと、後何度か衝突するんだろうな。

何て変な予想を立てていた。

その予想が当たるのか当たらないのかは解らないけれど。

それとは別に、私の視線は再び下を向いた。

今も眠っているヘーじに、だ。

さ、て……どうしよーかなー。

その14. 妹の前では、良い姉でいたくて。

私は結構シスコンらしい。

(後

前回の感想で体につけましようと言って頂いてたのですが……
風邪をひきました(T|T)

猛烈にシンドイです(汗

みなさんも体は大事にしましょー!

私みたいに裸で寝たりしちゃいけませんよー!

でも裸で寝たら気持ちいいんです(*´|`、) ポッ↑(懲りてない)

その15. 魔女と呼ばれた少女

風になびく髪の毛は時々顔にも掛かり鬱陶しくも在った。

わたしはその髪の毛を掻き揚げる素振りをしつつ早足で歩いた。
ズキズキと頬が痛い。

まさか叩かれるなんて思っていなかった。

心の読めるわたしは、先程のオネーサンの妹と思われる人……確か志保さんという方の強い強い気持ちを感じ取ってしまった。

心は読めるけど、コントロールしているわけじゃない。

ソレは勝手に頭に流れ込んでくる物だ。

わたしを叩いた志保さんの様にその津波の様な心に。

一気に心を読むと気圧される時がある。

心を読むのも楽なわけでは無いのだ。

今も街中を歩くだけで声は五月蠅い程にわたしに届いている。

汚い声、杜撰な声、激しい声、下げずむ声、五月蠅い声。

【うおーあの子可愛いー】【彼氏いんのかなー？】【なによアレ】

【あの子チョー調子乗ってそー】

わたしは無意識に早足になる。

相変わらず、人間の心の声というのは気持ち悪い……。

ヤダ……ヤダヤダ。

わたしは耳を塞ぐ。

それでも手の隙間から人間の汚らしい声が聞こえてくる。

わたしは人、という物が嫌いだ。

心の中を毒々しく染める姿は、ケダモノにしか思えない。

だけど。

あの人たちは違うかもしれない。

そつと頬に触れた。

熱い……。

思い出すと、また涙が出そうになる。

ああ……怖かった……。

わたしの見た目にどうか言うわけでもなくて、純粹に、輝く心を持つ人たち。

心の底から言葉を出すヘーじさん。心のままに動く怖いオネーサン。心の感情が一気に上がったたり下がったりする先程のおねーさん。そして人のために怒れるオネーサンの妹の人。

父に我儘を言ってこの学校に来て良かった。

こんな人間もいるんだ。

わたしは何処かで安心する。

人間という存在を嫌うわたしは、何処かで人を嫌う事をやめたかったのかもしれない。

心が読めるわたしに、対等になれる人がいるなんて思えなかった

けど。

きつと……きつとあの人たちなら。

物心付いた頃から聞こえる人の醜い声に飽き飽きしていた。
この学校なら、その飽きも解消してくれる。

熱い頬に触れる。

殴られるのも初めての経験。

頬が熱くて痛いのに、ドキドキする。

しかし、そこで妹の方の怒りの表情を思い出した。

わたしは、少し顔を曇らせる。

ちよつとやり過ぎだったかもしれない……。

怒られる、という経験がほぼ無いわたしとしては、悪い気がして
しまう……。

……それにしても。

あのオネーサンは可愛いかったな。

オネーサンの心の声は、ヘーじさんの事ばかりだった。
恋する乙女というのは凄いらしい。

私は、一人、クスクスと小さく笑った。

もつともつと遊びたいな。

もつともつと、わたしを楽しませてよ。

もっともっともっともっともっ……。

ウフ。

ウフフフフ。

町を歩いていると。

一人の男性が私の顔を覗きこんだ。

良くあることだ、わたしの顔を良く見ようと覗きこんでくるのだ。そういう男は大概ニヤけ面だ。

しかし、その男の顔はニヤけ面から直ぐに強張った顔へ変わった。

クスクス……わたしどんな顔してるんだろ？

その答えは、男の心から聞く事にした。

【……………魔女】

面白い発想をする男性ですね。
でも。

良い表現。

固まっている男にとびっきりの笑顔を見せる。

「オニーサン♪ その通りです♪」

青ざめていく男を無視して先を歩く。

零れる笑みは、止まらない。

また明日。お楽しみはまた明日。

今度はもっと遊びましょうね、
ヘーじさん♪
オネーサン♪

その15. 魔女と呼ばれた少女（後書き）

献血があつたので興味本位でやってみた時の話し。

私「いっぱい取って下さい！ 世界の人の為に！！」（；・ω・）
ー〇↑（腕を出してる）

友人「日本赤十字だから日本内だけだな」（ノω、）プププ

困り顔なおねーさんと談笑しながらも色々と検査。（献血って色々検査しなきゃ出来ないよーです、知りませんでした）

そんな時、とんでもない事が起こりました……。

おねーさん「……O型ですよね？」

私「はい！18年間O型です！！」（；・ω・）

「アナタ……」

深刻な面持ちのオネーサンに心配になってくる私（（（（；・ω・
、（（（ガクガクブルブル

「A型ですよ？」

私「……は？」

オネーサン「いえ、あなたA型です」

私「っはア!?!Σ(。ロ。;)」

なんと18年間信じていた血液型はOでは無くAだったのです。

工工工エエエエエエエエエエΣ(。D。ノ)ノエ
エ、

こんな事ってあるんだア……自分で大雑把IWとか言ってたので何
やら複雑な気分……orz

親に確認をすると。

親「えーWマジでIW知らなかったーW」

私「ちょ……アンタの大切なお子さんだよ!　そういう所ちゃんと
しようよ!」

親の適当っぷりに凹んでしまった私でした。。。(T|T)

みなさんも気をつけましょう。。。 (無いと思うけど)

その16. 黙っていれば美人

最初に目に入っただのは、薄暗い天井だった。

ボウ……とする頭がゆっくりと動き始める。

ミホと縁のダブルパンチで確か僕は倒れた筈だ。

残念な事に胸の痛みと心の痛みが夢でない事を証明している。

そして今は白いベッドの上に居る。

誰かが運んでくれたのだろう。

薬品の匂いと見覚えの在る景色を遮る白いカーテン。

ここは多分、保健室だろう。

真っ暗な様子を見て、今が夜なのは間違いないだろう。

折角の放課後が潰れた事に少し落胆する。

カーテン越しに薄い光が零れていた。

その明るくも無い光は、多分月の光かな、と勝手に解釈。

起き上がり、遮るカーテンに手を掛けた。

ツシャ、という擦れる音と共にカーテンは簡単に開く。

遮るものは無くなった。

僕の目に最初に映ったのは。

一人の少女だった。

少女は保健室用の椅子に腰掛け、片手に持つ本に目を落としていた。

その本に目線を落とす姿が知的なイメージを思わせる。
少女を、月明かりが照らす。

照明の様に、月明かりはたった一人の少女を照らす。

まるで、その少女の為に光が存在しているのかのような、そんな錯覚を覚えた。

神秘的な姿に、目を奪われていた。

空けられた窓からの風で少女の黒いショートヘアが揺れ、サラサラと揺れる髪は柔らかい印象を思わせる。

そんな風等気にせず、少女の視線はひたすらに本へ向けられていた。

僕は。

その横顔に見惚れていた。

柔らかかに揺れる髪に、肌、目に、全てを呆然と見つめ、その少女の美しさに惚けていた。

こんな綺麗な人が居たろうか……？

少女が着る制服は同じ学校の物だ。

でもこんな少女が居れば知っている筈だ。

呆然としてみると、少女が僕に気がついたのか本を閉じた。

パタン、という音と共に本は机の上に置かれる。

少女が僕の方を向いた。

「おっはー、ヘーロー！」

そのあっけらかんとした言い方には聞き覚えがあった。
そして、少女が僕に向ける笑顔にも、見覚えがあった。

「……ミホ？」

「なーんで疑問系？ みんなのミホミホですが！
何故か胸を張っていらっしやる。」

……あれ？ 僕はまさか……ミホに見惚れてた！？
自分で自分に自己嫌悪……この超絶性悪女に見惚れるとは……。
僕は深く、ふかあああつく！ 溜息を付いた。

「つむ！ なんの溜息よー！」

何かご不満な様子のミホ。
それを見て僕は呆れた視線を向けた。

そして……気づいた。

この子は黙っていれば相当な美人らしい。
いつものやりたい放題っぷりに隠れていたようで……。

しかし、この子はこんな遅くまで何してんだ？

「まったく起きるのおっそいってば〜」

その言葉だけで、なぜこの子がいるのが解った。
僕を運んだのがミホで、ミホはずっと僕の事を待っていていたのだ。

「な、なんで？」

その言葉だけでミホも僕が言いたいことを理解してくれただろう。何で僕を待ってたんだろう？

サッサと帰ればいいのに、こんな夜遅くまで……。

ミホはいつものお得意の笑顔だ。

二ヒツつと見てる方が恥ずかしくなるくらいの笑顔。

「エッヘッヘッヘッヘ〜！　なんでかねん？　なんでかな〜？」

挑発するような笑み、僕の顔を覗き見る楽しそうな表情は子供の様に輝いていた。

その16. 黙っていれば美人（後書き）

昨日徹夜で鉄拳してました……

私「もう寝させろよー（泣）」

友達「まだ全キャラ出てないんだよ！」

私「一人でやれよ！」

友達「ウルセー！　こんなの一人で何時間もやってたら発狂するわ！」

私「ちょ！　そんな理由で巻き込むなよ！　私が先に発狂するわ！
Σ（。∪。；）」

友達「さーて次のキャラはー……お、この子可愛いー、決定（。ω。）」

私「（。∪。アラヤダ　この野郎人の事ガン無視ですか」

更新出来なかったのはあのクソ野郎のせいです。私のせいじゃないんだ
アアアアア（つー；）

その17. 自制が効かない程に嬉しくて仕方なくていつも以上に調子に乗って。

今回はヘーじとミホと、二人分の視点の話があります。

その17. 自制が効かない程に嬉しくて仕方なくていつも以上に調子に乗って。

夜の公舎を二人で出た。

妙に明るいの満月のせいだろう。

誰もいない学校を歩く、と言ったのも中々奇妙な物だ。

僕よりも先を歩くミホはピョンピョンと跳ねるような歩き方をしていた。

ショート髪の毛がユラユラと、その度に揺れる。

月明かりに照らされながら眼の前の少女は跳ねる。

ウサギみたいに、ピョンピョンピョンピョン。

相変わらず行動が読めない子だ。

えらく楽しそうだ。

彼女はいつも楽しそうに行動している。

馬鹿みたいに騒いだりして、いつも明るい子だ。

意味があるか解らないピョンピョンと右足、左足、とバランスを取りつつ跳ぶミホの後ろを着いていっていた。

っていうかスカートも跳ねる度に浮いてるんですけど……見えるか見えないかについつい視線を向けてしまう。

そーゆートコは意識してやってるのやら……気付かずやってるの

やら……。

ミホは僕の方にクルンと振り返った。

同時に目線を向けていたスカートも大きくヒラリと舞う。

シャイな僕は慌てて視線をミホの顔の方に向ける。

見る度胸も無いし見た後に死ぬ思いもしたくない。

ミホに今度は何を言われるか解ったもんじゃないしね……。

ミホは僕に向けて何時もの笑顔を見せていた。

「しかし、ヘーじってばモテるねー！」

何か嫌味にしかきこえない気がするのは気のせいだろうか……。

先ほどと言っているのかは解らないが、亜里沙ちゃんの事を言っているんだろう。

確か抱きつかれたのを見られたっけ……。

そんな勘違いをされても仕方が無いが、僕にその気が無いというのも解って欲しい。

「何言ってるの、こちとら迷惑だったの」

確かに美少女だし好かれるのは悪い気はしないけど、あの子は何か裏があるみたいだし……なによりも心を読む少女なんて対応のしようが無い。

「えー？ そう？ まんざらでもない感じじゃーん？」

ツム、何か突っかかるような言い方だな……。

というか君は僕の真っ青な表情を見て、まんざらでもない感じだったと言えるのかオイ。

「確かに可愛いけどアレと付き合うくらいなら、まーだミホの方が千倍マシだよ」

ミホはキョトンとした表情を見せる。

だけど、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「アッハッハッハ！ 嬉しい事言ってくれるねー！」

照らす月と笑顔というのは中々に合う物らしいね。

一年生の少女、亜里沙ちゃんも十二分に可愛いかった。

しかし、それでもミホの方がずっと魅力的だと思う。

ただ単にあの少女の事を知らないからってという意味もあると思う。そして、僕がミホの事を知っているから、という意味も確かにあるんだと思う。

「ね！ ね！ ジャアーねエ！ 志保と私ならどっちと付き合いた
ーい？」

何を笑顔で自分と妹を比べてんだか。

冗談かな？ と思ったんだけど、ミホの笑顔とは裏腹にその目が真剣な風に見えた。

気のせいだろうか？

どっちにしても、僕に嘘を付くメリットが無いのなら正直に言う
だけなのだが。

「ん……つまー志保ちゃんは可愛いけど、付き合うって仮定ならミ
ホかなー……」

「……ッ！　ッ！！」

ミホはツパーッと顔を輝かせ声にならない言葉を漏らしていた。
その場でピョンピョンと楽しそうに飛んでみせる。

「……そんな嬉しい？」

そこでミホは我に返ったように飛ぶのを止めて、焦ったような、
誤魔化したような笑みを浮かべる。

「ア、アッハッハ！　ヘーじは正直者だからねー！　まー知ってん
だけどー、私が可愛いって事なんでしょー？　そりゃ純粹に嬉しい
ってー！　アハ！　アハハー！」

何が『知ってんだけどー』だ、あいつかわらず自意識過剰と言う
か何というか……。

しかし、この子程本心が見え難い人間も少ないわけで、本当にそ
う思っているかは定かでは無いだろう。

「そうゆうもん？」

「そーゆーもんだよん？　アハ！」

そんな笑顔で言われちゃ流石に何も言えないんだが……。

月が照らす夜道を二人で歩く。

そういや、この子と二人つきりって珍しいような……？

「んじゃさー！　んじゃさーヘーじー！」

そこからミホはクラスの女の子や、果ては知らない女の子の名前
まで自分と比べ出す始末。

どっちがいい？　どっちがいい？　て目を輝かされながら言われ

ても……。

メンドクサイと思いつつ、適当に「あーはいはい、ミホですミホー……」と返す。

その度に嬉しそうにミホは笑みを浮かべる。

てか知らない女の子の名前出されても解るわけないじゃん、そんなのはミホも解っているだろうに。

何か、ミホが必死に見えた。

何でこんなに必死なのかは知らない。

だけど。

自分の言っている言葉が変である事に。
理解する事が出来ない程に。

必死に見えた。

「じゃーさ！　じゃーさー！」

まだ続くのか、と少し飽き飽き。

キラキラなミホの笑顔がなんか嫌なのでソッポを向いて言葉を聞
いていた。

どーせ言う事は一緒なんだけど。

「縁ちゃんと私ならどっちが、いい？」

その瞬間に、間なんて無かった。
言葉は反射的に。

「縁」

それは、本当に無意識に出た。
「あ」と僕は小さく声をこぼしていた。
反射的にミホの方を向いた。

「……え？」

ミホも、僕と同じ様に小さく声を漏らしていた。
表情からの笑顔は消え、目が見開かれる。

先ほどまであんなにも幸せそうな表情をしていたのに。

僕達は立ち止っていた。

ミホの表情から目を外す事が出来なかった。

何でこんな事言ったの。

解ってたじゃない。

何でそんな事聞いたのよ。

わかってたのに。

私の馬鹿。

もうヤダ。

ヤダヤダヤダ……。

亜里沙ちゃんが言った言葉が頭に浮かんだんだ。

”はつきりさせた方がいい”

……ヘーじが、亜里沙ちゃんよりも私の方が良いって言ってくれたから。

だから。

きつと、きつときつときつと。

”はつきり”したと思ったのに。

ヘーじが私の事を悪く思っていないなら、可能性があるのなら。

私は。

調子に乗っちゃったな、私。

嬉しくて、ヘーじがそんな事を言ってくれたのが嬉しくて。

私は、きつと縁ちゃんには勝てない。

良くて二番手。

私は。

馬鹿だなア……。

”はっきり”したじゃない……。

「アッハッハ！ やっぱ縁ちゃんにや敵わないかー！」

まだだ。

私の作り笑い。

サイッテーだ。

また嘘の仮面。

嘘吐きな私。

オオカミ少女は笑う。

その裏を見せたくないから。

最も見せたくない彼が目の前に居るから。

「……ミホ」

どうしたんだろう？ 違和感があるのかな？ 私
の笑顔は、変かな？
いつもの……笑顔が、出来てないかな？

何でそんな顔するのよ、ヘーじ。

もうイヤヤ。

もうヤダ。

「アハ……アハハ……私、帰るね」

私はへーじが何か言う前に走り出した。

「お、おいミホ！」

後ろからの声が聞こえた。

もうイヤなの。

イヤだ。

冷たい夜の風が頬に当たる。

冷たい滴が、風で余計に冷たく感じた。

ああ。雨なんて、いつ降ったんだろう。

こんなにも。

私の顔は、ビショビショだ。

その18. 不在着信いっぱい来てたらビクツとするよね

走り去っていくミホの後姿を、僕は呆然と眺めていた。
無造作に出た手は、ミホに向けられたもの。

しかし。

その手はミホを掴む事は無かった……。

僕はその手をゆっくりと下ろす。

真っ暗なこの世界で、月明かりに輝いた雫を見た気がした。
いつも。

あの子は笑っていた。

一番、その綺麗な雫を流すことが無い、最も縁のない人間。

そう思っていた。

……それは、僕の勘違いだったの、かな。

僕は俯く。

流石の僕だって、女の子に泣かれれば悪い気するのは当たり前だ。

僕が知る中で、最も性悪で、最も最悪で、最も性質タチが悪くて。

……それでも。

最も義理堅く、優しい少女で、最高の友人の一人だ。

その友人を泣かせてしまった。

真黒な夜空を見上げた。

輝く星が、金色の満月が、現在が夜遅くである事を示していた。

こんな遅くまで待っててくれたのに。

僕を運んでくれたのも彼女だろう。

……今更追いかけても、もう遅いかな。

彼女の運動神経なら走っても追いつけない。

残念ながら貧弱男な僕が追いつける速さではないのだ。

……ホントは。

追いつかなくても追いかけた方がいいのかもしれない。

だけど、彼女が涙を流すことが想像できなくて、追いかけても何を言えば良いのか解らなくて。

追いつけないなんて。

情けない僕の良い訳に過ぎないんだ……。

何故泣く程のショックを受けたのかは解らないけど……どちらにせよ明日学校で謝ろう。

友人じゃ無くすには、あまりにもミホを大切に思っていた。

ボロ臭いアパートに帰ってきてても僕の心は暗いままだった。
脳裏に焼き付いているのはミホの事。
とぼとぼと歩きながら考えていた事があった。

僕は、あのエスパ―少女と、ミホとを、もし比べたらミホの方が
良いと言った。

それは本心だ、別に何か他意があったわけじゃない。
ミホは凄く嬉しそうだったけど。

そして突然、いろんな子と自分を比べてどっちが良いか何て聞き
出した。

僕がめんどくさそうながらもミホの方が良いと言う度に凄く嬉し
そうにしていた。

そして、縁とミホを比べた時、咄嗟に縁の名前を出していた。

本当に無意識に、反射的に。

それに他意があったかどうかは聞かないで欲しい。

反射的に言った僕自身も戸惑っているくらいなんだから。

そして、それでミホはショックを受けていた。

普段なら茶化したりはしても、そこまで反応する物では無い気がする……。

ミホは、それほど本気で言ってたのかな。

結論から言おうと。

ミホは。

僕が好き………？

そこで慌てて首を振った。
何を考えてるんだ僕は。
自意識過剰にも程がある。

馬鹿馬鹿しい。

無理矢理にでも、考えを逸らす為に携帯を開いた。

もしかしたらミホから連絡が来てるかもしれない。

さっきのは冗談でした、とか、騙されたな馬鹿め!!
メールを送ってきてもおかしくは無いと思うんだけど。 とかメ

しかしメールは無かった。

少し、落胆する。

変わりに不在着信が30件来ていた。

……………は？。

え、30件？ 何故に!？

慌てて不在着信の人物を見ると。

……サクだった。

僕は机に突っ伏しがクーツと力が抜ける。

何やってんだ馬鹿サク……しかも一分おきという気持ち悪さまでプラスだ。

寧ろ気づかなかった自分が凄い気までしてくる。

一分おきという規則正しさから見るに、多分……っていうか、どーせしょうも無い事なのだろう。

今は馬鹿の相手をする気分じゃないけど、これ以上着信が来たら僕は多分窓から携帯をブン投げるだろう。いや、多分では無く絶対。

サクに電話をかける事にした。

『プ、もしもし！？　へーじ！？』

出んの早ッ！！

ワンコールっていうか、プルルルルのプで出やがったよ！　どんだけ身構えてんだよ！　初めての経験に携帯落としそうになったわ！

心の中で思いっきり突っ込みを入れる。

口に出したら疲れるので出さない。

『おいへーじ！　なんで出ないんだよ！　嫌いか！？　俺の事が嫌いなのか！？』

「今は死ぬ程嫌いだ」

『ッガン！？　へーじの即答に、口で擬音を出してしまうほどにサクマッチはカルチャーショックですよ！？』

「自分でサクマッチとか言うなよ！　そしてカルチャーショックの意味を辞書で引いて来い！！」

口に出して突っ込んでしまった僕は負け組み。

『何だ、辞書引いたら解るのか、俺の部屋に辞書が無い場合はどうすりゃいいんだこのヤロー、買うのか？ 買いに行けば良いのか？ 本屋までダッシュを決め込めと言いたいのかコノヤロー』

僕は心の底から溜息を吐いた。

つ……疲れる……。

疲れているときにサクと電話していると携帯を逆パカして（折りたたみ型の携帯を折り畳む方とは逆にたたむ事、つまりぶっ壊したいわけだ）窓から投げたい衝動に駆られてしまう。

「……で用事って何？」

いい加減サッサと切りたいので、そして自分の携帯の破壊衝動を抑える為にも話しを進める。

『おお、そうだった、いやな？ 志保ちゃんから電話が家に掛かって来てよー。 ミホミホがまだ帰ってねーんだと、んで俺も馬鹿妹もンなのシラネーからよ？ ヘーじ知ってるかなーって思ってたよ』

携帯の先から『誰が馬鹿妹だ！ 殺すわよクソ兄貴！！』という聞き覚えのある声と、パコーン！ という子気味の良い音が聞こえた。

どうやら近くに縁も居る様だ。

そしてサクに何かをブン投げたのだと予想。

『ぐふう！？ テメツ！ スリッパは時に凶器になるんだぞクラア

!!」

子気味の良い音はスリッパの物だったらしい。
っていうかそっちで勝手に盛り上がるな。

「あー、ミホならさっきまで一緒に居たよ、学校で僕倒れてね、ミホが保健室に運んでくれて夜になっても僕の事待っていてくれてさ。さっき帰ったから志保ちゃんにもそう伝えておいてよ」

取り合えずは僕を待っていてくれて帰るのが遅れたのも伝えておく。これでミホが親御さんに怒られたりしたら気分が悪いからだ。

『え、ちょ、ちょっとヘーじ!』

突然サクの馬鹿みたいなデカイ声から高い女性の声になった。
縁がサクの携帯を引っ手繰ったんだと予想。

『俺が今ヘーじと喋ってんだよ! 取るなコラ! ヘーじの声は俺の物だ!』

『うっさいボケ! 今はアタシのよ死ね!』

予想的中………というか、そういうのは僕が聞こえないところでやってくれ疲れるし恥ずかしい。

後ろでギャーギャー言っているサクを無視して縁は喋りだした。
どうも慌てた様子だ。

『ヘーじ! 志保やミホ先輩は電車通学なの! この時間って確かもう終電過ぎてるよ!?! 歩いて帰ろうにも確か4つぐらい駅が離れてたと思うし……ミホ先輩どうやって帰ろうとしてるの!?!』

縁の言葉を聞いた瞬間、僕は携帯を落とした。

な、なにやってんだあの馬鹿。

志保ちゃんが電話したって事は親御さんが迎えに来るとかは無いだろう。

クソ！ 何やってんだよミホ！

『ちよっと！ ヘーじ！ ヘーじ！？』

落とした携帯から縁の声がこぼれている。

慌てて携帯を拾う。

「悪い！ 急ぐから切るぞ！」

『え、ちよっ……』

何か言い終わる前に僕は携帯を切った。

続けて携帯を鳴らす。

電話先はミホだ。

『電波の届かない所、もしくは電源をお切りになって……』

電話が繋がらないアナウンスが淡々と流れる。

全て聞き終わる前に携帯を切った。

今は僕と喋るのはイヤなのか、とか変な事を考えてしまったけど、今はそれ所じゃない！

僕は直ぐに家を飛び出した。

大馬鹿野郎……！

本当に何考えてるのかサッパリ解らない親友を探しに。

その18. 不在着信いっぱい来てたらビクツとするよね（後書き）

感想明日か明後日に一気に返信させて頂きます。

態々感想送ってくださって、とても嬉しいのですが返信遅くて本当すいません（汗

今忙しいんです（T|T）（言いわけ）

実は私ブログやってるんですが、ID登録めんどくせーけど感想送りたいよー、という素敵な方はどーぞブログの方に宜しくお願い致します！

毎度ブログのアドを後書きに置いておこうと思うのですが毎度忘れます。

今回は忘れないようにのせときます！

どうぞ宜しく！m（|）m

人生の攻略本が欲しいですorz

http://wanwanoukoku.blog.shinobi.jp/

その19. 残酷で幸福で最悪で最高で幸せで不幸で。

寒い……流石に春になったって言うても少し前までは冬だったわけだし。

何でウチの学校は新学期になってスグに夏服の指定になるんだろ。学校の無駄な規律の厳しさに憤慨しながらも自らを温めようと体を丸める。

既に電気を消されている暗い駅の前で私は座り込んでいた。吐く息は白く、少しでも体を暖め様と膝を抱いて体を縮こまらせる、所謂三角座りと言った形。

もたれているコンクリートの壁は最初は凄く冷たかったけど、今はそうでも無い。

自分の体温がコンクリートを暖める程に時間が経っていたらしい。

昼間は賑やかな駅前でも、夜は暗く不気味に思う程の静けさ。

私以外の人間はいない。

携帯の電源は入っていない。

充電が切れていなければ怒られる覚悟で親に電話も出来た。

所持金は100円硬貨が数枚、電車に乗れる分だけしか持って来ていない。

今日はとことん腑抜けていたらしい……。

始業式だからこんな事を予想していなかったのが一つ。
そして、ヘーじに会えるって勝手にはいでて……。
色ボケにしてもボケすぎだった……。

馬鹿だなア……私……。

少し前まで途方に暮れていた。
いつもの私なら終電の事を忘れるわけが無い。
何だか亜里沙ちゃんと喋ったときから私は変だ……。

また、涙が込み上げてきた。

散々泣いたのに、まだ泣きたりないらしい。

どうせ誰もいないんだし……思う存分泣くのも良いかもしれない。

「ぐすっ……ひっく……うええ……」

嗚咽が零れる。

自分の服の裾をぎゅっと握り締める。

三角座りのまま、顔を埋め、泣き声を挙げた。

ポロポロと零れる涙は止まらない。

冷たいコンクリートの地面に、小さな滴が落ちていく。

「ヘーじ……ヘーじい……」

なんでこんなに好きなんだろう。

なんで諦められないんだろう。

初恋は報われないと良く言うけれど。

ちょっとだけでも報われても良いじゃない。

もう関わらない方が良いのかな。

自分が傷つくだけなんだったらもう近付かなければいいのでは無いか。

そんな風に考えても、やっぱりヘーじといたいらしい。
ヘーじという空間が好きだったから。

甘いお菓子ばっか食べて、虫歯になったみたい……。

子供みたいな発想がツパと浮かんで苦笑する。

虫歯になってもお菓子を食べようとする私は、子供のようだ。

私は大人ぶった子供でしかない。

後悔しながらも甘いお菓子を口に運んで、痛みに泣きながら、嬉しそうに笑ってるんだろう。

傍から見れば只の『馬鹿』でしかない。

亜里沙ちゃんは、そんな私を見透かしていたんだと思う。

馬鹿だと解っても止められない。

そんな時に、妙な音が聞こえた。

ペタン、ペタン。

間抜けな足音に顔を挙げた。

私の目の前に、ヘーじがいた。

ああ。

こういう時に限って。

君は来るんだー……。

頼んでもいないのにね。

荒い息遣と、赤くなった顔で、急いで走って来たんだと解った。
間抜けな足音の正体はヘーじが履いていた物がスリッパだったか
ら。

その間の抜けた姿は、きつと慌てていたんだと思う。

ゼーゼーと荒い息遣いをしながらも、ヘーじは喋ろうとしていた。
私に向けて口をパクパクと開いていたけれど諦めたように膝に手
をついた。

何か言うよりも、取りあえず息を整える事にしたらしい。

確かヘーじの家は駅から決して近いわけじゃ無い筈。

なのにスリッパで走ってきたのかな。

暫く待っていると、息が整ってきたらしい。

だけど、それでも声を出すのはまだ苦しかったみたいで。

ヘーじの口から洩れた言葉は掠れていた。

「バ……バカか君は……」

呆れた表情と疲れた表情と怒った表情と……色々な物が入り混じっていた。

ヘーじの、そんな姿が可愛くて、愛おしくて。

何故ヘーじがココに居るのか。

何故ヘーじが『来てくれた』のか。

つつい私は期待してしまう。

そんな自分とはまた別に、後ろめたく思う自分も居る。

さっきまで諦めてたじゃない。

”はつきり” したって思ったじゃない。

止まらない。

止められない。

虫歯になるって、きっと後悔するって解ってるのにアナタは甘い

お菓子ばかり。

どれだけ私を傷つければいい気が済むのよ。

来てくれた喜びと、また自分が傷つくかもしれない悲しみと苛立ちと。

二つの私がそこに居た。

ねエ。

残酷で幸福で最悪で最高で幸せで不幸で。

『良い事と悪い事』が同時に来る気持ち、アナタに解る？

解るわけないよね。

ありがとう。

へーじ……。

その19. 残酷で幸福で最悪で最高で幸せで不幸で。 (後書き)

ヘーじは心で思った通りにしか動きません。

縁は信念通りに動こうとします。

志保ちゃんは心で思う事は多くても自分から動く事は少ないと思います。

ミホは。。。常に比喻や深読みで表現しようとしています。

見る人には何を言っているのか解らないのでは？ という心配もあります。

ミホの表現には基本的に意味があります。

深読みして頂けると幸いです。

私も伝わり易く、そして深読み出来る表現を研究中です。

っていうかミホの描写が私としても書くの一番苦手です (汗
ミホの時間が一番直すの多いんですよね！……

サクは何も考えずに行動するので一番書きやすいです。
っていうか馬k (ry

その20. 女の子の手ってちっちゃいよね。

泣き腫らした眼、どこを見ているか解らない視線。

彼女は本当にあのミホだろうか……？

いつも豪快で元気一杯のミホがそこにはいなかった。

僕と目が合うと、ミホは顔を伏せた。

ずっと突っ立って座り込んでいるミホを見ているだけってのもアレなので僕は口を開く。

「……どうする気だったんだよ？」

ここで一日中ジツとしてるつもりだったのか？

あまりにもミホらしくない考えなしな行動だ。

ミホは何も答えない。

「君にしちゃ珍しいミスだね、終電の時間忘れるなんてさ？」

それとも、終電なんてどうでもいいほどに、あの時は僕から離れたかったのか？

っていうか終電あんのに何で僕が起きるのを待ってたんだよ。わけ判らないだろ。

ミホは答えない。

「もしかしてずっとこうしてるつもりだったわけ？ 親に連絡は？
ここらへんの友達の家泊めてもらうとか……」

答えない。

さ、さすがにイライラしてきた……。

「いい加減にしろ！　だんまりか！　今日の嫌がらせはだんまりか！　あーあーそうですか！　だったら帰るよ！　折角来ただけ帰るよ！　いいのかー！　帰るぞー！　帰っちゃうぞー！？」

帰る素振りを見せつつチラ見。

「……」

「……」

つく！　ここまで来てもだんまりか！　ここまで無視されると大声出したのがめっちゃくちゃ恥ずかしいじゃないか！

僕はため息をこぼす。

座り込んでいるミホの目の前に、子供に目線を合わせるように座り込む。

「ミホ……取り敢えず外は寒いしき、どこかに移動しようよ」

ミホは僕と顔を合わせるのが嫌なのか、さらに体を縮こまらせて表情を見せない様になっている。

何意地っ張りになってんだか……。

僕は大きく、おおきくため息を付いた。

そして、僕自身も決意を決める。

無理矢理ミホの手を取ると立ち上がらせ、少し乱暴だけど手を引っ張って歩き出した。

ミホはさして抵抗をする様子は無かった、お陰で簡単に移動出来るようになったのは嬉しいけどさ……。どうもいつものミホらしくない。

っていうか、同学年の奴の家なんて僕が知る筈が無いんだが……。自慢では無いけれど僕は全くと言っていいほど家に遊びに行ったりはしない。

……寂しい奴とか思われるかもしれないが僕は断じてさびしい奴ではない！

……別にいきたいわけじゃないからな。

つまるところ、そんな僕が、友人が家に来るわけなんて無いし。サクが来たいとか言っても断じて連れてくる事は無かった。多分来た事があるのは縁が最初で最後だったとしてもおかしくは無かったわけで。

……。

ファミレスとかに適当に置いていくわけにもいか無いし……。何かヤマシイ気持ちがあるわけじゃない。

取り敢えずは……。

ミホには僕の家に来て貰おうと思う。

握っている手は僕が無理矢理握っている感じで、ミホから握り返す事は無い。

冷たい掌の温度が、僕のほうにも伝わってくる。

今更になってその冷たさが、何故ミホを追わなかったのかと罪悪感に苛まれる。

……変な事を言うわけじゃないけど。

握ったミホの手はとても小さかった。

まるで女の子みたい……いやいやいや女の子なんだけどさ。

そこまで彼女を意識して見た事は無かったし、ミホが冗談で意識させようとさせてくる事はあったけど。

自分から。

ミホを女の子として見たのは初めてかもしれない……。

や。何度も言うけど変な意識とか無いからねホント。

その20. 女の子の手ってちっちゃいよね。(後書き)

ある時はスポーツマン。

ある時は作家を目指すアマチュア小説家。

ある時はアニメや漫画に燃える……基、萌える腐れオタク。

色々な顔を持っている私ですが、今度は実況とかやってみたいなー、
て思っています。

ある動画サイトのゲームを実況しながら進めるっていうアレです。

アレ面白そうだなーwって思うんですよねーw

もしも某動画サイト、っていうかニコニコ見てて実況好きな方が居
たら私が動画を出したら見てみて下さいねー^^ノ

私の小説を見ていてニコニコ動画を見ていて実況好きで……w w w
多分そこまで都合の良い方はいないでしょうねwサーセンw w

その21. エスパーは一人だけで結構です。(前書き)

寒い夜の風が私の頬を撫でる。

冷たい風が少ない気がした。

顔を挙げた先に、彼が居た。

彼が壁になってくれていた。

成程……風が少なく感じるわけだ。

私の手を強く握っている彼が居た。

私の手を引いて、前を歩いている彼がいた。

何度も夢見たシチュエーション。

だけど嬉しくない。

私の脳裏に浮かぶのは一人の少女の事。

私と同じように、彼に恋した少女の事。

バカだなア……私。 そんな事考えなきゃ良いのに。

考えなかったら、もっと楽に生きれるだろうに。

大好きな少女と大好きな彼。

片方が大切と思うなら片方を切り捨てる事も考えるのが現実だと思ふ。

だけど私はそれがイヤでイヤで仕方無くて。

どこまでも私は。

甘いらしい。

その21. エスパーは一人だけで結構です。

取り敢えず家に帰ってくると、姉がまだ帰ってきてない事の確認を行った。

家に女の子を連れ込んだとなっては、僕の生死が係わってくる可能性もあるのだ。

そんな恐怖の姉がいない事を確認してホッとした後、俯くミホを風呂場の前まで連れていく。

「取り敢えず風呂入って体暖めといで、外は寒かっただろうし……風邪引かれてもイヤだしね」

僕の言葉にミホは顔を挙げないまま小さくコクンつと頷いた。

……………。

ミホってこんなしおらしかったっけ？

僕はミホを置いて居間に戻りながら首を傾げる。

いつも騒いで、ニコニコしているミホはそこにおらず、ミホは全く間逆の存在に変わっていた。

大人しい綺麗な少女が居るみたいで、何故か変に意識してしまうのは気のせいだろうか……。

いつもの五月蠅いミホの方が何倍も良い。

これがギャップというものなのだろうか……と、勝手に変な事を考えていた。

小さなちゃぶ台を前にしつつ、何故か僕は正座で座っていた。

遠い目をしつつ、っというかチヨイチヨイ聞こえるシャワーの音に意識が行かない様になっていた。

ナーンデでこんな事になったんでショーカー……

女の子を家に連れ込んでシャワーまで浴びさせて……何だ、僕は何がしたいんだ。

……イヤイヤイヤイヤ！ これは何かこう……仕方ないのであつてだな……。

実際にミホの為であるし、悪いことをしているわけでは無いのだが、僕は勝手に自己嫌悪に陥っていた。

そして何より姉が怖い。

問答無用でブン殴られそうだ。

理由を話せば何とかなると思うけど……取り敢えず始めの一発は貰うつもりで覚悟しておこう。

この覚悟は当然殴られる覚悟だ。

ミホの事は姉が何とかしてくれるだろう。

別に泊まる事になったとしても、姉が居ればミホと二人っきりつてわけじゃ無いし、……イヤやましい事なんてなんも無いけども。

……いつものミホならそんなことを考える必要は無いのだが、今のミホは何か違う。

その……不謹慎かもしれないけども、何故か可愛いとか思ったりしてしまうのだ。

これがギャップという物なのだろうか（二回目）。

まあ、取り敢えず僕は一つ屋根の下で男女二人という状態をなんとかできればいいんだ。

そういうわけで、姉よ早く帰ってこい。

そんな事を思っていると、功か不幸か携帯が鳴った。

宛名に目をやると、今思い浮かべていた姉、張本人だった。

何時に帰るかの連絡かな？ とメールを開いた。

Re…急用

本文

急用が出来ました。今回の私の分の晩飯はいりません。勝手に食べてなさい。

……え？

僕は心の中でもう一度読み返し、少し考えて……再び読み直し、
そしてもう一度考えて……。

若干涙目になりつつもう一度だけ……もう一度だけメールに目を
通した。

そして。

今の状態がトンデモ無く不味い状態である事に気付いた。
きゅ……急用！？ このタイミングで！？

功か不幸か、では無く……不幸だった。

手の中から携帯が力無く落ちる。

そんな事を気にする事も出来ず、僕はひたすらに凹んだ。
四つん這いでズーン……といった具合だ。

さあどうしよう、どうしましょう。

チ、チキショウ！ あんのクソ姉め！ 奴が冷蔵庫に大事に置いてる限定100個プレミアムプリン食ってやるウ！

そんな復讐心に燃えた瞬間、タイミング良く恐怖のメールの着信音が鳴った。

ビクウ！ と僕は体を揺らしつつ、恐る恐る携帯を開く。

Re；無題

本文

冷蔵庫のプリン食ったら世界の終りを見せてあげます。

その文を見た瞬間、僕の復讐に燃える炎はあっさり沈下し、更なる凹みを味わう事になったのだ。

どうやって世界の終りを見せる気だよ……どちらかといえば僕を終わらせる気だよコノ女……。

僕の事は何でもお見通してか！ エスパーかあの女は！ 本物のエスパーを最近っていうか今日知ってしまったので強^{あなが}ち嘘では無いかもしれない。

恐るべし僕の姉。

その21. エスパ―は一人だけで結構です。(後書き)

感想返信遅れていますが、しっかり返させて頂きます。

溜めてた分の話が無くなりそうです。
でも更新は早く出来るように頑張ります！

その22. 何か僕のテンションがおかしい。 落ち着け！ 落ち着くんだ僕！

そんな凹んでる僕の耳に。
か細い声が聞こえた。

「……一じ、ヘーじ……」

あまりにも小さな声に、気付くのに遅れてしまった。
僕以外の声とすれば、彼女しかいないわけで。
彼女が今居る筈の方面に視線を向けた。
風呂のドアの隙間が少し開いて湯気が漏れている。

その小さな隙間からミホの瞳だけが覗いていた。

困ったような……恥ずかしそうな瞳から、そのドアの先はきつと
裸なんだろう、と勝手に考えてしまう。

っは！？ イカンイカンイカン！！ 落ち着くんだ……いつもの
クールでヌアイスガйна僕に戻るんだ！

そうさ！ いつもの天使な自分でいればモーマンタイ！ イエス
ウィーキャアン！

「ど、どーしたの？ ミホ」

僕は飛び切りの笑顔で汚れなんて知りませんといった具合に言葉を
返した。

無いよ、元から汚れ何て無いよ！ ホント無いから！
と、勝手に自分で思った事に自分で突っ込みを入れていた。

……………。

……何だろう。

何か僕は妙にテンションがオカシイ気がする……。

あまり経験の無い女性が家に居るという感覚は人をオカシクするんだと思う。

あ、ダブルゴリラ（縁と姉）は別。

何て聞かれたら確実に殺されるであろうワードをサラッと頭に浮かべつつ罪悪感も無く首を傾げていた。

いつものミホならダブルゴリラと同じ部類なんだけどナー……。

何でだろ。

変に緊張してしまう……。

隙間から覗くミホの瞳は、困ったように下を向いたり上を向いたり。

「あの……」

何時もと違うしおらしさに胸を撃たれそうになりながらも必死に笑顔を保つ。

何度か大きな瞳をパチパチとした後、ミホは小さく再びしおらしい感じで言った。

「服……どーしよ……」

ブボホォ！

笑顔のまま、鼻血が飛び出した。

人間って本当に興奮すると鼻血出すのね、本当にありがとうございました。

ヤバイって！ 今のはヤバイだろー！ いつもとのギャップもそうだが、困ったような言い方にハートを撃ち抜かれてしまった。

お！ 落ち着け！ 相手はあのミホだぞ！ 性悪女だぞ！ しかし、女の子が家に居るってだけで死にそうなのに！

「あの……ヘーじ……？」

悶絶している僕に困ったような声かけられる。

止めろっ！ そんな間を空けて疑問符なんて使うなやい！ 暫く勝手に興奮した後、徐々に冷静さを取り戻してきた。

……いい加減ミホが可愛そうなので軽く深呼吸して落ち着く事にした。

「あ、ああ……服ね、服」

女性物の服……普通なら姉のを持ってくるべきなんだが。

お……恐ろしくてダンスに手をつけたことがないんだけど！

しかし、流石にミホをほっとくわけにも行かないし許してくれるだろう。

躊躇いを残しつつも禁断のダンスへと触れた。

……よし、何も無いな。

姉の事だから何かしら罨があってもおかしくは無いと思ったが…
…流石に考え過ぎだったかー。

そう思いつつダンスを開けた。

『アナタは今世界の終りを体験するキップを手に入れました』

開けた先にまず目に入ったのは、大きな紙に真っ赤な字で書かれた筆のような執筆。

おどろしいかんじに。

ダンスを閉じた。

神様……僕の姉は一体何者……。

目尻に涙を浮かべながら遠い目をする。

その22. 何か僕のテンションがおかしい。 落ち着け！ 落ち着くんだ僕！

前の前の後書きの後に幾つかニコニコみてるよー、という感想を頂きました。

案外みなさんがニコニコを見ているようで驚きましたW
ニコニコ面白いですよねー！

その23. 男の夢は裸エプロン以外にもあると思うんだ。

いや、変態とかじゃ

温かいシャワーに体が温まっていくのを感じる。
暗い心も少し晴れていつている気がする。

今、私はヘーじの家に居るんだ。

……しかも、シャワーまで借りてしまつて……。

私は何をしてるんだろう。

ヘーじに甘えて、状況に甘えて。

私は、私は……。

………。

ん？ 状況？

そこでとんでも無い事に気づいてしまった。

寒い夜空に迎えに来た男の子の部屋に転がり込んでシャワーを借りて……。

こんな展開、一体何処のB級恋愛ドラマ！？　こ、こんなの誰だつて次の展開が解るじゃない！

自分の顔が真っ赤になっていくのが解る。

ど、どうしよう。

や、その、イヤじゃ無いけど……私たち高校生だし……順序って

モノがあるし。

そこまで考えて。

温かいシャワーが私を落ち着かせていった。

……何考えてんのよ私。

もう期待なんてしないって考えてたじゃない。

それに……縁ちゃんにも悪い。

私が縁ちゃんを超える事は無いんだから・

何凹んでんのよ私……縁ちゃんだったら良いじゃない。

眼から零れる水は、シャワーの温かさと違い、別の温かみを持っていた。

これはシャワー。

きっとシャワー。

最後の最後に残った私の中の小さな小さな意地っ張りな思いが、泣く事さえ許さなかった。

あまりにも情けない意地が、泣くことさえ許さないと決め込んでいた。

体は温まったけれど、心は冷たいまま……。

顔を曇らせながらバスタブから出ると、ある事に気付いた。

「あれ……服どーしよ」

制服を着るのはちよつと気が引ける。

涙やら、ヘーじから離れた時にがむしゃらに走って扱けた時に汚れた制服だ……。

自分がどれだけ動揺していたか解るような制服。

……自分自信に呆れてしまう。

うう……どーしょ……。

一人、バスタオル一枚でオロオロとしてしまっていた。
いつもの私なら、別に汚れた制服で良いや。何て軽く考えるのだ
けれど。

今の私は相当変みたいで。

そんな簡単な事が思い浮かばないでいた。

恥ずかしいけど……ヘーじに頼むしか無いよね……。

覚悟を決め、恐る恐る横スライド式のドアを少しだけ開けた。

そこから覗きこんでヘーじが見えるのを確認した。

ヘーじは携帯を前に物凄いショックを受けた顔をしていた。

若干涙目になっている。

……何故かは知らないけど。

……？ ど、どうしたんだろう？

結局僕が渡したのは、僕の持っている服。

それをドアの隙間からミホに渡した。

ミホ……ごめん……。

もう姉に殺される事を覚悟して服を取りだそうとしたのだが、何故か体が恐怖で動かなくなってしまったのだ……。

しかし大丈夫だろうか、いくら僕が体が小さな方だとしても結局は男だ。

ミホよりかは体は大きい事になる。

っというかミホは僕のなんか着るかなァ……女の子が男の服を借りるというのも妙な感じだ。

そんな事を考えていると、風呂のドアが開いた音がした。

音の方に目を向けると、ミホが上半身だけ出していた。

白い長袖シャツはやはり大きいのか、袖から指しか出ていない。しかし、どうしたんだろう……？

ミホは困ったような表情で顔を赤らめていた。

「ど、どしたの？」

何かキュンとしてしまっちゃって戸惑ってしま……。

落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け………（略）

「えっと……あの、笑わないでね……？」

上目づかいでそんな事を言われれば笑えるわけもないんだが。渡した服は至って普通だったと思うけれど。

何か笑うような事があるんだろうか？

「や、別に笑わないけど……」

僕の言葉にミホは困った表情をしながら考える素振りを見せる。
な、なんなんだろう。

何やら意を決したようにミホは強く目を瞑った。

恐る恐る、といった具合に、ミホはドアから出てきた。

……ア。

ミホは。

下のズボンを穿いていなかった。

大きな目のお陰でズボンはそこまで必要では無いようだが出ている生足はつい凝視してしまう。

裾を両手で思いつきり引っ張って少しでも下を隠そうとしている仕草がとても可愛くて、その必死そうな仕草に、少し可笑しくもなってしまう。

「い、今、笑ったでしょ」

顔を赤らめ、少し涙目になりそうな目で睨まれば全力で首を振らせて頂く。

「ズ、ズボンは!?!」

取り敢えず何故そんな状況なのかを聞かなければミホが変態になっってしまう。

何て失礼な事を考えてしまう僕。

「ズボン……おっきいからどうしても落ちちゃうし、無理矢理穿いても長すぎて下すらして汚しちゃうし……」

顔を赤らめて、ミホは目を伏せる。

ミホだって好きでそんな事をしているわけでは無いのは解った。これ以上立っていたくない、といった具合にいそいそと僕と対面する形で机を間にペタンと女の子座りでミホは座った。

「……………」

「……………」

ち、沈黙が重い……。

ミホが俯いているのに合わせてつい僕も俯いてしまう。

いつものミホだったら、適当に喋ったり出来るんだけど……。

今のミホは何か違った。

いつもの元気一杯なミホのオーラが全くと言って良い程に無い。

チラッとミホの方を見してみる。

俯いているミホは風呂上がりで、ショートの手がまだ生乾きの状態だ。

上せたのか火照ったように顔が赤い。

なんというか……オッサンっぽい言い方になっちゃうけどアレだ。

その……。

変に色っぽい……。

僕はブンブンと頭を振った。

何考えてんだよ！ 友達を変な眼で見るとか最低だ！
僕は取り敢えずその場を離れようと立ち上がった。
いきなり立ち上がったからミホが驚いたように見上げている。

「あ、あのさ……姉さん今日帰ってこないみたいだからさ、布団片方使ってくれていいから！ 僕は廊下で寝るからさ！」
そう言って無理矢理に笑顔を作る。

「あ、え？」

戸惑った表情のミホを横目に部屋を出ようとした。

「ま、待って！」

足首を掴まれる感触がした。

ミホが慌てて僕の足首掴んだんだろう。

しかし、慌てている時に同じ位慌てて足首なんか掴まれちゃ結果は見えているわけで。

「へぶッ!？」

僕は顔面からモロに扱けた。

畳式なアパートだが、畳に顔を思いつきり擦りつければどうなるだろう。

とても痛いんです。

「……! ……! !」

暫く声が出無い程に痛みに悶え、畳の上をゴロゴロと転がっていた。

「い、ごめん！」

慌てて謝っているミホの声は、何となく聞こえていたが今は痛みで何も言えない。

……駅で震えてた時よりかはちよつと元気になったかな。

痛みに苦しみながら、そんな事を考えていた。

その23. 男の夢は裸エプロン以外にもあると思うんだ。

いや、変態とかじゃ

すいません。女の子のズボン無しシャツはやってみたかったです。

……良いじゃない！ 男の夢（私の夢）を實現させようとしただけじゃない！

すいません自重しますorz

どうでもいいですけど金縛りに初めてかかりました。

その24. 昔に比べたら泣かなくなったと思ってただけだね。

所詮は私はそ

私達は再び机を挟んで向き直った。

痛そうに頬を摩るヘーじには申し訳ないと思ってる。

何で私はヘーじを呼びとめたんだろう？

反射的にだった。

だけど自分が必死だったのは解る。

自分では解っていない程に、無意識に手を出していたらしい。

私は、何がしたいんだろう？

いつまでも喋らない私に痺れを切らしたのか、ヘーじが口を開いた。

「ねえ、ミホ……君は一体どうしたんだ？　いつもの君らしくないよ」

心配そうに私を見つめるヘーじの瞳。

純粹に私なんかを心配してくれるヘーじ。

その瞳を見て、私は何がしたいのかが……解った。

ああ、私はヘーじに伝えたいんだ。

誰にも言ったことが無い『本当』を。

嘘つきな私の、仮面の裏の素顔を。

嫌われても良い、もう。『本当』の私をヘーじは見てしまったんだから。

仮面を被る事が出来ない。

もう後戻りはできないんだ。

もう、逃げられないんだ。

「ねエ、『私らしい』って何？」

私は小さく零した。

私の言葉にヘーじは少し眉を寄せる。

「ミホらしいって……元気で明るくていつも笑ってる感じ？」

間髪入れずに私はもう一度質問。

「じゃあさ、今の私はどう見えるの？」

「今のミホ……？ んー何か暗いっていうか、しおらしいっていうか……いつものミホとは違うかな？」

そっか。

やっぱそう見えるんだ。

ヘーじの言葉に小さく苦笑する。

「ヘーじ、私はね。嘘つきなんだ、皆にも自分自身にさえも嘘をつくような大ウソ付き……」

そこで一度言葉を切った。

ヘーじは。黙って聞いていた。

ううん、聞いてくれていた。

私は、ゆっくりと語り出した。

誰にも話したことが無かった事。

沢山の事を私は知っている、だけど私自信の事を知っている人は

きつといない。

だって、誰にも喋ったこと無いんだもん。

初めて話す、自分自身の事。

覚束ない感じになってしまいうけど、上手く喋れるか解らないけど。
私の話を聞いて。

「私には志保っていう妹が居るでしょ？」

まず最初の口頭はその言葉から始まった。

そこから、私はゆっくりと、ゆっくりと語りだす。

あの子は、志保はともにか弱くて、昔から心も体もガラスの様な子だった。

物心ついた頃から私は志保を守る為に、強い人間でいようとしていた。

シスコンって思われるかな？ でもね。 私にとって宝物なの。

それが今にまで至って、皆、私がそういう人間だと、強い人間だと思ってる。

本当はね、本当はね？ ヘーじ。

私はとても弱いんだよ。

怖い男の人が居れば震えるし、先生に怒られるのも怖いし、親の言葉にだってビクビクするような。

普通の女の子なんだよ。

もう、後戻りはできないけどね。

普通の女の子に戻るには、ちよっとやりすぎちゃったかな……ハハ……。

ちよつとね……今日は……もう疲れちゃったんだ。

強い自分を演じることには。

誰にもバレた事の無い事だった。

私は口を噤んだ。

本当の自分をヘーじに見せた。

馬鹿馬鹿しいと言うだろうか。

変な奴と思われただろうか。

私の本当の姿。

こんなに好きほうだいたしてたのに。

本当は弱い人間だったなんて、知ったらヘーじは軽蔑するかな…

…。

私はギュッと目を瞑った。

もう逃げないと思ったのに、怖くて怖くて仕方が無くて。

何て言われるだろう……

沈黙が長く感じた。

早く何か言って欲しかった。

罵倒でも批判でも良いから。

しかし。

不満そうにしている私を一蹴するかのように。
ヘーじの言葉は以外だった。

「……………ヘー」

その間拔けな声に私は瞑っていた眼をつい開けてしまった。
目の前に居たヘーじの表情は、呆れたような、苦笑したような表情だった。

「ナーニを深刻に言うかと思えば、そんな事かよ」

真面目に聞いて損した、という様にヘーじはため息を零す。

「そ、そんな事って……」

私が必死で打ち明けたのに、何よ……その態度。

ヘーじは優しく微笑んだ。

その表情にドキッとしてしまい、私は何も言えなくなる。

「……あのさ。確かにミホは明るくて元気な子だけどね、別に女の子らしくしちゃいけないなんて事無いんだよ」

呆れたような言い方。

だけど、その言葉に悪意は感じられない。

……え？

私は心の中で小さな声を挙げた。
予想外の、その言葉に。
驚くように。

「まー、いつもの明るいミホも好きだけど、こっちのミホも可愛いと思うよ僕は」

そう言って、ヘーじはウンウンと頷ずいている。

ななな……何をいきなり……。

私の顔は一気に赤くなる。

今の暗い私をまさか……か、可愛いなんて言われるなんて……。

「ミホは確かに凄いし、明るい子だけど、凄いままでいつづける必要なんて無いんだよ。そんなのいつか疲れるに決まってるじゃん。僕はミホが暗くなるうが、君の事を軽蔑する様な事何て思わないよ」

ヘーじはそう言った後、最後に少し笑いながら付け足す。

「確かに最初は驚いたけどね」

……ヘーじは、やっぱりカッコイイよ。

普通ね。 そんな簡単に言えないよ？

だけどヘーじは言える。

ヘーじだから、そんな事、何て言える。

どこまでも。

ヘーじは……。

私は安心してしまっていた。

嫌われると思っていたのに。

明るい自分でなくなちゃいけないと思ってた私は。

ヘーじのその言葉が、何よりも救いになっていた。

私は力が抜けた様に。

また、ポロポロと涙が零れてきていた。

「い、いい!?! ミ、ミホ!?!」

突然涙を流し出した私にヘーじは焦ったような声を挙げていた。

良かった……良かった……

嫌われるのを覚悟してたのに。

覚悟していても、ヘーじの言葉がととても怖かった。

私は、泣き虫だ……。

月が照る帰り道、ヘーじに拒絶されたと思って泣きながら走った。
駅前でヘーじに嫌われたと思ってまた泣いた。

シャワーで、ヘーじに呆れられたと思ってまたまた泣いた。

そして。

ヘーじに嫌われなくて、良かったと、私はまた泣いた。

「ひっく……ひぐ……」

嗚咽が何度も零れる。

何処までも、私はヘーじが好きで好きで。

諦められない、やっぱり諦められない。

子供の様に泣く私と、オロオロとしているヘーじの二人っきり。
きつとそれは、とても奇妙な絵柄だったと思う。

その24. 昔に比べたら泣かなくなったと思ってただけだね。

所詮は私はそ

えー、溜めてた分が無くなりました。

そして今回の回、累計13回消しです。

結局最後の部分以外納得出来ない結果になりましたが。

何故ミホは今の暗い自分を隠していたかったのか、何故それをへーじに伝えたのか、色々な物を詰め込み過ぎた結果のミスだと思っています。

ミホの心が伝われば幸いです。

自分の作家としての実力の底辺ぶりに半ば泣きそうになりました（T|T）。

まだまだ勉強しないと行けないようです。

感想返信が遅れていますが、出来るだけ早く返させて頂きます。

感想が力になっています、言葉にならない程の感謝で胸がいっぱいでございます！

どうぞこの小説をこれからも宜しく願います！

どうでもいいことですが右手の指折りました（泣

い、痛い……

片手でタイプするのは結構骨が折れます（キリッ（文字通り）

今私上手い事言ったんじゃないですか！？（どや顔）

その25. 子供扱いされるのって何かヤダ。

「落ち着いた？」

「……うん」

鼻をすすりながら、ヘーじの優しい声に私は小さく答えた。

私はあの後、泣きっぱなしだった。

今は大丈夫だけど、オロオロとしているヘーじを前にして10分くらいずっと泣いていたと思う。

多分……もう涙は出無いと思う。

多分だけど……。

私の前には今、温かいレモンティーが入れられていた。

ヘーじが私に入れてくれた物だ。

何か子供扱いされてるような気がするけど……。

ボーっとしながらその温かい湯気を見つめていた。

優しそうな短い笑い声に顔を挙げた。

「しかし、ミホがそんな事気にしてたなんてね？」

そう言っって、ヘーじは少し悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「わ……私にとっては大変な事だったんだもん……」

拗ねたような私の言い方に、ヘーじは小さく笑みを浮かべながら、

「はいはい」と適当に返されてしまう。

私はそんなヘーじにムツとして、視線をティーカップに落とした。

子供みたいに扱われるのは、少しやだ。

「まー、でも、いつも気張ってるよりかは、時々爆発させた方がストレスも溜まらなくていいんじゃない？」

ヘーじの中では私の中の鬱憤が爆発したのだと思っているらしい……現況はヘーじ何だけド……。

まあ……いいや。

私は両手で熱々のティーカップを慎重に持つと口に運ぶ。
……熱い。

少しだけ口に含んでスグに置いた。

そんな私の動作を、ヘーじは黙って見つめていた。

「な……何」

「べっつに？」

またその悪戯っぽい笑みだ。

……止めて欲しいんだけど。

あんだけワンワン泣いたら、子供扱いされるのは仕方無いけど。

いつも私が子供扱いする側なんだけどな……。

まるで日頃の仕返しみたい。

「ミホ、今の君は僕しか知らないの？ 志保ちゃんも？」

その言葉の意味はスグに解る。

いつもの明るい自分じゃない暗い自分。

突然の言葉に私は困ってしまふ。

しかし、ここまですっ飛ばしてしまつたのでは後には引けない。

「う、うん、志保の前じゃ意地張っちゃうし……」

「ふーん？ そっか」

少し考えた素振りをして見せた後に、ヘーじは再び口を開く。

「……皆の前じゃ明るくふるまつても良いけど、僕と一緒にいる時は無理に明るくしなくても良いよ」

……へ？

困惑している私を無視してヘーじは話しを進める。

「そうすりゃストレスも溜まらないんじゃない？」

な……なんかソレ、すっごく恥ずかしいんだけど……。

ヘーじの前じゃ本当の自分で居ていい、って事でしょ？

誰にも弱みを見せないけど、ヘーじの前でだけは、素の自分でも良い。

「ええっと……それってさ。ヘーじと二人っきりの時は甘えても……良いの？」

「は！？ 甘える！？」

ヘーじが焦った声を出したのに、自分がとんでもない事を言ったのに気付いた。

わ、私っては何言ってるのよ！

「や！ え！？ ち、違うの！ そういう意味じゃなくて……えと、や、そういう意味だけど……」

慌てて弁解するも声が小さくなって何も言えなくなってしまう。

「ま、まア……別にかまわないけど……」

「へ！？ 良いの！？」

予想外のヘーじの言葉に私はつい大声を出してしまう。

ヘーじは若干顔を赤らめつつもまた笑う。

「言いだしたのは僕だし、確かにミホって誰にも甘えるイメージ無いもんなア……」

その言葉にまた私はムツとする。

何よその言い方！

私だって甘えようと思えば甘えられるわよ！

半ばいこじになりつつも私は立ち上がった。

ヘーじは多少驚いた表情になるも動こうとはしなかった。

私は机を周り込むと、ヘーじの隣にストンと座った。

ヘーじとの距離は殆ど無い。

「甘えるわよ！ 良いんだね！？ 後で言っても止めないわよ！」
何故か強気に出ようとしてしまう私……でも心の中はドキドキ。

「や、何で強気なのさ」

ヘーじに呆れた感じに突っ込みを入れられてしまう。

「うっさい……」

私はそれしか言えなくて、ヘーじの肩にポンと頭を置いた。

甘えさせて頂くことにした。

もたれたまま。

時間が過ぎて行く。

私も……ヘーじも何も喋らない。

表情を見ようとチラッと視線を上げてみた。

ヘーじはソッポを向いていて表情を読みとることは出来なかった。だけど。

耳が真っ赤になっているのは隠せてないみたい。

私はクスッと小さく笑う。

これで一矢報いたんじゃないかな。

私はそっと目を閉じた。

今日だけは。

今日一日だけは甘えさせてもらおう。

今日だけは私だけのヘーじだよ。

ヘーじ。

ありがとう……。

その25. 子供扱いされるのって何かヤダ。(後書き)

片手でも結構タイピングって出来るんですね……

その26.

バアン！

大きな音と共にサンドバックが揺れる。

アタシの渾身の一撃を受けたからだ。

遠心力と共に、大きなサンドバックがアタシに向かって帰ってくる。

腰を捻り右手を強く握った。

迎え撃つ為の構えだ。

ブツかる瞬間に腰の捻りで反動を加えた一撃を放つ。

再び大きな音と共にサンドバックは浮いた。

アタシはそこでサンドバックから少し離れた。

グワングワンと揺れるサンドバックを無視して右手の甲を見ていた。

手に巻いていたバンテージが破れたのだ。

拳を守る為に巻いた包帯の様な物、私の拳の威力に耐えられずにバンテージが先に破れる事がある。

スポーツ用のウェアが汗でズブ濡れになっている事に気づき、長袖のウェアだけ脱いだ。

ティーシャツに染みついている汗が気持ち悪い……。

膝に手を付き荒い呼吸を整えようとする。

ここはアタシの家だ。

ゴロゴロと並ぶ大量のスポーツ用具は何処かのスポーツセンターのようだけど。

ここはアタシの家の一室に過ぎない。
広いその部屋には、アタシしか居ない。

定期的に体を動かしているアタシだけど、今日はいつもよりも調子が悪いな……。

「……水歩さん、大丈夫かな」

誰もいない部屋に私は言葉を零していた。

ヘーじの電話が気になっていた。

慌てた様子のヘーじは勝手に電話を切った、アタシの心配も知らずに。

………気にならないわけが無い。

いつもよりも身が入らないのは多分そのせいだ。

「よう、相変わらず化け物みてーな威力だなオイ」

その声の先に顔を上げた。

そこには、馬鹿兄貴が居た。

「……何のようよ」

アタシの素っ気ない様子に、兄貴は苛立つように頭をバリバリと搔いていた。

「……は？ お前な……」

アタシの言葉に兄貴は呆れたような表情を見せる。

その表情の意図は読めない。

[illegible]

……そう言えば兄貴の部屋はここからスグそこだっけ。

「ウツサイ、じゃあ寝るなバーカ」

バンテージを剥がしながらアタシは適当な言葉を返した。

……今の時間は深夜の2時。

確かにこんな時間にまで汗を流しているアタシは常軌を逸している。

しかし、それでも体を動かさなければ気が済まなかった。

「だけど幾ら体を動かしてもへーじの事が気になって身に入らないという矛盾。」

「……ミナミナの事が気になんのか？」

兄貴は水歩さんの事を『ミナミナ』と呼ぶ。

何でそんな愛称なのかは知らないけど、兄貴が言うことやっぱ似合わない気がする……。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

アタシは何も言わない。

凶星だったからだ。

そんなアタシの様子に兄貴はため息をついて見せる。

「心配すんな、ヘーじが何とかしてくれるって」

……そうだ、へーじなら何とかする。

へーじは何だかんだで頼りになる人間だと思う。

それは知ってるんだけど……。

「ねェ兄貴」

「ンだよ」

めんどくさそうな表情をアタシに向ける兄貴に少し苛立ちを覚える。

でもここは堪える。

「……ヘーじはさ、もしも……アタシに彼氏とか、そんなの出来たら、何か思ってくれるかな」

アタシは馬鹿兄貴に何を言ってるんだろう、でも誰かに聞きたかった。

『この事』を知っているのは兄貴だけだから、兄貴に聞くしかない。

「……ヘーじは別にテメーの彼氏じゃねーだろ」

兄貴にしては解り易く、そして厳しい言葉。

「うん、そうよね……解ってる、解ってるよ……」

その言葉にアタシは反論せずに受け止める。

何故か胸が苦しくなる。

アタシの家はハッキリ言って金持ちだ。

こんな大きなスポーツジムが家にあるくらいだから大きい家だと思う。

アタシはまだ高校2年生なんだけど。

お見合いの話しが……来ている。

親のその話しを、出来るだけ聞かない様にしてきたんだけど。

始業式の朝、見知らぬ男達に追われた……。

その男たちが何者かは家に帰ってきてから解った。

お見合い相手の男が、アタシの事を調べさせているという話しを、家のお手伝いさんが教えてくれた。

……。

ヘーじは水歩さんの事を話した瞬間スグに電話を切った。

きっと水歩さんを探しに行ったんだと思う。

慌てて家を出ていくヘーじが目には浮かぶ。

もしも……アタシがお見合いがイヤで逃げ出したりしたら。

……アタシの時も追いかけてくれるかな。

何があっても。

探しに来てくれるかな。

その27. たった一つの真実を守る為に私は嘘という武器を何度でも奮おう

「ん……」

目が覚めると僕は机に突っ伏していた。

明るい太陽の光が窓から照らされている。

昨日は、確かミホが家に、……？

そこでミホがいない事に気付いた。

一瞬夢だったのかな？ と思ったが、スグにその考えは変わった。

ミホは確かにこの家に居た。

それもさっきまで居たんじゃないかな。

そう思わせたのは。

肩に掛けられた毛布と、飲み干されたティーカップ。

そして机の上にあった紙だった。

ノートの大きさにも満たない小さな紙の真ん中に、身に覚えのある字があった。

そっと机の上の手紙を手を取った。

綺麗な、女の子が良く書く丸い可愛らしい文字。

【ありがとう】

ミホらしくない控えめな一言。

僕は小さく微笑む。

友達なんだ……別にお礼何て良いのに。
これならミホは大丈夫そうだな。

良かった。

紙を再び机の上に置こうとした時、紙が重なっている事に気付いた。

後ろにあったのは一枚の写真。
僕はその写真を見て苦笑する。

眠っている僕と、一生懸命笑おうとして引きつっているミホが映っていた。

ミホの緊張した様な表情に笑ってしまう。
引きつるくらいなら撮らなきゃ良いのに。

その写真はきっと僕が眠っている間に撮ったんだろう。

「まったく、いつ現像したんだよ……」
相変わらず元気なミホはすさまじい行動力だな。
もう一度僕はその写真に目を落とす。

……良い写真じゃん。

私は朝一にヘーじの家を出て、始発で一度家に帰った。

朝早くに帰ってくると、私の両親は大騒ぎしていた。

心配してくれたのは嬉しいけど、そんなに慌てなくても……。

大騒ぎする親を説得するのは大変だった。

私はそんな親から逃げるように学校へ行くために飛び出した。後は志保が何とかしてくれるだろう。

私の親は志保に弱いからね……。……。

そのままヘーじの家に居ても良かったんだけど。

授業に使う教科書や予備の制服は家にあったから仕方が無い……。……。

ちなみに私は汚れた制服で帰ってきた。

多少は汚れを風呂場で洗ったから何とか着れる状態にはしたし。

若干湿っていたのは仕方無かったけどね。

お陰で朝早くに出たからちよつと寒かったなあ。

だから断じて私はあんな下半身をさらけ出して帰ったわけじゃない！

……もうあんな恥ずかしい格好はコリゴリ。

自分の恥ずかしい格好を頭から消そうと私はブンブンと頭を振った。

誰に言いわけするつもりでも無いけど、そこは自分自信としても否定したかったわけだと思ってほしい。

そんな事を考えているうちに校門を潜った。

結構早く家を出たからかな、他の生徒たちの姿は見えない。

上履きを穿いて立ち上がった瞬間、廊下を歩く一人の少女と目が合った。

その少女は唯一私が苦手とした人物。

可愛らしいツインテールが印象的で忘れる事は無い。

少女……基、亜里沙ちゃんは私に笑いかけてきた。

「早いですね、おはようございます水歩先輩」

私も。

笑顔で言葉を返す。

「ん、おはよ亜里沙ちゃん」

私の笑顔を見た瞬間、何故か亜里沙ちゃんは少し驚いた表情を見せる。

その意図は読めなかったけど、驚いた表情はみるみる優しい笑みになる。

「そうですか、”はっきり”……したんですね」

何故、亜里沙ちゃんがそう言ったのか、まるで昨日の出来ごとをしっているかのような言葉だったけど。

私はさして驚かない。

笑顔のまま、私は答える。

「うん……”はつきり”したよ」

「はい、とても綺麗な心……迷いの無い澄んだ心ですね……」
何を嬉しそうに亜里沙ちゃんは言っているのか、その言葉に意味があるのかは解らないけど、私はもうこの子に負ける気は無い。

「亜里沙ちゃん、言っておきたい事があるんだ」

「はいー？　なんででしょうかー？」

私の言葉と共に亜里沙ちゃんの表情が変わる。

それは天使のような微笑みから、悪魔のような……おもちゃを見るような微笑みへ。

だけど私は恐れない。

「あのね？　私は今のこの環境がとっても大好きなんだー！　もしもこの環境を壊すような人間がいたら……」

私はそこで間を空ける。

今の環境。

それは。

ヘーじがため息をついて。
縁ちゃんが正義に燃えて。
サクが馬鹿な事やって。
志保が暴れる縁ちゃんを止めて。
そんな。

そんなそんな環境が好き。

幸せな私の環境。

思いつきり。

とびっきりの笑顔を亜里沙ちゃんに向けて、私は再び口を開く。

「私は全力でその人間をブッ潰す！！！」

これは私の宣戦布告、警告、威嚇。

亜里沙ちゃんは驚く表情を見せずに、楽しそうに、楽しそうに笑う。

「ええ♪ キモに銘じておきます」

そう言うと、亜里沙ちゃんは再び廊下を歩きだす。

私に向かって歩き出す。

私を横切る瞬間、亜里沙ちゃんの楽しそうな声が耳に入った。

小さく亜里沙ちゃんは零す。

嬉しそうに。

『楽しみにしています』

……アッハッハ！ 私は絶対に負けないよ。
大切な物が沢山あるからね。 誰にも渡さない。
私だけの宝物。

ポケットから生徒手帳を取り出すと、ソツと開く。
中には、今日ヘーじの家を出る時に撮った写真。
その場で現像出来る小型のカメラで撮った物だ。
私が持っているカメラの中でも中々の高級品。

画像が粗いのが難点だけど。

その画像が粗くても、その写真の私は笑おうとして表情を引き攣らせているのが良く解った。

そんな必死な私の横で幸せそうな寝顔をしているヘーじの顔もしつかりと撮れている。

私は小さく笑ってしまふ。

私ってば変な顔。

だけどコレは宝物。

ヘーじはいっぱい撮ってたけど私とヘーじのツーショットは無かったしね。

私は大切に大切に、その写真をそっと胸に抱く。
この想いは、きっと無くならないんだと思う。

だったら、苦しむんじゃなくて、大切にしよう。
この大切な想いを。

私はオオカミ少女。

たとえ嘘が自身に帰ってくる捨て身な行為になったとしても。
私は。

大切なものの為なら、オオカミに食べられる事も躊躇わない。

私はオオカミ（嘔吐き）少女。

たった一つの自分の真実を守る為に、初めての自分自身の想いに
『正直』になれた想いを。

初めての『本当』を守る為に、私は何度でも『嘘』をつこう。

その27. たった一つの真実を守る為に私は嘘という武器を何度でも奮おう(後

家のパソコンがウイルスにやられました……クソガアアアアア!!
というわけで現在は大学のパソコンから更新中です。

家のパソコンが治るまでは大学のパソコンで頑張ります(T|T)
夜更新を基本としている私としては確実に更新は遅くなるのは否め
ませんね(汗

人が後ろを通るたびに消している私はチキン。

さて、今回で水歩編は終わりです。

次回からはまた話が変わっていくと思われます。

少しは水歩も報われてくれると良いですね。

後、前回の話のタイトルがないことに気付きました。また気が向い
たらタイトル入れときます。

家のパソコンが出来ない↓ニコニコ見れない↓やる事が無い↓イ
ライライライライライライライライライライライ!!
パソコン中毒者ですが何か(へpへ)

その28. 変わらない平和な日々。　　ここが交差点

あれから数日が過ぎた。

賑やかなクラスは、今は昼休み中だ。

頬杖を付きながら僕は遠目にミホを見ていた。

彼女は楽しそうに他の女子と談笑している。

僕が見ているのに気付いたのか、飛び切りの笑顔で手を振って来た。

当然一緒に談笑していた子達も僕の方を見る。

その子達は何が楽しいのかクスクスと笑っている。

……なんか恥ずかしいんだけど。

そんな僕の気など知らずに嬉しそうに手を振っているミホ。

苦笑いしつつ僕も軽く、小さく手を振り返す。

それで満足したのかミホは再び楽しい会話に戻っていた。

僕は小さくため息を零す。

まア、元気になってよかったけどさ……。

「よお、なんかあったんかよ？」

そう言ってきたのは一人の大男。

サクだ。

言っている意味は多分……僕とミホに何かあったのか、とかいう意味だと取る。

君までバカな事を聞いてくるのか……。

サクはバカだが異常に勘が良い時がある。
だからこそ。

いきなり変な事を言わないで欲しい。

「……別にないよサク」

脳裏に少し前の出来事が浮かぶけどそこはスルー。

「何も無いわけねーじゃん！」

「!？」

突然の妙にテンションの高い大声に僕は椅子から転げ落ちた。
サクの声では無いのは確かだが、いきなり過ぎて焦る。
顔を挙げた先に変態男がいた。

「え、何いきなり！」

僕の冷たい視線なんて何のその。

変態男、基アズキは興奮した様子だ。

「あの水歩ちゃんのvariety……お前何かしただろ！ 絶対！」

「……は？」

呆然としている僕を無視してアズキは勝手に話を進める。

「ここ数日間にいきなり水歩ちゃんがなんか女の子らしい感じにな
ってんじゃん！ それは何故か……女ってのは恋の思いにつれて綺
麗になってくんだよ！」

聞く感じでは……まるでミホが今迄女の子らしくないみたいな言
い方だな。

なんと失礼な……。

というか君は何でそんな熱く語ってんの。

「で、君は何が言いたいんだ？」

「……かー！ お前は本当！ アレだな！ ダメだな！」

「ダメな奴にダメと言われる方が心外なんだけど！」
馬鹿に馬鹿と言われるのと同じくらいムカツク。

僕達のそんな様子にサクもアズキの様に呆れた表情を作っていた。

「へーじはよー……頭良いんだけど何か馬鹿だよなー、俺でもわかんのに……」

「終始馬鹿な奴にも言われたくないわ！」
くそ！ 普通に馬鹿な奴にも言われるのは予想外だったわ！

サクとアズキが顔を見合わせる。

何だその視線で語っている感じのソレは。

普通に気持ち悪いから止めて欲しい、そして息をするのも止めて欲しい。

「だからー……」

二人同時に僕の方を指差す。

この指折れないかな、とか思ってる僕を無視して二人は声を揃える。

「ミナミナ（水歩ちゃん）はお前の事が……」

そこで言い終わる前に、突然二人はビタッと止まった。

そんな馬鹿二人に僕はビクツとしていた。

何故二人が固まり、頭の上にシャーペンが深々と刺さっているのか、そして噴水のように血を垂れ流しているのか。

何故かはスグに解る。

「やっほー！　ヘービー♪」

二人の後ろから笑顔のミホが現れた。

あ、これや（殺）ったの君かい。

アズキは血を流しまくりながらぶっ倒れた。

そんな変態とは別に、流石は頑丈な変態、サクは血をダラダラと流しながらも未だに立っている。

「てつめえ！　何すんだよミナミナくらあ！！」

頭にシャーペンをぶっ刺し、ダラダラと血を流しながら何を言ってるんだこの男は。

しかしホントに丈夫だな。

「あつれー？　サクマッチ丈夫だねん？」

丈夫で済まされるのはサクだけなんだけど、っていうか躊躇無しに刺せるミホが怖いわ。

「ウルセー！　てめーの事を思っ言ってやろうとしてやっ……」

サクの言葉はまたも最後まで言える事は無かった。

それはミホが思いっきりサクの額に再びシャーペンを突き刺したからだ（2本目）。

「ぎ、ぎいあああああああああああ！！」

強烈な悲鳴を挙げるサク。

というかウルサイ。

ニッコニコと楽しそうな笑みを浮かべているミホが怖……。

「大きなお世話よくバカサク！」

サクは血を噴き出しながらフラフラと足を纏れさせる。

流石に丈夫なサクも前後ろにシャーペンがぶっ刺さってたらキツイらしい。

あらー……何て人事な僕は視線を落とした。

その先に、何故か血を流しぶっ倒れているのに光悦な表情のアズキが居た。

……え、なんで笑ってんのこの人、気持ち悪……！！

「フフ……なぜ俺が笑みを浮かべているのかが解らないようだな……」

うわ、話しかけられちゃったよ！　っていうか意識はあるのね。

「知りたいか？」

「いや、全力で遠慮しとく」

「そうか……そんなに知りたいか！」

「人の話し聞けよ！」

「美少女にシャーペンを刺されるという素晴らしいさが」とか何とか勝手には喋り出すアズキを取りあえず無視することにした。

顔を挙げた先に、フラフラとしているサクがいた。
未だに血を出しているこのバカの丈夫さには呆れる。
そう思った時に、サクは足を縛れさせた。

「「あ」」

僕とミホの声が嵩張る。

なぜ嵩張ったかという、僕もミホもサクが扱けること自体に興
味は無い。

しかし、倒れる方向がまずい。

その方向は今も勝手に変態的な発言で喋り続けているアズキの方
向だ。

ちなみにアズキはまだ倒れたままだ。

その上に、大きな体のサクが覆い被さるように倒れていく。

アズキが気付いた時にはもう遅い。

プチ、という解りやすい効果音。

ピクピクと痙攣している二人のバカを前にして

取り敢えず……合掌。

呆れた表情のまま合掌している僕と、「バカだ！ バカが居る！
アツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ！」と爆笑しているミホ。

……今日も平和らしい

その28. 変わらない平和な日々。 ここが交差点（後書き）

遅くなりました申し訳ないです。

ここから新しい話しへと入って行きます。

また遅くなるかもしれませんが、どうぞお付き合い願います。

大学通ってパソコン使ってるので中々小説が書けない……（言い訳）

その29. 偶然なんて結構何度だって起こる物だって

「あー！ もー！ 鬱陶しー！！」

あまりにも苛立ちにアタシは不満な声を挙げる。

廊下に転がっているのは先ほどアタシが黙らせた一年生。
言う事を聞かないので体に解らせることになったのだ。

これで何人目だろうか。

朝から校則違反が多すぎる……。

それも全員今年入った一年生だ。

授業に出て休み時間に違反取り締まり。

いい加減疲れる。

しかも、

ここ最近、あまりにも多すぎる。

一年生が入ってからだ。

アタシ以外の風紀委員の人間も全員朝っぱらからフルで動いている程だ。

……多すぎる。

前はこんな事、なかったのに……。

何か作偽的な物を感じるのは気のせいだろうか。

突然ケータイが鳴った。

着信は風紀委員の先輩から。

内容は大体解ってるけど一応出る。

「はい」

『あ、縁ちゃん！？ 1階で喧嘩！ こっちも手が離せないんだ！
お願い！！』

そう言って電話はすぐに切れた。

やっぱり、またトラブル……。

一階は基本一年生の教室ばかりだ。

やっぱり……何かあるのかもしれない。

取り敢えずアタシは一階に急ぐことにした。

……………。

最近、忙しすぎてヘーじと喋ってない気がする……………。

廊下を走りながら、そんな事を考えていた。

ヘーじなら、この異常な状況を何とかしてくれるかもしれない。

あの貧弱男に何が出来るかは知らないけど。

……疲れると、ヘーじを頼ろうとしてしまう時がある。
ちょっと悪いクセだなんて事は解ってる。

だけど……久しぶりにまた背中を貸してくれないかな。

今僕は保健室にいる。

保健室は一階にある。

一階までバカ二人を連れてくるのは中々大変だった……。

ミホはどっかに行くし……あんにやろうサッサと逃げやがって。

取り敢えず気絶しているバカ二人を無理やり起こしてここまでやって来たわけだ。

なぜ保健室に来るのを渋るのか解らん……。

サクは「舐めときゃ治る」とか原始的な事言うし、アズキは「美少女が付けた傷を（以下略）」とかでメンドクサイし……。

両方とも額から血が出まくっているのに保健室に行こうという考えは生まれないらしい。

ほっといたら死ぬっつの!!

全く……頭の怪我は後から響くんだよ。

後から何かあったらどうするんだ……。

………や、別にこいつらがどうなろうがどうでも良いけどさ。
ホントに別になにもないから。うん、多分。

なんて誰に言い訳してるんだ僕は。

今は眠っているバカ二人を見て僕は小さくため息を零す。

もうすぐ授業始まるけどもう少しここでサボろうかなー……とか
思っていると、突然保健室のドアが開いた。

自然と視線がそちらを向く。

見覚えのある少年が、別の一人の少年を担いでいた。

担がれている少年は気絶しているようで、体もボロボロに見える、

担いでいる方の少年は。

……ッゲ。

始業式に初めて合った一年生。

切れ長の視線に身に覚えが在り過ぎる綺麗な顔立ち。
常識外れな刀は健在な様で。

確か名前は。

悠馬
ゆうま

その29. 偶然なんて結構何度だって起こる物だって（後書き）

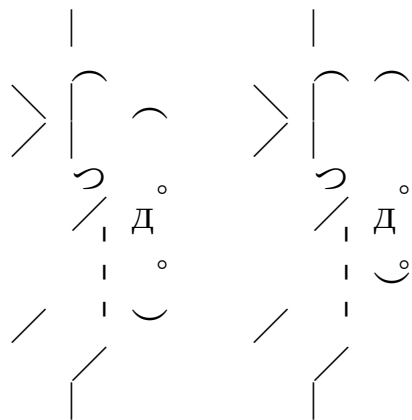
私の相棒はウィルスでやられ、大学の先生もお手上げだった筈なのに。

トボトボと家に持ち帰って起動してみると。

普通に起動。

「……あれ？」

普通に使える。



その30. 最初の印象が悪いからって、悪い奴と決め込むもんじゃ無いらしい

悠馬は僕に気付く様子は無い。

「……なんだ朝倉先輩か」

……わー気付いてたよ。

「やー久しぶり」

僕も取り敢えず挨拶を返す。

悠馬は眼を細め、少し苛立った表情を見せるもそこはスルー。

「今はアンタに構っている暇はないんスよ」

「安心してよ、僕も構われたくないから」

敵対するような言い方に反射的に僕も敵対した言い方で返してしまふ。

悠馬は鋭い視線を僕に向けた。

だが。すぐに視線を外した。

空いているベッドに担いでいた少年をゆっくりと降ろしていた。

「朝倉先輩は俺の中でブツ殺したい人間ぶちぎりトップだけどよ

……今はヤル気はないんすよ」

えゝ！ 僕って、そんなに嫌われてたの！？

普通にショックを受けるガラスマイハート……。

「それに、そのアンタを更にぶちぎるぐらいにムカツクのが二人程いるんでね、今回は見逃しますよ」

……？

そりゃまー助かるけど、僕以上にムカツク奴？

ヤクザの息子をここまで言わせるなんて、どんな命知らずだ？

まア僕も人の事は言えないけどさ。

視線を悠馬からベッドに寝かせられた少年に向けた。

……殴られた後が目立つな。

喧嘩か？

「何、君がしたの？ ソレ」

「なんで俺が仲間を殴んなきゃなんねーんスカ、これは風紀と生徒会の奴にやられたんスよ」

ここ最近、風紀委員が忙しそうにしているのは良く目にした。

生徒会も手が回らない風紀委員の手伝いをしているらしい。

いまベッドで寝てる少年は風紀を乱し、生徒会や風紀の奴に逆らったという事か。

風紀を乱す方が悪いし、あの縁が居る生徒会に逆らおうとするのだからなお馬鹿だと思えないけど。

しかし、そんな馬鹿を悠馬は仲間と言い、怪我をした仲間をここまで運んだ。

……っはーん。

「何だ君、案外良い奴じゃん」

僕の言葉に悠馬は少し妙な顔をした。

その表情は苛立ち等の表情では無く、まるで本当にどういう表情をすればいいのか解らない、と言った具合だ。

「良い奴かどうかは、俺が決める事じゃない、朝倉先輩がそう思うなら、それでいいんじゃないですか」

妙に素っ気ない返しだ。

まるで言葉に迷った結果、それしか言えないような。

……最初、この子は縁や薫君と同じ部類だと思っていた。
自分の信念のみを信じる部類。

心のままに生きる縁や、自分のみを信じる生徒会長の薫君。

この子は、違いかもしれない。

悠馬に向けての考え方が少し変わった気がした。

悠馬は馬鹿二人に視線を向けて、少しだけ、ほんの少しだけ微笑んで見せた。

「朝倉先輩も大変そうっスね」

察してくれるか、この馬鹿二人の面倒を見るのがどれだけ大変だ

ったかを。

僕も少しだけ微笑んで見せる。

「まーね」

……そういえば、何でこの子は僕の名字知ってんだろ？

今はあの時みたいに殺気立ってないし、今なら結構普通に聞けるかな？

ビビッてますともさ。

だってこの子刀離さないんだもん！ そりゃ誰だって怖いわ！！

だから聞くなら今かなー。

「あのさ」

僕がそう切り出した時、突然部屋の外から大きな音がした。

バァン、という何かを思いっきりぶつけた様な音。

僕と悠馬は同時に立ち上がり、同時に廊下へ出るドアに向かった。何が起こったのかを確認したいと思った僕に対し。

悠馬の表情は明らかに何が起こったのかが解ったような表情をしていた。

憎々しげな表情で怒りを露わにしていた。

握っている刀を今にも抜きそうで、殺気を曝け出していた。

このドアの先にはいったい何があるっていうんだ？

……取り敢えず不幸な事があるんだろうな。

その31. それぞれの正義

アタシが一階に行った時には、既に他の男が喧嘩の仲裁に入っていた。

……いや、違う。

これは仲裁なんて物じゃない。

喧嘩していたのは両方共一年生だったんだと思う。

しかし、二人の一年生の内、片方は既に血だらけで倒れていた。それは喧嘩でそうなったのでは無いだろう。

喧嘩というのは片方が一方的になる物ではない。

かくゆう、もう一人は、今も馬乗りで男に殴られ続けていた。

この男はアタシよりも先に来ていた。

この男を、アタシは知っていた。

男が一年生で無いのは解っている。

男の特色も。

だからこそ男がやったのだろうと思った。

周りの一年生は青い顔のまま動こうとしない。

それはきつと恐怖から。

茫然としていたアタシはハッ！ と我に返ると慌てて声を張り上げた。

「や、止めなさいよ！」

だが、男の耳には聞こえていない様子だった。

この男は、今年度から会長になった男だ。
そして、アタシ自信何度も衝突した覚えがある。

「止めろつつてんのよ！ クソ会長！！」

アタシの怒りの声も無視して、生徒会の会長は何かを言いながら手を止めない。

ボソボソと会長が零している言葉には禍々しい物を感じた。

「何故、態々（わざわざ）、我々（われわれ）が、貴様等なんぞに、手を煩わせなければ、行けないんだ、クズが、クズが、クズが！」
一言一言零す度に会長は馬乗りになっている一年生に拳を下ろす。血だらけの拳と、返り血を帯びたメガネや服に、背筋が寒くなった。

これ以上は本当にマズイと感じたアタシは慌てて手を出した。

「やりすぎよ！！」

振りかぶった会長の腕を無理矢理掴む。

止めるのに結構な力を入れた。

思いつきり殴っていたのが解り、アタシの心は変なモヤモヤでムカムカする。

表現が変だけど……口には出せないのだからこう言うしか無い。

初めて会長は振り向いた。

「……なんだ風紀の犬か、遅かったじゃないか、既に肅清は行っている、邪魔をするな」

あまりにも淡々とした言い方。

先ほどのまでの行動が無かったかのように。

しかし無い筈が無く、今も男は馬乗りのまま。

感情の無い言葉に、アタシの胸のムカムカは強くなる。

肅清！？ ふざけてんじゃないわよ！

「アタシ達が言われたのは喧嘩の仲裁よ！ 肅清しろ何て言われてないでしょ！！」

会長が憎々しげに舌打ちをする。

「ツチ、風紀のクズ共が働かないから態々、我々生徒会も手伝ってやっているのにとんだ言い草だな！」

「ざっけんじゃないわよ！ アンタのやり方は度が過ぎてんのよ！ 相手はもう気絶してんのよ！？」

アタシの言葉に会長は立ち上がり、腕を振り払った。
憎々しげに正面からアタシを見据える。

「風紀の犬が……貴様がやる事も変わらないクセに、力で解決するのが最も理想なのは解っているだろうが」

その言葉は、生徒会長が言うような言葉では無い。
しかし、コイツはそれが当たり前なのだろう。
全くイライラさせる！

「耳かっぱじって、よっく聞きな！ アンタはやり過ぎなのよ！ 力で解決が否めない事もあるのは確かよ！ でもアンタのやっているのは違う！ 死人に鞭打つようなやり方アタシは許さない！ そ

んな正義は許さない！」

会長は分厚いメガネ越しに目を細め、あからさまに殺意を向けてきた。

「私が秩序であり私が正義だ……クスが夢物語を語るなよ」
会長のオーラが変わったのが一目で解った。

私は慌てて後ろに一步飛んだ。
そして身構える。

上等よ腐れ会長！ こっちだってアンタのやり方は気に食わない
のよ！ 正義の名の元にぶつつぶす！！

「アタシは絶対にあんたの正義なんか認めない！ アンタみたいな
壊すだけの人間なんて認めない！ 守る為の拳を文字通り体に叩き
込んで教えてあげるわよ！」

ヘーじがアタシに言葉だけで、脳みそ揺らしておもっきりぶっ飛
ばした様に。

アンタの脳髓にしっかり響くようにぶっ飛ばしてあげるわよオオ！

どこか昔の自分と会長が被った気がした。

緊迫する空気の中。

聞き覚えの在る声が聞こえた。

その声はアタシの耳にハッキリと聞こえた。

その声をアタシが間違える筈も無く。

アタシは声のした先を振り返った。

「ゆ、縁？」

そこには、何故か刀を持つ、いつかの一年生と一緒にいるヘーじが居た。

茫然としているヘーじ。

まだ状況を理解出来ていないんだろう。

そして、目を見開き、一目で怒り狂っているのが解る刀を持つ一年生。

この一年生も知っていた。

風紀委員内で注意人物として知られていた人物。

多分、騒動を起こしている一年生達のリーダー。

その刀を持つ一年の視線は、血だらけで倒れている同じ一年生に向けられていた。

「……サイツコーにキレそうだなぜテメーラ」

血走った瞳の視線は、アタシと会長の方を向き、殺意を込めた視線を向けられた。

憎々しげに睨む一年生と、会長と、アタシが揃ったのはこれが初めてだったと思う。

その31. それぞれの正義（後書き）

親からの仕送り。

ささやかな親族の愛情を確かめる思い。

兄からは賞味期限切れのパンが。。なんでだよ！Σ（。D。；）

姉からは良く解らない海外のお菓子。。日本のお菓子送ろうよ！Σ

（。D。；）（※海外のお菓子は甘過ぎて死ねる）

母からは以前実家に返った時に置いてきたパンツ。。もはや私のじやん！Σ（。D。；）

ちよっと悲しくなりつつダンボールの箱を漁る。

奥の奥に。

白い箱が。

箱には大きな文字でWii……

Wiiが入っていましたΣ（。D。；）

父が入れたと思える手紙と共に。

手紙「お前ゲーム好きやったな、そっちにやゲーム無いし買う金も無いと思ってな」

……………（。D。；）

と、とーちゃん……（つD。；）

その32. 不幸に自分からダイブすることに慣れた自分が辛い。

それは廊下の真ん中。

現在の状況を言う。

強烈な三人が睨みあっていた。

「あんた等いい加減ぶっ潰しときたいのよ！」

拳を鳴らし、今から行う為の準備運動をしているのは最強の女子高生こと縁。

目が据わっている時は戦闘モード全開の時。

「加減つてのをしらねーのかよコラ……俺の仲間と同じ目に合わせ
てやんよォ」

本物の日本刀を抜き取り、殺意の込めた睨みを利かせるのは一年生を束ねていると思われる美青年、悠馬。

悠馬は血だらけで倒れている一年生二人に視線を送った後、手に持つ日本刀の様なギラギラとした視線を向ける。

「ツチ、クズ共が、クズはクズらしくじゃあっておけば良い物を……この私に刃向かうとは脳も弱いようだな」

手や服に付いた血を見る限り、倒れている一年生をやったのはこいつだ。

下級生から、果てには同学年からも恐れられている狂った正義。

手や分厚いメガネに付いた血は拭おうとはしない。

まだこの男の事はよく知らないが、弱いわけでは無さそう。

空気が淀んでいる……。

周りで青い顔をしている一般人の生徒達。
こんな状況じゃ誰も動けないだろう。

……しかしだな。

青い顔をしている奴等なんかより、僕の方がずっと最悪な位置にいる。

この3人に、僕は囲まれている。

喧嘩？ 止めろとか言わないよ、好きにやるときゃいいよ。

でも僕を挟んでやるなアアアア！！！！ 何処か他所でやれエエエ
！！！！

何故そんなヤバイ所にいるかと言うとだ。
話を少し戻そうと思う。

・
・
・

・ ・
縁&薫君を見、次に倒れている一年生を見た後、ブチギレている
悠馬を見て。

僕は確信した。

これはいけない。

不幸の臭いがプンプンする！

死神が手招きしてるよ！ 逃げるにしかりだよコレは！

そう思い、即座にUターン。

行動は迅速に！

逃げ出そうとした時、背中越しに声をかけられた。

「……朝倉先輩」

声は悠馬の物。

キレているにしては偉く冷静な声だ。

……何だよ、不幸の元凶の一人。

立ち止まるけど振り向こうとはしない。

何が何でも逃げてやる！

しかし、次の悠馬の言葉で僕の足は動かなくなる。

「確か、医者の子……だった、スよね」

その言葉に、僕は振り向いてしまっていた。

多分、僕は誰が見ても動揺していたと思う。
それほどに、僕は驚いていた。

何故知っている。

名字を知っているのはまだ良い、調べれば解る事だ。

しかし、僕の親が医者であった事を知っているわけがない。
ちよつと調べたら出る事じゃ無い筈だ。

名字から推測したのか……？ いや、朝倉なんて名字他に居ても
おかしくない。

そんなピンポイントで当てられるものなのか？

僕は振り向いたが、悠馬は振り向かず背中を向けていた。

表情は、悟られていない筈だ。

唯、勘で言っただけかもしれない。

そんな可能性なんて無いかもしれないけど。

僕は純粹に恐れた。

また、毛嫌いされたあの頃になるのが怖かった。

知っているのは一握りの筈だから、だからこそ悠馬が知っている
のが怖かった。

だったら僕がした事も僕の親がしたこともきつと知っているのだ
ろう。

普通なら、そんな昔の事に恐れる事は無いかもしれない。

だけど僕にとってあの頃の思い出は、あまりにも強いトラウマ。

簡単に拭える物じゃ無い。

「……そんなわけないだろ」
嘘を吐いた。

僕と悠馬の間に沈黙が流れる。

「……今はそれでも良い、取り敢えず……あいつ等を診てもらえませんか」

それは純粋な言葉だった。

少し前にも思った。

この子は、きっと悪人では無い。

何で知っているかは知らないけど、この中で倒れている一年生を診れるのが僕だけであり、それしか方法が無いから僕に言ったんだ。

僕が下らないトラウマに怯えている時、この子は倒れている仲間の事を考えていたんだ。

僕の方を振り向こうとはせず、悠馬は薫君と縁を睨んだまま。

その殺意ある瞳とは別に、心からの拙劣な言葉が僕に向けられる。

「……………お願いします」

僕の事を嫌いと言った。

嫌いと言った口で僕に頼むのはきつと苦しいだろう。
だけどそれよりも苦しい思いがソレを優先させた。

……流石はヤクザの息子。

『義』は通すか。

ツチ。

僕は心の中で舌打ちをした。

悪人よりも。

悪人になり切れない存在の方がずっとずっと厄介だ。

唯の悪人なら躊躇無く切り捨てる。

しかし、僕の思いはこの子を切り捨てる気は無いらしい。

「良いよ、借り一だ」

「……感謝する」

その言葉と共に僕は倒れている1年生達に駆け寄った。
一年生の前でしゃがみ込む。

薫君と縁も近くに居るけど業と目を合わせなかった。

血だらけの少年の様子を診てみる。

……外傷は無い、とは言えないが主に顔面以外は大した事は無さ
そうだ。

血は全部鼻血からだろう。

殴られた後は酷いけど、見た目程酷くは無い……と思う。

普通よりかは知識はあるけど真似ごとでしかない。

ちゃんとした医者に診てもらった方が良いのは確かだ。

軽い診察をしていると、突然上から声が降ってきた。

「オイ、何してんだクズ」

その声とともに見上げた先に、薫君がいた。
ゾワツと寒気が背筋を貫く。

その寒気の正体は僕に向けて振りあげられていた拳。

殴られる……！

躊躇無い拳が僕に降りかかる。

しかし、僕に届く前に突然目の前に細長く黒い棒が拳を防いでく
れていた。

激しい打撃音に耳が痛くなる。

音の正体が拳の威力を見せ付けるよう。

目の前に現れた棒は見覚えのある刀の鞘。

悠馬が僕の直ぐ後ろから、鞘を地面に思いっきり立て付けていた
のだ。

薫君の表情はあからさまにイラついた様子。

そんな会長の視線は僕を通り越して後ろに居る悠馬に向けられて
いた。

「邪魔をするなクズ、折角制裁を加えた相手をコイツは看病しよう

としたんだぞ」

「ざっけんなよクソ会長、制裁だか何だかシラネーが、今はこの人をやらせねー……」

……敵だと恐ろしい歩く銃刀法違反だと思ってたけど、仲間になるとこんなにも頼もしいとは！ た、助かる。

「それに、この人を殺すのは俺だ、勝手な事すんじゃねーよ！」
一步後ろに飛んだ薫君に吐き捨てるように悠馬は叫んでいた。

あれ！？ 仲間ってわけじゃないの！？ というかやっぱり僕
の事は嫌いなね！ ちよつと悲しいよチキショー！

「へ、へーじ！ 大丈夫！？」

そう言って駆け寄ってきたのは縁。

「あ、ああ大丈夫……」

と、最後まで言い切る前に。

悠馬がいきなり縁に斬りかかった。

……え。何してんの！？

「！？」

縁はギリギリで体を横にして刀を避けた。

縁自身も予想外だったのか目を丸くしている。

かく言う僕自身も縁と全く同じ状態なわけだけど。

な、何で縁にまで攻撃したんだこの銃刀法違反は！？

「だから邪魔すんなって」

美青年は当たり前の様に、簡単に言った。

さも自分の行動はおかしくありませんよ、と言いたげに。

……うオオい！！

「何やってんだよ！」

咄嗟に僕は突っ込みを入れてしまっていた。

何だ！ 何がしたいんだこの子は！！

「……何って邪魔しようとしたから」

凄く冷静な感じで返されてしまった！！

しかも何で僕が怒っているのか解って無いご様子だよ！

まさか悠馬って結構バカ！？

今のは別に邪魔しにきたとかじゃないから！！

ブチ。

良い感じにキレた音は良く知っている方からの音。

「……………上・等オオー！！」

とても良い具合にムカついた縁が怒りの声を挙げていた。

ああ！ 解りやすい位に余計ややこしい感じになりやがってエエ！
単純過ぎる縁も馬鹿な一人なわけで。

……そんな感じで現在に至る。

上手いこと僕はこの三人に囲まれた形になったのだ。

その32. 不幸に自分からダイブすることに慣れた自分が辛い。(後書き)

※下ネタ注意

ちょっとした悪戯問題を女友達にやってみた。

私「もんだーい、入れる前は固くてく出すと柔らかい物ってなーんだ(▽、*)」

※正解ガム。

中学生並みのしょうもないネタですが、女の子にやって「キャーヤダー」てな感じの可愛い反応を期待。

女友達(。A。) 「……」

女友達(。A。) 「チンコ」

私「あ、あれ!? Σ(。A。;)」

なんでも上手いこと行くわけじゃないみたいです……。
つか普通に答えるなよ……。

その33. 三つ巴だってあら素敵……なわきゃ無いけどさ

何！？ 君等本当何！？

僕の悲しい心の叫び声も空しく、睨みあっている三人が勝手に話を進める。

「会長になつたくらいで思い上がってんじゃないわよ」

「驕るつもりは無い……私が全てでありそれに逆らう貴様等こそが逆賊だ」

「どっちでも良いんだよ、テメーラはここで死ぬんだからよオオ……」

ま、マズイ、何がマズイかって言うとな僕を挟んでやっているという事だ。

三角形で良い感じに逃げ道塞いでんじゃねーよ！ 最早業とか偶然とかもどうでもいいよ！

コレもう100%巻き込まれる事山の如しじゃねーか！

「ちょ！ ちょっと！ 君等少しは落ちつこうよ！」

取り敢えず助かる為にも僕は慌てて声を上げる。

立ち上がると三人の視線を一点に集めているようで怖かったけど。三人に挟まれつつも、偉く必死な感じに声を出す。

「アンタ達、肉片が残ると思うんじゃないわよ！」

「フン、クズの親玉共を一斉に駆除出来るんだ、こんな楽な事も無い……」

「コチラの台詞だったの、テメーラ死ぬ覚悟は出来たかよ？」

あれ！？ 無視！？ 無視ですかー！？

聞いちゃいねー！ー！！

ちよっと半泣きになりつつある僕の事なんか見えていないのか、3人は僕を通り越して睨み合いを続けている。

しかし。

睨み合いが長く続く事は無かった。

最初に睨み合いを解いたのは薫君だった。

視線は僕を通り越すのでは無く、僕を見て。

薫君が一步前に入る。

それは結果的に3人の内、僕に一番近い一人になる。

「邪魔だ、貴様は退け」

そう言って僕を強く押した。

存在を無視されていたわけじゃ無かったのは何かしらホッとするけれど。

結構押しが強かった事で、僕は簡単に後ろに崩れていった

「わ、わ！」

間抜けな声が出たのが情けない……
尻持ちを付いて三人を見上げる形になった。

「……フン、貧弱なクズが」

そう言って薫君は僕の頭を軽く蹴った。
思いつきりでは無く、軽く、侮蔑する様に。

痛い……。

流石の僕も腹が立つ。

このヤロウ、と睨みつけようとしたのだけれど、薫君よりも先に
縁を見てしまった。

鋭い瞳が目を見開いていた。

何か禍々しいオーラの様な物まで見える……え？ 髪の毛浮いて
ません！？

久々にキレている表情を見た気がした。

躊躇無く縁が振り被った拳が薫君の顔面に向け走る。

パァン！ という破裂音は、薫君が瞬時に縁の拳を掌で掴んだの
だ。

なんにしても縁の拳を止めたのは初めて見た。

この男、思いの他凄いのかもしれない。

性格は悪いのに……。

「ハッ、良いパンチじゃ無いか、貴様はクズから虫にランクを上げ
てやるよ、ありがたく思え！」

どこまでも上から目線の薫君は、縁をあざ笑う。

そんな薫君に怒りのこもった拳と同じくらい怒りに染まる縁の大きな瞳が睨み付ける。

「ヘーじに手エ挙げた時点でアンタの人生は終わってンのよ！ サッサと殺されなさいよコラア！」

鋭い二人の視線が交差する。

殺気の籠った二つの瞳とは別に、別の殺意も二人の真横から飛んできた。

「オイオイ、二人で楽しむんじゃねーよ、俺も入れろよ」
悠馬が縦に刀を振っていた。

振り下ろす先は、縁の拳を握っている薫君の手。

つまりは両方の結んでいる手に向けて振り下ろされていた。

躊躇無いソレは、確実に二人の手を斬りつける為だ。

薫君と縁の行動は迅速だった。

お互いが空いている方の手を振り下ろされる刀に向けた。

パァン！ という破裂音は振り下ろされる刀を二人の手がタイミングよく挟んだのだ。

縁は薫君に拳を向け、その拳を薫君は受け止め、更にその二人に纏めて切りかかってきた悠馬の刀を

縁と薫君の残りの空いた手で防がれていた。

まるでアクション映画の一部シーンを見るような洗練されたすざまじい動きが目の前にあった。

僕の真上で繰り広げられた一瞬だけの迫力満点な戦いに背筋が寒

くなる。

縁以外にここまでの動きが出来る人間が居るとは……。

驚愕の一言しか無い。

あのクソ会長も、この一年も。

幾ら強くても縁程では無いと思って居た。

これは、考えを改めなくちゃならないかもしれない。

三人はそのまま固まり、再び睨み合いが続く。

そんな中、縁だけ僕の方に視線を送った。

その視線は決意に燃える縁らしい、正義のヒーローらしい瞳だ。

その視線を送ったのも一瞬のみ。

再び薫君や悠馬に視線を向けると縁はバツ、と一歩二歩と後ろに飛んだ。

それに合わせて薫君と悠馬は縁を追うように、同じように一歩二歩と出る。

三角状態だった形から、形は崩れる。

後ろに下がれば二人と相對する形になる。

つまりは2対一の状態になったのだ。

それを解っていただろう、に縁は後ろに下がった。

それは、多分。

僕からこいつ等を離す為だ。

馬鹿のクセに、変な所だけ気ー回しやがって……。

馬鹿女め。

その大きな瞳は悠馬と薫君を睨みつけ、臆することなく戦闘の形へと構えをとる。

どこまでも彼女は正義の味方で、守る為には簡単に自分を捧げる。

本当に。

馬鹿女め。

その33. 三つ巴だってあら素敵……なわきゃ無いけどさ（後書き）

ある意味最も無防備になるのがトイレ。

ハァー……♪（＊、▽、＊）

幸せな気分を味わった後。

ズボンを履くのは当然。

履くのと同時に、何故かドボン。という水に落ちる音。

……（；、▽、）

おそろおそろトイレの中を見てみると……。

ケータイがプカプカと浮かんでいるじゃありませんか。

「うえはぁー！？ Σ（□；）」

焦り過ぎて変な声が出る私。

ズボンを挙げる際にポケットから落ちた様子。

妙に放心状態になったり現実逃避したり奇声を挙げたりしながらも
ようやくケータイを助け出す。

何かぶるぶると（バイブ状態？）震えながら点滅を繰り返すケータイ……。

「（T—T＊）フッフ…寒いのかい、こんなに震えちゃって……」

と、半泣きになりつつケータイに語りかける私（この変で既にヤケクソ）。

そのままケータイは動くこと無く御臨終されました（T—T）

朝のテレビで星座占い3位だったじゃん！！

神様、私が嫌いか……私も大っ嫌いだバカヤロオオ！

その34. 不幸に自分からダイブすることに使命を感じている君に疲れる。

「遊んであげるわ、まとめてきなさいよ!」

自分から大変な方に突っ込んでいくバカ一名。

何故態々二人まとめて来る様な言い方するかなこの子は……。

「黙れクズ女が、汚らしい風紀の犬め」

「次は本気で殺るぜオラ」

そんな言い方するもんだから、二人の矛先は当然縁に向けられる。

縁は。

勝てるか……?

幾ら強くても、この二人を相手にして。

勝てるか?

縁の行動は、バカな行動だと思うけど。

結局は心配してしまう。

縁は強い。

だけど。

……もしもの可能性だってある。

誰も守らない彼女を守るのが僕だ。

それに、守られてばかりじゃカッコ悪いって！

僕は、縁を守るように立ちはだかっていた。

「な、何してんのよ……？」

縁の困惑した声が後ろから聞こえた。

ああ、そうさ。

折角縁が態々離れて助けてくれたのに、自分からまた怖い方に突っ込んだんだ。

僕は君から見たら唯の馬鹿かもしれないね。

でも、喧嘩中に僕を助けようとか考えてる君も十分馬鹿だって事は自覚しとけよバーカ。

「……ヘーじ？」

驚いた声を挙げる縁の声に僕は応えようとはしない。

でも、縁の言いたい事は解る。

縁だってそこまでは馬鹿じゃない。

この二人相手に僕が立ちはだかった所で勝率が挙がる筈が無いのだ。

寧ろ邪魔だろうし、僕自身が化け物二人と相対して怖くないわけじゃない。

っていうか死ぬほど怖い。

おーおー……男二人が思いつきり睨んでるよ。

そうさ、お前ら何かに勝てる気なんてしねーよ。

でもな、勝てる勝てないの問題じゃないんだよ。
僕の問題は守りたいか守りたくないかなんだよブオケ！

それに、僕は戦う為に前に出たわけじゃない。
守る為に出たけど、戦いたいわけじゃない。

僕の武器は『力』じゃ無い。

「退けよ、朝倉先輩」

「貧弱なゴミ、先に死にたいのか？」

二人の屈強な男達が僕に睨みを利かせる。
心の中では震えているものの、それを表情に出すつもりは無い。
寧ろ小馬鹿にした様な笑みを浮かべてみせる。

「ちょっと待てよ熱血馬鹿共」

僕の一言で、男達も、そして周りの野次馬たちも、縁さえも黙り込んだ。

それは何を言い出した？　と言った様な不審な目で見るような沈黙だ。

「……貴様から死ぬか？」

薫君が僕に冷たい視線を向ける。

「落ちつけよ」

馬鹿にしたような言い方に薫君の表情があからさまにイラついた表情を見せる。

そんな表情等どうでもいいと言った具合に僕は続ける。

「今君らが熱くなって潰し合うのは構わないけど、3人で戦えば必ずしも2対1の関係になるし、一人を倒した所で残りの二人のどちらかが弱れば片方が得をするわけだ、それはつまり、絶対に有利になる人間が居るって事じゃないのか？」

そこで一区切り置いて二人の様子を見てみる。

僕の話しを邪魔する様子は無い……僕の話に耳を貸す位の冷静さは残ってくれていて助かるよ。

「……ま、君達からすりゃそりゃ面白くない事になるんじゃないの？」

つまりは3人の内の一人が絶対に有利な状況になるという事だ。

いくら『君等二人vs縁一人』だったとしても、縁相手に無傷で勝利を得るなんて事は考えられないよな？

「……っふん、問題無い、私がクズ二人に遅れをとるとは思っていない」

薫君が舌打ち混じりに言うが、その言い方からして、心の中では解っているのだろう。

あの男も頭は良い、決して自分が悪い方向に持っていく事は無いだろう。

「今は意地を張るとこじゃないよ会長さん」

僕の言葉に薫君が睨む。

そんな視線を無視して悠馬の方にも目をやる。

薫君の様に憎しみを込めた様な睨み方はしないが、それでも僕に敵意を向けた視線を送る。

悠馬も納得した。

という様子では無いが状況は解ってくれたらしい。

僕は馬鹿にしたようにニヤツと笑い、加えて小馬鹿にしたように零す。

「もっとクールに行こうよ熱血馬鹿ども」

その34. 不幸に自分からダイブすることに使命を感じている君に疲れる。(後

先輩がお古の携帯くれたよー！(´▽｀)(ワアイ♪

携帯が新しくなったよー！ 夢を見たさ……正に湖の女神！ 湖じ
ゃ無くてトイレだけど！

女神「貴方が落としたのは汚い(トイレに落ちた)ケータイですか
？ それとも、ちよつと良い感じのケータイですか？(へーへ＊
)」

私「……(。.;)」

「ちよつと良い感じのケー……(。.;)」

グフウ。・。＊・(。d。(☆○〓(へーへ＊)o女神

という感じに女神に殴られる夢を見たのはきつと運命だったんでし
よう……

(トイレの)女神さま！ ありがとう！

その35. 僕の信念を舐めるな

「……一番クールじゃ無い奴に言われたくないわよ」

「貴様は馬鹿か、クールの意味を知らないのか？ 辞書を引いてこい」

「自分で自分の事クールだと思ってるのってマジ痛いと思うッスよ」

ぐお！？ 何だコイツ等いきなり息ピッタリかよ！！
しかも前からだけでなく後ろからも撃たれた！（縁に）

「ウルセーよ！ 君等さっきまでの行動思い返してから言えよ！」
噛み付く様に僕は叫び声をあげる。
勿論怒りを込めながら。

「……クールじゃない」
呆れた様な縁の言い方。

「汚らしい叫び声だ、クールとは思えんな」
馬鹿にした様な薫君

「クールには思えないっスね」
何故か普通に冷静に言う悠馬。

「なんなんだお前らは！ 打ち合わせでもしたのかコラ！」
あんまりにも息ピッタリでどん引きだわ！！
そして、大きく大きくため息を零した。

「ま……まアいいさ……落ち着いてくれたら……」

3人に向けてのイライラに唇を引き攣らせながら僕は言葉を零す。

「貴様の理屈は解るがココで引き下がる気は無い」

「朝倉先輩……悪いっすけど、俺にも意地があるんスよ」
男二人が共に構えだした。

へ？

あ、あれ？

真後ろで、ため息が聞こえた。

それは当然後ろに居る縁が零したものの。
仕方が無いという感じのため息。

「ゴメンね……ヘーじ退いて」

そう言っつて縁は僕を押して前に出た。

お、お前ら馬鹿か！？

「意味解んねーよ！ 君等が戦っても不利な結果にしかないんだってば！」

僕の言葉も無視して熱血馬鹿共は構えを解かない。

な。

何なんだよ。

悠馬が僕の方に 視線を向ける。

「あんたの言い分は解るよ」

そこで悠馬は眼を伏せ、続ける。

「だけど……悪いけどよ、ここで戦う事を止めるのは出来ない」

「な、何で」

僕の掠れる声に悠馬は低い声を零す。

「あいつ等二人はシラネーけどよ……俺は仲間ブツ飛ばされて『はいそーですか』って帰せるもんじゃねーんだよ」

悠馬の言葉に呼応するかのように、薫君も口を開いた。

「フン、そんな理由で戦うか、所詮は社会のゴミか？」
解り易いほどに悠馬の表情が硬くなる。

「じゃあ君の理由はなんなのさ」

悠馬が口を開く前に僕が聞いた。
納得の行く答えを聞きたかった。

「秩序とはその場で示すから意味がある。 たった一つの罪を逃せばソレは秩序では無くなる、それが私の答えだ」

悠馬は大切な仲間の為に、薫君は己が信じる秩序を守る為に。

二人の言っている事は正しい事であって、正しくない事ではなかった。

反論出来るわけが無い。

僕と一緒に。

自分に不利だからって戦う戦わないじゃ無いんだ……。

戦わなければ行けないんだ。

縁の為に喧嘩を止めようとした。

しかし、僕なんかじゃ、無理なのかな……。

カッコつけて出てきて、結局……貧弱な僕には何も出来ないのかよ。

……クソ。

「……………ヘーじ」

俯く僕に、目の前に居る少女が声をかけた。

彼女は振り向かず背を向けたまま。

彼女も、また、信念によって動く者だから。

きっと、戦うのだろう。

「私が戦う理由は『信念』がそこにあるから」
やっぱりそうなんだ……。

僕は無駄な事をしたただけだったのかな。

縁は一呼吸空けて続ける。

「正義の名の元に、この二人をほっとく事は出来ない」

ああ、解ってる。君らしい言葉だね。

君も含めて。

信念に燃える3人を、僕が止められる物じゃなかったんだろう…
…。

「一緒だよ」

只それだけを縁は零す。

その言葉の意味は解らなかった。

縁は背を向けたまま、続ける。

「ヘーじと『一緒』だよ。『私達と変わらない』、ヘーじは何の為

にアタシの前に立ったの？それがヘーじの『信念』でしょ？信

念を込めて動くアタシ達と、何が違うの？」

そう言って、縁は振り向いた。

とびっきりの笑顔を僕に向けて。

「ヘーじの『信念』は、そんな物？」

僕の中で、電流が走る。

その言葉が、その笑顔が、僕の心を洗う。

……ああ、そうさ。

お前らと何ら変わらないさ。

お前らが馬鹿みたいに『信念』の通りに動くなら、僕だって自分

の『信念』の通りに動いてやるよ!!

僕の表情の変わり具合に、縁は嬉しそうに笑った。

「ヘーじは顔挙げてる方がいいね」
そう言って縁は笑う。

……また助けるつもりが、助けられたらしい。

僕はッスー、と思いつきり息を吸った。
そして一気に吐き出す。

「っだー！ お前らはほんつとー！！ 頭ん中の脳みそメトロ
ノームで出来てんのかお前らはよー！ チックタックチックタッ
ク同じ行動おんなばっかしやがってよオー！」

どんなに言っても熱血馬鹿共は別の行動をする気は無いらしく、
何を言っても『勝負！』止めろと言っても『勝負！』このウニコ共
とか言っても『勝負！』 どうにもこうにも変わらない行動は最早
メトロノームのよう。

何かしら上手いこと言ってるんじゃない？ 僕。とか思いつつ僕は
叫び声を挙げ過ぎてゼーゼーと荒い息遣いに変わった。

大声を出すのは結構疲れるもんなのだ、解って欲しい。

こうなったらこっちも意地だ。
お前らは絶対に戦わせない！
今の僕の『信念』は揺るがない。

『信念』というより、只の我儘かもしれない。
ならば最大級の我儘だ。1年2年3年のラスボス共め！ お前ら
に御誂え向きの舞台を揃えてやるよ！

「好きに戦えよ！ どうせ止まらないんだろ馬鹿共が！ だけどな
……今ここでは戦うな！」

僕の言葉に悠馬と薫君は眉を顰める。

「……へーじ、どういう事？」

黙っているラスボス二人に変わって縁が疑問を聞いてくる。

僕は再び馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「君等の言い分は解った、ならば更に良いステージを僕が用意して
やる。 人を集めて、誰にも不利にならない最高の条件を揃える！」

僕は声を張り上げる。

周りの野次馬たちにも聞こえる様に。

状況を、誰もが見ても青ざめる血みどろの喧嘩から、見応えのあ
る見世物へと変えるんだ。

周りの空気も味方になるかもしれない。

視線を薫君に向けた。

鋭い眼光に、気押されないように睨み返す。

「君は大勢の人の目の前で秩序を見せ付けければ良い、そうすれば君
に楯突く奴はいなくなるし、誰もが認めなくても、大勢の前で見せ
付けてしまえば君に皆ついてくるだろうさ……自分の思い通りの学
校が出来るだろ。 君にとっても都合が良いんじゃないか？」

次に視線を悠馬に向けた。

「悠馬もそうだ、人々の目の前で生徒会も風紀委員もブツ飛ばせば君等に被害を加える者もいなくなる、大勢の前に見せしめとして倒せばケジメになるだろう？」

学校全土で生徒たちに自らの實力を見せ付ければ良い。

縁や薫君や悠馬が有名であるならば、その有名な存在を倒せば逆らう者なんて居ない筈だ。

時間を掛けずに、最高の舞台を作ってやろうと言うんだ。

お前らが欲しくなるさいつこの舞台だ！！

黙り込む二人を前にして僕は続ける。

「チャンスは誰にでもある。不利な条件は無い！」

二人を同時に睨む。

空気を支配する。

拳を振るえない僕が唯一出来ること、言葉で世界を作れ！

野次馬達の視線は僕に集まる。

「イエスカノーだ」

その一言を言って、僕は口を噤む。

さも、僕が上の立場な言い方。

良く考えれば、僕にそんな舞台が用意出来るなんて思えない。

だが、さも出来るように、堂々とした自信満々な表情で。

そんな空気を。

僕にとってコレは最大級の博打でしかない。

乗って来い……乗って来い！

沈黙が流れる中、先に言葉を発したのは悠馬だった。

「……悪くない」

刀を降ろすと、僕に向けてニヤツと笑う。

悠馬に合わせるように薫君も構えを解いた。

「良いだろう、この件、貴様に任せてやる」

メガネを治す仕草をしながらも鋭い視線は僕に向けたまま。

釣れた。

でかすぎて引っ張れないくらいに巨大なのが二匹程。

釣りざおをコントロールするのは僕だ。

君等が糸を引き千切るか、僕が釣りあげるか。

勝負はここからだ。

その35. 僕の信念を舐めるな（後書き）

何度も見直したので結局納得の行かない結果に……orz

小説を書いていると偶にある現象。

友人が言っていた『完璧なんてあるか!』という言葉が浮かびます。それでも完璧に少しでも近づけたいと思うのは間違っていない筈。

そしてそんな友人に「ギャグ少ないしwwそれでコメディ作家とか
ワロスww」と言われましたイエー!ウルセー!ゝ（＊、旦那＊）
ノ”ミ☆

その36. 最高の舞台には最高のダンスで

ヘーじのおかげであの場はまとまった。

その後、チャイムと共に全員が解散した。

アタシはある事が気になって、離れていく人の中から
一年のアノ男を追った。

「待ちなさいよ」
アタシの言葉に、目の前の先を歩いていた銃刀法違反男は止まった。

刀の柄に手をかけて男はアタシに鋭い視線を向けながら振り返る。
敵対意識バリバリね。

嫌われるのは慣れてる……ってわけじゃないけど、今はあまり気にしないでおう。

「なんのようだ」

ヘーじの時は敬語だったのにアタシにはタメ語ってか。

ヘーじが志保には『ちゃん』付けしてアタシには『ちゃん』付けしないのと同じくらいムカツクわね。

「ちょっと聞きたい事があるのよ」

腕組みをするアタシに対し、銃刀法違反の一年生は刀から手を離

す様子は無い。

名前は悠馬。

一年生が暴れているのはこの男のせいである可能性が高いと。
風紀の方で噂されている。

「……何だ、さきに殺り合うか」
刺々しい殺意に流石にムツとしてしまう。

「アンタさっきのヘーじの話聞いて無かったの？ 取り敢えず休戦よ殺り合う気は無いわよ」
アタシの言った言葉が解ったのか、悠馬はようやく刀から手を離した。

……話しは解る方かしら？

「取り敢えず一つは、『ありがとう』ヘーじを助けてくれた事は感謝するわ」

悠馬は少し眉を寄せて見せた。

「アンタ……俺は敵じゃないのか？ アンタ達の好きな悪だぜ？
それに礼を言うなんざ変わってるな……」

目を丸めている様子を見ると、アタシをあの糞会長と同じと見られているらしい。

心外も良い所ね。

「……確かにアンタはアタシの嫌いな悪だし敵である事は変わりないわよ」

アタシの言葉に一年生は馬鹿にしたように鼻を鳴らす。
それが『やっぱり』と言われている様でイラつく。

でも今はその怒りは心に留めて置く、ヘーじの頑張りを無駄にする気は無い。

「でもね、アンタがヘーじを助けた事も変わらないのよ、『ありがとう』アタシは敵であろうが悪であろうが心から感謝するわよ。大切な物を守りたいのはアンタも一緒でしょ？」

糞会長がやり過ぎた事を怒っていた。

守りたい物がある事は、悪でも敵でもソコはアタシと変わらない。アタシの言葉に、一年生の表情は突然柔らかくなった。

少し嬉しそうに、少し残念そうに。

一年生は口を開く。

「アンタが只の腐れ偽善じゃ無いのは解った……そんなにあの人が大切な？」

「ま、まあね」

あの人ってのはヘーじの事を言ってるんだろう。

一年生の言葉にアタシは少し躊躇した後に言った。

少し恥ずかしいという気持ちもあってアタシは言葉を詰まらせる。それでもハッキリと言った。

あの冬の夜から、ヘーじは掛け替えのない存在になった。

一年生は薄く笑う。

「……だったらアンタとは嫌でも敵対するさ」

そこで一呼吸空けて、少し間を空けた。

「俺はあの人を『殺す』為にこの学校に来たんだからな」

え？

その言葉に、アタシは一瞬固まった。

殺す。

ただの高校生如きが、本気で？

その為だけに態々この学校を選んだ？

何で、ヘーじを？

その瞳が嘘を言っているようには思えなかった。
だけど、それでもアタシは一応聞いた。

「……本気で言ってるの？」

「ああ、本気だ」

それを示すかのように、一年生は刀に触れた。

『殺す』という言葉を零したにしては、その表情は怒りに染まっているわけではなかった。

それは仕方なく、まるでそんな風に言うかのような表情。

「それは、何でって聞いても良い事？」

「……………」

アタシの言葉に一年生は言葉を嚙む。

そう、言えない事なんだ。

何でヘーじを殺すなんて言っているのかなんて、解らない。

理由なんて知らない。

ヘーじが過去に何をしたのかなんて知らない。

だけど。

もしもヘーじを殺す気であるならば。

「ならば、アタシがアンタを『殺す』」

アタシは、思いつきり一年生を睨みつける。

人の大切なモンを目の前で殺すなんて言われて、笑っていられる程にアタシは寛容では無い。

お礼を言うつもりだったけど、用事が今、変わった。

アタシは拳を握りしめる。

一年生は、目を細くして、睨むアタシとは対照的に、只見つめる。

アタシは、そんな様子なぞ気にせず続ける。

「心しなさいよ、殺すって事がどういう事か！」

アタシは一年生に警告する。

拳を直線に、一年生に向けて警告する。

「『殺される』覚悟を持ちなさいよ！『ヘーじを殺せばアタシがアンタを殺す！』、『殺そうとしても殺す！』、『その他一切、傷つける様な事があれば殺す！！』」

アタシの睨みに動じず一年生は笑う。
悪役に似合う最高の笑顔のアタシに向ける。

「ッハ、とんだ番犬だ、だけど覚悟が無いつもりは無い……貴様に
噛み千切られようが俺は俺のやり方でやらせて貰う！」

「舐めんじゃないわよ！」

アタシの声は廊下に響く。

「アタシの牙が、アンタが味わってきたそこらへんの丸い牙みたいに
甘いと思ったら大間違いよ！　ちよつとでも気を抜いたら簡単に
その首、噛み切り落とす……！」

吐き捨てるように言うと共に、直線に向けていた拳を自分の喉元
まで持ってくる親指で首を切り落とすジェスチャーを見せ付ける。

奢るつもりは無い。

だけど、ヘーじを殺すというなら、アタシという存在が居るのを
忘れるんじゃないわよ。

一年生は笑う。

「ああ、覚えておいてやるよ、守ってみろよ、テメーの大切なご主
人様をなア」

楽しそうに。

アタシは精一杯睨みつける。

ココで闘う気は無い。

ヘーじが舞台を用意してくれると言った。

きつとヘーじなら何か考えがあった筈だ。

最高のステージをヘーじが用意してくれるなら、アタシはソレに見合った最高のダンスを見せるだけ。

アンタ達如きが。

アタシのダンスについてこれるかしら？

その36. 最高の舞台には最高のダンスで（後書き）

えー、前の作品から大分間が空いた事を先に謝っておきます。申し訳ありませんでした。

いや、っていうか15日に一回更新したんですけどね!?

ソレが何故か更新されていない事に気付いたのは24とか23だったかな? それについては活動報告に…。

まーその時更新していた奴はさっさと消しちゃったので書きなおしなわけですが。

書きなおしてたら時間かかるので「その37.」だった筈の作品を先に持ってくる事にしました。

取り敢えず色々言いましたが遅くなっすいませんでした!

次の更新

その37. 野球に例えるなら現在九回裏無失点……誰か逆転ホームランを（泣）

ガヤガヤと騒がしい教室。

授業の合間にある休み時間をそれぞれが様々な方法でストレス解消に勤しんでいた。

友達と喋る人、トイレに行く人、漫画やお菓子等の持ち込んだ物を使う人だって居る。

そんな中、解消が出来る筈の無いストレスに押しつぶされている人間が居た。

それが机に突っ伏し、項垂れている。

僕だ。

ど……どうしよう。

僕は言った。

縁と会長と不良に最高のステージを用意すると。

んなの……。

出来るわけねー……っつー……の……！！

僕は一介の高校生に過ぎない。

そんな僕にあの3人が納得する様なステージが用意出来るわけがない……！！

ちよっとは動いたさ、努力はした。

廊下で会った駄目教師に提案した所、笑顔で「却下」

何か行事に合わせて出来るかと思ったけど、被せられそうな行事は今のところ無さそうだ……。

普通の学校なら会長に提案という手が在るのだが、今この学校の生徒会長に近づく気は無い。

何故って？ 怖いからだよ！！

頭は良い方な僕だけど……見事になんも浮かばないな……。

頭を掻き毟っている僕に、ケラケラと笑いながら声をかける少女が居た。

「ヘーじイー？ 噂になってるよーん？ あの三人相手にとんだ啖呵を切ったねエ？」

僕がその場のテンションで考え無しな発言をしたのは解っているらしい。

僕が落ち込んでいる時は大概彼女が飛んでくる。

僕の不幸がそんなに好きか性悪女めエエ……。

しかし少し前の事が噂になってるって、相変わらずあり得ない情報網してるね君……。

てか広めたのも君だろ絶対。

「バツカだよなー、お前って頭良いのに……バツカだよなー」
クソ！ 変態にバカって言われた！！

変態、もといアズキが呆れた表情を僕に見せてくる。

どうやらコイツも騒ぎに自分から首を突っ込んで楽しむタイプなようだ。

要するに僕が不幸な時は近くにいた野郎なんだろう。

結果的にはミホと変わらない。

「五月蠅い変態黙れ死ね」

机に突っ伏しながら取り敢えず変態に向けて毒を吐いておく。
こんなのではストレス解消にはならないようだ。

気持ちが和らぐことは無いらしい。

「え、ちょ、酷くね!？」

勝手にショックを受けている変態を無視していると、また別の方向から男の声。

「ん? 何だ? 何かあったんか？」

この馬鹿はっていうかサクは基本的に何か騒ぎがあろうが無かろうが何故か僕の近くに居る。

っていうか何も解って無いってのもソレはそれで腹立つな!!

人の不幸が蜜の味な二人+バカの五月蠅い言葉に、僕の頭は限界を超える。

プツツンだ。もうプツツンだ糞共!!

思いっきり机を叩いて高らかに叫ぶ。

「あーもー! 何なんだよお前らはよー!! 人が必死に悩んでん
のによォー!」

僕の怒りの声にミホは眼をパチパチとしている。

「えー? 何よー折角一緒に考えて挙げようと思ったのにー」

あーあー! そうだろーさ! 邪魔しに来たんだろ!? 一緒に
考えてって最高の邪……うん!?

「え、え!?! 一緒に考えてくれるの!?!」

プツツンした頭の中の血管が見事に元に戻る程の衝撃的な一言。

ま、まさか僕に不幸をもたらす三人が僕を助けてくれるとは誰も
思うまい。

「アタシ達にまっかせといてよー！」

そういつて僕に親指を立てて高らかに笑うミホ。

う、嬉しい！ 普通に嬉しい！！

現在追いこまれ中9回裏無失点。

僕じゃマトモなバッティング（提案）は浮かばない。
バッター交代！

君達がまさかの逆転ホームランを出す事を願うよ！！

「で？ 今んトコどんな案があんの？」

僕の言葉にミホは人差し指を顎に付けて考える素振りを見せる。

「んー……」

そして僕にいつもの笑みを向けると言った。

「諦めたら？」

……え？ ワンアウト？

一瞬間然とするも慌ててミホに叫ぶ。

「いやいやいや！？ 何のための代打！？ せめてバット振ってよ！
諦めたらそこで試合終了ですよ！？」

例えるならこの女はバッターボックスに立っているのにバットを一度も振らずに笑顔でボールを全部見逃しているとかそんな感じだ。
っていうか今さっき「まっかせといて！」て言ったじゃん！ 堂々と
言ったじゃん！！

何!?!?　ここ笑うとこ!?!?

僕の言葉にミホはケラケラと人ごとのように笑う。

「だって?　そんなの考えなしの発言したヘーじが悪いんでしょ?」

つく!　こんな時だけ正論出しやがって!

「おい!　ミホちゃんそりゃねーよ!　ヘーじだって必死なんだぜ?」

そんな落ち込んでいる僕に変態男が助け舟を出してきた。

まさか変態男から助けが来るとは……

「安心しろよヘーじ!　俺はちゃんと考えてきてやったよ!」

お、おお……君って奴は。

ちよつと感動で泣きそうになる僕。

「君の事は変態でバカだし犯罪者一步手前で語ってる時とか近寄りたくない人間第一位だとか思ってたけど……君本当は良い奴だったんだね!」

「お……俺ってそんな風に思われてたの!?!」

変態男が何故かショックを受けているが気にしない。(二回目)

「で、で!?!　どんなの!?!」

きっと僕の目は希望に輝いているのだろう。

ここまで大口を叩いたのだからよっぽど凄い事なんだろう!

「聞いて驚くなよ!」

幾ら変態男とは言え、期待に胸を膨らませてしまう。

「へーじが女装するんだよ!!」

その瞬間、固まる僕。

……………。

はいイイイ!! ツーアウトオオオ!! 帰れエエエ! お

前ほんと帰れエエ!!。

所詮変態男は変態らしい。

僕の期待を帰せ!!

どうせ期待損だって事は薄薄思ってたけどな!!

「何で女装何だよ!」

僕は怒りやら呆れやら、取り敢えず心の中の黒いのを吐きだすか
如く椅子から思いつき立ち上がった。

「いやお前絶対女装似合うって! それで会長や不良をお色気で無
かった事にするんだよ!」

色々とキレそうな僕とは別の意味でキレちゃってるアズキが興奮
した感じに声を荒げる。

「小学生の発想だよ! いや小学生もそんな発想しねーよ!!」
瞬発的に思いなおし慌てて言い直した。

「いや絶対に似合うから!」

目が血走ってんだよお前!!

「寧ろお前が見たいだけじゃね!？」

僕の瞬時の発言に少しも間を空けずに瞬時に。

ッカ！ と目を見開きアズキは堂々と胸を張って言った。

「そうだよ！」

「正直だなアおい！！」

あまりにも正直過ぎて僕はビクツと体を揺らしてしまう。

「……………はああ、もう良いよ……………」

最後にソレだけ言って僕はため息と共に項垂れる。

変態過ぎて困る…………。

何やら一氣にテンションが下がった、というか疲れた。

「つていうかアズキ…………僕は男だゾ？ 幾ら変態でもそこは良いのか」

「可愛ければ男でも女でもイエス！ オフコース！

駄目だ！ これは駄目な変態だ！！

ドン引きしている僕をよそに、「確かに女装とか似合うかもー？」

とか恐ろしい事を言っている性悪女と「ヘーじの女装…………」とか気

持ち悪く呟いている馬鹿。

この二人は一切僕の気など知らないんだろう…………。

取り敢えず「なー、良いだろー？ ヘーじー」とか未だにほざい

ている変態を無視して僕は椅子に座りなおす。

例えるとアズキはバッテリーボックスに立って思いつきりバット振

ってんだけど当てる気無いつて感じた…………。

絶望と共にガクーンと項垂れていた。

……そして、顔を横に向けてチラッと最後の代打に目を向けてみた。

サクはニッ！ 期待させてくれない笑みを浮かべる。

「俺は目玉焼きには醤油派かな！」

「そんな話ししてないよ……そして僕はソース派だよ……」

バッテリーボックスに立ってすらいな奴よりかはマシか……。

そう思いつつ今度はアズキに視線を送ってみた。

アズキは変態的な荒い呼吸をしていた。（ハアハアみたいな）

いや、べつにマシじゃねエ！

ツク！ 今思うとコイツラ思い言いたい事言ってるだけで別に僕の助けする気ねエ！

結果的な事実に気付き、凄い精神的に疲れた上に泣きそうになっている僕の耳に、可愛らしい声が聞こえた。

騒がしい教室内では耳を凝らしても何とか聞こえるという具合だが、その可愛らしい声には覚えがあった。

個性ある友人達から現実と言う意味も込めて目を背け、声の方に向けた。

それは廊下に出るドアの方。

そこに何やらヒョコヒョコと見え隠れするツインテールが見えた。隠れようしながらも中の様子を見ようとしているので隠れていない。

頭隠して尻隠さずという言葉が似合いそうだ。

あのツインテールには見覚えがある。

試合はスリーアウトで終わったと思ったけど……これはまさかの延長？

結果はまだ解らないかもしれない。

その37. 野球に例えるなら現在九回裏無失点……誰か逆転ホームランを（泣）

最近ペースが遅いです申し訳ありません^^;

さて、今回の話しが前回乗せたのに消されていた話しです。

大分話しが変わってしまいましたでしたが気にしないでください（T|T）

そしてサイトの方からの連絡は未だ無し。……（^ω^#）ピキピキ

次回出来るだけ早く出来るよう頑張ります！

その38. エスパー少女の助言

「すいませーん……すいませえーん……」

小さな声で呼びかけるも騒がしい教室の音に掻き消されている。

何か声が少し泣きなような感じがするのは気のせいだろうか……。

オロオロと教室を覗くツインテールとバツチリと目が合うと、不安そうな表情は突然ツパーと明るくなった。

僕に向けて嬉しそうに手を振る。

要件は僕に対してだと考えて良いのだろうか？

良いのだろう。

必死に手招きしている、中に入る気はなさそうだ。

性悪女と変態と馬鹿に一言だけ言うとは僕は立ち上がった。

その時、何故か性悪女の表情が曇った。

ミホはあのツインテールの事を嫌いなのだろうか……？

あまり気にしてても始まらないのでツインテールの子の所に向かった。

廊下で話しをする為に教室から出た。

廊下にもチラホラと僕たち以外に人は居る。

その何人かからもツインテールの子は注目を浴びていた。

やはりこの子は目立ちやすいらしい。

「フフ……また会いましたねへーじさん」

「……いや、何ちよつとブラックな感じだしてんの、アリサちゃんさっきまでメツチャオロオロしてたじゃん」

僕の言葉が凶星だったのかツインテール……基亜里抄ちゃんもといの顔が真っ赤に染まった。

「し、仕方ないじゃないですか！ 人ごみは苦手なんですよ！」
亜里抄ちゃんはそこでッハ！ と我に返ると無理に笑顔を作って見せる。

いつもの感じを出そうとしているのかもしれないけど、この子は地味に天然が入っているのかもしれない……。

「改めまして……こんにちは！ ヘーじさん♪」
元気良く、そして♪付きの歯が浮くような甘い声に可愛い笑いみ。

何人の男がこの可愛い少女にやられたのだろうか……。しかし本性を知っている僕としては苦い顔をしてしまう。っていうか。

さっきのオドオドはどこへやら、アレもアレか？ 女の武器を見せ付けてたのか？

「だから……人が多いと苦手なんですよう……」
そう言って少し困った表情を見せる。

僕は君みたいには心は読めないけど、その表情は本当な気がした。

「っていうか、せんぱーい、私が心読めるからって酷すぎませんかー？」

そう言って可愛らしく頬を膨らませる。

ある意味喋らなくていいのは楽かもしれないけど、心が読めるのはホントに厄介だな……。

僕の心を盗み聞きしている少女はクスクスと楽しそうに笑う。

「どうやら私はヘーじさんに結構嫌われてるようですね？」

「別に君が嫌いってわけじゃないよ……僕は誰にだってこんな感じだよ」

そう、僕は別に嫌いだから悪口を言うとかそういうわけじゃない。言葉が悪いのは元からだし僕にとっちゃ挨拶みたいなもんだと思ってくれて構わない。

そう言うとき少女は嬉しそうに笑う。

「なんだー、良かったー！」

ワオ……ッ。

やっぱりこの少女は可愛い子なわけで。

目の前で輝く笑顔を見せられれば面喰らってしまう。

こんな時、何故か浮かぶのは縁の顔。

きっとデレデレしてたらぶん殴られるからという恐怖からの思想だろう……。

体に刻まれてるって悲しくね！？

自分で自分に自己嫌悪……。

落ち込んでいる間に、少女の表情から笑顔が消えていた。

「……？ 何したの？」

少女はムツとした表情のまま口を開く。

「私以外の女の人を頭に浮かべるの止めてくださいよ」
その表情は本当に嫌がっている様子。

「皆……私と喋ってたら私の事しか浮かばないのに……」
ツインテールの少女は俯く。

……好かれ続けた少女だからこそその悩み。
無意識かもしれないけど、それでも一番でありたいという欲があるのはこの子の今までを示している様だ。

「で、用事は？」

僕は敢えて触れずに先を進めた。

「あ、えと、そうですね」

そう言うと少女は笑った。

さっきとは違う少しぎこちない表情の笑みだけど。

……この子の事が少し解った気がした。

「あの、三人の事どうするんですか？」

やっぱり内容はその事か。

「今悩んでるトコ」

僕の表情を亜里抄ちゃんはジッと見つめる。

それだけで先ほどのやりとりや、僕のちょっとした努力も全て見透かされてしまう。

……成程、一々説明しなくて済むのはある意味便利かもしれない。
なんてポジティブに考えてみる。

「……良い事を教えてあげましょうか？」

そう言って亜里抄ちゃんを含む様な笑みを見せる。

「良い事って？」

素っ気なく見せても期待はしてしまう。

この子は他の人間とは違う。

幸か不幸かは解らないけど、絶対にどちらかに転ばせる事が出来る。

行き詰った人間を進ませる力があると思う。

それは心を読めるからという特異な力から成せる技なのかもしれない。

「生徒会長さんは確かに異常な人ですけど会長としての仕事はちゃんとするんですよ、確かにヘーじさんの考える通り、ヘーじさんの話しには聞く耳を持たないでしょう、しかし、他の一般の方なら解りませんか？」

……成程、あの会長は悪意的な事が嫌いだ、つまりは常識的な所があるのも確かというわけだ。

僕みたいな嫌われているのが行っても意味は無いかもしれないけど、他の人間だったら何かしらの行事の提案だって事に出来るかもしれない。

そこまで考えて、少し不穏に思う。

今笑顔でヒントをくれたこの子に對して。

「……何で僕を手伝う？」

この子は敵では無いが、多分味方でも無い。
だからこそ僕に手助けをする義理は無い筈だ。

助言をくれるのは助かるけど、何か裏があるとしたか思えない。

「……ヘーじさん、コレは私だけの思いでは無いんです」

亜里抄ちゃんの表情からスっと、笑顔が消えた。

亜里抄ちゃんはそのまま続ける。

「生徒会と不良と風紀の三竦みの戦争になったら一番被害にあうのは一般の生徒ですよ？ そんな不安の中、貴方が戦争を止めた、これは貴方個人だけの事じゃ無いんですよ、平和的な解決を望む人間もいるわけです。貴方は知らないかもしれませんが……そんな風に期待している人もいますよ」

え、っていうかそんな おおごとの話しなのコレ！？

僕の一言が、そこまで重大な事になっていたなんて知る由も無かった。

確かにあの3人（特に縁）が本気であれば被害に合うのは一般人だろう。

その争いを一つの舞台として纏めれば被害は無くなるだろうししっかりと丸く収まる。

うーん……期待されてると思ったら余計にプレッシャーなんだけど……。

まーそれはそれとして。

「……でも君は騒ぎに巻き込まれるのが怖いから僕に手助けをするってキャラじゃ無いでしょ」

「……あれ？ そう見えます？」

キョトン、とした顔で亜里抄ちゃんは可愛らしく首をかしげる。

「うん、君は違う」

この子と似たような女の子を僕は知っている。
だからなんとなく解る。

この子は面白くなる方に動く人間だ。

僕の心を読んだのか、亜里抄ちゃんは可愛らしい笑みでは無く、
不気味な笑みを浮かべた。

ニコツでは無く、ニヤッて感じだ。

「そうですね、その人と一緒にされるのは心外ですけど、私はそういう人間です」

どこぞの性悪女と一緒にされたのは心外らしい。

何だ、ミホと亜里抄ちゃんは仲悪いのか？

「悪いですよ？♪」

「ちょ……心読むな……」

笑顔でそんな感じに言われても仲悪い感じしないんだが。

そこで耳に障るチャイムが響いた。

休み時間終了のお知らせであり授業始まりのお知らせの、何度聞いても気に食わない音が廊下に響く。

「へーじさん、コレ受け取ってください！」

そう言っただけで亜里抄ちゃんは僕の手を無理矢理取ると、小さな紙を握らせた。

いきなり手を触られるとドキッとしてしまうシャイ野郎なんで止めて欲しい。

明らかに亜里抄ちゃんはニヤツと笑って見せる。
確信犯かこの野郎……。

僕の手を離すと亜里抄ちゃんは後ろに軽く飛んだ。
くるっと可愛らしく一回転して見せながら亜里抄ちゃんは僕に飛びっきりの笑顔を見せる。

「何か手伝える事あったら言って下さいね♪」
手を軽く振りながらそれだけ言うと言里抄ちゃんは背中を見せると走り出した。

自分の教室に返っていく亜里抄ちゃんの後ろ姿が見えなくなると、握らされていた物を見してみる。

小さな紙に亜里抄ちゃんの物と思われる番号とアドレス。

なんか上手い感じに可愛い子の番号をゲットしてしまったのだが……これは喜んで良いのだろうか。

あのエスパ―少女じゃなけりゃ嬉しいんだけど……。

そして、紙の裏にも何か書いてある事に気付いた。

『可愛い子の番号貰ったら喜ぶべきですよ♪ 愛しのヘーじ先輩へ』
と、可愛い女の子の書きそうな丸い字。

……この子エスパ―とか以前に何者？

その38. エスパ―少女の助言（後書き）

もうすぐ部活の大会が始まるのでまた更新送れるかもしれません（汗
その時は申し訳ございません（――；）

その39. 春空、待ち人。（前書き）

学校の終わる音。

チャイムの音と共に私は立ち上がった。

いつもサクにヘーじを取られてしまうので今日こそはヘーじと一緒に帰るんだ！

そう思って隣の席のヘーじに元気良く、いつもの笑顔と一緒に話し掛けようとした。

でも、私は言葉に出さずに喉の所で詰まった。

ヘーじの真剣な表情が私にそうさせた。

……ヘーじ？

そんな生徒会や不良や縁ちゃんに、そこまで一生懸命にならなくても……。

そういえば、亜里抄ちゃんがヘーじと何か喋ってからずっとこんな感じだ。

亜里抄ちゃんがヘーじに何を喋ったのかは知らないけど……き、気になる。

話し掛けようと思ってた分、話しかけにくい雰囲気を出されると流石の私でも参ってしまう。

ため息を零しつつヘーじから視線を外した。

何となしに向いた方向は窓。

……ん？

窓からは綺麗な春風が吹き、気持ちの良くなる空が見える。

しかし、ソレとは別に見えるものがあった。

窓から見える校門の所で、一人こちらの方を見ている人物が居た。別に私と目が合っているわけで無く、この教室全体を見ている。そんな感じだ。

その人物は私の良く知る人物。

……フーン？

そんな感じにしている間にサクの馬鹿みたいな大声が私の耳に届いた。

先を越されてしまった……。

私は視線をヘーじの方に再び向けた。

サクを見るヘーじの目はいつもとどこか違った。

ヘーじは悩んでいる。

……そんな事無視したら良いのに。

でも、その悩みを、ヘーじは必死に考えるんだろうな。

私やサクじゃ……きっとその悩みの苦しみから解き放つ事は出来ないんだろうね……。

『今、ヘーじの歯車を回すのは私達の役目じゃない』

その39. 春空、待ち人。

学校が終わるチャイムで僕は我に返った。
いつの間にか授業が終わっていた。

気付かない程までに、ずっと考えていた。

咄嗟に出た言葉がココまでのおおごとになるとは思っていなかったのだ。

……さて、どうしようか。

「へーじー！ 帰ろうぜー！！」

元気な大声にいつもならイライラとする筈なのだが、今は何も感じなかった。

僕はそれほどまでに、他に気が掛からない程に悩んでいた。

「あ……悪いサク、今日は一人で帰るよ」

僕の言葉にサクは首を傾げる。

「なんでだよ？」

「……………」

僕は何も言わない。

少し、一人で考えたいってだけなんだけど。

「良いじゃん、一人でじっくり考えなよ」

そう言っサクの大きな体の後ろからひよっこりと顔を出したのはミホ。

笑顔のままミホは続ける。

「物語の歯車を回す手助けをするのは、私たちじゃ無いよサク、今は、ね？」

ミホの言葉の意味は解らなかった。

多分、僕の悩みを解決するのはミホ達じゃ無いと言いたいのかな？
そして、それ以外の誰か、ってそう言う意味で良いのかな。

他に誰かいる気はしないんだけど……？

「ま、まあいいや、またね二人とも」

僕は軽く手を振りながら教室を後にした。

今んトコ、やっぱり亜里抄ちゃんの言っていた事が一番有力だろう。

しかし、結局僕が言いに行けるわけでも無いし……そして他の人間に行かせるとかはもってのほか。

ミホやサクやアズキに行かせても会長をブチ切れさせるだけだろう。

志保ちゃん何てだろうか？

……ミホの妹という事は既にバレてそうだ、一番マトモな子なのに。

……あれ！？ 今思うと僕の周りマトモな奴がひつとりもいねエ

エエー！！

誰を送りこんでもひと波乱ありそうだなコリャ……。

かといって知らない人に頼むのも気が引ける。

っていうか誰も好き好んで生徒会室何かに近づかないだろう。

ミホから聞いた話だが、生徒会室……基^{もと}死刑部屋と別名されている。

この学校の生徒会室は生徒指導室と合体している。
そして生徒指導の先生は名ばかりではぼ生徒指導室へ来る事は無い。

理由は……今の会長さんを見れば大体察しは付くだろう。
代わりに生徒指導という名目を使っているのが生徒会の奴ら。
指導という便利な言葉を使えばやりたいほうだいなわけで。
不良やテンションの高い生徒達からは恐れられている程だ。
そんな人達でさえ恐れるのに一般人が行くわけもない。

そして僕が行くなんてのも死んでも嫌だ。

さて……どうしようか。

いつの間にか校門の目の前まで来ていた。

無意識なため息。

……ミホの言った通り謝った方が手っ取り早い気がしてきたよ。

校門を潜った時。

見覚えのある少女が居た。

片方だけ結んだ長いサイドテール。

お馴染みの猫目に手放そうとしない胸に光る赤いロザリオ。

校門にもたれて空を見上げる姿は、通る人達も一瞬でも目を奪われるだろう。

少女は視線を空から僕に向けた。

そのクセ目が合うスグに反らす。

「……おーっす」

ぶっきらぼうな言い方だけど、僕を待ってくれていたという事は

解った。

目線は外したまま、縁の声だけが僕に向けられる。

視線は再び空に。

空を見上げる瞳に綺麗な青が映っていた。

そんな縁に釣られて空を見してみる。

悩みなんて吹っ飛びそうな綺麗な春空だった。

その39. 春空、待ち人。 (後書き)

今回は前書きありますよ！

急遽アドリブで入れたのでちゃんと出来てるかは不明ですゴメンナ
サイ(汗)

また時間ある時に見直してみます！

その40. 信念とアタシの感情が、その間で心が揺れ動く。(前書き)

今回は縁視点でお送りいたします。

その40. 信念とアタシの感情が、その間で心が揺れ動く。

ヘーじと帰り道を歩く。

なんだか……こうやって並んで歩くのは久しぶりな気がする。

ヘーじを待っていたのは二つの事が気になったから。

舞台を用意すると啖呵を切った事と、悠馬との関係。

チラッと隣で歩いているヘーじを見てみる。

何か考え毎をしている様で、真剣な表情だ。

きつと、舞台の事で悩んでるんだ。

アタシから見ても、明らかに後の事を考えずに言った事だとは思った。

それでもヘーじなら、という期待をしたのは買い被りすぎだったかな？

……^{けしか}喉けたのはアタシだ。

何か無理させてる様で心配になってしまう。

そんな風に思っていると。ヘーじがボソッと呟いた。

「うーん、やっぱり目玉焼きにはソースかなー……」

え、心配損！？

「……アンタ何に対して悩んでんのよ」

ヘーじが突然わけのわからない事を言いだすのは今に始まった事じゃないけど……。

ヘーじは自分の事をマトモだとか思っている節があるが。

絶対どこかオカシイ。

「ちなみに縁は何派？」

「え、醬油派……」

「うーん、やっぱり兄弟かー」

何を変な所で納得してるけど大丈夫だろうかコノ人……。

「おい！　へーじー！　返ってきてー！　舞台を用意してくれる
って話はどうなったのよー！」

グワングワンと思いつきりへーじの肩を揺らしてやる。

良い具合にへーじの顔がガクンガクンと揺れている。

「ちょ！　止め！　縁！　酔う！！」

半ば泣きそうな声にアタシは慌てて手を離す。

ホント思いつきり揺らしたのでへーじが凄いふらふらしている……
ま、まあ目覚めて貰う為だし。

「ちょっと現実逃避してたよ、ごめんごめん……」

「ちょ……ちょっとへーじ、大丈夫なの？」

見た感じ、偉く疲れている様子だ。

「……寧ろ君にリアルで現実を逃避（死）させられそうになったけどね」

そう言っってちょっと睨まれる、そんな思いつきり揺らしたんだろうか。

そこは適当に笑って誤魔化しておく。

「笑ってんじゃないよ」

ぴしゃりと言われてしまう。

う……そんな酔いそうになったのかな。

「で……ど、どーすんの？」

慌てて話しを変える、というより元よりコッチが本題だし。

「どーするもこーするも、やるしか無いしね、まだ悩んでるトコだよ」

「……へーじ、無理してない？」

アタシの不安そうな声にへーじはその不安を掻き消すように手を軽く横に振って見せる。

「あー、大丈夫大丈夫」

口ではそう言っているけど、明らかに無理をしている気がする。

……大丈夫かな。

でも、キツイかもしれないけど。

へーじには、頑張ってもらいたい。

へーじの用意した舞台、それを見たいと思うアタシもいた。

「へーじには、感謝してるよ」

そう言った後、へーじがアタシに訝しそうな顔をする。

つく！ そんなにアタシがお礼言ったら変かア！？ な、殴りたい！

しかし、今はお礼を言っている途中なわけで……そこは何とか堪え様と思う。

「あの時へーじが止めなきゃ被害に合ってたのは他の一般の生徒だ

ったしね」

訝しい顔をしていへーじの表情は、アタシがそう言った瞬間に驚いた表情へ変わった。

……？

そんな驚く事言ったかな？

「っへー、ちゃんと考えてたんだ、暴れる事しか考えてないかと思つてたよ」

ちよつと、心外なんですけど。

関心されてるけど腹立つ。

「……まるで暴れたがつてるみたいな言い方じゃない」

「え？ 違うの？」

そのあつけらかんとした言い方はアタシに喧嘩を売ってんのね？
解り易いムカマークと共にアタシはジロつとへーじを睨む。
極め付けに手の骨を軽く鳴らして見せる。

「わ……解った悪かったよ……」

へーじはひきつった表情で慌てて謝って来る。
解れば良いけどね。

「アタシをあの会長と一緒にしないでよ」

アタシはあの会長とは違う。

自己満足の正義で、暴力政治を起こそうするあの男と一緒にである筈が無い。

「……アタシは風紀の人間として一般の人を守る立場にあるのよ、それにアタシの正義は守る正義で暴れる正義じゃないし」

そう、あの日からアタシの正義は悪を倒す事じゃなく、守りたいものを守る正義へと変わったんだ。

正義のヒーローになる、なんていう高校生と思えないバカげた思いかもしれないけど。

アタシの信念は変わらない。

「……そっか」

そう言ってヘーじは青い空を見上げた。

それはヘーじもきつと解ってくれてる。

もうアタシの正義に文句を言う気は無いらしい。

そこはアタシを信じてくれてるんだと思う。

誰かが偽善だと言っても、偽善だと言っていたヘーじが善だと思ってくれている。

それがある限り、アタシはきっと大丈夫

「じゃあ、あの二人とは絶対闘う事になるんだろうね」

何となしに言ったヘーじの言葉が、アタシの心を揺らす。

そうだと思う。

……だと、思う。

会長をアタシは多分許さない。

だからケリを付けるつもりはある。

だけど、もう一人は、解らない。

守るべきものには当然ヘーじも入っている。

だからヘーじを殺すと言った悠馬も倒すつもりだ。

だけど。

そんな事無いって考えたいけど。

それがもしもヘーじが悪い側である事だったら、アタシは正義を貫く事が出来るかな……。

あの少年、悠馬はどこか不良らしく無い。

同じ一年生の仲間の為に怒る事が出来る人間だ。

そんな人間が、『殺す』とまで発言した理由。

……その理由が正当な理由な可能性は大きい。

ヘーじが悪いのでアレば、それを守ろうとしているアタシもまた悪にしかない。

それでも、ヘーじを殺されるのは嫌だった。

信念と、アタシ自信の感情が揺れ動く。

矛盾した考えがアタシを困らせる。

聞けば解る事なんだけどね。

もしもそうだったら、アタシはどうしたら良いのかな。

その40. 信念とアタシの感情が、その間で心が揺れ動く。(後書き)

試合が近いので更新が遅くなると思います(汗
良いわけ臭いかもしれませんがゴメンナサイ。。

しかし次の話しは明日か明後日には更新出来ると思われます！

その41. 二人っきりでいたくて（前書き）

今回はへーじ視点と縁視点があります。

その41. 二人っきりでいたくて

アタシ達以外に道を歩いている人はいなくて、青い空は今も続いている。

でも、もう少ししたら空にも赤みが掛かってくる時間だと思う。そして、並んで歩くアタシ達ももうすぐ別れ道へと続いている。空が時間が経てば色を変えるように、永遠にアタシ達の時間が続くわけじゃない。

「……ねエ、ヘーじ」

離れる前に、どうしても聞いておきたい事があった。

「何さ」

アタシの言葉に目を合わす事も無くヘーじはいつも通りの適当な言葉の返し。

「……人に殺される程の恨みってどんなものなのかな？」

言い方は間違っではない。

だけど、どこかズレた言い方。

ハッキリしないのは自分らしくない気がする。

ヘーじの事となると、ハッキリ出来ないのは始まった事じゃ無いけれど……

答えが気になるアタシと答えを聞きたくないアタシ。

アタシの中で矛盾が何度もぶつかる。

悠馬とヘーじの関係。

それをアタシは聞きたくて。

そんなアタシの気持ちなぞ知らず、ヘーじは呆れた声を出す。

「……はあ？ 何言い出すんだよ」

そんな風に言われても、他に言い方が無いんだから仕方が無い。

「何？ 恨み買うような事したわけ？」

つく！ アンタの為に言っやってんのに！ この馬鹿にされたような言い方が腹立つ！

アタシの表情が苛立ちに変わったのが解ったのか、ヘーじは慌てて言い直す。

「ど、どんなもの？ う……うーん。 大体人生生きてりゃ恨み買わないなんざあり得ないし殺したい程なんてのも良くあることだろうし……」

何かジジ臭い事を言い出した。

「……ヘーじってアタシと一つしか変わんないよね？ 何その人生生き抜いた感ある言い方」

「君等と一緒に居たら若かろうが人生生き抜いた感出るでしょうよソリヤ」

それは何？ アタシらと居たら何倍も疲れるって言いたいわけ？

「何か納得行かない……」

アタシの不満そうな声にヘーじは珍しく声を出して小さく笑った。

「ツハハ、納得行かなくて結構。 納得行かれたらまた僕が殴られそうだし……」

最後にボソツと言った声も聞こえてるんですけど、それを聞いた感じだとアタシに関して良い言葉じゃ無い事は確かかなよね。

今の言葉は聞かなかったことにして、言い方を変えてみる。

「じゃあヘーじは殺される程の恨みを受けた事ある？」

アタシの言葉に、ヘーじの表情が少しだけ曇った。

アタシはヘーじの過去なんか知らない。

だから、その表情の真意は解らない。

「……僕は受けた方っていうより、恨む事ならいっぱいあったかな」

え？

「な、何て？」

慌てて聞きなおしてしまう。

聞いて良い事なのかは解らないけど、アタシの中の無意識がヘーじの事をもっと知りたいと考えていた。

「まー聞いても面白い事じゃないよ、気にしないでいいから」
そう言ってヘーじは速足で先に行ってしまう。

慌ててヘーじの後を追うアタシの気持ちは晴れない。

再びヘーじと並んで歩くも、ヘーじはアタシの方を見る様子は無い。
い。

……ヘーじが言いたくないなら、別に良い。

だけど、いつかはヘーじの事をもっと知れたらいいな……。

今は一つの事に集中しよう。

ヘーじと悠馬の関係も気になるけど。

「ヘーじ」

「ん」
アタシの方を向く事もせず、やっぱり適當過ぎる返事。

ヘーじらしい態度は変わらない。

「……楽しみにしてるよ。ヘーじの用意した舞台なら、アタシは最高の踊りを魅せて見せるから」

「……ん」

やっぱりアタシの方は向かない。
だけど、さっきよりかは適當じゃ無い返事だとは思えた。
そこで別れ道へ辿り着いた。

アタシとヘーじとの二人だけの時間はココまで。
久しぶりの二人つきりは、あまりにも短くて。
もっと聞きたい事があったけど。

ヘーじの『じゃあまた明日』という言葉で二人だけの時間は終止符を打たれる。

反射的に『また明日』と言ったアタシも悪い。

その言葉を言った瞬間にアタシ達はサヨナラになるんだ。

別れの言葉に確認するように返した言葉。

その言葉を聞いて、別れの確認をした瞬間にヘーじは背を向ける。
アタシは同じように背を見せたけど、すぐに体を横にした。

ヘーじが見える様に。

ジッと離れていくヘーじの背中を見つめた。

……お見合いの話も、したかったな。

縁にまで心配されてるのか僕は。

あんな暴力女に心配される程に僕は悩んでいる表情をしていたの
だろうか……。

お節介め。

縁は自分が何か助言が出来るとは思ってはいないだろう。
それでも僕を心配してくれて、態々待っててくれて。

……本当にお節介だ。

縁とは別れたばかりだけど、何となしに僕は振り向いた。

きっと振り向いた先には縁の後ろ姿がまだ見えるんじゃないかと
思ってた。

しかし。

そこに後ろ姿は無かった。

僕と同じように、振り向いている縁が居た。

ばっちり。

僕と縁の視線が交差する。

途端に縁の顔が一気に真っ赤になった。

遠目でも解るほどに縁は目を見開き、口をパクパクとしている。

まさか僕が振り向くと思わなかったのか、突然に言葉が出ない様
子だ。

っていうか逆にこっちも恥ずかしくなるんだが……。

見開かれた目は僕をスグに睨む形へと変わった。

……これはガンを飛ばされている様な気がするんだが。
視線からはビシビシと何見てんのよ！　という気持ち伝わってくるのだが。

不良か君は……。

君も見てたでしょーが……、とアイコンタクトで呆れた感じで返す。

通じたのかどうか解らないが睨む視線が、ウッ！　と詰まった表情へ変わった所を見ると、通じたらしい。

固まっている縁に軽く手を振ってみる。

縁もぎこちない感じに手を振りかえしている。

そんな様子に僕は思わず笑ってしまう。

悩んで苦しんでいるのが馬鹿らしく思うくらいに。

そうだ、こんな馬鹿な子の為に僕は舞台を用意すると言ったんだ。今、頬を膨らませ、不機嫌を思いつきり表現している女の子の為に。

不良の為でも、会長の為でもない。

唯、この子の為に僕は動こうとしていたんだ。

そう思うと、悩むことが苦しいという気持ちは不思議と薄れた。

「縁い！　楽しみにしとけよぉー！」

大声で聞こえるように、僕にしては珍しく名前を大声で呼んで。そう言った。

その言葉と共にビクッ！　と面白い反応を縁は示し、「ひゃー！　ひゃい！？」とか訳の解らん返事を返してきた。

縁は未だに僕が名前を呼ぶのを苦手としている節がある気がする
のは気のせいだろうか……。

多分それは僕も縁もあまり名前を呼ぶ方じゃないからというのが
大きいだろう。

取り敢えず『解った』と言った事にしておこう。

そこで僕と縁はやっと別れた。

家に帰り、僕は携帯を前にして覚悟を決めていた。

舞台を揃える方法。

会長に頼みに行くというのが現在一番有力だ。

しかし僕の知り合い達に行かせるわけもいかないというのが結果。
僕が行くなんてのも持ってたのほか。

……実は結構前から浮かんでいた方法がある。

後は決断するだけなんだが……。

脳裏に言葉が浮かぶ。

『平和的な解決を望む人間もいるわけです。貴方は知らないかもしれ
ませんが……そんな風に期待している人もいるんですよ』

亜里抄ちゃんはそう言った。

『……楽しみにしてるよ。ヘーじの用意した舞台なら、アタシは
最高の踊りを魅せて見せるから』

そう言っ僕と同じように大きな覚悟を示してくれた縁。

もう僕だけの悩みじゃない。
様々な人の思いがあるなら。

僕は全力で答えるしかない。

僕はケータイを手取る。

空いている方の手には今日、亜里抄ちゃんから貰った番号。

小さく深呼吸。

「……うし」

自分に言い聞かせるように気合いを込めた声が部屋に響く。

「あ、亜里抄ちゃん？」

数コールの後、可愛らしい声が電話の先から聞こえた。

頑張れ。

僕!!

その42. コバルトブルーの瞳の少女

朝の学校への道。

校門が既に見える位置に今アタシは居た。

晴れやかな空の下、アタシの前を馬鹿兄貴とアズキさんが歩いて
いた。

何故大嫌いな馬鹿兄貴と、変態な先輩と一緒に学校に行っている
様な形になっているかは

昨日の事が気になって、ヘーじに早く会おうとアタシは朝一に家
を出た。

しかし。

別々で登校している馬鹿兄貴と途中で何故か鉢合せ。

暫し睨み合うも考えはアタシと同じらしく、昨日様子が変だった
ヘーじに早く会おうとしていたらしい。

馬鹿兄貴と同じ行動をしている自分に何やらイライラする。

これが俗に言う同族嫌悪……。

そして何故か風紀でも注意視されている超変態なアズキさんも一
緒に居た様で。

そして学校内の二大変態が前を歩きアタシは後ろから付いて行っ
ている現在に至る。

「空から女の子降ってこないかな……」

アタシの目の前で変態が何か言いだした。

変態である事を誇りに思っているアズキさんは空を見上げて勝手

にニヤけている。

噂には聞いていたけれど……アズキさんの変態っぷりはドン引き出来る。

そんな変態の突然な発言に意を返す事も無く。

アズキさんに釣られて隣に居る馬鹿兄貴が空を見上げた。

馬鹿である事を自覚していない馬鹿兄貴に合わせてアタシも空を見上げた。

当然、空から女の子が降ってくるなんて事がある筈も無く、朝から素晴らしい晴天を崇めれるのは良い事。

兄貴は解っているのか解っていないのか首を傾げる。

「朝っぱらから何言ってるんだお前？ 女が降ってくるわきゃねーだろ。アレか？ 『親方！ 空から女の子が！』 という名セリフが言いたいのか、止めとけお前じゃ飛行石は扱えない……」

肩に手を置くと、憐れんだ感じの目で兄貴がアズキさんを見た。

「……」

「……」

無言でそれ以上に憐れな目でアタシとアズキさんが兄貴を見ていたのは秘密だ。

「サク……お前はホントに馬鹿だな！ あんな途中からモツサモサなズボン履く女の子に萌えられるかア！」

アタシの視線はアズキさんに向き、憐れみよりも寧ろ同情の念の方が強くなってきた気がするのはいではないだろう。

「あ!？ 燃えるわきゃねーだろ！ なー！ 縁!！」

「ウツサイ！ 知り合いだと思われるじゃない！ 話し掛けんな死ね!！」

話を振られたので取り敢えず思ったことをそのまま口にする。

「ええ!？ 知り合いとかそれ以前に俺ら兄弟じゃ……」

何かギャーギャーと言っている馬鹿兄貴を無視してため息を零す。

朝っぱらから誰が解るか解らない様なジ●リネタを出されても突っ込み役がいなければ話はカオスに進んでいくだけらしい。

そう、ヘーじがない。

なーんで朝っぱらから変態と馬鹿に会わにゃならんのよ。

まさか学校に行く道中でダブル変人に合うとは思っていなかったわけ。

しかもいつも居るヘーじが居ないのならこの二人に価値は無いわよ……。

何て心の中で少しブラックな事を考えてみる。

そんな風のため息を零しつつ自然に視線は下を向いてしまう。

ヘーじ……大丈夫かな……。

その時、ドン！ と、思いの他思いつきりブツかった。

「ちよっと！ いきなり止まんじゃ無いわよデカブツ！」
ぶつけた鼻を抑えながらちよっと涙目になりつつ吐き捨てるよう

に言った。

前を向いていなかったアタシが悪いんだけど……ぶつかった何かが間違はなく無駄にデカイ馬鹿兄貴。

そりゃ文句も言いたくなる。

しかしいつもの馬鹿兄貴の言い返しは無く、進む事も無く立ち止まったまま。

不思議に思い兄貴の顔を覗き込んでみる。

兄貴の表情は固まっていた。

只一点を見つめ、食い入るように何かを見ていた。

隣に居るアズキさんも全く同じ表情で目を見開いていた。

先ほどまで騒いでいた二人が一瞬で黙る程の何か。

二人が向く方に、アタシは視線を向けた。

視線の先には。

一人の少女。

一人の少女が前を通っていった。

アタシは息を飲んだ。

無意識に惹きつけられる少女に固まったのはアタシ達だけじゃなかった。

その場の、全ての生徒達が黙った。
騒がしいハズの朝の登下校。

しかし、男も女も、全員がその子を見ていた。

たった一人の少女に。

晴天の空からその子にのみスポットライトが当たったかのように目が釘付けになる。

その少女の長い髪の毛は雪のように白く、春風に当てられて柔らかく揺れる。

青いコバルトブルーの瞳は自分が注目を浴びているのを解っていないのか視線は前のみしか見ていない。

スラッとしたスタイルに綺麗な顔立ち。

こんな完璧な少女がアタシの学校にいただろうか、と模索するも覚えが無い

こんな綺麗な人を今まで見逃していたとは思えない。

じゃあ……転校生？

いや、もつとあり得ない。

そんな大きな行事があれば風紀委員のアタシが知らないはずが無い。

必死に自分の中からこの少女のことを検索していた。

しかし、幾ら脳内を探してもこの子に関する検索件数は0。

そんな風になっている内に少女が通り過ぎようとしていた。

アタシ達の前を通り過ぎる瞬間、少女の前しか見ていなかったコバルトブルーの瞳がこちらを向いた。

その瞬間、私の頭の中は真っ白になった。

顔が熱い。

すれ違う視線がアタシと絡み合う。

女のアタシが照れるというのもオカシイけど、この人に見られた瞬間。

何も考えられなくなった。

すぐに少女の瞳は前を向いたけど、アタシは動くことも、頭の機能を動かす事も出来なかった。

少女が過ぎ去り、校舎に入って行った後、私を含む登下校中の生徒達は自分でも良く解らない重圧に安堵するように胸を撫で下ろした。

「い……今、目が合ったの、俺だよな!？」

興奮したようにそう言い出したのはアズキさん。

「ち……ちげーよ! 俺だよ!!」

すぐに反論し出したのはアズキさんの隣にいた兄貴。

口火を切ったアズキと兄貴を中心に他の生徒達も次々に動き出し、騒がしい何時もの朝へと戻って行った。

ただいつもと違うのが、誰もがあの見知らぬ少女についての事を口にしていた事。

まだ惚けてるアタシの方を変人の二人が目血走っている状態で同時に振り向いた。

「「なあ! 今俺の方を見たんだよな!!」」

アタシはそこでハッ、と我に帰った。

「え……あ……さ、さあ?」

そう言っアタシは慌てて誤魔化すように零した。
今の二人に、言う言葉では無いから心の中で呟く。

あの少女は間違いなく兄貴とアズキさんを飛び越えてアタシを見た。

アタシを見た瞳に何か思いがあったかは解らないけど。

何か意味があった気がした。

何も感情を込めないような瞳。

誰かに……似てる気がした。

その42. コバルトブルーの瞳の少女（後書き）

もうすぐモバゲーにも進出する予定ですw

友人がモバゲー小説でしか見ないから見れないとかメンドクサイ事を言うんで……（メンドクサ……）

その43. 蒼い瞳の少女は無愛想

「ねーお姉ちゃん、幾らなんでも来るの早すぎない？」
妹の志保が私の隣で歩きながら不思議そうに零す。

「アッハッハ！ そうかねー？ こんなもんじゃない？」
何て笑いながら言ってるけど、いつも学校に行く時間の2時間くらい前から学校に来ている。

早く来過ぎて寧ろ暇過ぎだったぐらいだけど……。
仕舞にはいつもの時間に来た志保に出会う始末。

「……幾ら昨日のへーじさんが変だからって心配しすぎだよお姉ちゃん」

呆れた感じに志保に言われてしまう。
……っというかバレてた。

「へ？ あー……な、なんの事？」
バレてたけど、妹の前では見栄を張りたくなるのは最早クセमितいなもんになってる。

「まー別に良いけどね……」
そう言うのと志保は再び呆れたように目を瞑る。
ム……ムウ。
何よその呆れた言い方さあー。

普段でも志保と私は学校に来るのは早い方。

まだ静かな廊下を歩いているのは私と志保だけだった。

そんな中、廊下の端に人影が見えた。
私達しかいないと思っていた分、人影に興味が湧くのは当たり前前
だと思う。

近づくにつれて、人影が少女である事が解った。
遠目からでも解る長い髪の少女。

同じ制服を着ているのだから同じ学校の生徒……だと思う。

……ガンガンと廊下の壁に頭をぶつけている少女が居た。

「見られた……見られた……」

何かボソボソと呟いているのは聞こえるんだけど……良く聞こえ
ない。

見える範囲まで近づいて行くと、純白の綺麗なストレートの髪が
目に付いた。

そんな綺麗な少女が異様な行動をしていれば誰でも首を傾げると
思う。

「あの人、何やってるんだろう？」

志保はやっぱり文字通り首を傾げ、不思議そうにしている。

というか……こんな目立つ子、学校に居ただろうか？

そんな事はいいや。

この子は何か面白そうだ。

こんな目立つ子が壁に頭ぶついたりしてるなんて……絶対に何か
楽しそうじゃん！

「アハ！ 何やってんの？」

笑顔と共に私は少女に話し掛けた。

志保も私と同じで、この少女に興味がある様子だ。

すると頭をブツケまくっていた少女はピタリ、と止まった。
そして、ゆっくりと私達の方を向く。

……あらあら。

「わア……」

心の中で零した私と、感嘆するように零した志保との気持ちは多
分一緒だろう。

蒼い瞳に綺麗な顔立ち。

これは、綺麗な少女だ。

日本人らしくない容姿と、綺麗な顔立ちの二つが少女に惹きつけら
れるのか、と勝手に推理。

しかし、少女の表情はひたすらに無表情だった。

綺麗な顔立ちが勿体ないとさえ思える。

少女は私からスグに目を離すと歩きだそうとした。

何も言わず。

明らかに私達を避けた様な行動だ。

私は無意識にニヤッと笑ってしまう。

こんな面白そうな子を逃がす気は無い。

「ちょおーっと待ってー？」

そう言いながら少女の腕を取った。

少女は私の方を見ると明らかに嫌そうに表情を歪ませた。

「お、お姉ちゃん……」

そんな少女の気持ちを察したのか、志保は私を咎めるような心配するような感じで私を呼んだ。

志保には『大丈夫だから』と、視線だけで答える。

「アッハッハ！ 君が誰だか知らないけど、学校の生徒じゃないのに制服着て入り込んでくる何てよっぽどじゃない？」

そう言うのと、少女の綺麗な瞳は見開いた。

そんな事も解らないとでも思った？

「え？ ええ！？」 と志保も驚いた声を出していた。

自慢じゃ無いけど学校内くらいの生徒なら全員家族の人数から恥ずかしい過去までバッチリ調べ上げている。

結論的に言えば私の知らない生徒が居る筈が無い。

制服は確かにうちの学校のだけど、間違い無くこんな少女は生徒にいない。

つまりは。

先ほど私が言ったのが一番有力。

この少女はこの学校内の密入国者と認定！

押し黙っている少女に追い打ちを掛けるように零す。

「ちょっと騒いだら困るのは君だよねん？」

私がニヤッと笑うのと同時に、少女は離れようとする動作を止めた。

「悪いようにしないからちよつと話し聞かしてくんない？」
笑みを浮かべ、軽く脅しつつ優しく声を掛ける。

「……」

少女は私の方へと向き直ると、腕組みをして見せる。
表情は不満そうだ。

改めてみると……本当に綺麗な子だ。
気を抜くと見蕩れそうになる。

「まず何を聞こうかなー？」

そう言った時、綺麗な蒼い瞳が私の方を睨んだ。

「……早く終わらせてよ」

怒った様な言い方で少女は初めて言葉を口にした。
その言葉よりも、澄んだ高い声に震えた。
少し強い高さと言えば解るだろうか。
その見た目相応の美しさがその声には合った。

「笑ってよ」

そう言ってお手本を見せるように私は頬の端を上げて見せた。

「……？」

少女は首を傾げる。

そんな事を言われるとは思っていなかったのか不思議そうだ。
私もそんな事を聞くつもりは無かったんだけど、この表情に張り
付いた様な無表情が気に食わなかった。

と、いうのもあると思う。

「あー、確かに笑ったらもつともつと綺麗だと思いますよおー？」

志保がそう言って礼儀正しく可愛らしい感じに笑みを浮かべる。

「ほら、笑ってみて！ 綺麗な顔してるんだからまずは笑わないとね？ 勿体ないよん？」

そう言いながら私は懷からカメラを取り出す。

どんな時でも記者兼カメラマンな私はカメラを手放さないのだ。

「なにそれ……バツカみたい」

そう言うが無表情だった少女は小さく微笑んだ。

微笑という程の微かな物。

呆れた様な笑みだけど、私はシャッターを押すのと同時に、惚けてしまった。

予想以上に綺麗な表情。

いきなり笑われたら凶器にもなりかねない美しさ。

「……？ 顔が赤いよ？」

そう言う少女が覗きこんでくる。

少女から離れるように慌てて思いっきり仰け反る。

「あ！ アハハ！ 気にしないで！ うん！ 大丈夫だから！！」

あ！ 危な！ 危なー！ 危うく落とされる所だった！ これは思った以上に厄介な子かもしれない……。

そんな風に額の汗を手で拭う。

「キ……キーレイイ……」

っと、隣でポワポワとしている私の妹。

やられた！ うちの妹がやられた！

「ちょ！　ちょっと！　うちの妹に何て事すんのよ！」

「はア！？　言い掛かりも良いトコでしょーが！」

お、おおう！？　初対面なのにナイス突っ込み！？　この子、綺麗なだけじゃなく侮れない！！

まあポワポワしてる志保は取り敢えず置いて……

「で、名前は？」

記事にしようにも名前を聞かなきゃ始まらない。

「へ？　名前？」

私の言葉に少女は何やらポカン、としている。

まるでそんなの知らない、とでもいうかのように。

……？　名前が無い人間なんていないと思うけど。

「何？　言えないのン？」

「や、えつと……」

蒼い瞳が右往左往している。

む、か……可愛い！

まあそれは置いといて。

しかし、ますます怪しいな……。

名前が言えないなんてよっぽど何かあるんだろう

「ま・す・ま・す・怪しいねエー？」

そう言いながら、ずずい！　と顔を近づけてみる。

「や、え、あ、あの……」

ムフフフフフ！　そんな可愛い顔しても逃がす気は無いから！
縁ちゃんと言い、志保と言い、可愛い子を追いこむのは私のた・

の・し・み♪

自分にSっ気があるのは自覚してますが（笑）

「オネーチャンよだれ出てるよ……」

いつの間にか復活していた妹が呆れた表情を見せる。

「え？ エッヘッヘッヘ！」

気付かずに出ていたヨダレを慌てて拭うも、にやけた表情は止まらない。

名前を言わないのならソレでも良いけどねエ？

それをネタにぞくンぶんに可愛がらせて貰うよん？ エッヘッヘ

ッヘッヘッヘ！

「百合果さん！ 百合果さアーン！」

声の先に振り向いた。

その聞き覚えのある高い声はアタシが最も苦手とする子。

可愛らしい表情にパタパタと駆け寄ってくるツインテールの少女。

お馴染みの猫被りな可愛らしい笑みを向けていた。

その可愛らしい表情とは裏腹に、その瞳は挑戦的に私の方を見ていた。

その43. 蒼い瞳の少女は無愛想（後書き）

更新が遅くなりました……申し訳ないです……でもちゃんと今回は言いわけがあるんです！
言い訳ですけド……

彼女が！

彼女が出来ましたアアアア！

うひょーい！うへーい！うひゃひゃーい！

その事に関しては次のあとがきで。

明日更新出来ると思っています。

その44. 戦いはここから

「……亜里抄」

多分『百合果』と呼ばれた少女。

白髪 of 少女の方をまた、スグに向いた。

あ、あの子と知り合いなの!?

茫然としている私のスグ後ろで亜里抄ちゃんがニコニコと笑っていた。

「私の大切なお友達にナーニやってんですか?」

私の方に敵意を向けた笑みを向けた後、百合果と呼ばれた少女の方に笑顔は笑顔でも好意的な笑顔を向けていた。

「百合果さん? 駄目ですよオ? その人は人の弱みばかり握る最低の芋女なんですから♪」

可愛らしく言っているが、『芋い』という意味が『かつこわるい』、だという古い意味である事を知っている私としては頬が引き攣る思いだ。

上手く隠した様に、それも一般人じゃ解らなさそうな言葉で私をけなすなんて……中々グロったらしい子じゃない。

その黒い笑みに立ち向かう様に私も精一杯の笑みを見せる。

「誰が芋いってー? 確にお芋は好きだけどサー!? どこぞのブリっ娘猫被り女よりかは芋の方がマシよねえー!?!」

そう言うと、表情は笑みのままだが、亜里抄ちゃんの頬の端がヒクヒクと動いているのが窺えた。

取り敢えず一矢報わせて貰った。

「あれれー？　だ・れ・が！　ブリっ娘猫被りですかー？　腹黒で性悪な水歩先輩！？」

「おやおやー？　猫の被りものが破けそうよー？　簡単に剥がれる大した事無い仮面付けるんなら最初から取っとけばー？　もしくは取れないように張り付けといた方がいいんじゃない？　本性よりもブリっ娘の方がマシな性格してんだしさあ！！」

私と亜里抄ちゃんはギリギリと睨み合う。

二人の視線の間に激しい火花が飛ぶ。

ふと冷静になった様に、亜里抄ちゃんは眼を細めた。
先ほどのまでの感情の籠った声の色から、冷静な声に。

「……その人はわたしの物ですよ？　残念ですけど、その人は『あげません』」

合わせるように私も声をすぼめる。

「残念、決めるのはこの子、私達じゃ無くってよ？　オジョーちゃん」

皮肉を込めてそう言ったのに、亜里抄ちゃんは怒った様子も無く微笑むだけ。

「お、オネーチャン……」

隣でオロオロとしている志保には悪いけど、この子と相容れる気

は無い。

志保もこの子の顔を叩いているんだけど……、この子はどこまでも人を嫌いになれないらしい。

「……もう良いから」

睨み合う私達の間割って入ったのは白髪の少女。

凜と響く声と共に私達を交互に見た。

その蒼い瞳に見られれば流石に黙ってしまう。

きっと私と同じように亜里抄ちゃんも目を逸らしたと思う。

「行くよ、亜里抄」

その声に外していた視線を戻した。

百合果と言われた少女は亜里抄ちゃんの手を取っていた。

「あ……」

零れた言葉は無意識。

離れていく少女と亜里抄ちゃん。

私はその背を茫然と見ていた。

亜里抄ちゃんが振り返り、私に意味深な笑みを向けた。

まるで『選ばれたのは私でしたね？　アハハ！　ザーンネーンでーしたー？』

とか解り易い程の言葉が脳内再生される程の笑み。

……は、腹立つっ！！

私の考え過ぎかもしれないけどふつつうに腹立つっ！！

振り向いていた亜里抄ちゃんは。

私が思ったのと同時にンベツと私に向けて舌を出して見せていた。

いや、考え過ぎじゃないだろ絶対！ あの子ホントいつか泣かす！！

亜里抄の手を引っ張り、ミホ達が見えない所まで行くと手を離して振り返った。

「そんな風に見られるとキュンキュンするんですけど♪
亜里抄のテンションは高く、幻滅している自分としては疲れるだけなんだけど……。」

「だってー？ ヘーじさん超綺麗なんですもん♪」
亜里抄の言葉と共に、僕はズーンッと軽く項垂れる。

……コンバンワ皆さん、僕です。ヘーじです。

「誰に挨拶してるんですかー？」

「五月蠅いよ心勝手に読まないでよ、爆弾発言だよメタ発言だよ。だから無視して、気にしないでよ。」

良く解っていない様子で首を傾げている亜里抄に僕は大きくため息を零す。

蒼い瞳はカラーコンタクト。白い髪の毛はウィッグと呼ばれる物。

何故こんな格好をしているかという、少し前に遡る。

昨日の夜、会長に申し出るのが一番だと思った僕は何とか会長と話せる体制を作りたかった。

それに関して、相談出来る相手、基^{もと}良^いかったら会長と話せる人間。前も言ったけど赤の他人に頼むわけも行かないし、ましてや僕の知人は全員会長の目の敵にされている。

しかし、僕が最近出会った人間で唯一可能性があるのが居た。それが亜里抄ちゃんだ。

亜里抄ちゃんは心も読めるし最近入った一年生。

悠馬のような目立つ行動をしていない限りは会長も知らない筈だ。

……何か条件を突き付けられそうだったけど、僕は亜里抄ちゃんに電話した。

内容を簡潔に言う以下の通りだ。

「亜里抄ちゃん、会長と交渉してくれ！ 頼む！！」

『良いですよー？』

良いんだ！？ 結構あっけからかんと了承してしまった。

『でも条件がありまーす！』

ほら来た……絶対条件出すと思ったよ。

この子のそういう所は予想していた。

多少の苦しい条件は飲むつもりだ、覚悟はしている。

少しくらい金のかかる物程度だったら可愛いもんなんだけど……

不安だ。

『わたしの事を次から呼び捨てにしてくれるって言うなら良いですよー?』

「あ、あれ? その程度?」

『?、はいそうですよー♪』
以外に簡単な条件だった。

名前を呼ぶっていうのはそんなに大事な事なんだろうか?

むう、それとも後から他に条件出すつもりか?

……まあ良いや、それぐらいで済んだんなら儲けモンって考えよう。

『でもへーじさんと一緒に無いとイヤです♪』

「……いや、だから僕は顔バレてるから」

だから君に頼んでんだけど……解ってんのかな。
それと君の心を読む力。

『変装すればダイジョーブです!』

電話越しにガッツポーズしてんのが目に浮かぶわ。
この子は無駄に元気だな。

「変装って……そんな上手く行かなア?」

『わたしー、変装のプロなんですよォー? まっかしてください!』

という事でまかした結果がコレだよ！ まさか女装とは思わなかったよ！

それで現在に至るわけだ。

驚くべき程に別人になったけど、確かに凄い変装だけど！
何か納得いかないよホント！！

「えー？ だってすごい似合ってますよー！」

そんな風にキラキラした目で言われても……。

「絶対に似合うと思ったんですよー♪」
どっかで聞いた事のある言葉だなオイ。

しかしさっきのミホ達に見つかったのは焦った。

バレ無くて良かったけど……ていうか見られただけでもショックだわ。

まアさっきも縁に見られてショックで頭ガンガンやってたけど。

（変態と馬鹿はどうでもいい）

この格好で名前なんて言えるわけもないし。

それにしても……。

「……百合果ってなに」

名前なんて言えるわけ無い中、助かったには助かったけど

亜里抄は僕の言葉に二ヒツと笑って見せる。

「アハっ♪ 私の好きなアニメでカリリーってのがあるんですけどー！ それに出てくるキャラクターに白髪で蒼い瞳の人がいるんですよー？」

ってこの格好コスプレかよ！

どうりでウィッグとかカラーコンタクトとかヘリウムガス（声が高くなるガス）とか制服とか何でもう一枚あんのかなーと思ったよ！

亜里抄が楽しそうにクスクスと笑っている。

「百合果さんの心の中ってほんとーに面白いですねー♪」

……勝手に心読むな！

っていうか僕の名前百合果で確定！？

僕は男だった時と同じようにいつものため息を零した。

こんな格好だけど……女装している僕と、亜里抄の二人で頑張っ
て行きたいと思う。

会長は強敵だけど。

縁の為にもね。

その44. 戦いはここから（後書き）

彼女について書こうと思いましたが時間が無いのでまた次で。。。次頑張って更新します！

ちなみに後書きに変な事書いてる時は基本的に時間があるか暇つぶしに書きこんでるだけです自己満足ですサーセンW

その45. 昨日の味方は今日の敵

皆さんおはようございます。

今日も春らしい広々とした晴れに恵まれましたね。
窓から零れる春風に頬が揺るぎます。

……そんな天気とは裏腹に。

オネーチャンのクラスはどんよりとしていた。

朝の綺麗な女の人の事で聞きたい事があって態度ここまで足を運んだんだけど。

……話を出来る状態じゃないようです。

お姉ちゃんの教室のドアを開いた先に最初に見たのは、苛立っている姉だった。

姉は机の上にふんぞり返り、明らかに不機嫌と言うかのように指の爪を噛んでいた。

いつも笑ってそんな行動などしない筈の姉に軽く引く。

「あ・ん・の・小娘……泣かす……絶対泣かす……」

姉がボソボソと溢す言葉は小さい筈なのにおどろおどろしく耳に残る聞こえ方をしている。

そんな姉は。

現在のこの教室内では「まだマシ」のレベル。

そのまだマシだと思わせるそれ以上の人たちに視線を移した。

部屋の端で妙な大人数の白い覆面を被った人達。

確かあの人達は……「モテ隊」？というものを結成している妙な方たちだ。

お姉ちゃんが『この学校のガン』だとか酷い事を言っていたのを聞いた事がある気がする。

そんなモテ隊の先頭に白では無く赤い覆面を被っている人が声をあげていた、多分リーダー格の人だと思う。

「良いかー？！ 髪は美しい純白に蒼い瞳の少女だ！ 何としても見つけるのだアー！」

赤い覆面の人の言葉に合わせて白い仮面の人達がビシィツ！と姿勢を正し軍隊の様に敬礼をして見せた。

動きに狂いは無く、見ているものを圧倒させていた……気がする。

「イエス！ モテ隊！！」

……動きは凄いが掛け声はセンスが良いとは思えなかった。なんか少しでも凄いと思った私が恥ずかしくなる……。

少しズーンとしながらもモテ隊から視線を外した。

視線を外した先に佐久間さんを見つけた。

佐久間さんは色んな人が馬鹿、変人だと言うけど私はそうは思っていない。

あの事件の時の佐久間さんはとても頼りになった。

姉の為、ヘーじさんの為、そして縁の為に。

私はあれ以来、佐久間さんをどこか見直している。

男性があまり得意な方では無い私としては、とても珍しいと思う。

そんな佐久間さんは今、机の上で深刻な表情を見せていた。

いつもとのギャップが少し惹かれてしまうのは気のせいかな？

今の佐久間さんに馬鹿らしい様子は見えない。

まじめそうな佐久間さんなら、この教室の状態を聞けそうだ。

「佐久間さ……」

言葉は言い切る前にそこで詰まった。

佐久間さんもマトモでは無い状態である事に気付いたからだ。

それは佐久間さんがボソボソと呟いた言葉が耳に入って来たから。

「俺がヘーじ以外の人類に興味を持つとは一体何事か？　これが恋か？　いやいやいやいや待て考えるんだ、だがしかしあの女の子は可憐だった……しかも俺に視線を向けてきたんだ俺に気があると考えてもおかしくは無いしかしコレはヘーじに対して浮気にならないか？　いや結局俺達は相容れない存在ならば今の内にあの女の子に切り替えた方がいいのか？　しかしヘーじも捨てがたい、しかし……いやいやしかし……こんな気持ち初めてなんだ、あの子に会いたい喋ってみたい触れてみたい……うん、探してみよう探してみよう聞いてみよう話してみようあの子を探そう、あの子があの子が（略）」

耳に入ってきた息つきをいつしているのか解らない様な言葉に頭がグルグルと回った。

今の間に「しかし」というフレーズが何回はいつて来たのやら……佐久間さんスイマセン……普通に背筋が寒くなりました、今は近づきたくないです。

さつき良い人感を出した説明の後にゴメンナサイ……普通にキモいです……。

後マトモそうな人はヘーじさんだけかなア……。

そう思っただけを見渡す。

いらっしやられない……

仕方が無い、また後で来よう。

あの白髪の人、どこかで見た事があった気がしたから誰かに相談しようと思ったんだけどな。

どこで見たか思い出せなかったから聞きに来たんだけど……まあ良いや。

そう思い立ち教室を出ようとした時。

「そおだア！」

「っ!？」

誰かの大声にびくう！と体を揺らして慌てて振り向いた。

そこには、姉が机の上に立ちあがっていた。

目をドス黒く輝かせ、嫌な感じに笑みを浮かべている。

「これをネタにしてやろう！ アッハッハッハッハ！ 良いネータ！ アッハッハ！ 覚えときなさいよ亜里抄ちゃあゝん!? 私を怒らしたら、しっつこい!! わよおお!!? アッハッハッハッハッハ!!！」

オネーチャン……良い感じに悪役が似合うねホント……。
暗い笑みを浮かべる我が姉の暴走に頬が引き攣る。

次に今度は大きな歓声、先ほどの様に体を揺らす事は無いが取り敢えず視線は姉から歓声の方へ。

視線の先には先ほどの覆面達が声を挙げている所だった。

「目標は愛しの少女だぁー！」

赤い覆面のリーダーが大声を挙げると共に大勢の覆面達がドアの方を向いた。

「ひ、ひい!？」

ドアの方に居た私は一斉に覆面達がこっちの方を向いたのに寒気を感じ、恐怖の声が零れた。

震えている私の耳に、また声が聞こえた。

大きな声でも、歓声でも無かったけど、ハッキリと聞こえた。

「……会いに行こう、俺の本気、誰にも邪魔させねえ」

その声は佐久間さんの声。

学校内で最も性質が悪いと言われている姉。

学校のガンと言われている程の変人の軍隊

学校一の馬鹿だと言われている人だけど、

唯一縁と渡り合える力を持つ本気の佐久間さん。

この三つが同時にドアの方に歩いてきた。

「ひいひい!？」

恐怖の声と泣きそうになる気持ちが入り混じる。

ぜ、全員目が怖いですよ!？」

そんな時、後ろのドアが開いた。

ガラっというドアの開く音に助けの目を向ける。

入ってきたのは、生徒を抑える存在である教師。

た、助かった! 先生ありがとうございますう!

「……なにやってるんだお前らは、サッサと座らんか」

若い先生は集団の面々に顔を顰めながらそう言った。

た、頼もしいです先生! やはり生徒の暴走を止めてこそその教師

……

生徒達は一瞬だけ、立ち止まった。

「「「あっ?」」」

全員の声が揃った、迫力の籠ったドスの利いた恐ろしい声が響く。圧倒されるように私はビクウ！と道を空けるように飛び跳ねた。そんな恐ろしい声を出されたのに、教師はドアの前から退かない。

おお！ や、やっぱり先生は凄い！

心の中で教師という職業に尊敬を込めようと思ったのだけど、

「……どうぞ」

礼儀正しい感じに教師は道を空け、ついでに敬礼までしていた……

……生徒を抑える筈の教師が抑え切れていない。
心の中で教師という存在に落胆した瞬間だった。

先生もやっぱ怖かったんですね……。

ぞろぞろと教師を無視して教室を出ていく面々。

亜里抄ちゃん……後、たしか百合果さん……ご冥福をお祈りいたします。

その45. 昨日の味方は今日の敵（後書き）

感想返信遅れていますスイマセン。
早いうちにお返します。

その46. 心が読めるって大変だね

僕と亜里抄は並んで廊下を歩いていた。

ここは2階の廊下。

生徒会室は確か三階だ。

「亜里抄……授業は？」

既に学校の授業は始まっている時間で僕たち以外は誰もいない。

「今回の授業はどうやら私の人生に置いて必要のない知識なようです……」

「いや、ソレ只のサボリじゃん」

何只のボイコットをカッコ良く言ってるの。

亜里抄は僕に向けてまた笑みを向ける。

「良いんですよォー♪ 私は百合果さんの方を優先してあげてるんですよぉ？」

うーん、確かに助かってんだけど……。

つつーかその百合果さんってのは定着なんだ。

「そうでーす！ 後ー、折角のコスプレなんで喋り方も似せて下さい、百合果さんはもっと御淑やかな感じですよ！」

あゝ！ 今素が出たなこの子！！ やっぱコスプレじゃん！ この子コスプレさせたいだけじゃん！！ 絶対やらねーよ！ 君の思い通りにはさせねーよ！！

「えー！ ケチですよヘーじさーん！」
そう言って亜里抄は可愛らしく頬を膨らませる。

ケチなもんか、寧ろ大分君には善処しているでしょーが。
ホントならこんなコスプレすぐに脱ぎたいぐらいなんだから。
それもコレもこの子の力を利用したいが為なんだけど……

あの何考えているか解らない会長だが、心さえ読めれば交渉も楽
だろう。

「気楽に言わないでくださいよ、心読むの結構キツイですよ？」

へえ？ そうなんだ？ 心読めない僕からしたら全然解らないん
だけどそういうモンなんだろうか？

「何？ 何かしら体力とか使ったりするの？」
僕の言葉に亜里抄は少しだけ表情を曇らせる。

「そういうわけじゃないんですけど……人の素の心ってのは聞いて
て良い物じゃ無いですよ？ 私が勝手に覗いているわけじゃ無くて、
頭にその人の心の言葉が流れ込んでくるんですから。」

成程、それは確かに嫌かもしれない。

この力は自分で操っているわけでは無かったのか。

この子の性格が何でこんな風なのかなんとなく解ってしまう。
人ごみが苦手なのも何故か解った。

確かに大勢の人が居たら頭ん中ぐちゃぐちゃになるだろーな……。
そんな力を利用しようとしてる、て思うと少しだけ心が痛む。

そこで亜里抄の表情が優しく和らいだ。

「良いんですよ、私はヘーじさんの心を読むの好きですから」
そういうと亜里抄は微笑む。

人の心に好き嫌いとかあるのかな？

「ヘーじさんは私が心を読めても嫌がる素振り見せませんし、普通に接してくれます♪」

その言葉は、過去に何かあったのかと、少しだけ深入りしてしま
う。

心が読めれば誰しにも気味悪がられるのは確かだろうけど……
止めよう、きっとこの子は僕のそんな深入り聴きたく無いだろう。

僕の遠慮した心の声が聞こえたのか、亜里抄は困ったように小さ
く苦笑した。

その苦笑は、悪い意味で無く少し嬉しそうだった気がした。

「それにこの力、イヤな事ばかりじゃないんですよ？　そういう……
言葉にしない思いやりの心も聞こえますからね」

そう言うとき亜里抄は意地悪な笑みを浮かべる。

意地っ張りな僕としてはそういう心を読まれるのは少し恥ずかし
いんだけどねえ……？。

クスクスと亜里抄はまた笑った。

恥ずかしがっている僕の心も聴こえているらしい。

心を曝け出す、僕や縁が出来ない行為を無理矢理やらされている
感じだけだ。

存外悪くは無いと思っている僕が居た。

そんな僕の心も聞こえているわけで、成程、驕るつもりは無いけ
れど。

今の僕のような心が聞こえるのなら、心を知るといいうのも悪く無

いものかもしれない。

そんな風に。

心を読まれ笑われまた僕の心が動く。

何度も繰り返しながらも一緒に廊下を歩いていた。

この子は、やっぱり悪い子では無いという思いが出てきた。

言うなれば『変に純粹』

そんな感じだ。

三階の階段に足を掛けた時、突然亜里抄は立ち止まった。

僕は片足を階段に掛けたまま振り返る。

どうしたんだろう？

亜里抄の表情は具合が悪そうな感じに青くなっていた。

張り付いていた笑みは消え、目を見開いていた。

「ど、どうしたの？」

突然の、あまりにも様子の変貌に少し心配になって声を掛けてみる。

亜里抄は唇を震わせながら小さな声を零した。

「こ、声が……」

「声が？」

恐怖で震えた様な言い方に首を傾げてしまう。
一体どうしたんだ？

亜里抄はきゅっ！ と唇を噛み締め、もう一度口を開く。

「沢山の声が……向かってる……」

そう言うとき亜里抄は視線を先ほどまで歩いてきた廊下に向けた。
釣られて僕も廊下の方を見る。

……遠くから、多くの人影が見える。

おかしいな、この時間はまだ授業中だ。

なんでこんな人数が？

しかもその大勢の人物はこちらに向かって歩いてきていた。

そして先頭には何故かミホが。

ミホが居る時点で何かしらの元凶が彼女であり、何か良い事をしようとしている雰囲気は無いだろう……。

僕と視線が合うと、悪役っぽいニタァーとした笑み浮かべていた。

な、何だ？

「見ーーーーつけたアアアアアアアアアアア！」

ミホの、その大声を合図にするかのように、大勢の人たちがダッシュでこっちに向かってきた。

ドドドドド！ という音が聞こえてきそうな程の勢いで。

へ、へえ！？ 何事！？

突然の事にポカンとしている僕はそのまま固まったまま。
裏腹に顔が更に青くなっていく亜里抄。

「こ、言葉がいっぱい、いっぱい、いっぱい……せ、迫ってくるう

ううう！」

あ、成程。

何故あの人間達がこんな迫ってきているかは意味不明だけれど。

亜里抄ちゃんの様子がおかしい理由は解った。

感情の揺れの激しい方達がこっちに向かってきて、なおかつ目的は僕等らしい。

そんな状態ならば、心の読める亜里抄からしたら、すぎまじい大量の興奮した声が、ガンガンに脳に響いているわけだ。

……うわ、前言撤回。

心読めなくて良かった。

「ひいやあああああ！？」

亜里抄は叫び声を挙げたかと思うと、一人で勝手に三階の階段をダッシュで登り始めた。

取り乱しかたが半端じゃないけれど……これは仕方ない。

なんとなくご愁傷さま……。

なんて合掌している余裕は無い！ 何を冷静に解釈してるんだ僕は。

何が何だかわからないけど、向かってきている集団達には危険な香りしかない。

僕もサッサと逃げないと！

そう思い走り出そうとした瞬間。

派手に転んだ。

こんな時に何かしらしょうもないミスをするのは全く持って僕らしい。

扱けた形のまま変に納得。

女装した時点で自分の中で何かが吹っ切れているらしい。

さっきから妙に冷静なのはそのせいだろう。

そんな風に考えているうちに集団はグングンと近づいてきている。どうしよう、この距離だったら確実に捕まる……案外捕まっても大丈夫だったりするんじゃないかな、今一応女の子の格好してるんだし手荒な事はしない筈。

甘い期待をしつつ上体だけ起こし集団達に目をやった。

先ほどよりも近づいてきている集団達はさっきよりも良く見えるわけで……。

目が血走り、荒い呼吸にニタニタとした気持ちの悪い笑みを浮かべた表情。

そんな男たちの集団がこっちに向かっていた。

うん、マズイ……考えが甘すぎたかもしれない。

変に冷静だった頭は逆に素に戻り、現状がマズイ事に気付いた。これって……ややややばい!?

素に戻ったとたん一気に取り乱してしまった。

そんな僕等気にせず集団は近づいてくる。

もう、目と鼻の先と言ってもおかしく無い。

うわわわわわわわわわわ!!

その46. 心が読めるって大変だね（後書き）

毎度の事ですがどうでも良い後書きです。

漫画化を目指す友人が、原作を作って欲しいと私に言ってくれました！

プロというわけではないのでアイデアを提供するだけです……。こんな私で良いのか解りませんが頑張ってみたいと思います！！

もし雑誌に乗る様な事があれば後書きにこっそりと私が原作ですよ、と言つときますw

その47. 男のプライドが……今は女の子だけ。

すでに集団は目の前。

もう駄目だ！ 何がどう駄目になるのかは知らないけど、もう終わったアァー！！

その時。

耳元で声がした。

「肩貸して下さい、一気に飛びますよ」

そう言った瞬間、肩を誰かに担がれた。
フワッと綺麗な髪の毛が腕に触れる。

「行きますよ！」

聞き覚えのある声と共に、僕の体が浮いた。

「わ！ わわ！！」

突然の事に頭がついてこず、間抜けな声が出る。

それが声の主の跳躍力で飛んだという事には、スグに気付いた。

。

集団の人物達を飛び越え、『彼女』は高く高く飛んだ。

下を見ると、あんぐりと見上げている人とニヤけている人がいる。
る。

……スカートの中が見えているのかもしれない。

『彼女』には言わないでおこう……。

その集団の中でミホが苦々しそうに睨んでいるのが見えた。

何か今日のミホは妙に怖いな……。

朝っぱらから絡まれたりと……いつも以上に恐ろしいなこの子。

着地と共に『彼女』は追いつかれる前に、と再び空中に飛んだ。

人一人を運んでこんなことが出来る人間を、僕は一人しか知らない。
い。

「ゆ、縁!？」

肩を担がれている形であり、顔はスグ横にある状態。

大きな猫目の瞳がチラッと僕の方を見た。

いきなりこんな近くに顔があると、焦ってしまう。

僕は健全な男子であり、女子の顔がこんなに近けりゃ動揺もする
わけで。

今の格好は女の子だけど……。

「やだ、ちょっと! 動かないでよ!」

縁の困った声を気にしている余裕は無かった。

焦って体を揺らしてしまっていた。

肩を担いでいる縁からしたら担ぎ難くなるだけなのは解るんだけど、察して欲しい……。

「あー、もう仕方無いな!」

そう言う縁は空中で体制を立て直し、左で僕の体を支え右手で
足を持ち上げた。

つまりは……お姫様抱っこの形になったわけだ。

その時点で僕は恥ずかしさと情けなさで顔が赤くなるのが自分でも解った。

女の子にお姫様抱っこされる男なんていていいのだろうか……。イヤ、今は女の子の格好しているけれど……。情けない事には変わらない。

縁はピョンピョンと壁から壁に飛んでいる俗に言う壁ジャンプを難なくこなしながら集団から離れていく。

取り敢えずはこれ以上恥ずかしい事にならない様に縮こまる事にした。

後、縁に顔見せないようにしよう。

今は他人だと勘違いされてるみたいだけど、それでも今の顔を見られるのは死ぬほど恥ずかしい……。

「……？ 大丈夫、全然軽いですよ！ 羨ましいくらいです」

そう言って縁は僕に向けて優しく微笑んだ。

どうやら僕が体を縮めて顔を見せないようにしたのは。

重いのでは、と意識したように思ったらしい。

女の子らしく重さを意識したように思われるのは解るとして……。

多分普通に軽いと思われる女の子の縁に。

羨ましい、とか言われる現役男子高校生……。これで良いのか僕よ……。

確かに体は小柄な方だけど！！ これ以上追い込まないで縁。

既に僕のライフは0なんだよ色々と！！

そんな僕の状況なんて僕以外、誰も知る由も無いから「止めて！」何て言って止めてくれる人も居るわきゃねーしィ！

女装した時点で死にそうだったのに、トドメとついでに死体に鞭打たれるとは思わなかったよ！

縁に悪気が無くて、気を利かしてくれている発言なんだって解っ

てるけど……

な、泣いて良い？
(泣)

その48. 性悪女の本領発揮

「ここまで来たら大丈夫かな……」

そう言いながら縁は僕を優しく下ろした。

ここは学校の裏庭。

過去にココで、縁と大量の新聞紙と一緒に焼却炉へと入れて行つた事があったっけ。

現在上履きのまま何だけど……まあ今は緊急事態だから仕方ない。しかし……しかしなあ……。……。

「ど、どうしたんですか？」

ズーン……。……とあからさまに落ち込んでいる僕に不振そうな具合に言葉を溢す。

「男としてこれで良いのかって思ってたね……」

「……？、男？」

不思議そうに縁は首を傾げた。

ツは！？ イカンイカン！！

そういえば今の僕は女の子の格好だったっけ。

僕は女僕は女……。……じゃなかった私は女私は女私は女……。……。

「う、うふふ！？ 何を言っているのか解りませんわー？」

自分でもキモっ！と思いつながらも自分で思う女の子っぽい感じを

出して見た。

「……ふうん？」

不振そうな目で見られてしまったわけだが……取り敢えず流してくれた見たいでホッとする。

まだ疑っている可能性があるのでスグに話を変えよう、それに何であんな事になってるか知りたいし……。

「ねエ、あの集団は何？ 何で私が追われなくちゃ行けないの？」
自分の事を「私」だとか言うのに抵抗があるのだが、それは仕方がないと諦めよう……。

縁は何故か呆れた表情を見せた。

「これ見て下さい百合果さん」

そう言って、ポケットから何か紙切れを取り出すと僕に渡した。

……あれ？ 何で縁が『百合果』という名前を知っているんだろう？

そんな小さな疑問も、縁が渡した紙ですべて解決する事になる。

その紙には妙に見覚えがあった。

何故見覚えがあるかに気づくと、僕はガクーっ……と先ほどとはまた別のショックを受けることになった。

この紙の質は……ミホがいつも新聞に使う紙じゃねーかアアア！
！。

やはり元凶はあの性悪女かアア！。

何か中身見なくても大体予想が付くような……。

中身見たくないけど一応内容を確認してみる。

『毎日私の新聞を見てくれているド畜生共ー♪ 今回の新聞は特集として面白い企画を持ち込んでみましたー♪ 現在学校に密入国している超絶美少女がいまーす！ 写真は下に。名前は百合果ちゃん！！ この美少女を捕まえた方には私の用いる力を持って、全力で願いを叶えて差し上げます♪ 誰かの秘密が欲しい。志保タンのパッツが欲しい。写真・金銭面・欲しいバッグ・何でもござれ♪ あ！ この美少女を好きにしたいとかでも全然O・Kー♪ 後近くにいると思われるツインテールもついでに捕まえるように。男の子も女の子も自分の汚い欲望の為にファイトー♪』

僕が思ってたのより全然悪い内容だったんですけど！！
爽やかな文面の中にバリバリの悪意を込められたその新聞の下半分にはあの時撮ったであろう僕の写真。

笑顔で笑い掛けているカラーで、どアップの写真に吹き出しで勝手に『私を捕まえて（ハート）』何て肌寒い事までしてくれている。

「な……なんじゃこりやああああああああ！！！」

女の子とは思えない様な言い方だが完全に反射的に出たので仕方が無い。

「それ……学校内で大量にばら撒かれていますよ……その新聞見つけて急いで来たんですから、美奈歩さんもやってくれますね」

呆れた具合に縁は零す。

ほ……ホントやってくれたよあのクソアマア……。

「ソレ見つけて急いで探したんですよ？ 案の定とんでもない事態になってますね」

確かにさっきの集団はとんでもない事態だわ……。

僕も亜里抄も死ぬんじゃないかと思えるぐらいの勢いだっただ。
正義を自負する縁がこれを見逃すハズが無い。

学校内でミホの新聞は案外人気がある。

その分ミホがどれ程の力を持っているかは生徒達も良く解っているように。

あわよくば肖ろうと、欲望の塊達が授業も忘れて突っ込んできたわけだ……。

それでも縁が変な欲望に駆られず助けに来てくれたのは本当助かった……、この子はホント頼もしい。

「つていうか何でアタシの名前知ってンですか」

……え。

流してくれたんじゃないの!?

まだ僕の事を疑ってやがる……らしい。

クソ、頼もしいと思ったのに！ 嫌な所を突いてくれる!!

「え……えーと……」

どもる僕に縁は容赦をしてくれない。

「あなたみたいな綺麗な人を学校で見逃す筈ないし、アタシと会ったの今日が初めてですよね？」

詰め寄る縁に僕は後ずさる。

くう！ バカのくせに変なところで勘が鋭いな！

「あの……聞いて知ってて……」

苦し紛れに出た言葉に縁は眉を寄せる。

「聞いてって誰に？」

やっぱそうなるよなー！　しらねーよー！！　適当に出たんだよコノヤロー！！

頭の良い方な僕だけど機転はあんまり効かないらしい。

「えーっと、えーっと……へ、へーじ君に」

更に更に苦し紛れに出たのは自分の名前だった。

なぜならこの学校の現時点で僕の今の状態を知っているのは僕と亜里沙だけなわけだし。

縁が亜里沙に詰め寄れば正直に話しそうだあの子は……面白半分

に通じるか解らずに出した名前に、縁は訝しそうな表情から、キョトンと間の抜けた表情に変わった。

「へーじの、知り合い？」

なんとなく縁の表情が和らいだ気がする。

……お？　これは意外に上手く行った……？

「そ、そう！　へーじの親戚なんだ！　ちょっとへーじに緊急の用事でお忍びで来たー……って、どう？」

慌てて捲し立てるように出た言葉に、言った後に後悔。

っていうか相手に聞いてどうすんだ僕は！　アホかア！

それにしても苦しい！　自分で言っていてアレだが本当に苦しいな！　何だ緊急でお忍びって！

「そ、そうだったんですか……」

おおー！？　納得しやがった！　縁……バカだバカだと思ったけれど……。

今回はバカでよかったと心の底から思うよ！

なんて心の中でボロクソ言いながら胸を撫で下ろす。

取り敢えず、縁にバレなくてよかったー……。

女装してます何て事がバレたら死ねる。

嫌マジで。

なんか変な設定がついてしまったけど今更後には戻れない。

私は亜里沙という名前でヘーじ君（僕）の親戚のオネーサンって
トコで。

がんばって行こうと思う……。

その48. 性悪女の本領発揮（後書き）

お金が無くて昼飯も食べられない状況（T―T）
家にあるのはソーメンとカレーのルーだけ。

さあどうしようかと思っただけ……。

私の頭でティンと来た。

カレーうどん。があるのなら……カレーソーメンも美味いんじゃない？

ーやってみた。

クソまずかったorz

同じ麺でもこうも違うとは……

カレーソーメン、みなさんはやらないように！！

友人に気をつけるように言ったら「誰もやらねーよww」と言われてしまった……。

でも私みたいに追い込まれたら多分誰でもやるんじゃないでしょうか。

多分。いえぜったい！

その49. 縁と百合果で頑張って行こうと思う

「へえー……ヘーじの親戚のオネーサン……へえ。」

何を納得したのかは知らないが変にマジマジと見られている。

「な、何？」

やはりいくらバカと言ってもそんな簡単に騙されない物かもしれない。

だとしたらまた疑われたら厄介なんだけど……。

「あ、あのさ、ヘーじアタシの事、なんて……？」
何か、そわそわとしだした。

「は？」

言っている意味がいまいち解らない。

そしてなんで顔を赤らめてんだこの暴力女は。

「い、いやね？ ほら……アタシの事ヘーじから聞いてたんなら……ほら、何て言ってたのかなーって？」

そんな事気になる物なのか？

他人が陰で何を言っているかというのは気になる物だけど……縁がそういうのを気にしているとは意外だった。

だけど、何故だろう。

人が陰で何て言っているか気になるなら普通は表情は不安な感じになると思うんだけど、縁のそわそわとしている感じは気のせいかな瞳まで期待で輝いている。

……。

不審に思う僕だが、しかし何故か変に期待の目を向けられているわけ。

うーん……疑われるわけにもいかないし、僕がもし縁の事を説明するなら何て言うだろうか。

頭が良いからこそこういう風にしか考えられないのは最早病気なのだろう。

思い出す素振りに見せつつ、必死に考える。

自分が言いそうな事……自分が言いそうな事……。

「えっと……正義気どりの暴力女……だっけかな？」

うん、明らかに僕が言いそうな言葉だ。

そう思った瞬間。

バギヤア！！ と何かが碎ける様な、すざまじい音が響いた。

……縁が近くの壁を殴ったのだ。

「……それだけですか？」

脅すように座った目が僕を睨む。

コンクリートの壁には見事なひび割れ……なんかこの子、日を増すごとに人間離れしてないか？

てか聞いたってキレるか普通！？ 期待していた言葉と違うかったのか！？

「あ！ えと！！ 凄く良い子だって言ってたような！ 言ってたなかったような……」

慌てて嘘を嘘で潰すようなお世辞な言葉。
最後の方で声が小さくなっていったのは僕の良心だと思ってほしい。

取り敢えず縁の怒りを収めなければ！

「ふうん……？」

座った目は戻らないまま。

だ、だめか！？

今ここで少しでも縁の怒りを収めなければ明日からのマイライフ
ヘーじ君の学校生活は地獄と化しますよ！？

「あ、アハハ……」

僕は誤魔化すように笑う。

もう何も浮かばないので取り敢えずな笑み。

それに釣られるように縁もやっと笑みを浮かべる。

よ、良かったー！　こんなドスの効いた眼で睨まれ続けたら泣く
わホント！

「ヘーじ、会ったらブツ殺す……」

縁の表情は笑みを浮かべていたんだけど……良くない、良くない
よ！

口から何かエグイ声が聞こえた気がした……聞こえてない聞こえてない聞こえてない。

暫く百合果の格好でいる事を僕は心に決めた。

縁にぶっ殺されるのが嫌で女装なんつー精神的に死ぬることをや
っている僕……。

踊らされてるよ！ 見事に踊り狂わされてるよ！！

女装してから不幸続きな気がするの？ 気のせいだろうか……気のせいじゃないんだろうな？（泣）

「と、取り敢えず縁ちゃん？」

今は話しを変えよう。

これ以上踊り狂わされたら死ぬる。

「何ですか？」

ちよ、まだその怖い笑みのまんまなのかよ。

その笑み止めい……。

「亜里沙がどっかに行っちゃったから探すの手伝ってくれない？」

取り敢えず今は縁が仲間で居てくれるなら亜里沙を探し出さなければ。

今の校内は大量の猛獣が放たれているのと一緒に。

この中を猛獣の餌である僕が一人で亜里沙を探し出せるとは思っていない。

縁が仲間で居てくれるなら今のうちに亜里沙を見つけ出さないと。

縁と一緒になら三階の生徒会室まで余裕だろうけど、肝心の亜里沙がいなければ始まらない。

「……亜里沙？」

縁が軽く首を傾げる。

そうか、縁は名前を知らないのか。

「ほら、あのツインテールの子」

僕の言葉に縁は突然渋い顔を見せる。

「なんである子の事知ってるんですか？」

あ。

僕の今の表情はきっと間抜け面なんだろうなア、なんて半ば人ごと。

自分ごとなんだけどさ!!

僕は現在親戚のオネーサン。
知ってるわけないわ確かに！

ド……ドジった。

ドジっ子な僕のバカアア!!

何で自分でまずい方まずい方に持っていくかなー！
でもこんな天然な自分が嫌いになれないイエスマイラブ。

縁の顔がどんどん渋くなっていく。

多分バカ暴力女の脳内では美味しい具合に良からぬ感じにメンドクサイ展開になっているんだろう。

縁はバカな癖にメンドクサイ感じに頭の回転が速い時がある……。
バカな癖に……。 (2回目)

亜里沙みたいに心読まれてたら僕は何回殺されている事やら。

……どーせ。

親戚のオネーサンなのに亜里沙って子の事知ってるって事は……
親認定のお付き合っているご関係なの！？ 何それ変態ヘーじ
！ バカヘーじ！ そういや前に抱きついてたわね……アタシ知らないわよそんな関係！ 入ってきたばっかの女の子に手出すなんて最低よ！ 社会のゴミよ！！ 見かけたら殺す！ 苦しめて殺す！！
生まれてきた事を後悔させてやるわよ貧弱男めエエー！。

とかそんな感じの事思ってたろうなー、この怒りで真っ赤になった顔は……。

「親戚のオネーサンなのに亜里沙って子の事知ってるって事は……
親認定のお付き合っているご関係なの！？ 何それ変態ヘーじ
！ バカヘーじ！ そういや前に抱きついてたわね……アタシ知らないわよそんな関係！ 入ってきたばっかの女の子に手出すなんて最低よ！ 社会のゴミよ！！ 見かけたら殺す！ 苦しめて殺す！！
生まれてきた事を後悔させてやるわよ貧弱男めエエー！」

縁はその場で怒り狂ったように叫びだした。

まんまどんぴしゃりかよオイ！ どんだけ読み易いんだよ！！

兄であるサクもわけが解らなくなると長い言葉を叫び出したり考
えが滅茶苦茶読みやすかったりする……。

そういうトコはやっぱ似ている。

なんだかんだで兄弟らしい。

……そんな事より今は怒り狂っている暴力女を止めなくては。
そうしないと本当に僕は一生『百合果』でいなくちゃならなくな

る。

「や、違うのよ縁ちゃん……あの、ほら、ちょっとあの子とはココ来た時に知り合ってたね？ ええと……制服とかお世話になったから、それに私のせいで巻き込んだみたいだから助けてあげたいの」
嘘は……ついて無いよな？

「そうなんですか……」

どうやら怒りは収まってくれたらしい。

素直というか単純というか、取り敢えず助かったかな？

それでも何やら納得が行かない様子だ。

少しだけムスツとしている。

……？ ミホだけで無く、縁も亜里沙の事を良く思っていないのだろうか？

「……ううん、解った。 亜里沙も助けます」
何を決心したか知らないが縁はそう言ってくれた。

「助かるよ、ありがとう縁ちゃん！」
感謝の気持ちを込めて僕は縁に笑いかけ、謝礼の言葉を口にする。

「……ッ！ ベ……別に良いですよ」

……？ 何だ？ また縁は顔を赤らめている。

もしかして風邪気味なのだろうか？

その49. 縁と百合果で頑張っで行こうと思う（後書き）

展開が遅い気がするのはいきつと気のせいだと思ふな（o^▽^o）
気のせいじゃないです……すいませんorz

その50. ゆっくりお喋りとか女の子らしい事してみたいけどそういう事はや

突然笑顔を見せられれば、戸惑ってしまうのは仕方ない。

あまり笑わない人だな、って思った拍子にお礼と共に笑顔を見せられてしまい、それはまさに不意打ちであった。

顔、赤くないかな？

アタシの顔を不審そうに覗き込んでくる百合果さんの蒼い瞳から慌てて目を逸らす。

顔を近付かれるのは止めて欲しい……。

何故か恥ずかしくなってしまう。

アタシ、女なんだけどな……。

しかし本当に綺麗な人だ。

何故ミホさんがこの人を狙っているのか、亜里沙というヘーじに抱きついていた少女とどう知り合ったのか。

気になる事は山ほどあるけど、無理に詮索する気はない。

誰かが助けを求めるならば私は助けるだけだ。

だけど……ヘーじにこんな綺麗な親戚が居たのはビックリだ。

……、ヘーじの事、沢山知ってるのかな。

ヘーじの事をもっと知りたいと思う自分が居た。

自分の事を話さないヘーじについて、この綺麗なおねーさんとお喋りがしたいと思った。

ヘーじの好きな食べ物とか、ヘーじの子供の頃とか。

なんでも良いから、そんな他愛ない話しがしたいと思った。

ヘーじの知り合い、というのに興味を持ったのだ。

「あ、あの百合果さん？」

一応年上の方なようなので敬語は入れている。
それくらいの話しならしても良いよね。

「何？」

さっきの笑みが嘘のような適当な発言。
折角美人なのに何か勿体ない気がする……。
少し俯いて考える素振りをしてしまう。
聞いて良いものなのか、悩んでしまった。
まるでアタシがヘーじの事を気になっているみたいじゃないか、
という思いが生まれたのだ。
……実際そうだけど。

意を決して、顔を挙げたと共に口を開く。

「ヘーじの事について……」

そこでアタシの言葉は詰まった。

言葉を止めたアタシに由里果さんは不審そうな眼を向ける。

アタシは目を見開く。

アタシが見ている視線は由里果さんを超えた後ろ。

いつから居たのか解らない。

さっきまではいなかった筈なのに……ッ！

百合果さんの後ろに大きな男が居た。

両手を広げ、今にも百合果さんを捕まえようとするかのように。

「どうしたの？」

腕組みをして片眉を挙げる仕草を見せる百合果さんは気付いていない様子はない。

百合果さんの言葉に返答を返す暇は無かった。

男の大きな二の腕が。

挟みの様に由里果さんに向けて動いた。

「百合果さん!!」

大声を挙げ、思いつき床を蹴り上げた。

百合果さんとの距離は3、4歩だが、男の挟み込む動きに追いつくかは微妙だ。

後ろの男を蹴り飛ばす!? ダメだ由里果さんが邪魔をしてる!

! 百合果さんを突き飛ばす!? アタシの位置は男と対峙する位置、百合果さんを真正面から突き飛ばすのは不可能! 横に突き飛ばすまでも男の両手が邪魔をする!

厳しい位置!

間に合うか!?

「へ?」

間の抜けた声を漏らす百合果さんにアタシは飛び込んで行く。

間に合え!!

へーじの知り合いを。

傷つけさせるわけには行かない!!

その50. ゆっくりお喋りとか女の子らしい事してみたいけどそういう事はや

短いです、ここはどうしても切りたかったんで仕様と思ってください。

仕様って言葉、使ってみたかったですサーセンww

※一部百合果の名前が亜里沙になっている事に気付きました。
しょうもないミス申し訳ありません。

縁とか亜里沙とか百合果とか似た発音が多いと偶にこんがらがりますw

その51. 久方ぶりの戦い・馬鹿VS馬鹿

「……っ！」

男の息を飲む声。

「へ、え！？」

ようやく状況に気付いた百合果さん。

その百合果さんの後ろの男をアタシは思いつきり睨んだ。

ま、間に合った！！

今の状況は、百合果さんを挟む様に伸ばした男の両手、その百合果さんと男の腕の間に、ギリギリのスペースでアタシの腕が入る空間があった。

まるで百合果さんを囲むように男の腕とアタシの腕があった。それでも締めつけようとする男の腕をアタシは必死に力で抑える。アタシの腕が震える程の力だ、自分で言うのも変だけど大した力ね！

ギリギリと百合果さんを挟んだまま均衡状態が続いた。

この馬鹿力、体でハッキリと覚えているこの感じ。

「何……バカな事してんのよ……！」

歯を食いしばりながら男を思いつきり睨む。
百合果さんを挟んで大声を張り上げる。

「バツカ兄貴イイイ!!」

そこに居たのはまがいもなくアタシの兄貴だった。

っというかアタシ以上の力を持っているのは多分この男ぐらいだ。

「え、ええ!？」

アタシの言葉に驚いた声を挙げたのは百合果さん。

この状況に驚いたのか、もっと他の別の事なのかは解らないけれど。

声を挙げても百合果さんは振り向こうとはしない。

俯いてワナワナと震えている。

可哀そうに……こんな大男に襲われたらそりゃ怖いですよね。

「……クソ、ヴァカ! サクめえええ……」

目の前に居る百合果さんが何かを小さく零した。

声が小さすぎて聞こえないけれど、きっと怖がっているんだろう……と勝手に解釈。

瞬間的に思いっきり力を加え、兄貴の腕を跳ね上げる。

その間に出来た空間を逃さない。

一気に百合果さんの腕を引っ張り、その場から脱出した。

守るように後ろに百合果さんを引っ張り込んだ。

ダランと下ろした太い腕に顔を伏せている馬鹿兄貴。

いつもと何か雰囲気が違う。

そこに立ちずさむ兄貴を思いつき睨みつける。

「何のつもりよ馬鹿兄貴！」

アタシの言葉に呼応するかのように兄貴は顔を挙げた。
鋭い目つきに一瞬気圧される。

「縁……邪魔すんな」

脅すように低い声のアタシに向けられる。

「悪いけどその頼みは聞けないわよ！」

脅しに脅しを返す様に思いつき睨みつける。

「ツチ、黙って渡す気がネーんなら力づくで頂くまでだ」

吐き捨てるかのような舌打ちに、兄貴らしからぬ言い方に少し違和感を覚えるも、慌ててアタシは構えた。

それ程の迫力を兄貴から感じた。

いつもの兄貴なら数秒あったら潰せる、しかし、今の兄貴はいつもと違う……。

一体何が……イヤ。何があろうと百合果さんはアタシが守る。

「やるならサッサと来なさいよ馬鹿兄貴！ 誰に向かって言った発言か後悔させてあげるわよ！！」

そう言って人差し指でクイクイっと挑発して見せる。

「後悔すんのはテメーだオラ！ 愛の力を見せてやる！！」

何かとても臭いセリフを吐いた兄貴に若干寒気を覚えながらも身構える。

戦う前に後ろの百合果さんをチラッと視線を向けた。 大丈夫だろうか、兄貴みたいな男に迫られて怖がっていないだろう……。

……。

……何やら凄い顔をしていた。

ドン引きなんて言うものではない。

引き攣った表情に、目が死んだように輝きを失っている。

一体何に関してそこまで追い込まれたのかは解らないけれど……。

「大体何でアンタが狙ってんのよ!! 馬鹿なんだから願い事なんて無いでしょーが!!」

縁のあまりにも決めつけな発言に流石にどうよ……と突っ込みたかったが、馬鹿かどうかは置いて年がら年中幸せそうなサクに願う事があるとは思えない。

僕自身も気になった。

こんな行事にサクが参加するとは思えなかったからだ。
もしかしたら……サクにとって大事な事があるのかもしれない。

その疑問に答えるかのように、サクは口を開いた。

「なんで気になんのかなって思ったんだよ……確かに綺麗だよ、その人は、ただそれだけじゃない気がした。そして解ったんだ……」
ぼそぼそと零す声は聞こえ辛く、顔は伏せているせいで見えない。

サクはそこでツスと顔を挙げた。

「魔法微少女! カリリンに出てくる百合果タンとそっくりなんだよ
おとおおお!!」

ずっこけた。

「しかも名前まで一緒とかヤバ過ぎだろ! 絶対彼女は二次元から
やって来たんだよ! 俺の愛が通じたんだ!!」

……熱いシャウトだった。

その52. 無駄に熱血 無駄に馬鹿 無駄に強い 無駄にヤバイ!!

「まだそんな幻想を追ってるの!? 目覚ましなさいよ馬鹿兄貴」

「俺は正気だよ! どんだけ幻想だろうが俺の思いは変わらねェ! 俺の夢は終わらねェんだ! 渡してもらうぜ……その人を!!!」

「何をトチ狂ってんのよクソ馬鹿!! 春なのは頭だけにしてくれない!?!」

「ウルセー! 言ってる!! 俺の愛は誰にも止められねー!」

「この人は、アンタには指一本触らせないわよ!! 守る為の力を舐めるなァ!!」

「テメーが守る為ならば! 俺は追う為の力だ! 追い続けた夢が、後ちよっとおもいつきり伸ばしゃー届くんだよ!! 溜まりに溜まった思い(愛)! テメーに受け切れるかァァ!?!」

「どうやら何言っても無駄なようね! アンタがそこまでの思いをブツけてくるなら!! 全身全霊を持って潰す!! その思いが消えるまで粉々に潰す! 一片の塵一つ残さずに潰す!! 全力で!!! アタシの全力で潰してあげるわよ! 身内の恥は身内が消す!!!」

縁の大きな瞳が思いつきりサクを睨み付ける。

「あんたの幻想……」

一呼吸空けて、縁はサクに見せつけるように拳を、強く強く握りしめた。

「アタシが！ ブチ壊す！！！」

……………。

呆けている僕は蚊帳の外。

そこでッハ、と我に帰る。

あ…熱！

あっつ！ 暑苦し！！ ウザ！

草食系男子としては、この熱さにやられそうなんです！！

なんなんだこの二人は……

春風まで吹き飛ばすような熱すぎる言葉の応酬。

二人共熱血タイプだからこんな風になるのか！？

しかし、両方共激しい動きをしながら良くもまあ舌を噛まずに戦えるもんだ……。

そう、彼らの先ほどまでの応酬は、すぎまじい蹴りや殴り合いのさなかに行われた物だったのだ。

二人とも化け物だな……。

何て半ば人ごとながら二人の激しい戦いを目で追っ……
目で追えねエエエ！！

二人の速度がどんどん上がっている！
二人の異常なまでの速度は、喧嘩とかいう甘っちょろい物では無く、最早『戦闘』という感じだ。

縁はともかくサクがここまでの動きが出来るのは予想外だ。

サクは本気出したらやれば出来る子らしい。

しかし、こんなしょうもない事に本気出されても困る。

主に僕が。

必死に目を凝らすと何とか目で追えた。

これは……？ 縁が圧されてる！？

サクの拳を後ずさりしながら何とか避けている縁の表情は険しい。
いくらサクが本気を出していても縁には敵わないと思っていたのだが……

相手は史上最強の女子高生だぞ！？。

っていうか、縁が負けたら僕どうなの！？ あんなムキムキ馬鹿に連れてかれたら……ど、どうなの！？

そこで自分の状況がまず過ぎる事に気付いた。

縁が負けることは考えていなかった分、余計に寒気が走った。

戦っている縁が一瞬、そんな風に震えている僕の方を見た。

本当にそれは一瞬。

まるで怯えている僕を安心させるかのように、彼女は大声を挙げた。

「この！ 馬鹿兄貴イイイ！！」

縁に向けて飛んできた拳を縁は紙一重で避けると、無防備になった伸びきった腕を掴んだ。

体を反転させながら掴んだ腕を両手で持ちかえる。

「あんな綺麗な女性を、怯えさせてんじゃ無いわよオオオオ!!」
声を張り上げると共に、サクの大きな体が一気に持ちあがった。
そのまま力任せに縁は宙に投げ飛ばした。
サクの巨体が高く高く宙を舞った。

一本背負い。

背負い投げで下に叩きつけるのではなく、宙に浮かせる馬鹿力は
女としてほんとどうなんだ。

相変わらずの運動神経と力に物を言わせた無理矢理な技。

しかし、縁の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

縁は軽く膝を曲げる。

次の瞬間縁の姿は僕の目前から消えた。

自分の最大限の瞬発力で縁は宙に浮いたサクを追ったのだ。

まだ浮いているサクに追いつくつと共に、勢いに合わせて縁は体
を縦に回転させていた。

長い髪の毛が回転と共に舞う。

そのまま縁は回転と共に威力のついた踵落としを浮いているサク
に振りおろした。

ッド! という鈍い音はサクに踵落としが突き刺さった音。

そのままサクの巨体と、威力をつけたままの全体重を掛けた踵落
としがプラスプラスになり、重力に任せて大地へ落ちていく。

すざまじい速さで大地へと突き刺さると、地面を捲り上げ強烈な

音を残した。

爆音と共に砂が飛び散る。

周りを揺らす程の音と振動に僕は一步二歩と後ろに下がった。

土煙が巻き上がるも、スグにその煙は晴れていく。

芝生も土も弾き飛ばした窪んだ大地には、巨体のサクが倒れて
いた。

啞然としている僕の目の前に、縁は軽やかな着地をしてみせる。

顔を挙げた縁はフンッ！ 鼻息を荒く、ご機嫌斜めなご様子だ。

いや縁さん、あそこまでやってまだイラついてるんすか……。

しかし縁が押されてるように見えたのは気のせいだったのか？

「ゆ、縁ちゃん大丈夫……？ 圧されてるように見えたけど……」

一応聞いてみる。

縁は僕の言葉に暫し固まったが、すぐに口を開いた。

「ア、アタシが馬鹿兄貴如きに圧されるわけありませんよ！ ちょ
っと遊んでやっただけです！ アハ！ アハハー！」

なにやらぎこちない笑みだが、僕の言葉は縁のプライドを酷く傷
つけたらしい。

縁にとって馬鹿サクに圧されるなんてあつてはなら無い事よう
だ。

しかし縁も流石にやりすぎじゃないのか？ 幾らサクが丈夫とは
言っても……

それに今の騒音で他の奴等が来るかもしれない、すぐにココは離
れた方が良いな。

……まあ何にしても良かった。

一時はどうなる事かと思っただよ。

結局、結果は縁の圧勝で終わ……………たっ？

縁の後ろに、倒れていた筈のサクが立ち上がっていた。

その52. 無駄に熱血 無駄に馬鹿 無駄に強い 無駄にヤバイ!! (後書き)

更新遅れてすいませんでした。

今回は前話あるのでお見忘れなく。

その53. 馬鹿は超人

頭から流れている血が垂れ流れ、妙にリアルに見える。

そのボロボロな姿は確かに大きなダメージを与えている筈だ。

それなのに、この男は立ち上がっていた。

目を見開いている僕を不振そうに見ている縁は立ち上がったサクに気づいていない。

血だらけのサクの視線がギョロつと目の前に居る縁を捉えた。

ゾツと寒気が走った。

寒気と共に、僕は瞬時に動き出す。

「縁! !」

目の前の縁に思いっきり飛びついた。

ブォン! と縁に飛びついたと同時に頭上で空を切る音が聞こえた。

アイツ……! 後ろから殴りかかりやがった!

縁と共に地面を数回ゴロゴロと転がってしまったが殴られるよりはマシだろう。

すぐに上体を起こすと縁が無事か確認する。

押し倒しているような状態になっているがそんな事は今は気に掛ける暇は無い!

硬い地面を転がったんだ、擦り傷があってもおかしくは無い。純粹に縁を心配していた。

「縁ちゃん! 大丈夫! ?」

……縁の顔は何故か赤くなっていた。

多少制服は汚れてしまい、外傷が無い事には安心した。

だが、縁は何故か魚の様に口をパクパクとしている。

意味不明な縁の状態に、固まっている縁と同じ様に一瞬硬直してしまっていた。

すると、突然縁は甲高い声を挙げだした。

「ああああアタシにそんな趣味はあああ！？ た、確かに百合果さんは美人だけど！！ だけど！！ ア、アタシには、ここここ心に決めた人がああああ！！」

ちょ！ 何勘違いしてんの！？

「何わけわかんない事言ってるの！？ ほら立って！！ 逃げるよ！！」

「っへ？……逃げる？」

……まだ状況を理解していない様子だ。

百聞は一見にしかず、取り合えず見て貰った方が早い！

縁の手をとり無理矢理立ち上がらせると、サクの方を向かせた。

「……ッ！」

表情が陰しくなったということは状況は理解してくれたらしい。

「手応えは、確かにあったのに！」

歯噛みした表情で縁は声を荒げる。

縁が手加減したわけじゃないらしい。

それで立ち上がったんだ、タフと言っても度が過ぎないか!?

縁の攻撃を食らって流石に無傷とはいかないまでも、立ち上がった事は凄い。

サクは血を流しながら、僕達に向けてニヤツと嫌な笑みを向けた。

「よー縁ィ? てめこの程度だったか? おい!」

……いや何強がってんのこの馬鹿は。

確かに立ち上がったのは凄いが足ふらついてんぞ。

強がりと安い挑発は僕には利かなくとも、同じ思考の人間には利くらしい。

「ッこっの!」

それにイラついた表情を見せたのは縁。

歯を食い縛り、サクに思いつきり敵意を向ける。

サクのその笑みが、完全に縁のプライドを汚したようだ。

更に追い討ちをかけようと縁がサクに向けて一步足を踏み出した。

「縁ちゃん!」

僕は慌てて縁の肩を掴む。

「離してください! アイツの息の根止めなきゃ気がすまないんですよ!」

妹にここまで言われたら泣けるなア……なんて思いながらも、今にも走り出しそうな縁を必死に止める。

この子は毎度毎度後先考えずに動くから困るわ!

「縁ちゃん! 落ち着いて! さっきの音で他の人達が来たら不味

いから！！
今は逃げよう！！
ね！？」

僕の言葉の意味を理解してくれたのか、縁は歯噛みしながらも握り締めた拳を引っ込めてくれた。

サクは口ではああ言っているが足はふらついている、追いかけてくることはないはずだ。

「クソ兄貴……命拾いしたわね！」

憎憎しい言い方は本気でイラついているようだ。

「テメーもな！ クソ妹！！」

サクの言葉を背中越しに聴きながら僕達はその場を後にした。

こんな馬鹿たちとやりあっている暇があるなら速くアリサを見つけないと！

他の奴等に見つかる前に！

[illegible]

声が聞こえる。

私が今いるのは三階の理科室。

声が聞こえる。

部屋の隅、出来るだけドアから離れるように私は座っていた。

声が聞こえる。

耳を塞ぎ、必死で雑音を消そうとする。
しかしそれは無駄な努力でしかない。

声が聞こえる。

耳ではなく、頭に響くその声は私の努力を無駄だと嘲笑うかのよう
にさえ思える。

「うう……うえ……ひっく……」

もうどれだけ涙を流しただろうか。

どれだけ涙を流そうが頭に響く声が止まることは無い。

この力に慣れる事は無い。

唯ひたすらに私を苦しめるの。

その時、響き渡る雑音の中。

一際大きな声が聞こえた。

どす黒い雑音をかき消すように聞こえた一筋の音色のような、美しい声。

『アリサ』

私の名前を呼ぶ声。

知っている。

この人の声は知っている。

始めて心を聴いていて良いと思えた人。

心から本心の言葉を持ってくれる人。

この人の周りの人もそう。

だからきつとそう。

一緒に居たら、私も本心から笑えるんじゃないかなって思えた。

人の心なんて気にせず、心から笑え合える。

そんな学生生活に憧れて。

そんな期待を込めて。

声は近づいてきた。

より大きく大きくなっていく。

ドアが音を立てて開いた。

その綺麗な声と共に。

暗い理科室に光が溢れる。

私の心にも光が溢れるように。

期待を込めて私はドアの方を向いた。

あの人が迎えに来たのかもしれない。

そう思って。

ドアの前には人が立っていた。

光を背に背負い、人の形が見えても誰なのかは良く見えなかった。

おかしいな。

綺麗な心の声なのに。

あの人じゃないみたい。

「……アリサちゃん？」

その高い声には覚えがあった。

多分この学校で最も私と敵対している人。

それなのに、あの人と同じ様な綺麗な心の持ち主な人。

心の声に判別の色は無い。

だから同じ様な心に、間違えたのかもしれない。

それとも。

いつものような私に向ける刺々しい心では無かったから解らなかったのかも知れない。

その54. 馬鹿単体よりも馬鹿多勢の方がキツイ

「っだー！ー！！ ホンット！ 何なのよコイツ等アアアア！！」
叫び声を挙げながら縁は思いっきり目の前の白い覆面男をぶん殴った。

その縁の後ろで頬を引き攣らせているのは女装中の僕。
覆面が吹っ飛ぶのと同時に、僕は直ぐに踵を返して走り出す。
なぜなら一人をぶっ飛ばした所で、その後ろから更にワラワラと覆面どもが追いかけているからだ。

あれから、空き地から学校内に入った僕等だったが。
学校に入った所を、大量の覆面達と鉢合わせ。
一瞬お互い固まったのだが、一步速く覆面達が一斉に飛び掛ってきた！

その飛び掛って来た覆面たちを何人か縁が思いっきりぶん殴った。
ぶっ飛んだ覆面たちが他の覆面たちにぶつかり、隙を見せた。
その隙を逃す事は無い！

猛ダッシュで僕は逃げ出した。

しかし、流石はこの学校の変態達だ、すぐに僕達を追いかけてきた。

どういつも覆面から除く目が猥染みている……

人間の欲望の力とはすごい物なのか、逃げ足に自身のある僕と運動神経抜群の縁の僕等が変態たち達に直ぐに追いつかれてしま
う！

その度に縁が瞬間的に立ち止まり近い変態共をぶん殴っては逃げる。

現在それをループ中だ。

それが今の現状況。

覆面たちは何度もぶん殴られているのに一行に減る気配が無い。
縁が苛立った声を出すのも解る。

というか逆に増えて来てないか!?

この学校の名物の一つと化している変態覆面共の人数は解って居ない。

なんせ覆面なのだ、事情を隠されていれば正式な人数なんて解る筈も無いわけだ。

何て走りながらそんな風に考えていた。

「ッああ!」

隣で走っている縁が突然大声を上げた。

考え事をしていた僕は慌てて顔を挙げる。

縁が大声を挙げた理由は直ぐに解る。

今走っている一本通路の先に大きなドアが見えた。

しかしそのドアが何なのか僕は知っている。

それは校長室。

校長室を示すソレはドアの上にある金の刺繍が見せ付けていた。
きつとうちの校長は成金趣味。

校長室の場所は、そのドア以外の道は存在せず、言うなれば行き止まりだ。

躊躇する僕と普通にドアに手を掛ける縁。

「う、うええ!? ゆ、縁ちゃんココ入るの!??」

普通は生徒はあまり入りたいとは思わないと思うのだが。
っていうか普通に躊躇するでしょ普通。

「そんなこといつてる場合じゃないでしょ！　今は逃げるの優先した方が良いですって！」

た、確かにそうだけど！

僕が妙な気分で止めるか止めないかとしている内に縁はドアノブを回す。

ガチャ。

……？

縁がもう一度ドアノブを回す。

ガチャ。　ガチャガチャ。

何度回しても聞こえるのは入る事を拒否する金属音。

僕は恐る恐る後ろを振り向いた。

覆面たちがもうじき追いつこうとしていた。

……最初に言ったように僕達が走っていたのは一本通路の廊下。前の退路は断たれ、後ろは覆面たちが埋め尽くしていた。

……や、ヤバイ。

まさに背水の陣！！

縁は僕を守るように前に出た。

ワラワラと群がり、こちらを吟味するように嫌な視線を向ける覆面達を縁は睨み付ける。

「マズイですね……」

縁が小さく零す。

その言葉の意味は僕も理解している。

縁一人なら問題は無い。

覆面どもを蹴散らせるだろう。

だけどこの人数だ。

僕という存在を守りながらは厳しい。

こんな時でも守られてばかりの自分が齒痒い……。

数秒のにらみ合いの後、大勢の覆面達が道を空ける様に割れた。

……なんだ？

縁も不振そうに表情を顰める。

大勢の覆面たちの中から赤い覆面をした男が出てきた。

この赤い覆面の男は変態覆面軍団のボス。

赤覆面は不敵な笑みを（覆面してるから実際解らんけど）僕達に
向けてきた。

「縁ちゃん！ その人を渡して貰おうか！！」

男が高らかに声を挙げる。

要求したのは僕の受け渡し。

この男もミホの報酬狙いか！！

その54. 馬鹿単体よりも馬鹿多勢の方がキツイ(後書き)

テストで小説ぜんぜん触れないウワアアアン!!

今週も来週もテストで何。

私を殺したいのか、そうかそうか。

後、更新が遅いのは最近試合やらテストでほんととヤバヤバだったんです。

良いわけですサーセン W W W W

そしてその試合ではアッサリ負けました W

優勝候補とか言われて調子乗って一回戦負けざまあ W W W

チッキショー(泣)

※追記

間違えて別の書き途中の小説を載せてしまいました!! 申し訳ありません!!

あゝあゝあゝ!! 一番やっちゃ行けないミスをををををををを!!

っていうか私ちゃんと確認した筈なのに! 運営めえええええ!!

(八つ当たり)

ほんとに申し訳ありませんでした!

すぐに入れなおしました(;|;)

チクシヨウ!! チクシヨオオオオオオオオオオオオ!!

その55. タイプ交代。 縁が無理なら僕の出番だ。

赤覆面の言葉に敵意を向ける様に縁は叫ぶ。

「この人は渡さない！」

この子を守ると決めた物を途中で投げ出すような人間じゃない。それはきつとこの子の信念が許さないから。

どのような状況下でもこの子は諦めないだろう。

だけど今回は逃げ道が無い。

正直、手厳しい……。

縁が女性とは思えない睨みを見せつける。

それに気圧されて一步、二歩と覆面たちは後ずさった。

覆面たちの変態度も有名だが、縁が凶暴なのもこの学校じゃ有名だ。

「だ、だがこの状況は流石の縁ちゃんもどうにもできんだろう！」
覆面赤がビビリながらも縁に言い返す。

「……………ッ！」

その言葉に何も言い返せないでいた。

縁は悔しそうに、唯、睨み付ける。

自分の力ではどうにもならない状況。

その姿を見て、僕の心は感化される。

僕の心が揺れ動くの大概この子絡みだ。

……ここは、縁より僕の方が何とかなるかもしれない。

根拠は特に無いのだが、口喧嘩なら暴力女よりかは専門だ。

それに、この子が僕の事で悔しそうにするのは、少し嫌だ。

そう思い縁の前に出た。

「百合果さんッ!？」

驚く声を挙げる縁に優しく微笑んで見せた。

「大丈夫、私に任せて？」

そう言うと、縁は突然固まると、ぽーっと僕を見つめる。

「は……はい」

大人しく縁は小さな声を零した。

……？ やけにすぐ大人しくなったな。

いつもの縁ならもうちよっと食い下がるのだが……
しかもまた顔が赤いよ君。

今日の縁は大丈夫か？ 妙に変だ。

良く解らない縁は、まあ今は置いといて。

覆面達の方を振り向いた。

廊下を埋め尽くす人数、そしてその奥にも居る。
なんっつー人数だ。

取り合えず、覆面達と正面から対峙し、最初に赤覆面に笑いかけた。

「始めまして百合果です」

一応女装中だしこんだけ人数が居たらバレる可能性もあるので女の子っぽく挨拶してみる。

後、実際始めてでは無くこの変態共には（悪い意味で）お世話になっている。

「ぐふ！」

え、何で吐血！？

赤覆面は突然苦しそうにしながら自分の覆面とはまた別の赤で染めた。

何いきなり！？ 意味解らないんですけどオオ！！

「た！ 隊長オオオオオ！！」

後ろの覆面達も騒ぎ出す。

「く！ まさか自分の美しさを利用するとは困った子猫ちゃんだぜ！！」

ヤダ、寒気する事言われた！

女の子らしく、と思い笑いかけただけなのに……自然と頬が引き攣る。

「取り合えず、私達を逃がして欲しいんだけどダメかしら？」
そう言って表情を頑張って作る。

赤覆面の後ろどもから気持ち悪い声が上がりまくっている。

「おおふ……可愛い」

「ハアハアハアハア……」

「この学校にいなかった新しいジャンルの萌え……」

「……ふう」

「ハアハア百合果タン！ハアハア！」

だ、ダメだ！今は嫌な顔しちゃダメだ！

でも怖いわこいつ等……！

「ツフ、幾ら美人の頼みでもそれは聞けない！我等モテ隊の悲願！
水歩様の力でモテモテになれるかもしれないのだよ……！」

どういう思考回路なんだろうか。

ミホでも流石にソレは無理な気がするが……。

「そうだー！」「モテたいんだー！」という後ろの声から全員の満
場一致らしい。

流石変態覆面軍団、馬鹿しかない。

「俺達モテ隊の悲願はモテる事にある！どんな小さな可能性でも
それにすがりつかせてもらう！」

なんかカッコ良い感じに言ってるが内容はダサイ……

だが、状況判断は得意な方。

口だけで生きてきたような人間だ。

ココは僕に任せて貰うよ縁。

少し業とらしくなるが、キョトン、と不思議そうな顔をする。

「あなたたちはそんなにモテないのですか？」

「あーモテないね！ 驚きのモテなさだよ！！ 何でモテないんだ！？」

後ろからも似たような疑問の声が挙がっている。

嫌、こんな事してるからだよ。

という突っ込みは心の中に閉まった。

いつもとは違うタイプで攻めてみよう。

折角の女装を利用するんだ！

暫くは元のヘーじを捨てて、女である戦い方をしてみよう！

男の時は相手をボロクソ言うのが基本だったけど。

女性なら女性のやり方がある筈だ！

僕は優しく笑いかけ、口を開いた。

「私はモテても良いと思うんですけどねー？ 私はアナタ達の様な人達嫌いじゃないです」

その言葉に空気が固まった。

後ろで「は？」という縁の意味不明を示す声が聞こえ、前の覆面達は予想外の言葉に固まっている。

……アリサの思惑通りになっているかもしれないが、今は成り切れ。成り切ってしまう！

……やっぱり人生に踊り狂されてるよ（泣）

その55. タイプ交代。 縁が無理なら僕の出番だ。 (後書き)

展開が遅いです、もっと早めますスイマセン……。
モバゲー進行地味に進行中……

その56. 相手が悪いらしい。変態はやっぱり変態お前等なんて大っ嫌いだ！

百合果さんは一体何を言い出したんだろう！？

固まっているアタシと覆面達を無視して百合果さんは更にわけのわからない事を口ずさむ。

「ええ、とっても素敵だと思います」

百合果さんは覆面たちに笑いかけている。

「お、俺達が……素敵？」

まさかそんな風に言われるとは思わなかったのだろう。

覆面達も動揺を隠せない様子だ。

変態達が動揺してるって事は自分達が素敵で無い事は解っている様ね……。

百合果さんは優しく微笑んだ。

「ええ、個々がリーダーを信じ、集団で行動する何て事、簡単そう
で中々出来ませんよ？」

いえ百合果さん……こいつ等はただたんに変態なだけでは。

アタシの心の中の突っ込みも知らずに、百合果さんは続ける。

「お互いを信頼するという関係は綺麗な心でしか出来ません」

こいつ等に綺麗な心があるのだろうか……突っ込みたいけどココ
は自重しておく。

百合果さんは優しく微笑みながら、強調するようにもう一度言っ
た。

「私はそんなあなた方を素敵だと思います♪」

さっきまで騒がしかった覆面達は固まって動く様子は無い。

「あなたが覆面をしている用途は不明ですが、顔を隠すという意味合いは、自分とは違う自分に生まれ変わりたい、自分がしないような行動をしたい、そういった欲望の現われだと聞きます」

何人かの覆面が目を伏せるように下を向いた。

思う所があるのかもしれない。

アタシ流に大雑把に考えさせて貰えるなら、百合果さんの言っている事は要するに『誰だか解らなければ何をしてても良い』

悪い言い方になってしまったけど、そういう事だ。

「顔を隠す強盗なんてのが良い例ですね……。顔を隠すという意味合いで良い話しはあまり聞きません……」

そこで百合果さんは寂しそうに顔を伏せた。

「でも」

付け加えるように零すと、百合果さんは顔を挙げる。

顔は寂しそうな表情から一転していた。

「あなた達は違います」

百合果さんはゆっくりとリーダーの赤覆面に歩を進めた。

「この人数が居るにもかかわらず悪い方に進むわけでも無く、唯皆で楽しく学園生活を満喫しているようで、見ていて私は幸せな気持ちでした……。顔は見えませんが、あなた達の心は見えます。綺麗な、とても綺麗な心が」

赤覆面は気圧されたのか、見惚れているのか解らないが固まっている。

そつと、百合果さんは赤覆面の手を取ると両手で優しく包んだ。覆面たちがどよめいた。

そして、何故かアタシも焦ってしまふ。

「もっと自分を信じて？　こんな事をしなくても、大丈夫ですから……きつと自然と女性は惹かれて行くでしょう」

「う、あ……」

赤覆面は手を握られながら一歩後ろに下がっていた。覆面で表情は見えないが、よっぽど戸惑っているんだろうと思えた。

「ね？」

百合果さんは言い聞かせるように、強調するかのように零した。

「は、はい……」

完全に掌握された様に、赤覆面は小さく零した。それに合わせて覆面達が全員大人しくなった気がした。

全体の空気が百合果さんに圧倒された具合だ。

まるで……空気を支配したような。

美人だから出来る技。

そして相手を引き釣り込む様な喋り方は何となくヘーじに似ている気がした。

流石は従兄弟……女性でヘーじと同じ話術が使えるのは威力も大きく変わるらしい。

女性に免疫の無い男達にだからこそ美人の言葉が通じるという良

い所を突いたやり方だった。

「百合果さん……俺、頑張ります!!」

何故か赤覆面は表情が活き活きとしている。

いや、まあ見えないんだけど、雰囲気がそんな感じで。

「ええ! 頑張ってください♪」

百合果さんがニコやかに応えている。

その言い方はなにやら確信犯だったのでは、と思えてしまう。

「百合果さん!」 「俺も頑張るよー!」

後の覆面たちからも声がする。

っというか今の一瞬で百合果さんは姉御的な位置にいったらしい。さん付けになってるし。

百合果さんが私にだけ見えるように後ろ手でピースをして見せてくれた。

助かりましたよ、百合果さん。 これでこの集団からはもう狙われないはず!

「百合果さん……最後をお願いします!」

赤覆面は（表情解らないけど）とても輝かしい表情で百合果さんの手を両手で包むように握り返した。

「は、はい何でしょうか?」

突然の事に百合果さんは若干微笑みが引き攣っている。

戸惑いつつも微笑みを絶やさない。

「最後にパンツ見せてください!!」

「…え」

百合果さんの穏やかな背中にピシッと亀裂が走った。

その56. 相手が悪いらしい。変態はやっぱり変態お前等なんて大っ嫌いだ！

学校はテストが、部活がある人は試合が。

学生さんたち頑張って下さい！

社会人の方はお仕事お疲れ様です！

私は一足先に休ませて頂きます！！

久々の実家帰りがもうすぐでとつてもドキドキしてますw

皆さんもお休みタイムがいつかは存じませんが、それが来るまで頑張って行きましょう^^b

実家の友人BがPSPくれるって行ってくれました。

ふおおおー！！ PSPのモンハンやってみたかったんだ！！

ウッハー！（*@▽@）（※私はTVゲームのモンハンしかした事ありません）

ちなみに、着々と実況計画進んでいます（@▽@）

見て下さいね♪w

そんな暇あったら書けよ、とかは言わないでゴメンナサイゴメンナ

サイ（（；ー））

まるで天井から人間の胴体だけが伸びているようで色々とキモイ感じになったが、そんな事はどうでもいい。

ヨロヨロと後ろに下がる百合果さん。

「百合果さん！！ 大丈夫ですか！？」

慌てて百合果さんに駆け寄るも目が泳いでいる。

覆面があまりにも予想していなかったらしい。

「……え。……うええええ？」

何やら変な声しか出ていない。

……だ、大丈夫だろうか。

……こ、この変態共めエエエエ！！ 百合果さんの優しい言葉を無視して。

なんツつー！！ 事！ 言い出すのよ！！

怒りに震えながら覆面たちを思いつき睨み付ける。

その時、タイミング良く天井に突き刺さっていた赤覆面が落ちてきた。

赤覆面は落ちながら綺麗な放物線を描きつつ無駄の無い動きで柔らかく、土下座の形で着地していた。

色々と突っ込みたいがその動きが無駄に凄すぎて逆に突っ込みない……。

「お願いします！！！！ パンツを……パンツを見せてください！！！！」

リーダーに呼応するかのように後ろの覆面たちも次々と土下座の形へ。

「お願いします!!」「お願いします!!」「お願いしますあああす!!」

大勢の人数がたった一人に土下座をする図。
まるでお殿様に申し立てをする農民の様に。
それは言ってしまうえば壮観なものだけれど、内容がパンツが見た
いが為……。

「お願いします!」「お願いします!」と何度も続けての発言。
廊下内に響き渡る声は呼応してビリビリと肌に来るぐらい。
内容はだめ過ぎるのだが、それに気圧されてアタシは一步退いて
いた。

「だ、駄目に決まってるじゃない!!」
そんな自分に焦ってしまい、慌てて言い返す。
そんなアタシの声なんか聞こえていないのか、覆面達は土下座の
まま同じ言葉を繰り返すだけ。

こ、こいつら……!
もう殴り飛ばしたほうが早んじやないか? とか思っていると、
後ろから百合果さんのボソボソと零した声が聞こえた。

「パ……パンツぐらいなら……」

「っへ!?!」

慌てて振り返ると、百合果さんは半ばヤケクソ、と言った具合の
表情をしていた。

目がグルグルしてますよ百合果さん!?

「ゆゆゆゆ百合果さん何言ってるんですかア!？」

「こ……こんなに頼まれたら……パ、パンツぐらいなら良いかなー
って……」

先ほどまで空気を支配していたはずの百合果さんが今度は支配さ
れているってどうよ!

た、確かにこんな人数に土下座されれば、雰囲気でそんな気にな
ってしまうのは仕方無いけど!

「だ、駄目ですよ! 何をとち狂ってるんですか! 落ち着いてく
ださい!!」

「だだだだって! 他に方法無いだもん! 僕だって嫌だよ!」
開き直った様に百合果さんは目尻に涙を溜めつつ悲痛な声で叫ぶ。
というかいきなり僕っ子になったのはなぜ!?

「そ、それに……どうせ同性に見せると思えばそんな抵抗無いし……
…」

「(抵抗) ありまくりですよ! 女の子なんですから無理にそん
な風に同性とか思っちゃ駄目ですよ!!!」

ゆ、百合果さんがおかしくなっちゃった!

自分が男と思えば抵抗は無い、とか言うわけのわからない電波発
言までしてしまう始末!!

「百合果さぁーん!! しっかりして下さいよぉー!!」

「想定外想定外想定外いいいい……僕ってば突然の展開にほんっと弱いんだから……」

百合果さんをグワングワンと揺らしても百合果さんは変な事を呟くだけで正気に戻ってくれそうにない……

今も五月蠅くお願いしますを繰り返している覆面たちを思いっきり睨んだ。

こ、こいつ等のせいで美人の百合果さんがおかしくなったじゃないのおお!!

しかし幾らこいつ等が土下座中でも背水の陣の状態は変わらない。……でも百合果さんがその場の雰囲気の流れされてパンツを見せるようなコトになるのは絶対嫌!!

この状態を覆す方法は……。

アタシは百合果さんから手を離し、校長室の分厚いドアの前に立った。

このドアぶっ壊す!!!

待ってて下さいね百合果さん!! 逃げ道が無いから最善の策がそれしかないと思い悩んでいる百合果さんの為に!!

ぶっちゃけ流石のアタシも校長室はマズイかな? とか思ってたけどそんなの気にしてる暇無いし!!

逃げ道が無いなら……作ればいいじゃない!!

その57. 雰囲気の流れやすいタイプ（後書き）

休み中だからこそ小説にも力が入るってのもんですねW
でも中々進まない…… or z

その58. 状況は唐突に（前書き）

「でえりやあああ！！」

大きな掛け声とともに大きなドアに向けて拳を振り被る。

アタシの中では校長の高そうなドアより百合果さんが優先される

！ 悪いわね校長先生！

思いつきり力を込めた拳は、ドアを粉碎。

する筈だった。

拳は空を切った。

「っへ？」

自分の間拔けな声が零れた。

目の前のドアがタイミング良く空いたのだ。

ドアは拳から逃げるように中側に開いていた。

ブオン！ と拳を振り切る音が響き、その威力に任せてアタシの態勢が崩れた。

「ひやあああああああ！？」

そのままドアの中に間拔けな悲鳴と共に転がり込んでしまった。

その58. 状況は唐突に

もう何だよこいつラァー！

半泣き状態だよチキショウ！！

こんな変態どもに泣かされたのが普通に悔しい……。

「百合果さん！！ 待っててください！！」

何やら決心した縁が後ろに向かった。

後ろには通れないドアがあるだけ……何する気だろう。
ドアを前にして縁は拳を後ろに思いつきり引いていた。

ままままままままま……

予想は的中。

縁は男らしい掛け声と共に拳をドアに向けて飛ばした。

高そうなドアが目の前で破壊されるという行為と、校長のドア！
とかその変にも躊躇いとか全くなく行きやがったよあの子！
そんな度胸も無い僕は慌てて目を瞑った。

ウワァー！ やりやがった！！ 的な意味合いを含めた感じで。

暗闇の中、聞こえたのは破壊される轟音ではなく、ガチャっとい
う金属音だった。

……ん？

その後続いたのは間拔けな縁の悲鳴。

一体何が起こってるんだ！？

目を開こうとしたとき、腕を引っ張られた。
だ、誰？

「こっちだ」

その低い声には覚えがあった。
だが誰かは思い出せない。

目を開けるタイミングを逃し、力強い腕にそのまま引っ張られた。

「ああ、！！ 俺達の女神が連れて行かれるぞ！！」

聞こえたのは赤覆面のリーダーの声。

その声に反応して次々と声が挙がる。

「パンツが！！ パンツがアアアア！！」

「百合果様を返せえええ！！」

「追え！ 追えエエエエ！！！」

沢山の声が聞こえた。……目を開けるのが怖くなったわ。

そんな変態たちも無視して僕の腕を引っ張る誰かはズンズンと進んでいる。

そして、男達の罵声がボタンという何かが閉じる音と共に途切れた。

腕ももう引っ張られて居ないので恐る恐る目を開けた。

僕は高価な部屋にいた。

あの校長のドアのような無駄な豪華さ。

それで今、自分が校長室に居ることは理解した。

そしてそんな豪華な部屋の隅に、不満そうな顔で後転の途中のよ
うな状態で転がっている縁が居た。

まわりに散らばっている高価な装飾品達を見ると、どうやら思
いっきり突っ込んだらしい。

……パンツ見えるぞアホ縁。

そして。

僕の腕を引っ張っていた人物。
今、口元からタバコの煙を吐いていた。
ずれた眼鏡の奥から覗く瞳。

「ダ……ダメ教師」

そう、あのダメ教師だ。
な、何でこんな所に？

ダメ教師はいつものようないやらしい笑み、ではなく、何故か優しく僕に微笑んだ。

この男が僕に微笑むというのは有り得ない、奴は僕に対して優しくなんて絶対に見せない。

有り得ないからこそ不振な顔をしてしまう。

「おいおい弟みたいなこと言ってんじゃネーよ」
……？ 何の話だ？

「何だ、髪の毛染めたのか？ それよりも何でココに居る？ 俺に会いに来てくれたのか？」

……誰かと間違えてる？

僕自身がダメ教師になんざ会いに来るわけが無いのは言わなくても解るだろうに。

……も、もしかして。

「久しぶりだな」

そういいながら、ダメ教師が抱きついてきた。

ぞわわ！と走る寒気。

鳥肌総立ち、男に抱きつかれて喜ぶ男が居てたまるか、しかもこのダメ教師に！！！！

ギイヤアアアアアアアアアア！！

心の中で思いつき悲鳴を挙げるしかこの気持ち悪さのストレス解消方が無いイイイ！！

その59. 縛りプレイは苦手なんです。

「百合果さんに触るなコラァァ!!!」

頼もしい掛け声と共に縁がダメ教師に向けて飛び蹴りを放とうとしているのが見えた。

しかし渾身の飛び蹴りは簡単に外れる。

ダメ教師は僕ごとくるっと回転して縁をあっさりとスルーしたのだ。

「ぬええ!?!」

基本的に今まで百発百中だった飛び蹴りがいとも簡単に外れたのが予想外だったらしく暴力女は間拔けな声を出していた。

そしてそのまま豪華な装飾品達に突っ込んでガッシャーン! とギャグ色の強い音を再び出していた。

……何だかなァ。

それにもめげずに縁は立ち上がると今も僕を抱きしめた状態の教師にビシィ! っと指差した。

「その人を放せ変態教師!!!」

「誰が変態だアホ生徒」

特に怒る様子も無く縁の言葉をサラッと流す。

「何よ! アホっていう奴がアホなのよ!!! このアホォー!」

……本人は真面目なただけどなァ。

ここは流石に突っ込んだら可哀想だな、うん。

っていうかい加減放して欲しい……

勘違いも甚だしいわマジで。

「あ、あの勘違いしてるみたいですけど私はアナタの知っている人物ではありません……そろそろ放して下さい」

恐る恐ると言った具合に言ってみる。

「……？」

ダメ教師は少し距離を開けて、マジマジと僕の顔を見つめた。

「……………」

「……………」

暫し僕とダメ教師が固まる。

「……おいアホ生徒ちよつと耳塞いでろ」

「嫌よ！ 何でそんな事しなきゃダメなのよ！！」

「縁ちゃん！ この部屋を荒らし過ぎて部屋の主のお化けが縁ちゃんを狙ってるようなの！ 耳から入られないように両目と耳をしっかりと閉じて！ 大丈夫になったら呼んであげるから！！」

「ええええ！？ そそそそそうなんですか！？ 速く塞がなきゃ！！」

純粹無垢な縁は疑う事もせずに慌てて目をギュッと紡ぎ両手で耳を塞いでいた。

ダメ教師よりも百合果という存在は、縁から偉く尊敬されているらしい。

「……馬鹿は扱い易いな」

「縁の事を悪く言うなダメ教師」
女性らしい言い方でなく、いつも通りの素っ気無い言い方でダメ教師を睨む。

「やっぱりお前かヘーじ、何姉貴のコスプレしてんだよ」
コスプレはコスプレだけど断じて姉のコスプレではネーよ!!
やっぱりコイツ姉貴と間違えていやがった!

「……状況を大体察してくれたんなら色々スルーして欲しいんですけど」

「つつーか男に抱きついちゃった……気持ちわる……」
そう言いながらダメ教師は珍しく表情を変えてげんなりとした様子だ。

僕の方が気持ち悪かったけどな!! このクソ教師!!

「その事に関してもスルーしてよ……後何でこの部屋にいたのか、とか突っ込まないからちよっと助けて下さいよ」

どうせこのダメ教師の事だ。

校長の部屋に入って何かやましいことでもしていたのだろう。

「ヤダね」

ダメ教師は、へっ、と馬鹿にしたように軽く笑って見せた。

……この男が簡単に手伝ってくれるとは思って居ないけどドアの外には変態達。

どうにかこの部屋を出るにはこの男の助けが必要だ。
何とか手伝って貰わないと……!!

「頼むよ」

少し真剣に言った。

「……」

その僕の声が聞こえているのか知らないがダメ教師は啞えていたタバコの煙を吐くだけ。

やっぱりダメか？

教師はタバコを校長室でポイ捨てするという有り得ない行動をした後、口を開いた。

「お前が何しようとしてるかは大体予想出来るけどよ、それはお前のお姫様の為だろ？ だったら自分で頑張れよ。お前が決めた事だ、それぐらいの信念は通せよ」

ダメ教師は顎で今も目と耳を塞いでいる縁を指した。

自然と視線がそっちに行く。

……クソ。こんな時だけ教師面しやがって。

「アンタの言ってる事は間違いじゃないよ」

少しだけ俯いてしまう。

だけど勘違いだクソやろう。

縁から再びダメ教師に向き直ると思いつき睨み付ける。

「だけど僕の信念はそんなんじゃないよ、『どんな手を使ってでもこの子の為にやる事だ』汚れ役だろうが何だろうが知った事か。何だって利用してやる。自分の姿勢なんて二の次だったの。そんな縛りプレイ宜しくない信念なんざゴメンだったってんだよ」

ダメ教師はニヤツと嫌な笑みを浮かべる。

「へっ言うじゃねーか貧弱男なクセによ」

ダメ教師は新たなタバコを口に加えると、続ける。

「……だからってテメーの為に何かするかつたら別だけどな」

このダメ教師がそれ位で心を動かすとは思っていない。

想定内だクソ眼鏡。

「……ときに先生、さっき僕を姉貴と間違えて抱きついたって事は姉貴と上手くいっていない、もしくは最近会っていないんじゃない？」

僕の言葉にダメ教師の目に一瞬戸惑った色が見えた。
そこを僕は見逃さない。

「手伝ってくれるんなら姉貴との事も協力してやる、場合によっちゃ姉貴の写真だろうが何でも持って来ても良い、断るなら姉貴にはそれ相応の事を言う事になるけどね」

ダメ教師の口からタバコが落ちた。

「て、てめェ！」

ダメ教師が困惑しているのは中々珍しい。

言ったら、利用出来るものは何でも利用するって。

姉貴でもなんでもな!!

アンタが自分のお姫様（姉貴）を大事にしているのは良く解っているんでね！

先程ダメ教師が浮かべた嫌な笑みよりもずっと嫌な笑みを浮かべて。

「取引だクソ野郎」

その59. 縛りプレイは苦手なんです。(後書き)

更新が遅いですゴメンナサイ。。

休みから帰って来たのでまた頑張って行きたいです。

友達がPSPくれるという話は嘘でしたorz

始めて人を呪おうかと……

その60. 一番敵に回したくない親友

僕と縁は暗い通路を歩いていた。

薄暗い廊下は僕と縁が並んで歩くのにギリギリの広さ。

「こんな抜け道があったなんて……」

そう零す縁の言葉は解る。

この学校の地理は大体頭の中に入れていた僕でも知らなかった通路だ。

まさか校長室に本当に抜け道があるとは……。

多少大きい学校だとは思うけど抜け道があるとは誰も思うまい。

駄目教師曰く、三階に出ると言っていた。

一階からこの抜け道に入ったとして、こうも都合よく生徒会室がある三階に行けるとは思いもよらなかった。

対した抜け道だ。

教室だけは無駄にあるからなこの学校……そのどれかに繋がっているのかな？

でもこのままだとアリサ抜きで生徒会室に行かなくなってしまう。少しキツイけど仕方無い……か。

しかし大きな抜け道だ。

あの男が校長室に忍び込む為の抜け道なんだろうなア。
と勝手に推測。

「お化けに仕返しされなくて良かったー、実態無かったら流石に勝てないし」

隣でどうでも良い事に安心している彼女は僕と教師の会話は聞いていない。

……僕の正体を知っているのはアリサと駄目教師のみなわけだ。
これ以上バレることは無いとは思うけど、用心はした方がいいな。
特に……あの性悪女には。

今は敵対同士だし、どこで出会うか解らないし。 うん……気を
つけよう。

一番敵対したくない相手だし、この格好のときに二度と会うこと
が無い事を願うよ。

誰も知らないと思われる抜け道だけど彼女なら知っていてもおか
しくは無い。

そう思いつつ暗がりの通路の先を睨んだ。

その時、通路の先から覚えのある声が聞こえた。

「はろろーん？ 百果果さーん？」

お気楽な声は薄暗い通路に響き渡る。

僕は凍りついたように固まり、縁は慌てて構えた。

薄暗い廊下の先から出てきたのはお馴染の笑顔を振りまく性悪女。

この通路を知っている可能性が無くも無いとは思ったが……まさ
か考えている時に来るとは思わなかったよ！

「み、水歩さん！？」

驚愕な声を挙げたのは縁。

「あんれ〜？ 縁ちゃん？ アッハ！ いつまで経っても捕まんないのは君がいたからかー」

そう言ってミホは笑みを浮かべながら目を細めた。

「や、いや、え、と……こ、今回は水歩さんが悪いですよ！ 悪いですけど今回は敵対させていただきます！！」

あ、あの縁が少しビビっている。

縁もミホとは敵対したくないらしい……この人怖いもんね。

「アハ！ そだね、今回はちょっとやりすぎたね」

自分でも解っている。という様な落ち着いた口ぶり。

……？ この子が自分から反省の言葉を出すのは珍しいな。

「ま、反省した所でこの事態收拾は流石の私も出来ないけどねー」
そういつてミホはアッハッハ！ と豪快に笑う。

「……それはもう私を狙わないってことですか？」
恐る恐る聞いてみる。

バレたくは無いので女口調で。

「ま、ね」

何か納得の言っていないような言い方だが、一番の強敵が狙わないと言ってくれたのは僕からしたらとても嬉しい事だ。

でも、だったとしたら、

この子は何をしにきたんだ？

「まさかそれを言う為にここまでこられたのですか？」

僕の言葉にミホは肩をすかして見せる。

「それもあるけどね、本件は別」

そう言うミホは視線を自分の後ろに向けた。

暗闇しか無いハズの通路の先からもう一人の人物が現れた。

「ア、アリサ!？」

現れたのはツインテールのエスパ―美少女。

「……………」

何処か浮かない顔の表情だが、何よりも無事で良かった……

「ほら、この子探してたんでしょ？ サッサと行きなよん？ でないともた変態達に捕まるわよん」

「……………どういう風の吹き回し？」

ミホの考えが解らない。

僕の邪魔をするための行動じゃなかったの？

そしてミホはアリサの事を毛嫌いしていたんじゃないのか？
それを態々ミホはアリサをここまで連れてきた。

「アッハッハ！ 確かにその子ってば私の敵の筈なんだけどねー？
おっかしいねー？ アッハッハ！」

その笑い声が逆に不振に思わせた。

この子の事は嫌いじゃない。

この性悪女の事は大分解ってきたつもりだ。

それなのに全く考えが読めない。

「ごめんなさい何か裏があるのでしょうか思えない」
冷たい言い方になるかもしれないが。
本当にそうとは思えない。

そこでミホの張り付いていた笑みが消えた。

「……私はね。どっかの熱血みたいにYes Yesってはっきりしてるわけじゃないし、どっかの捻くれみたいにNONOって疑うばっかじゃないの」

どっかの熱血が縁だとしたら……NONOってまさか僕の事か？
そんなに否定してるつもりは無いんだが。

「太陽と月の間には夕暮れがあるのよん？ どっちつかずに突然に雨が降り出すように気まぐれなときだってあんの」

自分で夕暮れと比喻する彼女の言葉はわかる。

自由きままに進んだり曲がったりする彼女は正に『気まぐれ』な人間。

得のみで動く人間だったらもっと動きが読み易いんだけど……。

その60. 一番敵に回したくない親友（後書き）

ほんと更新遅れて申し訳ないです……最近これしか言ってますね
（笑）

毎日更新は出来ないまでも一週間に一回は更新しようが目標だった
のに……

試合先にパソコンが無かったんだから仕方ないじゃない
合宿先にパソコンが無かったんだから仕方ないじゃない
実家のパソコンが壊れてたんだから仕方ないじゃない

結局は良いわけなんですスイマセンでしたー！

最近寧ろ言い訳を考える事にせいで出してますスイ（ry

その61. バレないのが絶対条件

「……私が何の得にもならない様な事をした事に戸惑っているようですね？ アッハ！」

笑顔で言われても余計不振に思うだけなんですが……。

ミホがアリサの事を嫌っているのを知っている分、連れてきたことが罠だとは思えない。

彼女は心で動く人間だが、自分の損得を考えるとところもある。

だからこそ疑ってしまうのは仕方が無かろう……いや今の彼女とは赤の他人なんだけどね。

ミホはニコツといつもの笑みを浮かべると、僕に人差し指を向けてきた。

「じゃーあ？ 百合果さんとサシでお喋りしてみたいです♪ アリサちゃんも連れてきたんだしそれくらいは良いですよね？ アッハ！ ほーら私の得だア！」

……よ、読めない！

この子の行動が読めない！

僕を一人にする罠、いや罠だったらアリサちゃんを態々連れてくる意味は無い。

安心させるため？ 解らない……だからこの子とは敵対したくなかった。

「ど、どうしますか？」

縁が僕の耳元で不安そうに零す。

縁も罠である事を警戒しているのだろう。

狙わないと言っても相手は嘘吐き少女、何処までがホントかも解

らない。

……………いや、多分、大丈夫。

「縁ちゃん、アリサと先に行ってて」

「良いんですか？」

不安そうな言葉は変わらない。

「大丈夫。それよりも出口の確保の方が先だと思うの、私なら出てくる所を抑えるしね」

もし罠だとしたら常識的に考えたらそっちの方が有効だ。

……性悪女が常識通りに動くとは思えないが。

縁は小さく頷いた後、アリサを促して暗闇の先へ消えていった。
最後まで不安そうな表情は消えなかった……。

「アッハッハ！ やっと二人っきりですねー？ まさか二人っきりになってくれるとは思いませんでしたけど？」

ミホからしたら罠だと考えて引き下がるのが順当な考えだったらしい。

「アリサを連れてきてくれたのは感謝しているわ、それに関しての恩は返させて貰います」

普通に答えたただけなのに、ミホは不思議そうに片眉だけ挙げて見せた。

「……アッハ。ずっと思ってたけど百合果さんって誰かに似てますよねー？」

うゝ！ ヤバイ！？

どこらへんでその誰かに似てると思ったか知らないけれど！ ばれないようにしなければ！

「私と二人っきりになりたいと言っていましたけど、どんなお喋りをご所望ですか？」

笑顔を浮かべながらそう言ってみる。

ミホの言葉は聞こえなかったフリだ、取り合えずは即座に話しを変えなくては！！

ミホは目を細めて探るように僕を見つめた。

「……私ってそんなに知らないことないですよん？ そんな私だったら学校ぐらいの広さなら最早知っている事しか無いんです」

……ミホは何を言い出したんだ？

疑問に思う僕を無視して、ミホは更に続ける。

「そんな中で、この学校で知らないアナタに会ったんですよ？ あなたの事を教えて下さい。私にとって『知らない』という事が一番プライドが傷つくんですよ、私が知らないなんてありえないんです。だからアナタを教えてください」

……目、目が座っている。

ダ、ダメだ！ 迫力に圧されては素が出る！！

言い返さなくちゃ！

「おかしい人ですね？ 知らない事が傷つくことだなんて……では

貴方は毎日傷ついているんですね」

少し皮肉めいた言い方になってしまったが、僕の言葉にミホは嫌な顔一つせず、笑みを浮かべて見せただけだった。

「……そーなんです、だから学校内ではせめて、知らない事は『一つ』で良いんです」

へー、一つはあるんだ。

知らないっていうストレスは一つが許容限界らしい。

「じゃあ、これで二つ目ですね？」

そう言って笑う。

ミホは今度こそ表情を顰めた。

でもすぐにいつもの笑みへと変わる。

「……アツハ、百合果さんはど〇しても自分の事は言いたくないんだ？」

「ええ、個人情報の黙秘を訴えます」

今の状況はバレ無い事が絶対条件！

ミホに百合果の正体が僕だってバレたら、学校中に一瞬で広まるわ！

もしそんな事になったら……サクとか変態覆面達とか諸々に何をされるか解ったもんじゃない！！ 何よりも恥い！

ミホの探るような瞳は、呆れた瞳へと変わった。

「ま、無理矢理聞いても仕方ないですからね、別に良いですよ……不本意ですけどねー？」

……った、助かったのか？
い、いやミホにしては引き下がり及早すぎる！ これも裏があると見たほうが良いのか？

「じゃー百合果さんの個人情報以外の質問とかはどおですか？」
今度は開き直ったような良い笑顔を僕に向けてきた。
やっぱ諦めきれて無いじゃないか……だが、僕自身の情報が露見しない程度だったら質問に答えても良いんじゃないか？ 何よりもこれ以上僕がNOを繰り返したらミホが強硬手段に出かけない……
ミホが何をするか解らない以上は安全策に出た方がマシだ。 ……
…多分。

「ええ！ それぐらいなら構いませんよ？」
ニコやかに不振な素振りなぞ見せずにミホに笑いかける。

「わ、良いんですか？ そうこなくっちゃ二人っきりになった意味ありませんもんね？」
僕の笑みに不振なんて感じないという具合の満面の笑みを返された。

……今のミホと僕は赤の他人。
その状況下で僕自身を探らない質問のみが条件だ。
そんな条件下なら質問もたかが知れているレベルでしかないだろう。

大丈夫だ！ このままバレずにやりすごしてしまえ！

「じゃー質問です！」
ミホはいつもの笑みを浮かべながら、覗き込む様に僕を見つめる。

「へーじって、知ってますか？」
嘲笑うかのような瞳が、寒気を思わせる迫力を出していた。

……え？

その61. バレないのが絶対条件（後書き）

ワンピースの某映画を友人と一緒に見て。

私「……孔雀が空を飛んだら……ステキやねエ」

友人「何を言い出すんだお前は、馬鹿なのか？ お前は頭が飛んでるのか？」

私「ルフィみたいになりたいくて伸びる練習してる君に言われたくは無いよ!!」

ワンピース、やっぱり名作ですね。

その62. 友達思いなあの子

その言葉を聴いた瞬間に僕は固まった。

ま、まさかバレてる！？ あ、あわわわわわわ！

心の中グチャグチャの状態で固まっていると、ミホは不敵な笑み……ではなく以外にも焦った表情を見せていた。

「あ、あれ？ どうしたんですか？ 何で固まってるんですか？」

君の発言に固まってるんだよ……て、あれ？

いつもの彼女ならここは押すところだろう。

今僕は予想外の展開に完全に隙を見せたはずだ。

もし今の僕をヘーじだと疑うなら今のタイミングはチャンスなのでは？

そして裏を取って脅迫……じゃないのか？ ここで焦った演技をしても無駄な筈……？

「あつれ？ ヘーじの親戚のお姉さん、なんですよ？ ……おつかしいな、アリサちゃんからはそう聞いたんだけど……」

あれ！？ バレてるわけじゃない！？ アリサちゃんから僕が親戚のおねーさんっていう設定を聞いたのか！

何だ焦って損したじゃん！！

「え、ええそうです！ 親戚なんです！ ヘーじのお知り合いの方だったんですか！」

ここは知らないということにしておこう。

取り合えず今の僕が完全にミホとは他人という図式で！

僕の言葉でミホの困惑の表情は一気に明るい表情へ。

「そうなんですよ！ 仲良くさせて貰ってます！ 皆からはミホって言われてます！」

何を突然嬉しそうにしてるんだこの子は。

「そうなんですか、へーじがお世話になってますミホちゃん」
親戚のオネーサンってこんな感じだろうか……？

ミホにちゃん付けは鳥肌物なのだがこのさい仕方が無い、
そんな僕の不安なんて知るはずも無いミホは何故か知らないが興奮している。

「肉親の人と一回喋ってみたかったですよー！」
嬉しそうなミホは本当に喋ってみたかったんだろうな、と思わせた。

そんな表情にミホを疑う気持ちは薄れた。

「……そうなんですか？」

「そうですよー！ アイツってば自分の事ぜーんぜん喋らないですからねー！ ……だからこうでもしないと本音なんて聞けないですからねー」

そう言ったミホの表情は少し寂しそうな笑みだった。

僕はそんなに自分の事を言わないかな……？

友人を不安にさせる程に。

「ま、彼の気持ちも解るんですけどね。 周りがちょーとつ猛進女にへーじの為なら何でもする変態男＋ど変態男……それにへーじ大好きっ子な私まで来たら誰だって冷静にへーじの話なんて聞かない

ですしねー？」

そう言ってミホはアッハ！ と笑ってみせる。

……最後のヘーじ大好きっ子って、ネタかコラ。君は僕で遊びたいだけでしょーよ、

だが、確かにそうなのである。僕の周りは話の途中で走り出すタイプの馬鹿しかいない。

「それでも、私にだけでも言っただけで欲しいなア……メンツの中じゃ結構マシだと思うんだけどなア」

ミホの遠くを見る視線は僕を通り越して誰かを見ているような気がした。

きつとその誰かは僕自身なんだろうけど……。

この子は性悪女で性格悪いし、すぐ人で遊ぶけど。

……何処までも友達想いらしい。

「百合果さんが来たのだって、ヘーじに頼まれて会長と話を付けるためなんでしょう？ ……そんなの聞いてなかったしさあー」

それもアリサが言ったのだろうか？ 僕らの所にアリサを連れてくるまで随分と話をしたんだな。

仲悪いんじゃないかったっけ？

「アハ……どう思います？ 百合果さんは肉親だからともかく、同級生の友達よりも会って間もない後輩を頼るんですよ？」

……ッ。これに関しては何も言えない。

どうせ僕の周りの人間に相談しても、茶化されるだけだと思ってまともに相談する気何て無かった（実際茶化されたし）ここまで思っていてくれたとは予想外だった。

そこで独断でアリサを頼った。

巻き込みたくなかったなんて格好つけた言い方をするつもりは無い。

僕だけの問題だと思い込んでいた節の方が強い。
そのことに關して君をここまで心配させるなんて、思いもしなかつたからだ。

「……マージ殺したくなりますよね」

……っちょ、ちょっと本気で怖いんですけど。

ミホの中でこの件は悲しいことから苛立ちへと変わっていたらしい。

明日からどんな顔で会えばいいんだホント。

「か、彼にも何か考えがあるんですよ」
ちよつとでもミホの僕に対する苛立ちを薄めるように半ば必死に自分を庇う発言を零していた。

「……そーなんですよねー。あの貧弱は無駄に頭だけは良いからめんどつくさいんだですよねー」

お、おお。

適当に言ったのに何か変に納得された。
喜んで良い筈なのに何か腹立つのは気のせいだろうか。

「真面目に相談を受けなかった私も悪いんですけどね。アリサちゃんにへーじを取られるくらいならもっと真面目に考えてあげたら良かったな……そんなに、私は頼りない、かな……」
座った目から、今度は寂しそうに目を伏せて小さく零していた。

多分僕に『諦めたら?』と冗談っぽく言っていたあの事を言っているのだろう。

彼女が後悔している姿は少し珍しいと思った。

……彼女に弱気は似合わない。
普段見せないその姿には性悪女の面影は無い。

………そこまで心配にさせるような表情をしていた僕にも問題は
ある。

「アッハ！ すいません百合果さん。愚痴っちゃいました、すみません……」

誰かに吐き出したくなる程に僕の行動は……僕がアリサを頼った
事が辛かったのだろうか。

「……ヘーじはきっと貴方の事を頼りにしていると思いますよ」

「アハ、気休めですよ百合果さん」

そう言ってミホは自虐的に笑う。

確かに咄嗟に言った言葉に過ぎない。

だけど、彼女は僕が友達と思う数少ない人物だ。

友達の辛そうな顔を黙って見ている程、最低な人間では無いつもりだ。

「ヘーじから貴方達の事は良く聞いていますよ」

僕の言葉でミホは「え？」と小さく零した。

「貴方達には毎度助けられていると言っていましたよ？ 話を聞いている感じでは、とても頼りにしているようですけどね」

不断ならそんな事は絶対に言わない。

だけど今の僕は百合果だから。

今のこの姿なら、少しくらいなら。

……素直になっても良いと思えた。

その63. ツンデレのつもりは無いんですが

「ア……アハハ！ ヤダヘーじってばそんな事言ってるんですかー？ ツンデレやろうめーアハハ！」

いつもの張り付いた笑顔では無く、心から見せるような笑顔。子どもがはしゃいだときのような……取り合えず、嬉しそうに笑った。

釣られて僕も笑う。

ミホが嬉しそうにしたことが嬉しかった……なんてのはご都合すぎるだろうか？

「……貴方と喋れて良かったです」

まだ嬉しそうに微笑みながらミホはそう言った。

「ええ、私も楽しかったですよ」

少なくともミホの気持ち少し見れたのは僕も嬉しかったかな。

「あまり百合果さんを待たせると……お二人に怒られますしね」

そう言ってミホは笑みを浮かべると、道を譲るように動いた。

壁にもたれて十分に僕が通れるスペースをくれた。

これはもう行っても良いですよ、って事なんだろう。

……お言葉に甘えさせて頂こう。

確かに喋りすぎた、そろそろ行かないとね。

隣を通り過ぎようとしたとき、ミホが口を開いた。

「……一最後に、一つだけ聞いて良いですか？」

「はい？」

その言葉で僕は足を止めた。

ミホは間をあげ、悩んだような素振りを見せた後。

再び口を開いた。

「百合果さんから見て、私は……私はどう見えますか？」
少し必死な様子で、少し焦った様子で、少し……不安な様子で。

「……？」

言葉の意味が理解出来ず間をあけてしまった。

「……」

ミホはそんな様子の僕を見ても、意味を伝え直す事も無く黙っていた。

表情から笑みは消え、ただただその瞳が僕を見つめていた。
まるで救いを求めるのかのように。

彼女は回りくどい言い方をする子だ。

きつと、何かその言葉に意味があるんだろう。

だけど、その言葉だけで解るほど僕はミホを解っている訳じゃない……。

どう見えるか？ ……。

「とても友達思いの優しい人ですね」

僕はそう言って優しく微笑んで見せた。

「……そ、そうですか」

明らかな落胆な表情をミホは見せた。

あまりにも誰もが言いそうな普通な感想。

ミホの求めていた言葉ではなかったらしい。

そんな言葉だけでミホの言って欲しい言葉なんて解るわけがないんだ。

だったら、解らないんだから。

自分が思った素直な言葉を……出すしか無いじゃないか。

「……ええ、『ありがとう』」

僕の言葉に「え？」とミホはまた驚いたように声を挙げていた。

「ヘーじの事をそこまで想ってくれて『ありがとう』。捻くれた

彼の変わりにお礼を言いましょう……ありがとう」

その言葉は。

『百合果』が言った言葉であって『僕』の言葉じゃない。

イッタイタしい自演でしか無かろうが、僕が言った言葉じゃ無い。そう思わなきゃ恥かしくてやってられない。

「……」

何も言わずに俯くミホに、少しだけ助かったと思ってしまう。

顔が赤いのを見られたら、僕だってバレたかもしれないし……。

視線をミホに向けないまま、僕は真っ直ぐ歩き出した。

最後にミホに背を向けたまま小さく零した。

小さな声で。

ミホが聞こえるか聞こえないかのくらいボソツと。

ちよっぴり聞こえなく良いから、という気持ちを込めた小ささで。いくら百合果の状態でも言うのには、恥かしすぎた。

「捻くれた彼の……ずっと大好きな親友であって挙げて下さい……」

ミホと別れ、暫く暗がりの通路を進んでいてふと思った。

あれ？　そういえば、百合果が僕の親戚のお姉さんという設定、アリサに言っただけ？

離れていく百合果さんの後姿が暗がりで見えなくなっていく。

その姿を、私はずっと見つめていた。

最後に聞こえた言葉が、私の胸に響く。

小さな声で、聞き逃しそうになるくらい小さな声だったけど。

その言葉を。

私は確かに聞いた。

「ええ、いつまでも大好きですよ……親友としても……ね」

とっくに見えなくなった百合果さんに向けて小さな声を零していた。

その声が聞こえている筈も無く、暗がりで響くだけ。

「……………ありがとう、かー」

百合果さんの言った言葉を口ずさむ。

そしてなんとなしに頬が緩んだ。

「アッハッハー……何回目のありがとうかなー？」

その言葉はもう見えるはずの無い後ろ姿に向けて。

「ゴメンね、百合果さん。言ったでしょ？ こーでもしないと……

…ヘーじの本音なんか聞けないんだから、

そー……心からの本音が、『本人の口から』ね？」

……………ホントひっきょーかもしれないけどさ。

こーでもしないと、私がこの学校で『唯一解らない事』がわっかんないの。

何でも知ってる私がずっと解らないと思う事がどんだけ苦痛か知らないんだろうな。

ヘーじの心からの気持ち。わっかんないんだ……。

突然こんな行動を起こしたのは。

アリサちゃんと話していて、私がおかしくなったんだと思う。

アリサちゃんが私に言った言葉が脳裏を過ぎっていた。

ストーカーとか言われちゃったんだ……ヘーじに嫌われてるって
言われちゃったんだ……私のせいで。

ヘーじが死ぬって言われちゃったんだ。

わ、私はストーカーじゃない……嫌われてなんかいないもん。
ヘーじを絶対に死なせないもん。

私は。

私は……。

その63. ツンデレのつもりは無いんですが（後書き）

ホラーが好きな私は最近ホラーゲームをしています。
コーリンダ

CallinというWi iゲーム。

Wi iのリモコンがライトになったり携帯になったり（リモコンから声が出る）色々とハイテクな本格ゲーム。

そんなハイテクゲームを舐めまくっていたハイテンション時の最初の方の話。

私、友人、先輩との3人で一緒にやっていたとき。

友人がコントロール時に携帯から電話。
リモコン

「もしもーし！（・▽・）」↑ホントにリモコンを耳に当てている友人

聞こえてきたのは低い女の声。

「ワイワイー誰だよー女ー？ w（ ㇿ *）」↑ホラー舐めてる私

「ちょw w w紹介しろよーw w w（●、▽、）」↑勿論舐めてる先輩

「いやーw ちよっと一号と二号がw w フヒヒw！（・皿・●）」↑やっぱ舐めて（ry

その時。

突然出てきた幽霊「キャアアアアアアアアアアアアアアア！！
！???」

「?（!?! ㇿ）；。ㇿ。）；ㇿ；）ウワアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

ずっこける友人。

玄関に逃げ出そうとする先輩。

半泣きで友人に抱きついた私。

ゲームでもお化けは舐めちゃ行けないそうです……

その64. 知りたい情報屋知りたくないサイコメトラー

「追え！ 追えー！」

と、雄叫びを挙げながら変態集団が美少女を追って消えて行った。美少女を追って行く変態共の暑苦しい勢いに若干引く。

いや私がやらせたんだけどさ？ そんな必死になるなんて男ってヤダヤダ。

何て軽く人事。

美少女が変態共に合わせて意外にもすざまじい速さで逃げて行った事にも軽く焦る。

逃げ足はっや……。

集団達が消えた後、一人残された私はアリサちゃんが逃げていった三階の階段へと足を進めた。

皆が上手いことあっちに行ってくれたからアリサちゃんとは二人っきりになれそうだ。

……彼女に聞きたい事がある。

上手いこと分かれてくれて助かったよ。

別れて貰うのが目的ではあったんだけどここまで上手く二手に別れてくれるとは思わなかった。

聞きたい事。

それは……ヘーじとの関係。
知りたい。

情報こそが力になると思っている私としては、いい加減ヘーじとの関係を知っておきたい。

ヘーじに聞こう、という気持ちもあったのだけれど、彼は私や縁ちゃんと並ぶほどの天邪鬼。

簡単に答えてくれるとは思ってないしね〜？。

そういえば……今日ヘーじは休みだ。

変に優等生なぶん休んでいると目立つ。

……？ このタイミングで、というのが少し怪しい。
それもアリサちゃんに聞いたらハッキリするだろう。

三階まで上がったのは良いけれど、肝心のアリサちゃんは何処に逃げたんだろう？

流石の私でも逃げてった先の情報まで持つてゐるわけじゃない。

三階に上がってすぐに飛び出したのだけギリギリ見えたし、三階のどこかにはいると思うんだけれど……。

暫く廊下を歩いていると、どこからすすり泣く声が聞こえた。

……？ 何？

耳をすませると、ある一つの教室からその声が聞こえた。

この教室は、理科室？

そつと理科室のドアを開けてみる。

その先には暗がりか広がっていた。

暗がりの中では小さな泣き声が響き渡っていた。

震える声が教室の隅から聞こえた。

その聞き覚えのある声は私が探していた人物。

「……アリスちゃん？」

私の顔を確認した瞬間、アリスちゃんの顔は真っ青に染まった。

驚き方が違う。

私が期待していたソレとは違った。

変態達を追わせたのは半ばやり返しの気持ちがあったからだ。

だけど、それでも少し懲らしめてやるってつもりぐらい。

冗談ぐらいの気持ちで受け取ってくれると思っていたのに。

何よりも……アリスちゃんが、私が『敵』だと認識した程の少女が。

この程度でやられるわけが無い……私の思い過ごしだったの？
過大評価してたつもりは無かった。

アリスちゃんの表情は蒼白、目に涙を溜めていた。

女の子を泣かしてしまった、という感覚が胸糞悪さへと変わる。

「だ、大丈夫？」

「……ッ！」

私が心配の一言と共に一步步み寄ると、アリスちゃんはビクツと体を揺らした。

……驚かせるつもりは無かったんだけど。

アリサちゃんがこれぐらいで泣くなんて思わなかった……私が買いかぶってただけ？

耳を塞いで必死で縮こまっている彼女は本当に私と敵対していたあの子？

何もいえなくて固まっていると、アリサちゃんがゆっくりと顔を挙げた。

赤い目や涙の痕がいたたまれない。

「貴方、ですか……」

その落胆した言葉は、まるで別の人だったら良かったのに、と言っているような言葉だった。

……だったら誰なら良かったのかな。君は。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

そこに居たのは私の宿敵の水歩さんだった。

いつもの張り付いた笑みは無く、私を見て呆然としているようだ。フフ……滑稽ですか？

あそこまで貴方を追い詰めた私が咽び泣いているんですから……。

人の心が読める。

世界の常識を無視した私の能力。

その人の思いも過去も攻撃も作戦も全てを見透かす。

魔女と言われる程のある種、最強の力とも私は思っている。

誰にでも勝てるような……ゲームで言うところのバグ技みたいなレベルの物。

そんな反則的な私の能力。

その唯一の弱点が能力自身なんですから。

皮肉も良い所……。

頭に響く言葉は水歩さんが来た事で大分マシになった。

目の前の人物が私を意識している、というだけで周りの遠くの雑音は薄くなる。

遠くで誰かが私の名前を呼ぶのと、目の前の人が私の名前を呼ぶのではどっちが良く聞こえるか……という差でしかないけど……。

あなたに助けられるなんてホント皮肉ですけど。

ゆっくりと顔を挙げて何とか笑ってみた。

水歩さんの表情にいつもの笑みは無かった。

その理由も勝手に頭に響いてきてしまう。

知りたくないことまでも知ってしまう。

水歩さん？ 貴方は何でも知りたがる。

だからムカツクの。

本当に。

何もしらないくせに。

「私を……探していたようですね……」

心がそういつていたから解った。

私の言葉に水歩さんは困惑した表情を見せただけで何も言わない。

水歩さんの心が動揺していた。

この程度の事で泣くような子じゃないだろうと思われていた。

全力で向かわなければやられると思って向かって来てくれたのに。

あの時言ったように全力で私に向かってきてくれたのに、こんな情けない姿を見せたのには……少し申し訳なくは思います。

「……発作のような物です、気にしないで下さい」

私は冷たくそう言った。

嘘だ。

ただ心が読めて沢山の声が頭に響いたと正直に言っても信じて貰えないと思っただけ。

冷静に見える見た目に反して、水歩さんの心の中はグチャグチャで何を考えているかは特定しづらい状態。

だけど、弱みを突くやり方は私も貴方も同じですよ？

この姿を見られたのは私のミス。

何を言われても……覚悟はしておこう。

「……そーなんだ」

水歩さんの短い言葉は少し意外だった。

もと……何か言われると思ってたんですけどね……。

まあ、何も言わなくても心の声が聞こえるんですから関係無いんですけどね。

グチャグチャの心は突然冷静に。

透き通った一言だけが、綺麗に私の頭の中に響いた。

『……嘘吐きに嘘使ってもモロバレなだけなんだけどね』

……え？

頭に響いた言葉は、意外な言葉だった。

私に対する敵対する冷たい声じゃなくて、ドア越しから私の名前を呼んだような温かい言葉。

呆けている私を他所に、水歩さんは私に近づくと私のすぐ隣でしゃがみ込んだ。

「行こっかアリサちゃん」

短い言葉と共に私に肩を貸して持上げた。

「わ、私をどうするつもりですか？」

多少怯えたような声になってしまったのは、大勢の『声』の所に連れて行かれたらどうしようと思ってしまったからだ。

これ以上沢山の『声』に近づいたら頭が壊れてしまいそうで怖か

った。

「んー？ 百合果って子のトコにだよん？ 取り合えず一人で居るよりは友達が近くに居る方が良いんじゃない？」

水歩さんは、私の不安を消し去るように温かい言葉で簡単にそう言った。

一瞬疑ってしまったが、嘘じゃないのは力のせいで嫌でも解る。
サイコメトラ

「ど、どうして……」

何でも解る私でも、予想外の事で反射的に疑問をぶつけていた。そんな驚いている私に水歩さんはアッハッハ、と不安を吹き飛ばすように短く笑った。

「私は可愛い子をイジるのは好きだけど……苛める趣味は無いのよん？」

そう言って、水歩さんは私にウィンクして見せた。

今私が見せていたのは最大級の弱みだった筈。

水歩さんが私を『敵』だと思ったのなら……そこを突くのがベスト。

水歩さんに弱みを見られた時点で私の負け。

……なんのつもりですか。

貴方と私は敵なんですよ？

『敵』だったら情けなんてかけない。

私だったら……そうするな。

私に肩を貸して歩き出そうとしている水歩さんを見上げた。
負の心は、見えない。

「……………」

「ん？ 何？」

「何でも……無いです」

悪意の無い瞳を見て、スグに顔を伏せた

……………。

何も……知らない……クセに。

その64. 知りたい情報屋知りたくないサイコメトラー（後書き）

この新たな話を作るとき、新たなキャラ達は誰かと似ているようで正対な存在を作れたら良いなと思い。
その最たる例が

ミホ↑↓アリサ

です。

他のキャラ達の相反する存在も、もし話の中で解って貰えて行けたら良いな、と思っています。

その65. 本当のアリサちゃんの姿。

私とアリサちゃんが二人並んで歩くというの中々妙なものだ。
アリサちゃんはさっきから喋って居ない。

顔も蒼白なままだ。

何故こんなにも元気が無いのかは解らない。

……アリサちゃんは発作だと言っていた。
けど。

不断から嘘ばっかの狼少女に嘘は通用しない。

……アリサちゃんが答えたくないなら別に良いけどさ。
気にならないわけじゃないけど、何か事情がありそうだ。

取り合えず今は百合果って子にアリサちゃんを渡さないと、今の学校は戦場だ。

あの美少女やアリサちゃんは、変態集団や欲しいもの目当ての欲望に満ちた汚い人間達に探し回られてる。

その中で渡すとなるのは中々困難なわけで。

……いや、まあ。

私がこの状況を作り出したんだけどね、エヘ。

「エヘ、じゃありませんよ……」

呆れたような声が隣から聞こえた。

でもその零した声は 小さすぎて良く聞こえなかった。

「へ? 何?」

「なーんでも無いです!」

何か怒ってる……? ホントこの子はわっかんないな?

私が不思議に思っていると何故か余計にアリサちゃんの表情はムッス〜としていく。

私なんか言ったっけ……っていうか何も喋って居ないんだけど。

そうこうしているうちに階段が見えた。

アリサちゃんを見つけた所から階段まで、そこまでの距離は無かったわけだし直ぐにつくのは当り前なだけど……。

妙に時間が長く感じたのは秘密。

……なんかちよつと睨まれた気がするけど気のせいかな。

下に向かったあの美少女を追うために階段を一步下りようとした時。

足を下ろそうとした私とは別に、アリサちゃんは動き出さなかった。

「どうしたの?」

疑問に思った私にアリサちゃんは困ったような、怯えた表情を見せた。

「こ、この下はダメです……」

「ダメ? なんで?」

あの子を追うのなら下に降りなければ行けない。

それも見つかる前に急いだ方が良い事くらいこの子も解ってる筈だ。

それでもアリサちゃんは動く様子を見せなかった。

顔を青くさせ、絶対に行きたくないという意味を表情に見せていた。

まるで……下に何かいるみたいな。

不安な瞳が私を捉える。

行きたいけど行けないという気持ちが伝わってくるように。

「……解った、じゃあ別の道から行こうか」

私はそう言って踵を返した。

この状況で彼女が嘘や冗談を言うとは思えなかった。

『今』はこの子を信じることにした。

踵を返した私にアリサちゃんが慌てて付いてくる。

アリサちゃんは少し驚いた表情を見せる。

まさかアツサリ信じてくれるとは思って居なかったらしい。

確かに……私は用心深い方だから自分でも珍しいんじゃないかな、とは思うけどね？

アリサちゃんが慌てたように口を開く。

「私はダメしか言って無いんですよ？ 根拠とか……聞かないんですか？」

「んー？ 言いたいなら聞くけどアリサちゃんが言いたく無さそうだから別に良いよ」

私の何気無い一言でアリサちゃんの表情は更に驚いた表情を見せる。

「わ、私は言いたくないなんて一言も言っていないですよ!？」

「いや……言ってもなくても解るから」

そりゃそうだ、あんなに表情に出していれば解る。

根拠は言えないけど下はダメ。でも根拠を言わなければ私は動かないかもしれない。でも根拠が言えない。

そんな感じで右往左往してりゃ、ねエ？

私の呆れたような一言に何故だかアリサちゃんは勝手に焦っている。

「み、水歩さん……」

隣で一緒に歩いているアリサちゃんは、なにやら深刻な面持ちを出している。

「何？」

目的地の逆側の階段に向かいながら、簡単に返事を返す。

「もしかして水歩さんって……心が読めたりとかします？」

「……は？」

何を言い出すのこの子？

「だ、だってそうじゃなかったら私の考えていることが解るなんて！」

「……そんだけ顔に出易くて良く魔女とかあだ名付いたね」

私の言葉にアリサちゃんは更に目を丸くしている。

また勝手に勘違いしているようだ……。

「ええええ！？」 私の陰で呼ばれている名前まで！？ もしかして

レベルの高い超能力者!？」

……私はこんなド天然な子を敵と認識していたのか。
何か頭痛くなってきたわ。

「だ、誰が天然ですか!」

あれ? 私も顔に出てた? いやでもそんなピンポイントで顔に出るものなのかな。

「し! しらばっくれてる!! な、なんて事なの……私意外に力を持っている人がいるなんて、コレは計画変更だわ……」

なにやら横でブツブツ言っている。

そんなアリサちゃんの姿に少しおかしくなる。

「アハ! 私なんかよりよっぽどエスパーっぽいのがいるじゃん!」

「……え?」

アリサちゃんが女の子に似つかわしくない声を出したのと、ヤツ
べ! みたいな顔をしている事には突っ込まないで置こう。

これ以上顔に出させたらこの子の言いたくないことが勝手に解る
かもしれないし。

「ヘーじの方がエスパーっぽいと思わない?」

私の言葉にアリサちゃんは何故かツホと胸を撫で下ろしていた。

「ヘーじさんですか?」

少し不思議そうな表情をしているアリサちゃんは、まだヘーじの
全てを知らないらしい。

……ちよっと勝った気分。

何故か眉間にシワを寄せたアリサちゃんを無視して私は続ける。

「誰だろうが、簡単に人の心の中にズカズカ入って来て、プライバシーなんて無視無視……口では悪口しか言わないクセに誰よりも優しくて男でも女でも、勝手に忘れなくさせる……」
人の心を勝手に動かす、ほんとエスパーみたい。

私の言葉に、アリサちゃんの驚いてばかりの表情が優しい微笑みに変わった。

「ほんとに、ヘーじさんが好きなんですネ……」

「え、う、あ!？」

わ、私はアリサちゃん相手に何言ってるのよ!!

「さ、さあ? 好きって言っても友達としてっていうか私には勿体無いっていうか……」

「……そこまで言っというて何を今更」
今度はアリサちゃんに呆れたように言われてしまった。

「い、良いじゃないの別に!」

「水歩さんってばおっとめー?」
馬鹿にしたように笑うアリサちゃんの表情にもう暗い姿は無かった。

それは良かったんだけど、その言い方は腹立つわよ!

「わ、ギャクギレですよソレー!」

また私は表情に出ていたらしい。

あんまり表情に出ないほうなんだけどこの子にはお見通しのよう

だ」

「アリサちゃん！ 覚えてなさいよー！！」

アリサちゃんはキャアキャアと可愛い声を挙げている。

……。

……でも。

でも。

こうやって喋ってみると不思議。

知っている情報だけで彼女を認識していたけど、喋ってみれば案外普通の子。

こうやって解る事もあるんだ。

魔女だ何だと聞いた姿と。

そのコロコロ変わる表情からは想像出来ない。

敵としての認識を私は見誤ったのかな……。

それに、敵だなんてより。

友達とかになった方が面白いんじゃないかな。

そう、思ったときに。

私の隣で勝手に騒いでいた少女が突然固まった。

「……友達？ 私が？」

再び私の心を読んだかのようなピンポイントな一言。

その表情は何を言ってるの？ と表しているようで……。

キョトンとした姿が。

猫被りも騙しあいも疑いも情報も。

何も無い純粹な彼女を見た気がした。

その66. 寂しがり屋のサイコメトラー

水歩さんの心の言葉が頭に響く。

『友達』

私が欲しかったもの。

心から信頼し、心から笑えて、心から一緒に泣ける。
そんなテレビでしか見た事が無い世界。

きっとテレビ以外にもこのリアルにそれは存在する。

だけど私はそれを知らない。

この力が邪魔をする。

心が響く。

暗いところが見える。

じゃあ『心から』って何？

寂しがり屋のクセに、力のせいで人を寄せ付けるのが怖かった。

ならば敵として純粹に憎まれよう。

それだけでも良い。

それだったら曖昧な感情よりもストレートで良いから。

甘い言葉や友情のような優しさの裏が見えるより。

ずっとずっと、心が楽になるから。

悪い感情でも良いから、と願う私の思いはあまりにも必死で。

男には欲望の目で、女には嫉妬の目で。

ある意味求めている純粹さ。

人が嫌い。だと思っていたのは故事の守りの為。

多分、そうでも思わなければ……私は既に崩壊していたのかもしれないから。

本当は、タダ寂しいだけ。

悪意ある意識でも。

もうそれでも良いから人と触れたかった。
それでも良いからお喋りとかしたかった。

私をまっすぐ見つめる人間は居なかった。

でも水歩さんや、へーじさんは違った。

さっきまで私は水歩さんに敵意を向けていたのに、いつの間にか
楽しく喋っていた。

心でも裏が見えていなくて、普通に楽しいと思ってしまっていた。
もしかしたら……無意識に元気の無い私の為だったのかな……。

心が読めるのに気を使ってもらうのが解らないなんて始めて。

こうやって、友達って……思ってくれる人なんていなかった。

へーじさんや水歩さんのように、心から言葉を発せれる人。
ずっと探してた私と友達になってくれる人。

……嬉しい。

嬉しい！ 嬉しい！ 変に敵のように意識する純粹さも必要無い、
心を読む必要も無い。

私は……こんな人達を探していた！

喜んで友達になりますよ！

嬉しいな！　嬉しいなア！

友達って映画に行ったりするのかな！　友達って遊園地とか行く

のかな！　毎日メールとかして。

それと、それと……！

湧き上がる高揚。憧れた友人との学校生活。

きっと私は明日から変わる！　もう魔女だなんていわせない！

この人が……こんな人達が近くにいてくれたらこの力だって意味を無くすから！！

嬉しい。

とても。

嬉しい。

……のに。

「気持ちだけ受け取るとききます」

思ってもいない言葉。

いつものように笑って見せる。

ちゃんと笑えているかは解らないけど

「水歩さん……勘違いしちゃダメですよ。私は『敵』なんです。それも最高最悪の『敵』です。『敵』に向かって友達になろうだなんて……フフ、愚の骨頂ですよ？」

口が勝手に動く。

折角手を伸ばしてくれたのに。

でも今の私の役目は……『監視者』

友達を……作ることじゃ……ない。

最初から敵になんかならなきゃ良かった。
敵にならなきゃこの人の手を取れたのに。
今更つく相手を間違えたことを後悔する。

「……そっか、そうだね」

そういつて引っ込める水歩さんの手を名残惜しく見てしまう。

「……ええ♪ 今は取り合えず助けていただきますけど……明日にはきつとまた水歩さんの立派な敵として帰って来ますのでー？」

笑いながら敬礼なんてして見せた。

冗談っぽく、いつものように。

……いつものように出来てるかな、いつものように嫌な私かな。
魔女と呼ばれた、私かな……。

「アハハ、楽しみにしておくよ」

水歩さんもいつもの様子で返してくれた。

敵意を向けた笑み、いつも通りの敵対的關係。

水歩さんと私は似てる。

お互いが裏を見せないようにしている所が。
裏の部分は間逆みただけだね。

だから敵対出来るのかもしれないけれど。

そのいつも通りの敵対関係に戻っただけ。

……なんだか、ほっとする。

バレて、無いよね？ 寂しがり屋だなんて思われてないよね？

もう友達とか云々は忘れよう……

聞かなかったことに、

……。

しよう……。

水歩さんは目を伏せる私に向かって笑い声を挙げた。
私の中の全てを吹き飛ばすかのように。

「流石はアタシの『宿敵』かな？ アッハッハ！ 簡単にはなび
いてくれないんだねエ？」

宿敵と言う部分を強調して言った言葉。

そしてそこを何故強調したのか。

その意味合いが、言葉が頭に流れ込んでくる。

力が、響く。

……………ッ！

始めて……力があってよかったと思った。
その意味を知れて良かった。

ありがとう。

ありがとう水歩さん……

何でも知りたがるから嫌いだななんて思っでごめんなさい。
今まで『知りたくない』としか思わなかったから。

『知りたい』という気持ちがあるのに大事ななんて。
きつと心が読めなければ貴方が強調した意味は解らなかったでしょう。

本当に心が読めてよかったと思えたのは始めてですよ。

『敵』では無く。

『宿敵』だといってくれてありがとう……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

先に言われてしまったけど、一応口にもしておく。

「アリサちゃん、友達になろーよ」

警戒させないように笑みを浮かべながら手を差し伸べる。

何故ポカン、と固まっているか知らないけど、私は別に自分から敵を作りたいと思っているわけじゃない。

最初はアリサちゃんの事は何か企んでいると考えていた。

ヘーじに近づいたり、一年生の一人であるという概念からそう考えるのは仕方ないかもしれない。

それでもしっかりと話さずに敵と決め付けたのは私だ。

今からでも遅くないと思う。

それに。

こんな可愛い子を敵にするより友達にした方が絶対に楽しいよね？
アハ。

アリサちゃんは小さく微笑んだ。

いつもと違う笑みな気がするの、は気のせいかな。

困ったような微笑……という感じた。

いつもの得意な笑みが、そんなぎこちなくなってるのに気づいてるのかな？

「気持ちだけ受け取るとききます水歩さん」

アリサちゃんは……拒んだ。

「水歩さん……勘違いしちゃダメですよ。私は『敵』なんです。それも最高最悪の『敵』です。『敵』に向かって友達になろうだなんて……フフ、愚の骨頂ですよ？」

馬鹿にしたようにアリサちゃんは軽く笑って見せた。

馬鹿にしたように、見せようと。と言った方が正しいかもしれないけど。

「……そっか、そうだよね」

私は伸ばそうとした手を引っ込めた。

その私の手を、アリサちゃんが盗み見たのを私は見逃さない。

「……ええ♪ 今は取り合えず助けていただきますけど……明日にはきつとまた水歩さんの立派な敵として帰って来ますのでー？」

そう言ってアリサちゃんは冗談っぽく敬礼を試みせる。

「アハハ、楽しみにしておくよ」

私はそんなアリサちゃんの姿に笑みを見せた。

……なんて、解り易い子なんだろうなア。

私が言った言葉に暫く固まっていたアリサちゃんの瞳はとても輝

いていた。

まるで大切な宝物を目の前で見たかのように。

その瞳が全てを語っていた。

私に『敵』だと言ったのに。

瞳だけは友達になりたいんだって叫んでいるようで……

それを、この子は無理にそれを隠して友達になる事を拒否した。
名残惜しそうに辛そうに悔しそうに。

その一瞬の一連が、友達がいいるのかな……と余計なことまで考えてしまう。

話している限りではこの子に友達が出来ない理由は無い気がする。
理由は解らない……まだ私が知らないことがあるみたいだけど。
いつかはそれを無くせたらいいね。

その時は、もう一度友達になろうって言おう。

それまでは、『最高で最悪の私の敵』でいてあげよう。

この子は全力で迎え撃つ相手。

良い子だって事依然に。私の最大の敵で、憎たらしい子だって事も変わらないんだから。

『友達』では無いけど『宿敵』って言うのもある意味友達に近いんじゃないかな。

本当の友達になるまでは『宿敵』で。

アハ、知ってる？ 少年漫画じゃ『宿敵』のルビは『とも』なんだよん？

「さっすがはアタシの『宿敵』だね？」 簡単にはなびいてくんな

いんだねエ？」

私の言葉にアリサちゃんは一瞬固まった後、表情を緩ませた。

これは、嬉しくて泣きそうな顔、かな？

でもその表情は一瞬だけだった。

アリサちゃんの表情にはいつもの笑み。

「ざーんねんですね♪ ウフフ！」

「アッハッハ！ 猫被りめ〜！」

暫く私とアリサちゃんは笑いあっていた。
静かな廊下に二つの笑い声が響く。

こういうのも……偶には良いかもね。

その67. 解らないことが新鮮な私

私の能力のお陰で変態達に会わずに済んでいるので、順調に一階に進んでいた。

心の声がそこらじゅうでしていて大きいか小さいかでしか道は解らないのだけれど。

声としては、雑音過ぎて最早殆ど聞き取れてはいない。

今の私はノイズが頭に響きまくるだけで、人の心を読む力はもう無いに近い状態。

水歩さんは素直に一々道を変える度、大丈夫かを私に聞いてくれるので助かる。

何故その道が危険なのか、というのが解るのも聞かないでいてくれる。

おかげで後は目の前の階段を降りたら一階に到着。

といっても学校の中を変態達と会わない為にグニャグニャと歩き回っているからここまで来るのには大分かかっているけれど……。

階段を目の前にして水歩さんが私に視線を送る。

「どう？　こっちは大丈夫？」

水歩さんの言葉に私は恐る恐る頷く。

「はい、こっちからは声……いえ多分大丈夫です」

「……ん、オッケー解った」

慌てて言い直すも、水歩さんはそこまで気にする様子は無かった。そう、この下からは大量の声はしない。小さい声……だと思う。

水歩さんが階段を降りようとした時、突然水歩さんのポケットが鳴り響いた。

……これは水歩さんのケータイ？

降りようとした足を戻すと、水歩さんはケータイを取り出す。

ケータイの表示部分を見た水歩さんは、何故かニヤツと嫌な笑みを浮かべた。

声が聞こえ難い状態の私としては誰からの電話で何故そんな笑みを浮かべたのかは解らない。

「連絡がおっそいんじゃないの？」

そう零すと携帯を耳に当てた。

私はポカンと水歩さんを見ているだけ。

「うん、うん……あいあい、オツケー？」

何度かのやり取りの後、電話は切られた。

水歩さんは踵を返すと階段に背を向けた。つまり私と向き合った形になる。

軽く首を傾げる私に水歩さんはニコツと笑いかけてきた。

「あの子の居場所が解ったよん」

先程の電話がどうやら水歩さんの後輩である事は微かに心の声で解った。

変態達の中に忍ばせてヘーじさんの行動を見張っていたらしい。こういう所はホント抜け目無いですね……。

それにあの変態達の中に後輩を忍ばせるって結構酷いです。まアそこは水歩さんだから気にしない事にしよう。

「解ったんですか？」

「うん、今は校長室に立て籠もってるみたい、もう下におりる意味は無さ気ってね？」

変態達に追われて一番苦勞してるのはヘーじさんらしい、男の人なのに可哀想に……まアあんな可愛い男の子いないけど。

「散々追われてるみたいですわね……」

そう言いつつ水歩さんをジトーっと見てしまう。

そんな私の視線に水歩さんはごまかしたように笑う。

「ア、アツハハ？ まア無事だから良いじゃんかー？」

水歩さんのせいなんですけどね……。――

「私達に全然会わなかった分、あっちに行っちゃってるのかもねエ？」

う……そう言われると、能力を酷使して会わないようにしまくった私のせいでもあるのかな？

……いやいや元はいええば水歩さんが悪いのよ、うん私じゃない私じゃない。

自分の微妙な罪悪感をブンブンと首を振ってかき消す

「そ、それよりどうするんですか？ 立て籠もってるなら会いに行きようが無いですよね？」

「んー……多分、校長室にはあの駄目教師がいるだろうしー……」
駄目教師とは、あの白衣で眼鏡の教師のことかな？

いつかでへーじさんの心の声を聞いた時、白衣教師に対して駄目教師発言がされていた。

多分、教師の事かな。

色んな所で駄目教師発言をされる程に駄目なんですか、あの教師……。

でもそれがなんなんだろう？

その駄目教師が居るのなら何か良い事があるのかな。

水歩さんはニヤツとまた嫌な笑みを浮かべる。

「どこにでも秘密の通路ってのはあるんだよね？」

……は？

水歩さんの冗談っぽく言った言葉が嘘か本当かが解らない。

心が聞こえ難いと色々と不便。

少し新鮮ではあるけど。

でも、いろんな人の心は聞いたけど、隠し通路とかそんなの始めて聞いたんですけど……

「あの駄目教師なら隠し通路のこと教えそうだし、待ち伏せしますかー？」

そんなの知ってる水歩さんは一体何者……。

いくら心の声が聞こえる私でも、そればかりはわからないみたい。

今日は色んな声が混じっていて水歩さんの声が聞き取りにくくて何を考えているか良く解らない。

雑音が多いのは嫌だけど、人の心が読み難いって言うのも中々珍しくて良いものね。

「それでその隠し通路なんてのは何処にあるんですか？」

私が質問をすると言うのも珍しい事だけど、水歩さんは何も気にせずニンマリと笑った。

「隠し通路はねェー」

意味深にもったいぶりながら階段のすぐ前にある教室のドアの目の前に立った。

この教室の中に隠し通路があるんだ……！　なにやら気持ちがドキドキしてしまう。

隠し通路だと言うのだから黒板が裏返ったり掃除ロッカーの中が通路になってたり……そんな漫画チックな展開を期待してしまう私はちよっぴりオタク。

水歩さんがドアに手を掛けると横に引いた。

一体、この学校にはどんな仕掛けが……！？

ドアが開いた目前は、一見ただの教室でしかし大きな仕掛けがある……わけでは無く。

ドアが開いた先にあったのは狭い通路であった。

……？

水歩さんがバスガイドのように手を指し伸ばして見せる。

「はい、ここが隠し通路です」

「……隠れて無いですよね？」

ドアを開いたらスグ通路。

仕掛けもクソも無い、どストレート。　　というかこのドアの意味はあるんですか？

「何言ってるのよ！　この予想外すぎる所が逆に隠せてるんじゃない！　い！」

「逆に逆に隠せてないですよ！　180度予想外を狙って360度まで帰って来てるじゃないですか！」

考えすぎて失敗したパターンなんて見たくなかったですよ！　もつとありがちな感じで良いんですよ！　意外性を狙い過ぎて普通に萎えましたよ！　あ、萎えるとか使っちゃった、いっけなーいテへ☆

「良いと思うんだけどなー……」とかブツブツ言っている水歩さんと共に取り合えず先に進むことにした。

……やっぱり変な期待するよりも心が見える方が驚かなくて良いかも。　ハア……。

その67. 解らないことが新鮮な私（後書き）

某掲示板で小説の評価をしてくれるということで、これの原作暴力熱血と貧弱毒舌男を晒してみようと思いました。

毎日更新してたし実はちよっぴり自信があつての行動だったのですが……。

結果は惨敗……orz

見事なまでに指摘されまくり全部読まれる事無く飽きられる始末。自分の実力不足に泣きそうになります。。。

こんな駄作を今まで読んで頂いていると解ると嬉し申し訳恥かしいです……

が、頑張ろう。

今回を気に現在幾つかの執筆している小説をもっと本格的に書いていこうと思いました。

ですので、こちらの方の執筆が遅れるやもしれませんが、温かく見守って頂けると幸いです。

こんな駄作ですが最後まで書ききる事が書いている人間の責任だと思っています。

もう少しお付き合いして頂けると助かります！

いやもう一個の方はずっと更新停止していますけどね…（汗

その68. エスパ―少女の決心（前書き）

薄暗い通路はどこまでも続いている。

しかも、上がったりと下がったりと滅茶苦茶の通路。

歩いているうちに学校の中である事も忘れそうになる。

県内随一の広さを誇る学校だって事は聞いてたけど、まさか軽いダンジョンまであるのは予想していなかった……。

案外遠い位置にあるダンジョンなのか、心の雑音は薄れて行っていた。

もう元の私。

……でも、少しの間だけ一般人に戻れたのは苦痛でもあり、嬉しくもあった。

心が読めなくても、人の気持ちに触れることが出来た。

そんな気がしたのは気のせいかな？　心が読めたらこんな曖昧な

気持ちにはなっていない。

でも、この曖昧さが大事なのかな。

今なら人の心を読むのは造作も無い。

目の前の水歩さんの声だけが聞こえてくる。

水歩さんの声は、私の事を心配してくれている声だった。

口では人を良くからかう人なのに、心の中ではつねに相手の事を優先して考える人。

正直、今日一日でアナタの見方が大分変わりましたよ。

……私は貴方の敵です。

だけど。

一応助けてもらっていることには変わらない。

そりゃ水歩さんが悪いんだけど、それ言っちゃったらヘーじさん
けしかけたのは私だし……。

ちよつとだけ、ヒントをあげます。

話の核が誰なのか……水歩さんまだ解っていないようですから。
どう転ぶか私でも解らないけど、私は話すことを決心した。

……敵に恩があると、後々不利になったら嫌ですしね。
それだけだから。

私は……貴方なんて嫌いですから。

その68. エスパー少女の決心

誰が作ったのか、いつからあるかも全く解らない謎だらけの隠し通路。

知ってる人は限りなく少ない。

私も駄目教師に教えて貰うまでは知らなかったし。

最短距離もあったり色々と便利だけど私はあまり使わない。

何故ならば入る度に通路が変わっているからだ!!

まるで生きているみたいな謎の隠し通路に半ばドン引き。

っつーか下手したらこの広い世界に食われるかもしれない……流石の私でも学校内で餓死するのは嫌よ……。

何故か横で歩いているアリサちゃんがもの凄い顔でこっちを向いた。

「あ、あの……えと、広い通路ですけど迷ったり……しませんよね!？」

何やら必死な感じだ。

こういう狭いところ苦手なのかな？

「んー？ 大丈夫大丈夫。 良くわかんない道もあったりするののは確かだけどちゃんと解る通路使ってるから!」

「そ、そうですか……だったら良いんですけど」

ま、多分だけど。

久々に隠し通路使ったし……。

さっきから所々知らない道見えてンだけどー……まー大丈夫でっしょ。

……うっわ。

超睨まれた、何か知らないけどアリサちゃんに、ものっ凄い睨まれた。

可愛い顔してるクセに睨んだら超怖いわねこの子！！

「ア、アリサちゃんは百合果ちゃんと学校に何しに来たの？」

「え……えーと？」

おお、困ってる。

話を上手い事変えたのは当たりだったみたいね。

どっちにしても聞かなきゃとは思ってたし。

「百合果ちゃんはこの学校の人じゃないよね？ 学校外の友達が何しに来たのかなーって？」

「や、えと……」

戸惑うアリサちゃんに続けて私は口を開く。

「それにこのタイミングでヘーじがないのも珍しいよね？ 昨日ヘーじと何か喋ってたし……その次の日にこういう騒ぎになってるんだから、ヘーじと何か企んでるんは間違い無いんでしょ？」

ま、騒ぎ起こしたのは私なんだけど。

「あ、あー……ええっと」

戸惑った表情と困惑の表情がコロコロと入れ替わっている。

何を隠しているかはまだ解らないけど、この様子だと隠し事は確かみたいね。

この子の事が本当に良く解ってきた。
相手に対して弱点を攻めるのがこの子の常套句だ。
一方的なぶん、口で勝つのは難しい。
だけどコチラから攻める上では対した言い返しは少ない。

つまり。

自分で考えて誤魔化す、騙す等の関連に弱いみたいね。
正直に相手の弱点をついてくるからこそその強さ、そしてそれに合判する弱さ。

まア言ってしまうえば隠し事は得意では無いのかな。

中途半端に良い子なんだろう、只の天然って線もあるけど。

また何か睨まれた。

まるで心でも読まれてるみたいな気になってきたわね。

……まさか、ね。

「んで？ あの子は誰なのかねん？」

その言葉で睨んでいた瞳はまたスグに元の慌てた瞳に切り替わる。

「あ、あの人は……」

そのままアリサちゃんは押し黙ってしまった。
……なんかこっちいじめてるみたいで嫌だね。

そこで突然アリサちゃんは顔を上げた。
表情が輝いている所を見ると何か名案が浮かんだらしい。

「お姉さん！　そう、あの人はへーじさんのお姉さんなんです！！」
その言葉を聞いて私は愕然とする。

お、お姉さん！？　あれがへーじのお姉さん！？
一緒に暮らしている姉がいるのは知っていた。

だけど顔は見た事無かったしお姉さんの情報は、私の力を持ってしても少ない。

……まさかこんな所に。

戸惑っているのを誤魔化すように私は目線を逸らす。

「へ、へエ？　そのお姉さんが何をしに来ているの？」

「……それは」

・ ・ ・ ・ ・

狭い通路が続く中、アリサちゃんは話してくれた。

昨日へーじと何を話していたのか、何故へーじの姉が学校に来たのか。

……それでもまだ隠し事があるのは何となく解った。

多分この子も自分自身、嘘が下手なのは解っているのだろう。

だからこそボロが出る前に最低限の事を話してくれたんだと思う。
それでもへーじに口止めされていたであろう事を最低限でも教え

てくれたのは嬉しい。

「……そっか、やっぱ煮詰まってたんだヘーじ」

「はい、かなり悩んでいましたね……苦肉の策として生徒会長と話をつけるのは私も良い案だと思っています」

「私もそう思う。」

この学校で有力な権力を持っているのはあの会長だ。
でもだからと言って……。

「……お姉さんまで出す必要は無かったのに」

ヘーじとお姉さんの関係は、確かヘーじがメツチャクチャ尻に敷かれていた筈。

そのお姉さんが制服のコスプレをしてまでヘーじの頼みを聞いたなんて……逆にヘーじはどれだけの事をして頼みを聞いて貰ったんだろう。

何か可哀想になってきた……。

「仕方無かったんですよ、水歩さんやヘーじさんの周りの方達は会長さんに目を付けられてるから危険だって言っていました……会長さんに知られていない人物が絶対条件だったんですよ」

「……」

その言葉で私は小さな間を空けてしまった。

「そうだね」

アリサちゃんの言葉は正しい。
姉を出すという意外性は確かに良い考えかもしれない。

でも、そういうことじゃなくて……本当に言いたかった言葉は。
私とかにも、相談して欲しかった。

アリサちゃんには相談して、私には何も無いなんて……。
秘密にしていた事よりも、その事の方が心にチクリと来た。

心の中に生まれた小さな嫉妬。

「……」

何故かアリサちゃんは困った表情を見せていた。
その表情の意味は解らなかったけど、何やら申し訳なさそうにしていた。

……そんな表情を見せるような弱々しい顔をしたのかな。
それでそんな顔をしてきているのなら、この子はやっぱり良い
子ではあるのかな……。

「水歩さん……私は、アナタの敵だと言いました」

「え？ う、うん」
なんだろう突然。

「実は私は……ヘーじさんの敵でもあります」
……え？ ヘーじの為に動いて、ヘーじを好きだと言っていたの
に、それでもヘーじの敵……？

「ど、どうゆうこと？」

「……詳しい事は言えませんが結局私は敵でしかありません、今回

は別の目的もあって力を貸しているだけです、私が無理矢理ヘーじさんを動かしたと行っても良いです、ヘーじさんの思惑がハッキリとは解ってはいませんが、水歩さん達が頼りないから、頼らない、何て考えがあるようにには思えませんでした」

これは……慰めてくれてる？

でも、敵とまで言った私を何で……。

「アナタがヘーじさんに対して落ち込むのは勝手ですけど……これからヘーじさんを支えられるのは貴方達です、そこらへんはサッサと踏ん切りつけて下さい。でないと本当にうちのリーダーに殺されますよ？」

……リーダー。

やっぱりこの子は一年生組みの人間。

ヘーじを殺すと言ったあの子の事。

やっぱり……キミは私だけでなく。

ヘーじや、そして結論的には縁ちゃんも敵でもあるんだね……。

その68. エスパ―少女の決心（後書き）

大変更新が遅くなってごめんなさいでした……

もう何度目の謝罪かわからなくなって来ました（笑

前回から萌え……じゃなく燃えに燃えまくった私は二本の短編小説を書いておりました。

モバゲー側で執筆。

そして昨日ついに完成！ 気分上々でその日は寝ました。
そして今日見に行ったとき……。

PC「パスワードが違います」

私（「！」？）……………??アレ??

PC「IDが違います」

私……………?（・谷・;）

奮闘中……

PC「携帯のアドレスが登録されていません」

私……………（´, |, 〃, ） ヅプ…（ ; |, 〃, ） クダラネエ
↑一瞬だけ強気

あああああああああああああああつあああああがあああ
あああああー！！

2 作文の小説を書くのにどれだけの労力を使うかお解り頂ける
うか……OTL

とてつもなく落ち込んでいる私でございました…

よっしガンバロ…

その69. 心を挟る言葉。私だって完璧じゃない。結局は人間。(前書き)

この子が完全に敵だと解ったんなら、なんとしてでもヘーじに伝えるべきよね……でもヘーじは今何処に？

朝っぱらからいないわけだし、そのお姉さん……かどーか疑わしいけどその人を通してみるのも手よね。

「……険しい顔してますよ？」

アリサちゃんの不安そうな声で我に返った。

「ア、アハハ！ 私がそんな顔するわけ無いじゃん！！ アハハ

……」

慌てて誤魔化す笑みを浮かべてもアリサちゃんの表情は曇ったまままだ。

……やはり簡単に教えて良い事じゃ無かったみたいね。さて、どうするか。

その時、制服のポケットが音を立てて揺れた。

私の携帯だ。

こんな時に何？

アリサちゃんに軽く手を挙げてから携帯を取り出した。

相手は……今覆面共に紛れ込んでいる私の部下。

「何？」

『やっと校長室に入れました！ しかしお二人の姿は無いようです！』

アー……まだ潜伏させてたまんまだっけ。

百合果ちゃんの間所も解ったし、もう良いんだけど。

「も良いよー大体の場所解ってたしー、折角の情報無駄骨だったけど悪いね〜?」

『そうですか! 流石は我等が情報屋!』
私の言葉に嬉しそうな声が返って来る。

「……そういうこつ恥ずかしい事言うの止めてってば」
軽く悪口言ってみただけど、この子には何も通じないらしい…
…。

『あ、それと小耳に挟んだのですが、百合果嬢の正体が解りました』
私は電話越しで軽く溜息を零す。

色々と遅い……。
「それももう解ったから」

『あれま、この情報は知らないと思ったんですが……』

先程アリサちゃんから聞いた。
彼女はヘーじの姉。

信憑性は低い方だけどアリサちゃんから聞いたんだから、百合果って人を知っているそれ以上はいないんだから信じざるおえない。
それ以上の情報だったら他の百合果って人との知り合いから聞き出さなきゃ行けないけど、アリサちゃん以外の知り合いは実際ないし……どうせ対した情報じゃないだろう。

『うーん……何せ裏庭で他の生徒が偶然に百合果嬢本人から口に出したという物でして……有力な情報だと思ったのですが……』

……え？ 本人自身からの？

「……聞いてみようか」

まさか本人自身の言葉があるなんて、これ以上ない情報じゃない！

『なんとあのヘーじ氏の親戚の方だったようです！ いやゝあんな美人な親戚が居て羨まし……』

ツピ

私はケータイを切るとポケットにしまった。

無駄な会話をする気はないのでサッサとケータイを切った。

普通なら酷いと思われるかもしれないが、この部下にはコレぐらい冷たいくらいで丁度良い。

ポケットにケータイを戻すと視線をアリサちゃんに向けた。

……おっかしいね。

「ど、どうしましたか？」

眉を寄せる私にアリサちゃんが不安そうな声を掛けてきた。

そんなアリサちゃんに私は探るような視線を向ける。

対してアリサちゃんは私と目を会わせないようにしていた。

アリサちゃんが言った言葉と部下から聞いた話の違い。

このアリサちゃんが吐いた嘘のメリットが私には解らない。

何故ならばメリットが全く思い浮かばないから……

別に考えれるのは、アリサちゃんは百合果って子の事をよく知らないけど取り合えずで答えた？

んー……違うな。態々答えた意味合い、『知らない』というより

は百合果って子と『打ち合わせをしていなかった』という方が考えられるかな？

これが二人の食い違いが生まれた原因。

そしてその食い違いは、お互い百合果って子の正体を明かさないうようにしている。

……着眼点は他にもある。

それはアリサちゃんも百合果って子も言葉は違えど、ヘーじの肉親である事。

多分打ち合わせをしていなくて、百合果って子の方でもどたはんばで言い出したことがここでズレているわけだし。

つまりは百合果って子の存在は口止めされていて苦肉の策で出た言葉が肉親であること。

百合果って子も、正体がバレたくなくて適当なことを言った。

肉親と言ったのもヘーじの友達関連だったらすぐに調べれば解るからだろう、咄嗟にしちゃ二人とも上出来かな？

だけど、肉親関係ってのもアリサちゃんの様子じゃ嘘っぱちだし……

友達でもなければ肉親でも無い。

ヒントはヘーじ関連なわけだし……。

ヘーじは会長に直訴しに行くわけで、だけど自分や自分以外の知人が言った所で門前払い……だからこそ入り縦で学校に日が浅いアリサちゃんを使ったわけだし、だったらアリサちゃんだけを行かせれば良いのに、別で知らない美少女を寄こした。

アリサちゃんが得体の知れない存在だというのは解るし、それを

踏まえての保健での自分が信頼出来る人物。

そして、私が知らないヘーじの信頼が厚い人物、だけど肉親以外。

……あー良いとこまで来てると思うんだけどなー！　ヘーじに聞くのが一番手っ取り早いのにー！　何でいないのよー！！

あ、何でいない？。

あ。　あー……

そこで理解した。

私の中で歯車が噛みあった。

その時アリサちゃんのビクビクしていた顔が溜息と共に諦めた表情に変わった。

私の顔は人が見ても解るくらいに核心的な顔をしていたのだろうか？

バレたくないって感じが如何にもね。

ほんと呆れるやら笑いそうになるやら……。

カラーコンタクトとウィッグで完全に騙されたわ。

多分化粧もしてるわね。

あのヘーじが……ぶふー！！

素質はあると思ったけどまさかアレほどとはねー？

正体も解ったしそろそろ本題にうつろう。

ヘーじの正体が解った事は笑い話で済むけど……アリサちゃんの言葉は冗談じゃ済まない。

その69. 心を挟る言葉。私だって完璧じゃない。結局は人間。

「それは警告？ 忠告？」

自分は敵であるという発言とは別にヘーじが殺されるなんて発言は黙ってられない。

「どちらもです」

アッサリとアリサちゃんはそう言い返してくる。

……アリサちゃんは一年生組みの人間であることを告白した。
でもその告白はアリサちゃんにとってプラスになることじゃない。
寧ろ裏切り行為にまで思えるくらいだ。

「そんな事言っていないの？」

アリサちゃんは私の言葉に目を伏せる。

「それはそうですけど……敵だろうと私はヘーじさんに死んで欲しくありません、敵なのに……そんな風に考えるのは変ですか？」

「……アハ、良いんじゃない？ 敵にも好かれるってヘーじらしいしね」

私は小さく笑いながらそう言った。

そう、ヘーじなら敵に好かれてもおかしくない。

何処までも相手に真正面から対峙するあの人は、普通の人から見れば只の口の悪い男だけだ。

何かしら事情のある人間には通じるオーラらしい物を持っている。

「やっぱり、ヘーじさんが死んじやったらイヤですよ」

「確かにね」

アリサちゃんは可愛らしく笑った。

その笑顔が、ああ本当にこの子は可愛い子なんだな、って認識させた。

「さて、ここで本題です」

「……？」

突然アリサちゃんの顔つきが変わる。

「今から私が言うことは、物語の最深部を突く部分かもしれませんが物語。私が良く使う比喩表現だ。

意味は今の状況。

そして状況の最後まで。

「まだまだ物語の最初の部分でしかない貴方達ですが、最深部を知っている私からすればあまりにも貴方達が不利過ぎます、ですから少しだけ力を貸しましょう」

普段なら私はまず嘘かどうかを疑う。

だけど、その瞳が嘘を言っているとは思えなかった。

本気で本気の瞳。

敵からの最大の答え。

ある意味物語の反則行為。

それを聞いてたら大分楽になるんだろうね。

私達が負けることも無いといった。

だけど。

「……いないよ」

私の口は自然とそう言っていた。

私の言葉にアリサちゃんの目が見開かれた。

「な、何故ですか？」

その未来を見たようになしたかな言い方は気に食わないね……。悪気が無いのは解ってる。

でもね。

先の事なんて解らないじゃない。

「ありがとね。それを聞いたら面白くなるから良いや」

そう言って私はウインクをして見せた。

そんな私の様子にアリサちゃんはポカンッと口を開いていたが、呆れたように失笑してみた。

「呆れた……そんな理由で耳を塞ぐ気ですか？」

少し攻撃的な言い方。

軽蔑が籠っているのがわかる。

「アッハッハ！　どう言われても結構だけどねエ？　アタシはスグに攻略本見るタイプじゃないんだアー？

考える事をつ楽しむの結果がどうなるか

悩むのを楽しむの。　どんなエンディングになってもそれを受け入れるの」

いつも通りの私と違いアリサちゃんは笑っていなかった。
それよりも何処か怒っている様子。

「……ッハ、ゲーム気取りですか？　いままでがそれで上手くいつ
ているか知りませんが、今回は遊び気分でしたら痛い目にあいます
よ？」

私はニヤツと嫌らしい笑みを向けてみせる。

「アッハッハ！　知らないの？　私『達』は、強いんだよん？」

「……」

黙りこむアリサちゃんに視線を送る。

折角の親切を存外にされたのがショックだったのかな？
でもこう言うしかない。

私『達』は反則なんてしなくても絶対負けないと信じているから。
ヘーじや縁ちゃん達と一緒になら、誰にも負けないと信じているか
ら。

最高で最強の無敵な仲間達だと信じているから。

その時アリサちゃんがこちらを向いた。

綺麗な瞳が私を見つめる。

まるで心を覗かれているかのような気持ちになって私から目を逸
らしてしまった。

「……失望ですよ少しは貴方の事を見直したのに、そんな事で大事な情報を見捨てるなんて……」

「そ、そんな事って……!」

私の思いをそんな事呼ばわりされたのがカチンと来た。

この子ならそんな風に言わないと思って言ったのに! ふざけたような意味かもしれないけど、何よりも私には、それは私にとって大事なことなのに!

「貴方は純粋な好意を持つ女性? それとも……タダの悪質なストーカー?」

ゾッとする瞳でアリサちゃんが私の顔を覗き込んでくる。

気圧された渡しは言い返すこと無く一步後ろに退いた。

「へーじさんを大事に思う気持ちぐらいは一緒だと思っていたんですよ、けどとんだ勘違いです。所詮『アレ』と一緒にのストーカーでしたか!」

「ス、ストーカー!?!」

だ、誰が!?! 私が!?! 私がストーカー!?!

「他に誰がいるっていうんですか。相手の為では無く自分の楽しみだけで聞くのを放棄したアナタですよ。私はもうアナタなんかにはヒントをあげる気はありません。お陰でへーじさんは死亡です、本当に馬鹿な人ですね」

「……ちょっと、言って良い事と悪い事があるでしょ?」

「言って良い事しか言っていないません」

……ヘーじが死ぬのは嫌って言ったじゃない。

なのに何よその言い方。

私のせいで？ 私がストーカー？ ふざけないでよ！！

「そんな事じゃヘーじさんにもいずれ嫌われますよ？ いえ、もう嫌われてるかもしれませんね！？」

「そ、そんなの何で貴方が知ってるのよ！！」

「そりゃ私は解るンですから仕方ないじゃないですか」

確かにこの子は突然真意を突くことをいうときがある。

だからこそ……だからこそ、私の心はその言葉で決れる。

「何処にでも同じ様なのはいるんですね？ 貴方が『アレ』と一緒にだとするなら私は二度と貴方達に味方する事は無いでしょう……ええ絶対に！」

怒りと嫌悪を込めた言葉が私に投げかけられる。

確かに彼女の助言は聞かないといったけど、ここまで怒るのはオカシくない？ そもそも『アレ』って！？

私も言い返そうとした時、暗い通路の奥から足音が聞こえてきた。ヘーじが来たんだ。

アリサちゃんも気づいたのか怒りを込めた視線を逸らすと、口を噤んだ。

私もそれに習うように仮面である笑顔を取り繕った。

それでも私の中ではアリサちゃんの言葉が渦巻いていた。

ヘーじに早くアリサちゃんが敵であることを伝えなきゃ行けない。だけど、それよりも。

ストーカーと言われた言葉が、嫌われていると言われた言葉が、

私のせいで死ぬと言われた言葉が。

……気になって仕方がなかった。

私はそんな憎悪の塊りのような存在じゃない。

私は……私はストーカーなんかじゃ無い……嫌われてなんかいいない……ねエ。

そうだよな？　ヘーじ……。

その69. 心を抉る言葉。私だって完璧じゃない。結局は人間。（後書き）

大分間が空いてしまいましたね。

何度目のごめんなさいか知りませんがゴメンなさいorz

今回でアリサとミホの話は一旦区切りです。

次からへーじたちも出ます。主人公なのに本当久しぶりな気がします……。

ミホだって年頃な女の子。

好意を寄せる男性の気持ち程気になるものは無いのかもしれませんがね？

その70.

縁達に追いつこうと暗い通路を急いでいた。

薄暗い中、先に小さな光が見える、もうすぐ追いつきそうだ。

出口と思わしきドアが見えた。

光はそこから漏れているらしい。

というかダンジョンみたいな通路にいきなり学校でよく見る引き戸のようなドアは違和感が凄いな……。

そのドアの両端に二人の少女がいた。

熱血少女とエスパー少女。

「百合果さん遅かったね。何を喋ってたんです？」

僕を見て縁は首を傾げて見せた。

確かにミホとは少し長話になってしまった。

「ん、ちよつとね」

適当にはぐらかしておく。

ミホのあの様子を態々教える事は無いだろう。

あの子は弱音を見せるのを嫌がる子だ。

とくに縁や志保ちゃん達の前では完璧でいたがるだろうし。

縁は更に首を傾げたけどそれ以上追求はしてこなかった。

……ま、僕が幾ら黙ってても隣の方のエスパー少女にはお見通しなんだろうけど。

そう思いながらもアリサの方に視線を向けた。

「……」

アレ？

何か言ってくると思ったのだが、アリサは目を伏せるだけで何も言ってこなかった。

……？ 妙に大人しい気がするのはいのせいだろうか？ この子の事だから変に茶化したりとかしてくると思ったんだけど。
……まア、いいか？

それよりも肝心なのはこのドアの先だ。

一体どこに繋がってるんだろう？ 駄目教師が3階に出ると言っていたけど、3階と言っても広い。この学校はどの階だろうと無駄に広い。

出来るだけ生徒会室と近かったら良いけど

「じゃ、行こうか？」

両端の二人声を掛けると共にドアに手を掛けた。

まばゆい明りに目が眩む。

久しぶりな太陽の光と蛍光の光。

慣れてきた目に最初に映ったのは。

生徒会室。

と書いてある標識であった。

め、目の前に出た？

「何か……すっごく都合がいい気がするけど」

縁も目を細めながら疑うように標示を見ていた。

全く僕も同じ事を考えていたんだけど色々都合があると解釈しておこう……おっとこれ以上は何も言えないな。

「何にしても結果オーライです、サッサと交渉に入りましょう？」

案外冷静なアリサが一步前に出た。

その時、アリサの表情が歪んだ。

何だろう？　と思ったのも束の間、原因はすぐに解った。

心が読めなくても直に耳障りな漢字で通してくる馬鹿共の襲来。

「発見んんんんんん！！　我等が女神はここにいたぞオオオオ！！」

通路の先から馬鹿でかい声が飛んできたのだ。

タイミングはバッチリ。

ああああ……。まさか目的地目の前であの馬鹿共に見つかることは……。

赤い覆面のリーダーと、白い覆面の。

とてつもなく嬉しそうにこっちに走って来ている。

「しっつこい！！」

縁が呆れと怒りを込めた声を零す。

ほんっとだよ。

目的地は目の前だったのに。

「あの馬鹿共の粛清はアタシに任せて下さい。二人は生徒会室へ行って下さい。寧ろそっちの方が安全でしょうし」

そういいながら縁は一步前に出た。

確かに流石の奴等も生徒会室には手を出せないだろうし元々の目

的地はココなんだから都合も良い。
だけど……縁は大丈夫なのかな。

「だ、大丈夫なの？」

一応聞いてみる。

僕の不安な声を一蹴するかのような笑顔で縁は向けてきた。

「大丈夫ですよ！　ヘーじの為にも宜しくね百合果さん！！」

二度、三度指の骨を鳴らして見せた後、颯爽と集団達に向けて駆け出して行った。

……ま、確かに縁が相手ならあれぐらいの集団大丈夫だろうし。
寧ろ僕達がない方が戦い易いかもしれないか。

あっちは縁に任せよう。

小さな不安を振り払いアリサの方に視線を向けた。

アリサは眉を寄せて険しい表情で集団を睨んでいた。

やはり心の声が負担を掛けているのか？

今から会長と交渉すると言うのに大丈夫だろうか……。

前みたい逃げ出す事は無くても、肩が小さく震えているのが解る。

「アリサ……大丈夫？」

心配になって声を掛けると、アリサは震える声で応えた。

「百合果さん……不味いですよ、異常に強い声が三つ聞こえます……」

「え？」

また大量の雑音で苦しんでたんじゃなかったの？

そもそもあの馬鹿共の雑音より大きな声が三つも？

「そ、そんな事ありえるの？」

「心の声はその人の感情や存在によって大きく変わります、そして……私達が今対峙しているドアの奥から大きな『心の声』が聞こえるんです」

沢山ある心の声の雑音を掻き消すほどの二つの強い心の声。

単純に言ってしまうえば……大物が二人？ 会長以外に誰かいるのか！？

「一つは酷く純粋な声ですけど……純粋に黒い色って感じです。多分、会長の方の声です」

僕に心の声は聞こえないけど、心の声というのはどうも言葉と一緒にその人の雰囲気も纏っているらしい。純粋な黒……成る程、あの会長っぽい解り易い比喻だ。

一人はやはり会長か。

「もう一つは曇りのような中途半端な灰色……雨でも晴れでも無い声です、まるで迷っているような……」

一体誰だ？ まず会長や部員以外がこの生徒会室に居る事自体稀なのに。

もしその人物が僕達の敵になる人物なら確かに不味いよね……会長一人との交渉のつもりがその見知らぬ人物のせいで悪い方に転ぶ可能性もあるんだ。

せめて誰か解れば良いんだけど。

「それ、心の言葉は何を言ってるのか解らないの？」

アリサが険しい顔をしながら首を振った。

「二つの声が入り混じって……言葉としては聞こえ辛いですね、後もう一人の声が大きすぎて……」

「そういや三人って言ってたね」

三人目は生徒会室の中にはいないらしい。
少しほっとする。

だけどその二人よりも大きな心で、生徒会室内以外から聞こえ辛くさせるなんて……一体何者なんだろう……。

「はい、何よりも一番うるさくて。雑音みたいにガヤガヤしてないんですけど、直線過ぎて何か気持ち悪い感じで……とても明るい輝いた声ですけど光が強すぎて目も当てられないと言いますか……声は今縁さんが向かった方からです」

……その表現は何となく誰か解ってしまっただが。

「ね。その声なんて言ってる？」

一応聞いてみよう。

違うかもしれない。違うと信じたい。

「……え言っているんですか？」

明らかに僕の方に同情のような視線。

ま、まさか……いやいや奴は縁が静めたし……。

「そのまさかです、同情します……」

最早目だけじゃなくて口で言われたアアア!!

あの馬鹿かよ! もっと凄い人かと思っちゃったよ!! 何か恥

かしいよ!!

「恥かしいとかどうでも良いですけど」

どうでもいいって言われた!

っていうか勝手に心読むな! 余計恥かしいわ!!

「取り合えずそっちは縁さんに任せましょうよ、私達は私達で頑張らないと……」

う、そ、そうだな。

縁の方も心配だけど。会長と誰か解らない人物相手に今から戦争するんだ。

気を引き締めないと……。

二度三度深呼吸した後、ドアに手を掛けた。
しかしそこで止まってしまった。

今から死刑部屋とまで言われた部屋にまさか自分から入る事になるとは思わなかったな……。

あの会長は多分頭だけでなく腕っ節もあるだろう。

腕っ節だけとか、頭良いだけーとかなら簡単に利用出来るんだけどなー。

今回の相手は両方を兼ねそろえている。

その上頭の回転まで速いと来た。

口だけの僕が何処まで対応出来るか……いやアリサも居るんだ、何とかなるはずだ!

あの会長を交渉出来るかは解らないけど……縁の為に、みんなの為に頑張らないと……!

意を決して手にかけてドアのぶに。

力を入れ『ようとした』

その前にドアのぶが回ったのだ。

慌てて僕は一步後ろに下がった。

こ、このタイミングで出るかア!?

ココで会長がどっか行ったら話なんて聞かないに決まってるじゃないか!!

何の為に態々あの胸糞悪い会長の根城まで来たと思ってるんだ!

また別の機会を狙う? 無理だ、っていうかまた追いかけるのは勘弁なんだよ! 今回で決めたいってのに……!

ぐるぐると頭の中でめまぐるしく言葉が回る。

そうこうしているうちにドアはゆっくりと開いて行く。

想定外だ! クソ!!

どうする! どうする!?

そんな僕の焦りも知らずにドアは開ききってしまった。

固まったまま、ドアの開いた先にいた者と目が合った。

「……え?」

僕の口から漏れた声は焦りでは無く驚愕であった。

開いた先に佇んでいたのは。

会長では無かった。

僕の口が答えを出すよりも先に、後ろに居たアリサが答えた。

「悠馬君……」

そこに居たのは銃刀法違反男。

特徴である刀を手に持ち、鋭い視線が僕達を睨んでいる。

何でお前が？

会長とは敵なんだろう？ 何故この部屋から出てきたんだ！？

あまりにも想定外で。

「いやいや想定外過ぎるって……！」

その71. 良い子なんだって。きっと悪いやつじゃないんだって

銃刀法違反男の視線が固まっている僕とアリサに向けられる。

こいつは一体なんているんだ!?

わ、わけが解らない!

ここはあのクソ会長の巣窟。

そんな所に天敵と言っても過言じゃない悠馬が居るなんてありえなさすぎる!!

良い具合にテンパってる僕に、困った顔でアリサが耳打ちして来る。

「落ち着いて下さい、貴方も似たような事してるんですから」

あ、そうか。

僕も会長の天敵に変わらないのに巣窟に突っ込もうとしてたんだっけ。

うん……人の事は言えないな。

って! そうじゃ無くて!! 妙に対応し辛い突っ込みしないでくれない!?

「私が心読めるからって心の中で突っ込みしないで下さいよ……良いですか? ヘーじさんは変装してるんですから、変に動揺しないで下さい。悠馬君は勘が鋭いので喋らずやり過ぎましょう」

で、でも、今でもアリサが僕にがつつり耳打ちしてんの見られてんだから既に遅くない? あの銃刀法違反、解り易いくらい疑った視線ぶつけてるよ!?

「……確かに耳打ちは不味かったですね」

その言葉も耳打ちされてもオオ！ 君は行動がワントempo遅いよ！！

「大丈夫です。任して下さい！！」

そう自信満々な声を返すとアリサはゆうまと向き直る。

だ、だいじょうぶなのか？ だけど確かに変に僕が喋って存在が露見してしまうよりも同じ一年生のアリサに任せた方が得策かもしれない。

「こんにちは悠馬君♪ 何でこんな所に居るんでーすか？」

甘ったるい猫なで声が悠馬に向けられる。

一年生のキャラの中でもそんな感じなのか君は。

「……お前こそ何をしている。今は授業中だろう」

低い声がアリサに向けられ、疑いのような目は変わらない。

「アハ♪ それこそお互い様ですよー？ 不良のクセにそんな事考えなくても良いじゃない？」

まるで逆撫でするかのような発言に寒気が走る。

お、おい逆上して攻撃して来たらどうするんだよ！！ 日本刀持ち歩くような奴だぞ！？

恐々と見ている僕とは裏腹に飛び切りの笑顔のままのアリサ。

僕の予想とは違い、悠馬が逆上する事は無く寧ろ小さく微笑んだ気がした。

「ああ……確かにそうだ」

悠馬の表情を僕は恐怖の視線から驚きの視線に変わっていた。
この男は、笑うんだ。

会って以来険しい顔や仏頂面しか見ていなかった気がしたけど…
…。

前にも。今と同じような気持ちはこの男に感じたことがある。

それは二度目の出会いで保健室の時。

仲間を保健室まで運び、仲間を傷つけた物に対して純粹に怒っていたあの時。

この男は、やはり良い奴なのか？

「その人は？」

悠馬の視線がアリサから僕に移る。

「あ、えーと……こ、この人はー、その」

明らかに動揺したような言葉を吐くアリサ。

任せとけとかいつときながらこれかい……やはりこの子は嘘が苦手なのか。

戸惑っているアリサの変わりに僕が口を開く事にした。

「始めまして。百合果と申します、アリサとは仲良くさせて貰ってます」

礼儀正しく悠馬に一礼してみせる。

喋るなど言われたけど、ある意味これはチャンスでもあるかもしれない。

アリサが今こちらの味方なら悠馬が何で会長のとこに居たか心を読んでもらおう。

僕が喋ってどう考えているかを誘導させるつもりだ。

どうせ今考えている事もアリサには筒抜けだろう。

今は悠馬の方に視線を向けているからアリサの方は見れないけど

何とか解ってくれるだろう。

「この学校に通っている生徒の親戚です。ここの生徒会の会長に聞きたい事があって学校にお忍びでこさせて貰いました。案内してくれる筈だった親戚の子が来れなくなったので知り合いのアリサちゃんにお願いした次第です」

完結に、びみよくに信実味を加えて早口で説明を終わらせる。

ここまで明確に説明すれば聞く事は無いだろう。

「……アリサに学校外の知り合いがいたのは知らなかったが、この会長と話すのなら気をつけたほうが良い、危ないから」

あれま。

見知らぬ人間の心配までしてくれたよ。

こんな良い子なのに何で僕の命を狙うんだろう……？

「ありがとうございます。そんな危ない人に貴方はどういった用事だったのですか？」

「……ええ、ちょっとね」

ここだ。

やはり口にはしなかったが悠馬の脳裏には何故来たかが浮かんでいる筈だ。

アリサに後で聞けばこれで解る。

「それでは、私達は失礼します」

そういいながら僕は軽く会釈してみせる。

これ以上無駄な喋りは止めておこう。

何処でボロが出るか解ったもんじゃないし。

合わせるかのように悠馬もお辞儀を返す。

アリサも慌てて軽くお辞儀をして見せていた。

それを見て、悠馬はツフと小さく笑ってみせると僕達から離れていく。

手に持っている刀は未だに怖いけど、アリサに見せた表情には温かさがあつた気がした。

「……へーじさんの考える通りです、あの人は仲間に対しては優しく心で接します。風紀委員や生徒会では敵視されていますが私や同じ一年生の中では慕われているんです」

アリサは後姿の悠馬を見つめながら少し悲しそうに溢す。

やはりあの子は悪いやつではないらしい。

それでも僕に対する恨みは解らないし、縁の敵であることには変わらない。

「ええ、そうですね。相手の中身が解ったところで戦いが終わるわけではありません」

アリサの言葉はどこか齒痒そうに聞こえた。

お互いが正しければいがみ合う理由なんて馬鹿馬鹿しいと考えるのかもしれない。

心が読めるからこそ、どちらも嘘をついていないのが解るから。

「……うん」

僕は言葉に出さずに小さく、それだけ答えた。

こんな所でそんな話をしたところで自分しか正しくないと思っている男との交渉に役立つわけではない。

敵地の巣窟であるドアに手をかけると、ゆっくりと開けた。

あ、何で悠馬がココに来たのかアリサに聞いてないや。

瞬時に僕の心を読んだアリサがそっと耳打ちをしてくる。

「……もしかしたら私が言わなくてもスグに答えはわかるかもしれないです」

……？ どういう意味だろう？ まあいいや。

取り合えず今は頭でっかちの会長との戦いが優先だ！

その71. 良い子なんだって。きっと悪いやつじゃないんだって（後書き）

ハッピーニューイヤー私。

とうとう20才を迎えてしまいました。

さよなら10代。始めまして20代。

この小説が終わる頃は一体幾つになっていることやら……

それはそうと皆さん地震は大丈夫だったでしょうか。

私の所は何とか無事でしたが強いて言うならネットが暫く触れなかったくらいです。

被災地の方は大変かもしれませんが頑張ってくださいしか言えないのが菌痒いです。

今出来る事は募金と省エネと献血くらいだと思ってます。

そんなことしか出来ませんが、無事をお祈り申し上げます。

その72. 最強女子高生十武器

「うりゃアアアア！」

気合を込めた掛け声で変態覆面を一人蹴り飛ばす。

「ありがたき幸せエエエエ！」

悲鳴？ と共に覆面が吹っ飛んで行く。

だけど覆面達はまだワラワラと居る。

こいつ等アタシ達が見た時より数増えてない！？

ジリジリと覆面達が近づいてきている。

手つきがイヤらしい気がする……。

先頭のリーダーと思わしき赤覆面が（多分）ニタリと笑って見せる。

「フッフッフ！ 縁ちゃアーン？ 諦めて道を譲るんですなァ！」

「誰が譲るか変態共め！！ 百合果さんには指一本触れさせないわよ！」

とは言っても人数が多いのは確か、変態共が私自身に向かってくるなら血祭りにあげるのは簡単だけど。

変態達の目的は百合果さんだ、スキを突いて抜こうとしてくる。

案の定廊下一本だから多少は助かるけど……一気に詰め寄せられたら厄介極まりない。

今はその瞬間を狙っている感じだ。

中々厄介ね……せめてもうちょっと廊下が狭いか、リーチのある武器があると良いんだけど。

そんな風に考えていると、後ろから歩く音が聞こえた。

……ッ！？　嘘後ろから！？

慌てて振り返ると、そこに居たのは無愛想な銃刀法違反男。

「……アンタ等何してんだ、そんな所にては道が通れないだろーが」

最もな意見がアタシに向けられる。

っていうかアタシだって好きでシナな事してるわけじゃ無いわよ！！

「うっさいわねー！！　通りたかったらこの馬鹿共どっかやるの手伝いなさいよ！！」

前の変態共にも意識を向けながら不良一年生に悪態を付いてみせた。

そんな私に、不良一年生は肩を疎める仕草をしてみせる。

……何かコイツ。

こういう所はヘーじに似てるかも。

「……やだね。俺は風紀の奴に味方する気何か無い」

悪態の付き方まで似てる気がしてきたわね。

だけど今はコイツにかまってる暇は無い。

「期待してないわよ」

この男と敵対しているのには変わらないんだし。

味方をされても寧ろ困るっての。

悠馬は軽く鼻をフン！　と苛立ったように鳴らして見せた後、近くの壁にもたれながら座り込んだ。

「速く終わらせてくれよ熱血バカ女」

「……アンタ。先にぶっ飛ばすわよ？」

あまりにもフザケタ態度にカチンときてしまう。

目の前の馬鹿共がいなければ問答無用でぶっ飛ばすのに！　って、今は戦っちゃ駄目ってヘーじと約束したんだっけ……。

胸に残るモヤモヤに苛立ちを覚える。

そんなアタシを見て何を思ったのか知らないけど、悠馬は軽く立ち上がった。

何よ……やっぱヤル気？

そんな身構えるアタシなど気にしない様子で悠馬は口を開く。

「フン、ぶつとばされるのは勘弁だな……手を貸す気は無いが……これぐらいは貸してやる」

そう言いながら悠馬がアタシの方に向かって何かを投げて見せた。反射的に受け取ったそれは。

刀。

悠馬がいつも持っている刀だった。

「コレ、良いの？」

ついマジマジと刀を見つめてしまう。

っていうかおっも……やっぱ本物なんだ。

模造刀の可能性もあったけどまさか本物の銃刀法違反だったとは。

「アンタならそれあったら十分だろ？」

それだけ言うと悠馬は視線をアタシから外し、またズルズルと壁にもたれて座り込んだ。

……前にも思った。

この男は、やっぱり良いやつなのかも知れない。

「ありがとう！ 使わせてもらうわね！」

フン、とまた悠馬が鼻を鳴らしたのが聞こえた気がした。

再び変態達と対峙する。

今度は武器を持って。

柄を抜くと、刃がギリリと光る。

それを見て威勢の良かった覆面達がたじろいでいた。
代表するように赤覆面が震える声を溢す。

「ゆ、縁ちゃん！ 女の子がそんなの持ったら危ないでしょー！
どうせ使えないんだからしまいなさいよォ！」

使えない？ 誰が？

赤覆面の言葉にアタシはニタリと笑う。

「アタシの家じゃー長刀、弓矢、刀にヌンチャク何でもござれ！
衛生教育の金持ちお嬢様舐めんじやないわよー！！ アタシに使えない武器なんて無いのよー！！」

「ど、どんな衛生教育ー！？」

へーじがない分、赤覆面が突っ込みを返してくれる。

「金持ちお嬢様って……恐ろしく似合わない言葉だな……」

後ろからも冷めた感じの突っ込みがくる。

不良一年め……あの男は一言多いのよー！！

アタシは慣れた手つきで刀を構えると変態達を一瞥する。

勿論刀の向きは斬れる方向で。

まアあの変態達だし死にゃしないでしょ。

変態達は見事にびびってるけど。

「ツク！ 後方射撃！」

赤覆面がツバ！ と手を挙げると後ろから銃エアガンを構えた覆面達が勢ぞろいしていた。

また学校に玩具持ち込みやがって……

「ウハハハハ！ 近づかなければ良い話よオオー！」

悪者くさい言い方と共に赤覆面が手を下ろす。

同時に覆面達が引き金に指を掛けた。

……変なところで協調性のある軍隊ね。

そんな事に使うならチーム系統の運動部にでも入れば良いのに……

……と軽く覆面達の馬鹿さ加減に溜息を零す。

「馬鹿なりに良い考えだと思っけど……」

アタシに向けて銃弾が放たれた。

「そういう悪役っぽい台詞は、負けフラグってのよ？」

再びニタリと笑みを零しながら刀を空中で何度か振ってみせる。

ブンブン！ という刀が空を切る音が響く。

そして私の周りで破片が舞った。

放たれたBB弾に向けて刀を振り下したのだ。

飛んで来た全てのBB弾に、だ。

一瞬空気が固まった。

固まっている覆面達。

慌てて我に返った赤覆面が再び掛け声をかける。

「まぐれだ！　う、撃て撃て！！」

焦ったようにエアガンを持つ拳銃部隊がアタシに向けて銃弾を飛ばす。

私はもう一度刀を振る。

キンキンキンキン！　と刀がBB弾に当る音が響きわたるのに合わせてアタシはクルクルと回る。

十数人が飛ばしてきた玉をアタシは逃さずに切り落とす！
回りながら次々に飛んでくる玉を落としていく。

パラパラと砕けたBB弾がアタシの周りで舞う。

銃撃音が止まるのと共にピタ、と回転を止めると刀を覆面達に向けて見下すように笑って見せる。

「近づいてなくても無駄なのかしら？」

そんなアタシの姿に赤覆面は覆面から覗く目を大きく見開いていた。

「ん、んなアホな！」

赤覆面が何故か関西弁になっている。

覆面達も動揺が隠せて居ないらしい。

「ま、まるで踊っているようだったぞ！　美しい」

「何て恐ろしいお方なんだ！」

「流石我等が縁様！　そこに痺れる憧れるウ！」

「刀がまた似合うなア　ふつくしい！！」

赤覆面が慌てた表情で怒声を発する。

「き、貴様等どっちの味方だよ!!」

「どちらかと言えば縁様」とか「普通美人の味方だよなア」とかボソボソと覆面達から聞こえる。

……やっぱチームワーク無いかも。

「つゝゝゝ! ええい! 撃ち続ければ彼女が近づく事は無い!! 体力を減らすんだ! 撃て撃て撃てエー!!!!」

「イエスもて隊!」と相変わらずダサイ掛け声と共に再びアタシに銃が向けられる。

男達が再び引き金を引いた。

「発想は間違っていないけど、アタシ相手にはちょーつと安直なんじゃない?!」

再び飛んでくる拳銃に合わせて舞うように刀を振るった。

銃弾が再び弾き返される。

しかし、先程とは違う。

銃弾は飛んできた方向へ帰っていく。

「?!」

撃った玉がそのまま銃口に帰したのだ。

ガツン! ガツン! とそこらじゅうで銃口が妙な音を立てている。

「た、隊長オオオオ!! 玉が詰まって銃が使い物になりませんんんん」

「なななななななな! ? 銃弾を全て同じ銃口に向けて弾き返

したというのか！？　なんっつー人間離れナナナナ！！」

刀を構え直し、アタシがその言葉にムッとしてしまう。

「アタシは普通の女の子だっての！　ただ風紀委員に熱心なピチピチ女子高生を化け物みたいに呼ぶんじゃないわよ！！」

後ろの一年生から「っつーか化け物だって言ってるだろうよ……」なんて言葉が聞こえたけど無視！

なんにしても形勢逆転！

うろたえている赤覆面の様子を見るとあまりにも予想外だったらしい。

策はエアガン頼みだったのか何かしてくる様子は見えない。

この通路の広さでの、この刀の長さ！　誰も通させないし誰にもやられないわよ！　アタシが負ける要因は……無い！！

「変われ」

その時、聞きなれた声がした。

覆面達を押しつけてぬつと出てきた大男。

「テメー等じゃ武器持ったアイツ相手にすんのは無理だ」

その男をアタシは良く知っている。

覆面達はその男が出てくるのに合わせて場所を作るかのように何歩か下がった。

アタシの余裕を見せていた瞳は自然と鋭くなる。

刀を構え直し真っ直ぐに相手を見据えた。

アタシが何か言う前に赤覆面が大男の名前を呼ぶ。

「サ、サク」

「よう縁、退く気はネエよな？」

「……馬鹿兄貴」

気安く挨拶をしてくる兄貴に吐き捨てるように言葉だけ溢す。
今日のこの男は一味違う。

いつものふざけたオーラが見えない。

この男と本気の本気で殺り合うのは今回で二度目かな。

無敗のアタシが始めて負けた男だ。

……あの時の事は感謝してるけど勝負としてなら思い出すだけで
負けず嫌いなアタシをイラつかせるだけ。

……落ち着け。

刀を肩に乗せて首を軽く鳴らす。

それにあわせるかのように兄貴も指を鳴らしている。

「……アンタ武器有りのアタシに本気で勝てると思ってんの？」

「寧ろ丁度良いハンデだろーがよ」

「言うじゃない」

やっぱり明らかに雰囲気が違う。

裏庭で戦った時も正直長引いていたらどうなっていたか解らない。

……弱気になるのは止めよう！！

「かかってきなさいよ！ アンタの愛なんざ駒斬りにしてやるわよ！」

「俺と百合果タンのバーニングロードの邪魔すんならぶっ殺すだけだゼエエエー！」

何を言っているのか解らないが、怒涛の叫び声を挙げる兄貴に若干気圧される。

兄貴の後ろの方で「バーニングロードってヴァージンロードの間違いっすかね隊長！」「そんなダサい間違い流石のアホサクでもやらんだろー！ きつと意味があるんだって、アッチアッチの道を歩きたいなー、的な」等と言う可哀想な感じの突っ込みが入っているが兄貴の耳に入っているのだろうか……。

「ヴァージンロードを邪魔する奴はぶっ殺すだけだゼエエエー！」

っ言い直した！？

聞こえてたんだ。

叫び声を挙げながら兄貴がアタシに突っ込んでくる。

「恥かしかったんだ！ 素で間違えたんだ！！ ダサ！ ダサー！」
覆面達のどよめき等最早兄貴にはもう聞こえて居ない様子。

これ以上恥を欠かない為なのか百合果さんの愛のせいか切羽詰った感じの表情をしている。

……両方かな。

アタシは刀を構えなおす。

「さア！ 来い！！」

その72. 最強女子高生＋武器（後書き）

相も変わらず遅い更新です。すいません。

他の小説は友人（絵担当）と共同ですのもうちよつと出来た出して行きたいなア。

その73. やっぱいよ、女装してから悪い事しか起こってないよ！

僕男なんで

生徒会室には始めて入ったと思う。

奥にもう一つ部屋があるのか、隅にドアがある。

それ以外は長い机の周りを幾つかの椅子が綺麗に並んでいるだけ。
汚れ一つ無いってのも逆に気味が悪い物だな……。

いや、寧ろ殺風景過ぎるイメージの方が強いかな？

あの潔癖症の部屋だといっってしまうえば気味悪さも増大だ。

「……今日は客人が多い」

長椅子の一番奥から声が飛んできた。

そこに居たのは『あの男』

会長……。

「メンドクサイ男が来てイライラしていた所だったが……こんな綺麗な女性が二人も来てくれるなら今日は良い日だ！！　ようこそ

！　お二人さん！」

おもてつきックス

表面全快のクソ野郎。

分厚い銀縁メガネ越しの瞳が笑って居ない事はお見通しだ。

……ここが正念場だ。

「始めまして会長さん、貴方に頼みがあってきました」

暗がりの中、会長はニコツと微笑んでくる。

「ええ、何でしょうか正体不明のお嬢さん？ 名前は百合果さん……でしたか？」

げ。正体不明とか、バレてるし。

スグ横にいる亜里沙ちゃんが小さな声で話しかけてくる。

「ヤバイですよ……会長さんにモロバレです。女装がバレてないのが救いですね」

心を読むこの子がそう言うのだからそうなのだろう。

女装がバレたら今の状況だけでなく僕の人生も終わる（泣）

「……だ、大丈夫です可愛いですよ！」

だから勝手に心読むなって！

後フォローになってないよ……。

「ふむ、校内が現在騒がしいのは貴方がたのせいだと聞いている。本来なら早々に立ち去って頂くつもりだが……私によろしいのでしたら話だけでも聞きましょう」

固まっている僕達に会長は優しく話しかける。

あれま。コイツ以外にフェミニストか？ コイツは女でも容赦無いイメージあったんだけど。

「話聞いたら連行するのでそのつもりで」

うわ容赦無かった。

イメージ通りだよ、とんだ鬼畜眼鏡だよ。

「……考え通りでしたね」

一々心に返答するの勘弁して。

「後、鬼畜眼鏡ってもう古いんじゃない」

止めて！ 心の中の恥かしい台詞に突っ込むのは止めて！ 顔真
つ赤で泣きそうになる！

本当厄介だなその力！！！！

「所でそこですっとボソボソと独り言を溢している一年生女子、君
は何かようか？」

「え！？ わわわわ私ですかア！？」

ほれ見ろ見つけた。

俗に言う授業中に私語した的な感じ。

本来ならほっとくのだが、この子がいないと会長から優勢権を取
れる気がしないからな。

会長は、一番読めない人間だ。

今この子がここから消えるのは勘弁願いたい。

「この子も私と同じ内容です。結論的に言えば私達二人のお願いだ
と思って下さい」

「え、えーっと！ あの、そ、そうです、そう！」

適当に合わせるにしても合わせ過ぎじゃないかな亜里沙……。

「……ま、いいでしょう。で、話とは？」

妙に素直だな……？

「単刀直入に言いますと、ヘーじという少年の支援です　ヘーじはご存知だと思っています」

「……ほう？」

会長が肩眉を上げて見せる。

それとは別に亜里沙は驚いたように僕を見ていた。

まさかここまでハッキリと言うとは思っていなかったのだろう。

だがこの男は回りくどい言い方をして無駄だ。

心が読めるなら僕の考えも亜里沙に伝わる筈だ。

亜里沙には上手くやつてもらわないと……！

亜里沙は小さく頷いてみせる。

厄介だけど味方になれば頼もしい力だな。

「あの男の回し者か……フン、それを聞いて私が支援してくれると思っっているのですか？」

ヘーじで来ても聞く耳持たないだろうから態々恥かしい格好したんだよ……クソ会長め。

「ええ、確かに私は部外者で、あの子に頼まれて、貴方に相談しに来ました。ですがこの意見がこの一年生女子の者でしたらどうでしょう？」

そこで亜里沙に目配せを送る。

同時に会長の視線が亜里沙に向く。

僕の脳裏を読んでもくれる亜里沙は瞬時に対応してくれたらしく、
ゆつくりと口を開いた。

「はい、これは一生徒である私の意見でもあります。生徒会長として生徒の意見は尊重し出来るだけ叶えるのが勤めではありませんか？」

上手く返してくれた。

生徒会長としての肩書きを盾にすれば、取り合えず生徒の意見を受理しなくてはいけないだろう。

やるかやらないかは別として、だ。

「確かに意見を尊重するのは私の仕事だな……ふうむ」

考える素振りでも何も言わない会長に、僕は亜里沙の後に続ける。

「へーじ一人で何らかの行事を作り出すのは正直不可能でしょう。ですが生徒会長なら話は別です。行事の内容などはこちらに任せて頂き、その後ろ盾になって欲しいんです」

「敵対する相手の手伝いなんてオカシイのは解ります、ですが考えてみてください、会長さんも正々堂々と戦って周りに見せ付ける事には賛成していると聞いてます。それに個人的な意見としてですが三竦みの戦争はサッサと終わらせて一般的な学校に戻して欲しいです。会長さんも現在の三角関係の戦争状態は大変苦労していると聞きました」

亜里沙も付け足すように続けてくれる。

会長の心に何かを見たのかもしれない。

「別に私たった一人の意見でもありません。争いに巻き込まれる一般生徒を代表して言っているんです、その証拠は会長さん自身が先程知ったはずです!」

……? その亜里沙の最後の言葉は初耳だ。

この男が巻き添えを食うたかが一般生徒を気に掛けているとは思えない。

僕は心が読めるわけじゃない。

ココは亜里沙に任せるか。

「……何処で知ったかは知らないが、確かに悠馬一年生から十数人ばかりの署名を先程渡された。これだけの人数がそういった支援を望むなら私も動かなければ行けないだろう」

何だって? あの悠馬が態々? これは……幾らなんでも都合が良すぎないか!?

亜里沙がここに入る前に言っていたのはコレだったのか。

っつーか結局言うなら教えてくれても良かったのに。

どこの天邪鬼だよ。

「だとしたらやってくれるんですね!？」

不振に思う僕など知らずに百合果は顔を輝かせる。

しかし会長の表情は否定させるような嫌らしい笑顔を浮かべる。

「いいやア? それは私の思い一つだ。結局何も出来なかったあの男の尻拭いなんてゴメンだ。そもそも私はあの男の敵で、あの不良

の親玉の敵だ、何故あいつ等に加担する？ 馬鹿馬鹿しいと思わないか？」

「そ、それは」

言葉を濁す百合果を会長は嬉しそうに見ている。
相変わらず性格が悪い野郎だ。

ッ……流石に上手いかないか。

男の言ってることはごもつとも。

悠馬の都合の良すぎる準備があってもこのザマだ。

「で、でも会長としての仕事としてなら仕方が無いのでは……」

諦めずに百合果が食いつく、だが言葉に力はない。

自分でも厳しい状況であるのは解っているようだ。

しかし嫌だろうが僕達が来た理由は成功させなければならない。

会長の言葉に間違いは無いが百合果の言葉にも間違いは無いんだ。

わがままで生徒会長の仕事を通るはずが無い。

嫌でも仕事はして貰う！

「生徒会長として、その意見は不振なものとして見せて貰った」

僕が何か言う前に会長が口を開いた。

「え？」

百合果が小さく声を溢す。

そんな理解が出来て居ない百合果とは別に僕は心の中で舌打ちする。

先手を打たれた。
つくづくムカツク男だ……！

「……生徒会長として全ての意見を聞き入れられるわけが無い、悪質な意見だってあるだろうし……会長の自己判断でその意見を悪質かどうか判断し受け入れるか決められるってところですか」
僕の言葉に会長はニヤツと笑う。

「そ、そんなのあるんですか？」
亜里沙の表情は固まっていた。
そんな方法で返されるのは予想外だった様子だ。
実際僕もソレは予想していなかった。

心が読める亜里沙がこの会長に対して対応できていないのは、多分この男が考える事をせず瞬時に言葉を返しているからだ。
対応力の速さはやはりクソ野郎でも頭の良さが伺える。

会長が僕達に向けて勝ち誇ったような笑みを向けてくる。
「まアそんな所だ。オツムの悪い一年と君は違うようだ」
喋り方が突然攻撃的になった。
ドS会長はもう我慢出来ないらしい。
クソ変態め。

「ッ……」
会長の言葉に百合果の表情が強張る。
僕の服の裾をキュツと掴んでくる。
確かこの子は、嫌でも人の悪意が頭に流れ込んで来るんだよな。
まずこの男と対峙している時点でどれだけ酷いことを頭に叩き込まれているんだろう。

……怖いだろうに。

そんな子の心を殴りつけて。

言葉でまで殴りつけてんじゃネーよ。

そう考えると、僕の中のイライラが一気に跳ね上がった。

「……そうかしら 貴方の頭に比べれば亜里沙の方が1000倍マシよ？」

僕がそう言った瞬間、会長から笑みが消えた。

「ゆ、百合果さん？」

亜里沙が僕の方を不思議そうに見つめる。

「……君は賢いイメージだったんだが？」

会長の瞳がギラつく。

ヘーじであった僕に良く向けていた目だ。

だがそんなものには屈しない。

毎度の事ながら僕はキレやすい若者なわけだ。

「賢いわよ？ 人を見抜けないクソツタレな貴方より10000倍くらいね」

「……女だったら手を出さないと思ったか？ そういえば私の嫌いな男と似た目をしているよ貴様」

会長が椅子から立ち上がる。

う、ちょっと怖い。

だけど、それでも僕は意地っ張りで皮肉屋で天邪鬼で。

恐怖よりもソレが優先される頑固ものだから。

「天下の会長様が女の子にちょっと言われただけでキレるなんて貴方の方がよっぽど不良っぽいわよ！ 貴方みたいのが生徒会長？ 全く世も末ね」

僕の言葉に会長の眼鏡越しの瞳がみるみる鋭くなって行く。

「……交渉決裂だな、私に対してそこまでの口を吐いて意見が通ると思うなよ」

「ちょ、ちよつと百合果さん！？ 私達が来た意味が無くなりますよ！」

慌てる百合果の言葉は聞こえていたがここまで来たらもう遅い。

「良いのよ、こんな奴の力を借りようなんて思ったのが端から間違いだったのよ帰りましょう」

来た意味は無くなってしまったが、もう色々遅い。

亜里沙には申し訳ないが、僕自身もこの男が虫唾が走るほど嫌いであり、いい加減我慢の限界だった。

今はこの男の顔を見ているのも嫌だ。

踵を返しドアの取っ手に手を掛けた。

ガチャ。

「……？」

開かない。

開くことを否定する金属音がするだけ。

ここから入ってきたのに何で？

「クク、私に対してそこまでの暴言を吐いたクセに簡単に逃げれると思うなよ」

振り返った先に会長が気味の悪い薄ら笑いを浮かべている。
手にはなにやら小さな箱のようなものを持っていた。

「生徒指導を兼ねているココは指導中に不良が逃げ出すことがあつてねエ？ 態々遠隔操作が出来る鍵を作って頂いたんだよ、凄いでしょ？」

「……ツハ、性格の悪い貴方が好きそうな装置ね」

口ではそう言いながらも状況が不味いことは理解する。
つつーか本当にスゲーや。

「ゆ、百合果さん……マズイです」

不安な声を溢す亜里沙は僕にぴったりとくっついてくる。
不断なら喜んでもおかしくないけど、そんな状況では無いらしい。
亜里沙の口から嫌な言葉を聞く。

「さっきまで気づかなかったのに……奥の部屋にもう一人います」

エ！？ マジデ！？

亜里沙が僕にそう溢すと同時に、奥のドアが開いた。
ドアから出てきたのは180程の大きな目の男。

「つアー……ヤベエまた授業さぼっちゃまった」

先程まで寝ていたのか男は眠たそうに目蓋を擦る。

「また生徒会室を昼寝に使っていたな浅井^{あらい}」

会長が呆れたように男の名前を呼ぶ。

「しかたねーだろォ？ テメーが生徒指導で不良ばっか寄こすから疲れてンだよ、無防備だろうが殴るってのは疲れるンだゼエ？ たまには可愛い子でもよこしやがれ……ん？」

そう言った後、浅井が僕達に気づいた。
みるみると眠たそうな目が嫌らしい瞳へと変わる。

「フン、丁度良かったな、この女二人を指導させようと呼ぶところだった、手間が省けたな」

会長の言葉に亜里沙の表情が強張る。

会長と浅井の心が読めたのかもしれない。

真っ青になっている。

何が聞こえたのかは解らないが、浅井という男とクソ会長の様子だとあまり良い事が聞こえたわけでは無いのは解る。

「おいおい、二人とも上玉じゃネーか！ 良いのかよオイ」

汚らしく舌なめずりをする男の視線から守るように亜里沙を抱きしめる。

手の中で亜里沙の震えが増していく。

「ああ、スキにしろ」

そう言った会長の声は嬉しそうに聞こえる。

「その男も生徒委員！？ ふざけるのも大概にしなさいよ！」

強気で言葉をぶつけるも状況の打破に繋がるわけは無い。

それが解っているのか会長の表情は嬉しそうに広がっていく。

「ああ、とても優秀な男でな、指導はこの男に任せている。お陰で

不良は沢山減ったよ、まア偶に始末書があるのが残念だが……女問題が酷くてな」

その言葉は完全にコチラを脅しているように思えた。

浅井という男が居るのに気づいていれば対処も出来たのに……眠っていたから亜里沙の力も及ばなかったのか。

相も変わらず都合が良すぎるぜおい！

亜里沙ゴメン……僕の先走りな行動のせいだ。

「ではココは任せたぞ。私も奥にいる。まア、私が見て居ないからといってやり過ぎるなよ？ 見えなかったら注意の仕様も無いしなア」

そう言って会長は笑いながら奥の部屋に消えていった。

「ああ、見えない範囲で楽しませてもらうぜえ！」

そう言って僕達二人を嬉々として見つめる浅井。

クソ……鍵閉められてるんじゃ出ようが無いし。

せめて女の子の亜里沙だけでも守らないと……っていうか僕は男なんだぞ！？ 何が悲しくて男に襲われるような状況にならにや行かんのだ！

「ゆ。百合果さん……今はそんな事考えてる場合じゃありません……あの男は私達を襲う気です……た、多分良い内容では無いと………思います」

途切れ途切れで男の考えを伝えようとしてくれる亜里沙。

「良いよ亜里沙、態々状況伝えなくても大体予想つくから、今はアイツの声が聞こえないように頑張るんだ」

「へ、へーじさんの強い心の声が聞こえるから……大丈夫……です」

言っている意味は良く解らないが強がりだ。

そう言いながらも顔色が酷い。

そう言えば亜里沙はどんな思いだろうが、強い思いで向けられた言葉はその強い分頭に響くんだっけ。

じゃああの見るからに変態っぽい男の嫌らしい考えが亜里沙に響いているわけか。

アイツが出てきてからだよな。顔色が一気に悪くなったのは。

会長よりも悪意の塊りみてーなやつってわけか。

最初の時みたいに逃げ出したいだろうに。

逃げられないんだ。

そら……キツイだろうな。

人事じゃない！ クソ、可哀想に。

僕なんかどうでもいい。

この子だけでも助けないと……！

その73. やっぱいよ、女装してから悪い事しか起こってないよ！

僕男なんで

結構長めです。

なにやらサイトが始めましたね。

原作者になろう大賞？

……き、気になる！

やってみよーかなア、難しいかなア……

ちなみに前作でパクリがあったのに気づいたかた、怒ったかた本当にすいませんでした……。

好きなんです。正人が大好きなんですorz っていうカリトバスメっさ好きなんです許してください……orz

その74. 悪役っぽい奴の末路は大概悲惨

くっそー！

ホントどこにでもいそうな見事な悪役だなこの浅井とか言う男は！
会長にタメ口だったし僕とも同じ年だろうか。

こんな悪役面見たら一発で覚えると思うんだけど。

「へへ、どっちと遊ぼうかな」

何て僕の中の悪役扱いなんて亜里沙以外に聞こえている筈も無く、
悪役っぽい奴は解り易いように下舐め釣りをしている。

「そ、それ以上来たら大声上げますよ！」

牽制する僕の言葉に浅井はまたまた解り易いくらいにニヤ〜つと
嫌な笑みを浮かべる。

「不良どもの悲鳴が五月蠅いって一度苦情があつてなア？ 今じゃ
ココは防音設備付きだ！ 泣こうが喚こうが助けなんてこねーぜエ
！？ ちなみに暖房・冷房完備だ！！」

ど、どんだけ改造してんだよ！ 生徒指導とかもうそういう問題
でも無いでしょ！！

僕等のクラスエアコンとかありませんが！ 何で普通のクラスよ
り機能高いんだよ！！ 腹立つなチキシヨウ！

「へ、へーじさん……」

亜里沙の声が震えている。

アホな突っ込みしてる暇は無いんだった。

速く今の状況を何とかしないと……！

「……元々部外者で罰を受けるのは私です、亜里沙は関係ありません！」

僕は男だから良いが（いや良いわけじゃないけど）亜里沙は女の子だ。

こんな汚いクソ野郎に触れさせるなんて事はしたくない。

「アア？ しらねーよ、俺は好きにして良いって言われてんだよ。関係ネーかどうか何て知るかよ」

……チィ。野蛮なサルめ。言葉が理解出来ないタイプのバカか！
？ コイツは只のケダモノか！？

「へーじさん、スイマセン……私が変な提案なんてしたから」
涙声で亜里沙が後ろから小さな声を溢す。

この子が謝ることじゃない。
結局は勝手にキレた僕が悪いわけだし……。

「だ、大丈夫。君は僕が守るから安心しててよ」
後ろの亜里沙を諭す様に小声で言うも声が震えてしまう。
僕だって怖い事には変わりない。

僕の心も聞こえる亜里沙には僕が恐怖している事も、強がっているのも筒抜けだろう。

それでも、意地を張って強気な言葉を出すのは格好つけたいだけだろうか？

浅井は僕達の様子をニヤニヤとしながら見ている。

「だったらテメーから遊んでやるよ女ア」

早足で僕に近づくと屈強な腕が僕の腕を取った。

「百合果さん!!」

僕の偽名を呼びながら亜里沙が悲鳴のような声を挙げる。

「や、止めなさ……!!」

強気な言葉を掛けるも力で無理矢理引っ張られてしまう。

同じ男なのにこの力の差は一体……こういう時だけバカサクが羨ましいよ。

両腕を取られ壁に押し付けられた。

目の前にいる浅井は嫌らしい笑みを溢すとバカにしたように舌を出す。

「さー、何して遊ぶヨ？」

「止めてください!!」

浅井で見えないが後ろで亜里沙の叫ぶ声が聞こえる。

僕を助けようとしてくれているのだけは解る。

「ウルセエ! テメエも後で遊んでやるから大人しくしてろ!!」

浅井は首だけ後ろに向けると苛立った声を向けた。

亜里沙に向けて言ったのか。

浅井は片方の僕の手を外すと、外した手を後ろに振ろうとする素振りを見せる。

コイツ……! 女の子に手エ挙げる気かよ!

僕の反応は早かった。

浅井が振ろうとした手を、外された手で慌てて捕まえる。

「ア？」

疑問符を溢す浅井が振り返ろうとする小さな間で、僕は自由な足の右膝を思いっきり上げた。

寸分の差しか無い程近くにいる浅井の足は丁度僕の膝を跨いでい

る。

カッキーン↑比喩表現

「お……おうっふう……」

苦しそうな声を挙げて浅井はその場に崩れる。

「女舐めてんじゃ無いわよ!!」

そんな浅井を見下しながら僕は思いつきり吐き捨てた。
ん？ 何か間違ってるような。

「ゆ、百合果さん、本当素敵な女性になりましたね……」

そ、そうだよ！

同類なのに僕は男の一番可哀想な部分をををを。

「て、ってめエクソ女ア！」

お怒りはごもつとも、僕だってブチ切れるわい。
胸倉を捕まれて思いつきり壁にぶつけられる。

「ぐ……」

やはり流石デカイ体をしているだけはある。

力是中々に強い。

なんて感想を述べてる場合じゃない。

胸倉を掴まれてるわけで、みるみる首が絞まっていく。

「百合果さん!!」

必死で僕を助けようとしてくれている亜里沙の声が聞こえる。

それに動じずに怒りを込めた表情の浅井。

これは……思いのほかに……マ、マズイ……かも。

意識が遠のく。

霞が掛かる頭の中で、ハッキリと僕を呼ぶ声だけが聞こえる。

百合果さん、百合果さん、と泣きそうな悲鳴の声。

亜里沙に心配をかけてしまっている事に動かない頭ながらも罪悪感を感じてしまう。

僕の名前を呼ぶ声。

「百合果さん!! 離して!! 百合果さん!!」

あれ? 亜里沙以外に僕を呼ぶ声が聞こえた気がする。

「……百合……さ……私……行かせ……」

「……果タン……俺……嫁……退け……」

あれ? 嘘。似たような感じの言い合い? のような声。

「退けエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!」

「行かせるかアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

叫び声が呼応。

同時に丈夫である筈のドアが吹っ飛んだ。

転がりこむ二つの何かが見えたのだが、何が入って来たのかはポ
ーッとする頭では解らない。

浅井が呆気にとられながら僕から手を離す。

「ゲホ！ ゲッホ！」

崩れるように座り込む僕は慌てて息を取り戻した。

「百合果さん！！ 大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄ってくる亜里沙が心配そうに僕を覗き込んでくる。

何が起こったのかと僕は顔を挙げた。

目の前で、二人の人間が対峙していた。

片方は大男。

制服が斬れていたりと、斬り傷が目立つ。

血走った瞳でもう一人を睨んでいる。

片方は少女。

サイドテールが揺れる綺麗な少女。

大男程では無いが彼女も制服がボロボロだ。

握られた日本刀を構え、大男と同じ様に鋭い瞳を向けている。

多分大男の斬り傷は彼女によるものだ。

サクに、縁だ。

その74. 悪役っぽい奴の末路は大概悲惨（後書き）

カノジョニフラレチャッタ……

アハ、アハハハハハ……

そんな事も……あるさ

ヒヒ……（ブワッ（泣））

その75. 女キャラのほうがいいんじゃない、とか言わないで

今にも襲い掛かろうとする二人に浅井はたじろぐ。

「そ、そうだ！ テメエラ俺は風紀委員だぞ！？ 俺には手を出せないんじゃないのかよ！！」

浅井の言葉にも縁は怯む様子は無い。

「確かにアタシは約束した……だから傷つけないければ良いんでしょ！！」

そう言いながら縁は刀に手を掛けた。

「ッヒ！？」

浅井の小さな悲鳴を上げるも縁はその形で1、2秒固まっていただけ。

すぐにチン、と刀を鞘に納める音がした。

その瞬間、浅井の服が全て微塵に切り刻まれた。

「あつらー？ 突然服が破けたわねエー？ 不思議……傷つかず服だけねエ？」

縁の脅すような言葉に裸のまま浅井の表情がみるみる青くなる。

あ、あの女、見えない速さで浅井の服を切り刻んだのか！？

あれは居あい抜きという奴か？ 達人の居あい抜きは見えないというけれど……あの女何処まで化けモンなんだ！

取り合えず男のムサイ裸とか18禁って感じなのでアリサに見えないように手でアリサの目を覆う。

「……お、お気持ちはありがたいんですけど、私へーじさんの心読

めるんであんま意味無い気も……」

……確かに。

「直で見るよりマシでしょ……」

ここから二人の殺戮ショーが始まるんだ……そっちの意味合いでも18禁って感じ。

「どけ縁、俺は端からそんな約束した覚えは……ねーよ！」

確かに一切関わっていない、というか全く話を知らないサクは嬉々として拳を振り上げ、思いつきり裸の浅井を殴りつけた。

「ゲヒョォ!？」

浅井は体格は大きい筈なのだが、サクの腕力で宙に飛んでいた。そのまま防音で丈夫な筈の壁に減り込んだ。

「ざまあみろってんだ！」

「次百合果さんに手エ出したらこの世に肉片一つ残さないわよ!!」

さ、流石最強兄弟……。

「ほんの少しだけですけどあの浅井って人哀れですね……」

僕と同じ様に顔を引き攣らせているアリサが小さく溢す。

「全くだよ、あの二人をセットで敵に回したら死ねるね……」

だけど何だかんだで助けられた。

ヘーじの姿じゃなくても、この二人はやっぱり頼りになるな。

「おらああ！！　まだ終わってねーゾこらああああ！！！！」

「アタシの顔見たらトラウマになるくらいにしてあげるわよオオオ
！！！！」

……いや、頼りになるで、良いのか……な？

ボロボロのボコボコになっている浅井はともかく……何故か縁と
サクは睨みあっていた。

「今日という今日は絶対にぶっ殺してやるわよバカ兄貴！！」

「こっちの台詞だボケ妹！！」

仲良く悪役を討伐したかと思うと次はコレかイ！！
本当似てるなこの兄弟は！！

「あわわわわ……お二人とも少し落ちついて……」
アリサが慌てて二人を止めようとする。

そんなアリサが見えていないのか二人が止まる様子は無い。

「百合果さんには手を出させないわよ！」

「負ける気がしねエエエエエ！！」

勝手に二人の戦闘が始まる。
目の前で刀と拳の激しい戦闘が行われる。

相変わらずこの二人の戦闘は凄い……化け物同士の戦闘は流石だ。

っていうか助かったんだから君達……。

「燃えろアタシのコスモオオオオオオオオオオ！！！！」

「俺の右手が真っ赤に燃えるウウウウウ！！！！」

だから……。

「お前の血は何色だアアアア！！」

「奴を殺せと轟き叫ぶウウウ！！」

僕やアリサの引き攣った笑みも知らずに二人はヒートアップ。
そんな二人に僕自身の中で何かが弾けた。

「いい加減にしなさアーーーーーい！！！！」

僕の叫び声に二人がビタツと止まった。

「何でスグ喧嘩するの！！ 兄弟なんだから仲良くしなさい！！」

「で、でも百合果さん……」

「お、俺達はこういう関係で……」

固まったまま二人が焦った表情を作る。

「口答えは許しません!!」

「う、う、う……は、はあい……」

「お説教百合果タン……萌え〜!」

何か気持ち悪い言葉も聞こえた気がしたけどココはスルー。
サクが拳を下ろし、縁も刀を下ろした。

「へ……じゃない百合果さん凄いです……」
感嘆な声を漏らすアリサに僕自身も我に返る。

……ぼ、僕は何を言ってるんだ!?
完全に姉貴の口調で喋っちゃったよ!

女キャラ定着しすぎじゃないかアアア……

その75. 女キャラのほうがいいんじゃない、とか言わないで（後書き）

次の更新はテスト終わったら。

だってテストやヴァインですもん……orz

その76. 作戦が上手く行かなくても。味方が一人増えたと思ったらマシかな。

あの後、防音のせいしか会長が先の部屋から出てくる事は無かった。バレル前にサッサと出るのが先決だと判断して僕達はいそいそとその場を後にした。

ぶち破ったドアは縁とサクが力技で元に戻しやがった。
あいつ等本当なんでも有りだな。

「で、で、百合果さん……あああのヘーじについてもうちよつと聞きたい事が……」

「ケ、ケー番とか教えてくれねーかな……と、友達から……」

今は学校の通路を僕とアリサが並んで歩いて、後ろから最凶兄妹が付いてきている感じた。

……助かったには助かったけど。
どうしようこの二人、いつまでも付いて来るんだけど。

アリサも僕にそつと耳打ちしてくる。

「参りましたね……当初の目的は完遂できなかったわけですし、バレル前に速く逃げだすのが得策なんです……」

そうなんだよ。

あの二人多分どこまでも着いてくるぞ？

「ですよ……」

こそこそしてる僕達に後ろから訝しそうな声が振られた。

「何喋ってんのよ、何か気になるわね……」

「そうだぜ、二人で抜け駆け……してる気がする!」

さ、流石はWバカ! 下手に何にも考えて無いぶん勘がクソやベエ!

「べ、別に抜け駆けなんて! どうやって二人を振り切ろうかなんて話で無いですよ!？」

アア……アリサちゃん……無駄に正直なんだから……。

「ムム! この馬鹿が邪魔なんですか!? だったら今から片付けますよ百合果さん!！」

「テメー! 縁! お前百合果ちゃんの邪魔みたいだから消えろコラ! さもねーと俺が消す!！」

お互い自分は及びじゃないわけが無いみたいに思ってる!？
何か知らないが勝手に二人がまた戦いだした。

「と、取り合えず今のうちに行きましようか……」

「そ、そうだね。何か正直なのが効をさしたようだし、もうこいつ等勝手に戦わせておいて良いよ」

勝手にドンパチ繰り広げている二人を後にして、僕とアリサは学校の外へ向かった。

僕達は何とか裏の校門まで来る事が出来た。

ここまでくれば安心だ。

結局バレたのはあの変態教師だけだし……結果オーライかな？

……いや、当初の目的は失敗に終わったんだっけ。

「そんな落ち込まないで下さい。他の手を考えましょう」

そう言ってアリサが可愛らしく笑いかけてくる。

ウムム……やはり恐ろしいまでに可愛い子だ。

まア心読めるんだけど。

「アハハ、そんな褒めても何も出ませんよ？」

ほらみる。それに別に何も期待してないよ。

「えー、そうなんですか？ チューぐらいならオツケーですよオ？」

そういうながら僕に向かってンー、っと唇を伸ばしてくる。

そんな様子を見て僕は呆れた表情を作る。

この子の相手も大分慣れた。

「遠慮しとくよ……今の姿じゃ男女の素敵な関係にはなりえないしね」

「アハハ♪ 確かに百合百合って感じです♪」

どういう事かは解らないけど、アリサは偉くご機嫌だ。

怖い目にもあっただろうし、何でこんなに機嫌が良いんだ？

「エヘヘ……ヘーじさんが私を守ってくれたから……とかじゃ駄目ですか？」

そう言いながらモジモジとしている。

しかし、その姿が本当かどうかを見定める技術は残念ながら僕には無い。

取り合えず、「そうかい」とだけ言っておく。

そうするとアリサが不満そうな表情へと変わった。

「ツムー……水歩さんの気持ち何となく解った気がします！ やっぱり『私達』嘔吐きには、ヘーじさんは天敵ですね」

またわけのわからない事を……。

まあいいや、今は急いで帰ろう。

「じゃあまた明日ね。本来僕はいないわけだし、今日は帰って作戦会議でもするよ」

「ええ♪ お疲れ様です」

「うん、今日はありがとう。それに怖い目に合わせて悪かったよ」

「それは良いんですよ」

少し間を空けてアリサは顔を伏せた。

長い髪が前に倒れて表情が見えない。

「それに……本当に好きになっちゃいましたから……」

「へ？ 何？」

ゴニョゴニョと言われて何を言ってるか解らない。

「い、良いんです！ 本当に聞こえてないみたいですし！ 気にし

ないで下さい！　じゃ、じゃあまた明日！！」

「また合いましょうねー！　百・合・果さーん！！」
態々言われたくも無い言葉を大声で言いながらアリサがブンブンと手を振っている。

一応お忍びで帰ろうとしうてるんだけどね。
今更だけど本当なら授業中の時間だからねコレ。

少しずつ離れていっていると流石に心の声は聞こえて居ないのか、
それとも解ってやっているのか。
アリサは手を振るのを止めない。
無邪気に小さな子供のように。

僕が振り返る度に満面の笑みを向けたまま。

僕が視線から消えるまで手を下げない気だろうか？

……変な女装までして、襲われて、結局上手くいかなかったけど。
それでも。

亜里沙という少女が。

良い子だという事は解った。

何処までも読めない少女だったあの子の存在が。
良い子だって解ったんだ。
もう……それで良いじゃないか。

今日は疲れた。

……帰ろう。

帰ってもう一回やり直した。

何とかしよう。

「おー！ 可愛いね彼女！ 学校サボってどこ行くの？」
街中で突然チャライ男に話しかけられてしまう。

「……忘れてたよ。 ドチキショウどんだけ僕ってば可愛いんだよ
……」

「おお、僕っ娘とか超萌えるー！」

「ウルセーよ！ もうほつといてよ！ 帰らせろ！ 僕を帰らせろ
オオオオオー！！！」

その76. 作戦が上手く行かなくても。味方が一人増えたと思ったらマシかな。

テスト終わらねー（＾Ｏ＾）／

その77. 三つの電話（前書き）

学校に鳴り響く三つの電話。

ヘーじの運命を決める3つの電話。

掛けているのは一人。

受けているのは3人のヘーじの敵。

誰か解らない親玉と、誰か解らない3人の部下に立ち向かわなければならぬ。

ヘーじはまだ何も知らない。

敵が誰なのかも、存在しているということさえも知らない。

その77. 三つの電話

ヘーじさんが私の視線から見えなくなった。

ゆっくりと手を下ろすと、思わず私は言葉が零れる。

「ヘーじさん……ごめんなさい」

最初は面白い人だな、ぐらいだったのに。

知り合っていくうちにどんどん好きになっていった。

これがヘーじさんマジックって奴？

……だからこそ。

ゴメンナサイ。

私のケータイが鳴った。

表情を曇らせながらケータイを取り出すと耳に付けた。

「もしもし……」

電話の相手は解ってる。

そして、ミホさんよりも嫌いな人間だという事も。

……私はラスボスを知っている。

だって、協力してるんだもん。

ゴメンね、へーじさん。

水歩さんにも言ったけど、私は敵なんだ。

今この学校に、私を含めて三人に電話が行っている筈だ。水歩さんに言えなかった信実。

三竦み？

…違うよ。

2対1だよ。

と言っても狙いは縁さんじゃ無い。

狙われているのはヘーじさん、貴方です。

黒い意思が貴方を狙っています。

速く気づかないと死んじゃいますよ？　へーじさん……。

私は敵なんです……だから何も言えない。

今も電話で指示を仰ぐ。

もつと速く。

……貴方に会いたかった。

目を覚ました。

生徒会のソファで寝ていたから体が重い。

……そういえばあいつらはどうなっただろうか。

私の下の子で私でも思うようなクズをあてがった。

様子を見に行ってみるか。

ドアを開けると、生徒会の役員がズタボロになっていた。

その様子を見ても私は酷く冷静でいた。

すぐにこの状況を推測する。

この男をここまで追い込むことが出来るのは……まア予想は付くが。

全く野蛮な連中だ。

「おい、起きろ」

気絶している男の顔を蹴り上げると、小さな呻き声を発した。

それで目を覚ましたのだと確認する。

「誰にやられた」

私の言葉に男は震えながらも何とか言葉を発する。

「あ、あの兄妹だ……」

予想通りだな。

つまり、あの女は手を出したんだな？

それだけ解れば十分だ。

無意識に笑みが零れてしまう。

その時、突然ポケットに入っていたケータイが鳴り出した。

学校にいる時に唯一電話を掛けてくるのはあの人意外いない。

私の表情は輝き、慌てて携帯を耳に当てた。

「は、はい！」

久々に声を聞いた。

この声を聞く為に携帯を持っていると言っても過言ではない。
気持ちが上がっている私だったが、電話の内容を聞くうちにみる
みる顔がこわばる。

「え、え！? 『あの男の言う通り企画を手伝え!?』そ、そんな…
…いい、いえ、はい…:はい、全力であの男のサポートをします…:
はい」

要件を言い終わるとすぐに電話は切れた。

…:楽しい雑談をする暇も無く。

あの人はスグにあの男ばかり立てる。

ヘーじ…:…。

私とあの男と何が違うと言うんだ。

何故あの人はあそこまであの男に固執する…:憎い。

純粹にあの男が憎い。

…:あの男だけは私がこの手で殺す。

あの人の言う言葉は絶対だ。

あの男の手伝いをするのは仕方が無い…:だが、それだけで終わ
ると思うなよ。

その前にお前の大事な番犬との絆を断ち切ってやる。

企画のサポートはそれからだ。

ヘーじを殺す為には手順が必要だ。

風紀委員、縁。

この人は上手くいかなければスグにこれだ。
いや。

もう、ずっと昔から解ってることじゃないか……。

この人の心は、小さな子供の頃に止まったまま。

子供の我儘が、大人になり残酷な我儘に変わっているだけ。

全ては、朝倉先輩のせいだ。

……いや。

どんなにドス黒い事でも、こうやって感情を出して喋ってくれてるんだ、昔と違って。

俺は……喜ば、なきゃ……。

「ああ、首を持って帰って来てやる……だから……だからこれ以上壊れないでくれ、『姉さん』」

そう言った瞬間。電話は切れた。

もう聞こえない筈のツーツツという音が俺の心を動かす。

聞こえないのは解ってる。

だけど、小さく、小さく溢す。

「朝倉先輩さえ殺せば……元の優しい姉さんに戻って、くれるよな……」

俺の姉。

アンタは人殺しだ朝倉先輩。

殺したのは俺の姉。

俺は只の敵討ち。

返せ、返せよ。

姉さんの……心を、返せよ……。

「昨日は酷い目に合った……」

僕は多分傍から見たら凄くげんなりとした表情をしているだろう。いつものように学校の登校の道を歩いている。

結局何も浮かばなかった……ど、どないしよう。

縁の為にも……というより学校が化け物の三竦みで滅茶苦茶にさせない為にも。

何故僕が一般の生徒の為にまでここまでしなくちゃ……ってソレはもう何回も家で同じ事やったわ。もういいわ……。

あの後、帰ることは出来たのだが……帰ってきた姉と鉢合わせ。

弟が変態願望を持つてるような感じに見られたわけで。

小一時間説教しながらの顔面集中の殴打とか女がやることじゃねエ。

ぶっちゃけ痛すぎて説教聞いて無かったけど。

あんな姉に相談するわけにも行かないし……。

考えあぐねていると、前方に見覚えのあるショートカットが見えた。た。

ヤッブエ。朝っぱらからタチの悪いのに引っかかるゾこれ。

僕のげんなり表情が更に暗くなる。

同時にミホが振り向いた。

あの子は何か僕のセンサーでもついてるのか？
仕方が無いので軽く手を振ってみる。

「オッスーミホー」

「……ッ!？」

うえ？

凄い慌てた表情を見せるとミホが慌てて走り出した。

……え？ 逃げた!？

イヤでも勝手に関わってくるのに、ど、どうしたんだ？

それはそれで結構寂しいんだけどミホさーん!

……行っちゃった。

どうしたんだ一体？

学校行ったらどうせ同じクラスだし。

行ったらちよつと話してみよう。

何故か無意識に足が早足になってしまう。

……え、別に気にしないし。

気にしてないし。

ちよつと悲しいとか考えてないから!!

「ハイ！ 寄ってらっしゃい見てらっしゃい！！ 昨日現れた奇跡の女神のブロマイド！！ 一枚1000円だよー！！ 安いよ安いよー！ 今なら彼女のプライベート情報をオマケしちゃうよー！！」

……校門の前で何商売してんだ。
って売ってるのは僕の！？

一年生っぽい子が僕の女装姿の写真を売っていた。

「く、くれ！」 「こっちは三枚だ！」
しかも何商売繁盛してんだ！！
いつ撮ったんだコラ！！

「ちょ！ ちょっとキミは何やってんだー！？」
慌てて止めに入ろうとすると、一年生がキラキラとした瞳をこっちに向けてきた。

「あ、へーじさんチーッス！！ いやー大繁盛っすよー！ さすがは我らの情報屋イエー！！」

この子はミホに良くくっついてる新聞部の後輩だ。
僕も偶に喋る。

ミホ大好き少年で無駄に明るいのが特徴的だ。

「いやいやいやいー！ 何やってんの君！」

「そーなんスよーいつもならアネさん（ミホ）が率先して商売してんですけどー今回は任されちゃいましたよー何かちょっと様子おかしかったっすケドー」

「チゲーよ！ 何でキミが商売してるか聞いてるんじゃないんだよ！！ 何で売ってるんだって言ってんだ！ しっかも堂々とー！ 風紀か生徒会にブチ殺されちゃうぞ！？」

そんなことを言っていると遠くから聞き覚えのある声が聞こえた。

「こるあー！ 勝手に商売してんじゃないわよオオ！！ 全部没収没収ウウー！！ 百合果さんブロマイドはアタシのだから！！」
本音が出ちゃってるよ縁！

しかし相変わらず通る声にすざまじい速さだな。
ドンドンと近づいてきている。

無駄に明るい後輩も流石に顔が青ざめる。

「無敵素敵な暴力熱血少女！！ コイツはヤッペー！ 危険回避で即効ダツシュ！ 奪取される前に退散退散！！」
へーじさんお疲れッスー！！」

荷物をまとめて後輩がサッサと走り去っていった。

流石はミホの後輩だな……行動が色々早い。
しかし後輩君もミホがオカシイと言っていた。

……やっぱ何かあったのか？

「へーじー……アンタは買っていないわよね？」
いつのまにいたのか縁が隣に立っていた。
なにやらもの凄いジトーツと見ている。
嫌々僕が僕の汚点買うわけないでしょ。

「ま、良いけどねー……親族に欲情したら流石に引くわよー」
だから何で自分で欲情すんだよ！

「大丈夫だったの！　どんだけ疑ってたんだ！？」

「……冗談はこれくらいにして」

冗談だったのか。

結構マジな疑いの目だったと思うんだけど

「へーじ、風紀の奴らが朝から大人数で動き回ってる、気をつけた方がいいかも」

さつきとは違う真面目な目が僕に向けられる。

「気をつけるって……何を？」

奴らとは停戦協定中だ。

何かがあるとは思えないけど。

あの会長がどれだけクソでも約束を破れば生徒会と一年生が敵に
回るわけ出し。

最初から一年生や生徒会どちらかと手を組んでいたら話は別だけ
ど……まあ考えすぎだろうけど。

縁や悠馬が会長と手を組むわけないし。

「……解んないけど何があるか分ないんだし気をつけてね」

真剣な目でそう言うのと縁はサッサと行ってしまった。

同時にチャイムが鳴る。

……流石風紀委員、時間厳守って奴だな。

僕もサッサと教室に行こう。

「どこだ！？　オレの百果さんブロマイドが売っているという場所はどこだ！？　全部買いた！　
買いたー！！」

「……何やってんのバカサク」

縁が消えたと同時にサクが突然現れた。

「っは！？ 違うんだ！！ これは浮気なんかじゃ……」

「さき行ってるぞー……」

何か後ろでゴチャゴチャ言っていたがガン無視してサッサと教室に向かう事にした。

この男の扱いにも慣れたものだ。

その78. ブロマイドは一枚千円ー！ 一枚千円ー！ 縁タン亜里沙タンとの

Oh金が無い……

その79. パンツの色は縞々です。

教室に行ってもミホはいなかった。

ど、どうしたんだろう。

でも確かに学校に行ったのは見てたんだけどな。

いつもなら嫌でも関わってくるミホがいない……。

何だろう……少し不満。

取り合えず熱心に何かのファイルを見てるアズキに話しかけてみる。

「なんだよ！ 今良いとこなのに！！」

「何がいいとこなのかは知らないけどさ、ミホ見てないかな？ ちよっと探してんだけど……」

「あーアイツ？ 一年生の廊下で写真ばらまいてたけど」

「な、何い！？ 人が心配してやってる時に何やってんだアイツは！！」

どうやら心配損だったらしい。

あ・の・性悪女めええええ！

「あー行った行ったもう話しかけんよ！ 俺は忙しいんだ！！」
しかしコイツは何を熱心に見てるんだ？

ニヤケ面なアズキの後ろからファイルを覗いてみる。

……僕が百合果だった時の写真が大量に、大量に……。

パンチラ写真とかどうやって撮った、んだ……アアアア！？
ななななな何でそんな物までエエエアア！？

「ウ、ウヘヘ……百合果タンのパンツ、パンツ萌えええ……」

「ぼ！ 没収没収！！ 何見てんだこのクソヤロー！！」

「て、テメエ返せコラァ！？ 俺達の秘蔵のアルバムを！！ その
写真を買う為にどれだけ同士達と金を作ったと思ってんだ！！」
取り上げたファイルを持ちながら固まった。

「……ど、同士って何だ？」

「我等モテる奴らブツ殺したい隊改め……百合果様親衛隊だ」
思わずズッコケてしまった。いや本当普通に。

「お前暫く見てないと思ったらあの変態部隊の一員だったのかァ！
？」

「隊員じゃない！ 隊長と呼ばえ！」

「……ん？」

どの覆面かまで特定出来ました。

「あ。」

間の抜けた声がアズキから漏れる。
お互いがそこで普通に固まった。

「……お前かァァ！！ あのパンツ見せて下さいとか言ってた変態
赤覆面は！！」

凄い勢いで殺意が沸いた。

「変態赤覆面じゃ無い隊長と呼べエエエ!!」

「ウルセエエエエエ!! こ、殺してやるこのヤロー!!」
近場にある椅子を掴むと変態赤覆面向けて振り被った。

「……っというか何で俺がパンツお願いしたの知ってんだよ」
凄く冷静に言われてしまった。

「……あ。」

今度間の抜けた声を溢したのは僕だった。
椅子を掴んだまま固まる。

「ま、まさかお前!!」

「……」

黙ってそのまま椅子を振り被った。

「お前も覆面のひとりプギャア!」

……うん馬鹿で良かった。

取り合えずバレて無かったようだ。

なんである時パンツまで女物にしてたんだ僕は……。

しかし急いでミホに会って写真全部消さないとな……
つと、このファイルどうしょ。

いいや僕の机に入れといて、と。

よし! 一年生の廊下だな!? 急げ僕!!

「ん？　おいへーじー？　机からなんか落ちたぞー？」
後ろからアホサクの声が聞こえたがいまいち聞き取れなかった。
無視無視。

今は急いでミホの搜索だ！

きっといつも通りのミホなんだ。　速く、いつもの様に怒ってや

る。　あの性悪女め。

その79. パンツの色は縞々です。(後書き)

そろそろ溜まっているほかの小説を出して行きたいですね。

その80. 僕の親友はどうしたんだ？

一年生の廊下に来ててもミホの姿は見えなかった。

……おかしいな。

写真バラまいてたって言ってたけど。

取り合えず近くにいた後輩に話しかけてみる。

「あー、ゴメンちょっと良いかな？」

「……はい」

そう言って振り返る後輩。

「……」

「……スイマセン勘違いでした」

悠馬だった。

僕は短く謝ってUターン。

か、刀持っていないから解らなかったアアア！！

「……人の顔見ていきなり逃げ出すって酷いんじゃないですか？

朝倉先輩」

肩を捕まれた。

逃げれなかったか。

力強いなこの子……。

仕方が無い、結局誰かに聞くつもりだったし。

覚悟を決めて振り返るときこちない笑みを向ける。

「や、やー偶然だね？」

「貴方が一年生の所に来たのに偶然もクソも無いでしょう、で、何しに来たんですか？」

サッサと本題に入ってくれるのは助かるけど帰れ感出されるのは普通に凹むな。

「……ミホ見なかった」

不満な表情のまま取り合えず聞いて見る。

僕の言葉に悠馬は少し考える素振りを見せた後、思い出したように口を開く。

「ああ……朝倉先輩にくつついているショートカットの女性か……今はもういないが……少し前まで何やら写真売ったりバラまいたりしてましたね」

売ったりばら撒いたりしてるショートカット。

間違はなくミホだ。

未曾有事なきミホだ……。

しかし売るならともかくばら撒くって……何やってんだ一体？

「ちなみにばら撒いていた写真」

「……ツブ！」

悠馬が懷から出した写真はとても見覚えのある人物が写っていた。っていうか。

ばら撒いていたという写真は僕の写真だった。

な、何をバラ撒いてるんだあのバカは！？

不断から考えが読めない子であったが、今回こそは全くもって考えが読めない……僕は何やら心配になってきていた。

ミホは……僕の親友はどうしてしまったんだ？

「ま、貴方も人気なようですし……写真は一部の男性女性の手に渡ったようですね」

女性嬉しいが男性は嬉しくない。

一体僕の写真なんて何に使う気だ。

いややっぱ知りたくない。

「……大半の写真はアイツが持っていましたけどね」

呆れたような悠馬の言い方に首を傾げてしまう。

アイツ？ アイツって誰だ？

不思議に思っている僕の後ろから突然生暖かい風が吹いた。

ビクウ！？ と体を仰け反らせてしまい、慌てて後ろを振り返った。

「私の事ですょー？ ヘーじさん♪」

後ろには可愛らしいツインテールの少女がいた。

どうやら僕の首筋に息を吹きかけたのはこの子、亜里沙のようだ。しかもまた、さり気なく心を読まれた。

相変わらずだなエスパ―少女め。

「どーしたんですかヘーじさん？ まさか私に会いに……」

そう言いながら勝手にイヤンイヤン、という具合に喜んでいる。

「君は僕が口に出さなくても解るでしょ……ミホを探しに来たんだよ」

僕の言葉に亜里沙はスグに不満そうな表情へと代わる。

「えー知ってますよ？ でもちよつとは私に気を使って『君に会い

に来た!』とか言ってくれてもバチは当りませんよ?」

「……君に会いに来たんだー」
すべからく棒読み。

「もっと気持ちと愛を込めて♪」
……この子と喋ってたらいつか心が折れるわ。

「じゃ、ミホがいないんなら僕は行くよ、バイバイ二人とも」
サッサと踵を返して二人に背を向ける。

これ以上亜里沙と喋って精神的に疲れるのも悠馬と関わって肉体的にやられるのもゴメンだ。

「あん、へーじさん、付き合い悪いー!」

「さっさと行って下さい」

後ろから二人の正反対の言葉の意味が聞こえてくるがどちらにも対応せず後ろ手に手を振るだけで対応する。

しかし、結局ミホは何処に行ったんだ?

「……ミホさん探すよりモット気に掛けたほうが良い事がありますよ」

「……会長が動いた」

ええ?

突然後ろから聞こえた二人の言葉はどちらも『心配した』意味合

いを向ける言葉だった。

その両方の言葉に反応して僕は慌てて振り返っていた。振り返った先の二人はすでに僕に背を向けて歩き出していた。

後ろからでも解る亜里沙の楽しそうな背中と後ろからでも真面目な様子が伺える悠馬が並んで一年生達の中に消えていく。

二人とも振り返る事も無く。

今の言葉は……？

どういう事だ？

真意はわからないが二人とも何かを伝えようとしているのは解った。

一体何を伝えたかったのかははっきりと解らないが……。

会長が動いた？ 他に気に掛けること？ ……朝に縁が言っていた生徒会の人間が動き回ってるのも関係してるのか？

……取り合えず動こう。

ここで突っ立てるよりマシだ。

その80. 僕の親友はどうしたんだ？ (後書き)

試合終わりました。入賞です。
私頑張りましたb

その81. 一年生達の事情／頼れる友達がない

「何故あんなことを言った、亜里沙」

隣にいる悠馬君の言葉に私は首を傾げる。

「そりゃへーじさんが好きだもん？　ちょっとはヒント与えとかないかね？」

「……フン」

私の言葉に不満そうに悠馬君は鼻を鳴らす。

「俺達にはクソ会長の動きがスグに解る。姉さんのお陰でな、その情報を奴に教える必要は無いだろう」

「だからヒントだけしか言ってないでしょ？　そういう貴方こそ何であんなことを言ったの？」

私達はへーじさんの敵。

だけど私はへーじさんの敵になりたいわけじゃない。

だから裏切りにならないギリギリならへーじさんを助けたい。

……私と悠馬君は違うじゃない？

なのに、あんな解り易い発言したのは以外だった。

「……俺達は朝倉先輩の敵だ」

少し間を空けて悠馬君は喋りだす。

「うん、知ってる」

だって殺したいとか言ってるもんね。

私は殺して欲しく無いけど。

「だがあのクソ会長も敵だ……何れは潰す。その時に『あの風紀委員』が朝倉先輩と一緒にいなくなってもらっては困る」

…そう。

今この瞬間で狙われているのは縁さん。

あの最強の風紀委員。

成る程ね。

私達は手を出せないからへーじさんに頑張ってもらおうって事ね。
ふうん？ 悠馬君は縁さんに入っているらしい。

っ
て
い
う
か
……
好
き
だ
っ
た
り
し
て。

[illegible]

取り合えず、会長が動いたと言ったんだ。

一番会長が動いて反応が早いであろう縁を探した。

結局何処にいるか解らずにチャイムが鳴ってしまった。
とぼとぼと教室に戻ってくると、既に教師は来ていた。
軽い注意を受けて、スグに席に着く。

授業は始まるが、僕の頭の中に授業の言葉等耳に入っては来ない。
別の事に頭が目まぐるしく回転する。

狭い学校内で縁を探し回って何処にもいない時点で可笑しい。

教室に見に行っても居ない、風紀委員の部屋も行った。

志保ちゃんにも聞いたが居ないと言っていた。

どういう事だ？

もしも縁に何か危害があれば彼女の事だ。

あの暴力っぷりはスグに見つかるだろう。

無抵抗でやられるようなタマじゃない。

そして……

……ミホも、居ない。

朝来る時には居た筈なんだが。

授業の時にまで出て来ないなんて。

縁を探すときに一緒に気に掛けてた。

朝から目にしていない、という意味もあるがミホに聞けば大体の
事は解ると予想していた。

でも何処にも居ない。

せめて何か情報がアレば良いんだけど……取り合えず、後でもう一度探そう。

何か胸騒ぎがする。

くそ……僕は一人じゃ何も出来ないのか？

ミホも居ない。縁も居ない。

どれだけ僕はあの二人に頼ってたんだ！ クソ……。

自暴自棄になる僕はッハと我に返る。

そ、そうだ。

サクなら何か知ってるかもしれない。

期待は薄いけど……正直腹が立つけど……他に頼る人間が居ない。

「サ……」

隣の席のサクに話しかけようと身を乗り出した。

しかし僕の言葉は途中で止まった。

「……………」

サクは上を向いたまま鼻からダラダラと血を流していた。

白目を向いている。

しかしその手には鼻血に濡れないようにしっかりと距離を開けて

ファイルが握られていた。

僕が変態から取り上げたパンチラの……アレだ。

.....。

偶然机の中にあつたライターを取り出すと、そつ、とサクの体に火をつけた。

ファイル毎、燃えると良いよ。

授業中なのだが遅れてきた僕に注意した教師も燃えている生徒はガン無視してやがる。

周りの生徒も一歩引いて温かく見守っている。

メラメラと燃え始めるサクを無視して僕は机にうな垂れる。

僕頼れる友達少ねエエエエ.....

やべ、ちょっと泣きそう。

その82. 命より大切に

ココは女子更衣室。

次の授業は体育。

アタシ達は授業の為に体操服に着替えていた。

「さっきはごめんねー、穴見さん」

そう言って申し訳無さそうに話しかける彼女はアタシのクラスメイト。

「アハハ、良いの良いの気にしないで」

そう言ってアタシは笑みを溢す。

アタシはさっきまで彼女に頼まれて生徒会室の整理や片付けをしていた。

彼女は敵対する生徒会の人間だ。

だけど、だからといって彼女の頼みを無碍むげにするつもりは毛頭無い。

申し訳無さそうに頼んで来た様子はアタシが風紀委員の人間だという事を解ってだろう。

それでも頼む人がいなかったのか、というか大きな荷物を運ばなくては行かなくて。

男も上がらない荷物だった。

そりゃアタシぐらいしか頼めないよね……。

アッサリと頼みを聞いた私に意外そうだったが、アタシは会長は

気に食わないけど生徒会自体が嫌いというわけじゃ無いし。

彼等は彼等でしつかりと仕事をしてくれているのは知っている。
タダ会長がやりすぎだというだけ。

生徒会にはアタシとこの子しかいなかったし、普通に終わらせる
ことが出来た。

それに……過去に孤立していた経験があるとクラスの子に話しか
けられると変に嬉しくなってしまう……。

さ、寂しいわけじゃ無いけど頼りにされるのは……嬉しい。

「でも助かったよーありがとねー！」

明るくお礼を言う彼女の名前は崎島さきしま茜あかね。

茜はクラスでも男女分け隔てなく人に接する明るいイメージの子。
そんな彼女なのにアタシはあまり関わる事は無いで居た。

大人しい志保と常に一緒にいるから、明るい子とは接点が少な
っただけかもだけど。

「良いよ、また何かあったら言ってよ」

「あつりがとー！ 生徒会じゃ怖い噂聞いてたけど、 穴見さんっ
てば普通に良い人じゃーん！ 生徒会と風紀が争うかもしれないっ
て時だけど、そんな時こそ私達が仲良くしないとねー♪」

そう言って茜は人懐っこく後ろから抱き着いてくる。

「や、やだ変なトコ触ン無いでよー」

「良いでは無いか良いでは無いかーん♪ 穴見さん胸大きいねー♪」

後ろから胸やら何やらとベタベタと触ってくる茜に軽く抵抗する素振りを見せるも嬉しかった。

こんな暴力的なアタシに馴れ馴れしく触れてくる人は少ない。何か女子高生っぽい、という当り前の筈の感覚が嬉しかった。

「ゆ、縁……」

騒いでいるアタシ達に控えめな声が掛けられた。

視線の先を見ると、そこに志保がいた。

もうとっくに着替えてアタシを待っていてくれたようだ。

「速く着替えて……行こう？」

いつも控えめな笑顔を見せてくれる志保の顔が少し暗い。なぜだろう？

「え、あ、うん」

志保の様子がおかしい気がしたけど慌てて服を脱ぎ始める。

「……立花さん、ハロー♪」

私と接しているように元気な感じで茜は志保に話しかける。

「っ……」

だけど志保は返事もせず下を向いた。

人見知りをする子ではあるけど、人に対して失礼なことをしない志保にしては珍しい。

「わ、私……先に行くね」

そう言うと志保はサッサと行ってしまった。

本当に……どうしたんだろう？

「あれれー？ 私嫌われた？」

そう言うと困ったように茜は笑う。

「そ、そんな事は無いと思うけど……」

あの子が人を嫌いになるというのは聞いた事が無い。
何か、あったのかな。

急いで着替えると慌てて志保を追いかけようとした。
すると突然腕を引っ張られた。

もう更衣室にはアタシと茜しか居ない。

つまり、腕を引っ張ったのは茜。

振り返ると、予想通りニコニコしている茜がいる。

ゆっくりと茜は口を開いた。

「その首から提げてる『ロザリオ』体育するには邪魔なんじゃ無いかなア？」

「え……」

絶対に手放さなかった赤いロザリオ。

どんな時でも見につけていた。

体育でも服の中に入れたりして誤魔化していた。

只純粹に無くしたくないから。

ずっとずっと身に着けていた。

私の命より大切な物だから。

「だ、大丈夫だよ。バレた事無いし……」

「駄目だよォー！　そういうアクセサリー関連を学校に持ってくるの事態駄目だし？　体育なら尚更、それに私生徒会だから見ちゃったら報告しなきゃ行けない義務あるし……」

そ、それは困る。

アタシ風紀の人間だし……それに茜が言っている事は正しい。
間違ってるのはアタシの方だ。

「わ、解った……うん、そうだよね……」

首からロザリオを外しロッカーに入れた。
鍵を掛けて閉める。

「……」

良いのかな……。

茜ちゃんが言ってる事は間違えて無い、しね……。

「じゃー行こうよ縁ちゃん！」

突然下の名前で呼ばれ、腕を引っ張られる。
親しみを込められたようで、少し嬉しい。

「う、うん」

手を引かれ釣られて更衣室を出る。

嬉しさど不安が半分半分。

大丈夫……だよね。

「……………バァーカ♪」

「え？ ゴメン、何て？」

私の手を引っ張っている茜が小さく溢した声は聞き取れなかった。

「んーん？ なんでもないよー」

.....？

その82. 命より大切に（後書き）

いえー久しぶりの連続更新！ 誰か私を褒めろ！

その83. 巡って

授業終了の音が鳴った。

よっし！ 鳴ったな！ 急ぐか！

バカサクに頼ろうと思ってた僕がバカだった！！

自分の力でも頑張らないと！

チラツとバカサクの方をしてみる。

燃え尽きとる。

いや、萌え尽きてるのか？

体は真っ白な灰なようだが表情は満面で満足げだ。

……無駄に楽しそうだなオイ。

取り合えずダッシュで教室を出る。

実は探し回って一つ見てなかった所がある。

生徒会室だ。

あそこには女装時に一度行ったがもう一回行きたいと思う所じゃない。

僕は襲われそうになったんだぞ！？（男に）

だが見て居ない所はあそこだけ。

逆に考えればあそこまで探して見つからなかったという事は。

ミホと縁はあのクソ会長に捕まっている！

そしてあんなことやこんなことになっているのかもしれない！！

「へーじよう、何処に行くか知らねーがよー何かお前に卑猥なイメージが見えるから一緒に行っていいいか？」

変態アズキが何かニヤニヤとした表情でコツチを見てきやがる。
何だコイツ。

「何だ。お前変態に関してのアンテナ鋭すぎんか。何で人の頭ン中の事までアンテナビンビンになるんだよ。」

「おうよ、股間のアンテナもビンビンよ！」

「黙れ！」

凄いドヤ顔で言われたのでつい思いっきり怒鳴ってしまふ。
変態な事に関してはホント凄いなお前。

「って別に卑猥なトコなんか行かねーよ！ 来ンな！ 帰れ！ お前は変態なメンツとワーワーやっつけ！」

「お、俺は別に覆面集団のリーダーなんかじゃ……」

もういいやメンドクセーさっさと行こう。

僕は慌てふためいているアズキをサッサとシカトして僕は廊下に出た。

……僕の友達。

何で男も女も変なのしかないの……。

生徒会室前まで来たけど。

さてどうしよう。

覗きこんでクソ会長がいたら確実に僕は殺られる気がする。
でも縁とミホがいるかもしれないし……うーん。

誰かまともな生徒会役員が出てきたら話しかけてみるか？

生徒会って雑務の人数結構多いしな。一人くらいまともなのに…

…て捕まってるとしたら、誰とも言わないか。

うんうん、と考え込んでいると目の前のドアが開いた。

あ、ヤバ、と瞬間的に考えるも既に逃げ道は無い。

開いた先にいたのは。

クソ会長。

予想外というわけでは無いが表情がひきつる。

会長は分厚いメガネからジロリと僕を睨む。

正に蛇に睨まれたカエル状態、僕は動けないでいた。

「どけ」

会長はその一言で軽く肩をぶつけただけだった。

腹が立つが、胸を撫で下ろす。

よし。今のうちに中を調べてしまおう！

会長が背を向けたのを確認する為、視線を会長に向ける。

…：僕の視線は会長の背中より。

会長の手に吸い寄せられた。

会長の手からユラユラと揺れるものが見えた。

赤いロザリオ。

見間違えるはずが無い。

彼女が肌身離さず持っていたソレだ。

「待てよ」

僕は無意識に声が出た。

僕の言葉に会長はピタッと止まった。

振り返った会長が、何故か不敵な笑みを浮かべていた。

何故かその時は何も感じなかった。

頭よりも、怒りが込み上げていたから。

何故をそれをお前が持っている。

彼女に。

縁に何をした！！！！

その84. 無くなって

無い。

体育が終わって急いで更衣室に帰ってきた。
慌ててロッカーの鍵を開けて中を開いた。

いつもの制服はある。
財布やケータイ等の貴重品もある。
なのに。

ロザリオが。

無い。

も、もしかして入れたと思って落としたのかな……。

四つんばいになって床を懸命に探した。

情けない姿だとか、汚いだとか、そんな考えは微塵も出ずに。

無い。

どうしよう……どうしよう！

無意識に唇が震える。

あ、アレはヘーじがくれた……アタシとヘーじの、き、絆なのに。

アタシは困惑していた。

頭が上手く周らず焦る考えばかりが浮かぶ。

だって無くしたことが無かった。

だって、文字通り肌身離さず持ち歩いていた。

たった一回、手放しただけ。

始めて手放しただけ。

この一回で、たった一回で。

だって、だって……。

後からぞろぞろと入って来たクラスの子達が何事かと不思議そうに私を見ている。

「ね、ねエ。アタシがいつも身に着けてるロザリオ知らない？ 赤い奴の……」

クラスの子達は驚いた表情をしていた。

アタシがクラスの子にここまで焦っているのを見せるのはもしかしたら初めてかもしれぬ。

頼られる事が多いアタシだから、不断は冷静でいる。

だけど今はなりふり構っていられたかった。

プライドも何も無い。

クラスの子達は首を振ったり、知らない意思表示を示していた。

「縁？ どうしたの？」

集団から遅れて顔を出した志保にアタシは慌てて詰め寄る。

「あ、し、志保……ロザリオが、無いの。ねえ知らない？ アタシの……ロザリオ」

アタシの表情を見て志保は躊躇った顔を見せた。

アタシの顔は、今そんなに酷いのだろうか。

固まった志保が目を見開くとツバ！ と後ろを向いた。

突然の行動にアタシも慌てて志保が向いた先を見た。

そこに居たのは。

茜。

茶色と言うよりかは薄い赤色の綺麗な長い髪の手で払い。

アタシに向けていた明るい笑顔を、また向けてくる。

「取り合えず皆で探そうよ？ 縁ちゃんの為に、ね？ アハハ、私も探すから睨まないでよ志保ちゃん？」

茜の言葉でクラスの子達もアタシに『大丈夫だよ』と慰めたり。

『何処まで探したの？』と言って探し始めてくれた。

クラスの子達の温かさで、不安だった思いが零れ、アタシは涙を流してしまう。

「あ、ありがとう！」

嬉しくて感謝を溢すアタシにクласの子達は笑顔を返す。

良かった、皆優しくて。

きつと皆で探したらスグに見つかるよね？ 茜の一声で動き出してくれたんだ。茜にも感謝しないと。

「茜、ありがとう……」

茜にお礼の言葉を向ける。

茜は申し訳無さそうな笑顔を向けてくる。

「ゴメンね、私が外した方が良くなんて言うから」

「ううん、良いんだ。茜は何も間違った事なんて言っていないしね」
そうだ。

茜は悪くない。

今はロザリオを探さなきゃ。

「貴方が……」

か細い声が後ろで聞こえた。

声を出したのは志保。

アタシを見ずに、志保は茜の方を凝視していた。

志保とずっと仲良くしているアタシが見た事も無い表情をしていた。

怒りを込めた睨むような瞳。

「なににー？ 志保ちゃん私に何か言いたい事あるのー？」

「……別に」

無表情のまま睨む志保と対照的に笑顔を絶やさずに志保を見つめる茜。

何かギスギスした空気があるような気が……？

志保はフイっと茜から視線を外すと、周りと同じ様にアタシのロザリオを探しだした。

……な、
なんだろう、
嫌な空気だ。

その84. 無くなって（後書き）

男同士はサッパリしてるところあるけど女の子同士ってめっさドロドロしてますよね。

ホントそゆところは怖いですよね。。。（ガクガク）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2535j/>

暴力熱血女と貧弱毒舌男（春）

2011年11月10日06時24分発行